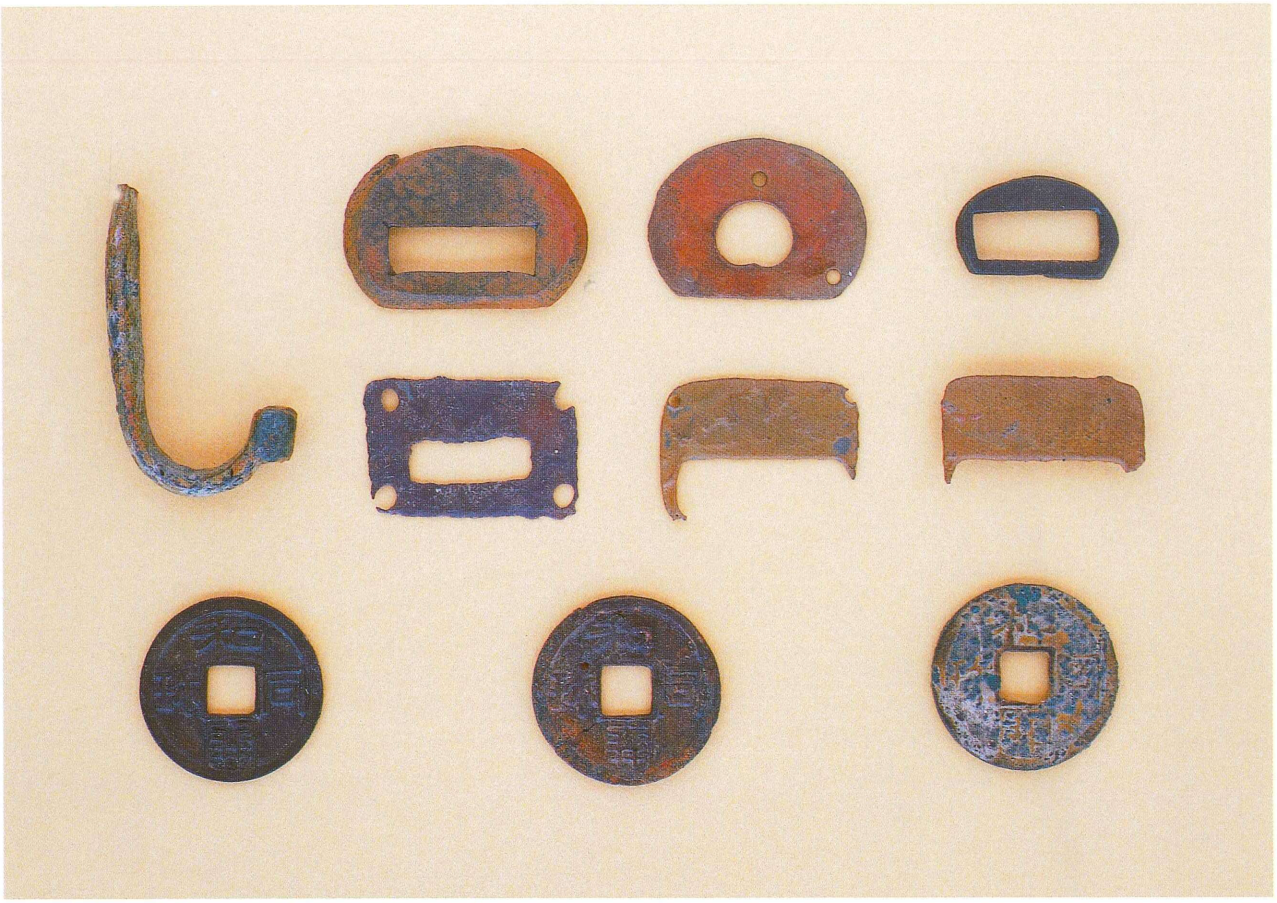
一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂尻遺跡

—奈良時代編—

1985

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会



鋳帯具　和銅開珎（表）



鋳帯具　和銅開珎（裏）

一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂尻遺跡

－奈良時代編－

例　　言

1．本書は昭和55年12月18日から昭和60年３月31日まで袋井市教育委員会で実施した一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査（坂尻遺跡第１次～第４次調査）の報告書のうちの奈良時代編である。
2．発掘調査及び整理体制については序文・古墳時代編第３章第４節に記載した。
3．本書「奈良時代編」作成のため資料整理および図面作成については主に森永明美、高野由実子、山内たず子、鈴木みさえ（坂尻遺跡調査補助員）が行い、遺構トレースについては原田安江（同）が行った。
4．本書は主に吉岡伸夫が執筆・編集したものであるが、第Ⅳ章については原秀三郎先生の玉稿を賜わった。
5．本書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章第１節～第６節・第８節・第９節・第Ⅴ章……吉岡　伸夫
第Ⅲ章第７節……森永　明美
第Ⅲ章第10節……高野由実子
第Ⅳ章……原　秀三郎

6．調査及び整理・報告書に関してはここに全ての方々の芳名を記すことはできませんでしたが、多数の方々のご協力をえました。感謝いたします。

凡　　例

1．本書の遺構名の頭に付されているＮは奈良時代の遺構であることを表している。
2．本書の遺構記号については次のとおりである。

ＳＤ＝溝状遺構　　ＳＢ＝掘立柱建物　　ＳＡ＝柵列　　ＳＨ＝竪穴住居
ＳＩ＝竪穴状遺構　　ＳＥ＝井戸状遺構　　ＳＫ＝土壙状遺構　　ＳＸ＝その他の遺構

3．土器の法量と器種分類は、土器実測図中の一覧表に記載した。なお、（　）で示した数値は推定値であることを示している。調整手法等はできるだけ図中記入したが、須恵器のへら削りの範囲は細線にて記載した。

目　　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 1
第1節　立　　地 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 1
第3節　奈良時代の遺跡分布 …… 4
第Ⅱ章　遺　　構 …… 6
第1節　溝状遺構（NSD） …… 8
第2節　掘立柱建物（NSB） …… 80
第3節　柵　　列（NSA） …… 108
第4節　竪穴住居（NSH） …… 110
第5節　井戸状遺構（NSE） …… 124
第6節　竪穴状遺構（NSI） …… 125
第7節　その他の遺構（NSX） …… 148
第Ⅲ章　遺　　物 …… 149
第1節　土　　器 …… 149
第2節　硯・転用硯 …… 165
第3節　土　製　品 …… 166
第4節　瓦　・　塼 …… 172
第5節　柱根・杭・部材 …… 172
第6節　木　　簡 …… 178
第7節　木　製　品 …… 181
第8節　金属製品 …… 188
第9節　銭　　貨 …… 190
第10節　石　製　品 …… 190
第Ⅳ章　土器墨書 …… 200
第1節　土器墨書の性格と分類基準 …… 200
第2節　奈良時代の土器墨書 …… 201
第3節　平安時代以降の土器墨書 …… 215
第4節　坂尻土器墨書の特色と坂尻遺跡の性格 …… 216
第Ⅴ章　総　　括 …… 273
第1節　遺構の切り合い関係と出土土器編年 …… 273
第2節　奈良時代遺構群の変遷 …… 286

挿　図　目　次

第 1 図　東・中遠地方の奈良時代遺跡分布図……2
第 2 図　ＮＳＤ１・２実測図……7
第 3 図　ＮＳＤ１・２出土土器実測図……8
第 4 図　ＮＳＤ３実測図・遺物出土状態……9・10
第 5 図　ＮＳＤ３東・西張り出し施設実測図……12
第 6 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（１）……13
第 7 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（２）……14
第 8 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（３）……15
第 9 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（４）……16
第 10 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（５）……17
第 11 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（６）……18
第 12 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（７）……19
第 13 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（８）……20
第 14 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（９）……21
第 15 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（10）……22
第 16 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（11）……23
第 17 図　ＮＳＤ３出土土器実測図（12）……24
第 18 図　ＮＳＤ４実測図……26
第 19 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（１）……27
第 20 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（２）……28
第 21 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（３）……29
第 22 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（４）……30
第 23 図　ＮＳＤ４出土土器・獣足実測図（５）……31
第 24 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（６）……32
第 25 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（７）……33
第 26 図　ＮＳＤ４出土土器実測図（８）……34
第 27 図　ＮＳＤ５実測図・出土土器実測図……35
第 28 図　２Ｇ－ｆ・ｉ　３Ｇ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ　２Ｈ－ｃ・ｆ　３Ｈ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ区奈良時代遺構分布図……37・38
第 29 図　ＮＳＤ７・８・９出土土器実測図……39
第 30 図　２Ｅ－ｇ　２Ｆ－ａ・ｄ区奈良時代遺構分布図……40
第 31 図　ＮＳＤ11実測図……41・42
第 32 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（１）……43
第 33 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（２）……44
第 34 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（３）……45
第 35 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（４）……46
第 36 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（５）……47
第 37 図　ＮＳＤ11出土土器実測図（６）……48

第 38 図　２Ｅ－ｉ　３Ｅ－ｇ・ｈ　２Ｆ－ｃ・ｆ・ｉ　３Ｆ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ
２Ｇ－ｃ　３Ｇ－ａ区奈良時代遺構分布図……49・50
第 39 図　ＮＳＤ13土器集中部実測図……51
第 40 図　ＮＳＤ13第２土器集中部出土土器実測図（１）……53
第 41 図　ＮＳＤ13第２土器集中部出土土器実測図（２）……54
第 42 図　ＮＳＤ13第２土器集中部・ＮＳＤ13出土土器実測図（３）……55
第 43 図　ＮＳＤ13出土土器実測図（４）……56
第 44 図　ＮＳＤ13出土土器実測図（５）……57
第 45 図　ＮＳＤ13出土土器実測図（６）……58
第 46 図　２Ｄ－ｇ・ｈ区奈良時代遺構分布図・ＮＳＤ16遺物出土状態……59
第 47 図　ＮＳＤ16出土土器実測図（１）……60
第 48 図　ＮＳＤ16出土土器実測図（２）……61
第 49 図　ＮＳＤ16出土土器実測図（３）……62
第 50 図　３Ｃ－ｅ・ｇ・ｈ　３Ｄ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ　２Ｅ－ｃ　３Ｅ－ａ・ｂ区奈良時代遺構分布図……63・64
第 51 図　ＮＳＤ17土器集中部実測図・出土土器実測図（１）……66
第 52 図　ＮＳＤ17土器集中部出土土器実測図（２）……67
第 53 図　ＮＳＤ19出土土器実測図……68
第 54 図　２Ａ－ｇ・ｈ・ｉ　２Ｂ　２Ｃ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ区奈良時代遺構分布図
……69・70
第 55 図　ＮＳＤ21第１・２・３土器集中部実測図……71
第 56 図　ＮＳＤ21第４・５土器集中部・礫集中部実測図……72
第 57 図　ＮＳＤ21第１・２土器集中部出土土器実測図（１）……73
第 58 図　ＮＳＤ21第２・３土器集中部出土土器実測図（２）……74
第 59 図　ＮＳＤ21第４・５土器集中部・ＮＳＤ21出土土器実測図（３）……75
第 60 図　ＮＳＤ21出土土器実測図（４）……76
第 61 図　ＮＳＤ21出土土器実測図（５）……77
第 62 図　ＮＳＤ21（６）・22出土土器実測図……78
第 63 図　ＮＳＢ１実測図・柱穴出土土器実測図……79
第 64 図　ＮＳＢ２実測図……81
第 65 図　ＮＳＢ３実測図……82
第 66 図　ＮＳＢ４実測図・柱穴出土土器実測図……83
第 67 図　ＮＳＢ５実測図……84
第 68 図　ＮＳＢ６実測図・柱穴出土土器実測図……84
第 69 図　ＮＳＢ７実測図……85
第 70 図　ＮＳＢ８実測図……85
第 71 図　ＮＳＢ９実測図……86
第 72 図　ＮＳＢ10実測図……87
第 73 図　ＮＳＢ11実測図……88
第 74 図　ＮＳＢ12実測図……89

第 75 図　ＮＳＢ13実測図……90
第 76 図　ＮＳＢ14実測図……91
第 77 図　ＮＳＢ15実測図……92
第 78 図　ＮＳＢ16実測図……93
第 79 図　ＮＳＢ17実測図……93
第 80 図　ＮＳＢ18実測図……93
第 81 図　ＮＳＢ19実測図……95
第 82 図　ＮＳＢ20実測図……95
第 83 図　ＮＳＢ21・22実測図……98
第 84 図　ＮＳＢ23実測図……99
第 85 図　ＮＳＢ24実測図…… 101
第 86 図　ＮＳＢ25実測図・柱穴出土土器実測図…… 101
第 87 図　ＮＳＢ26実測図…… 102
第 88 図　ＮＳＢ27実測図…… 102
第 89 図　ＮＳＢ28実測図…… 102
第 90 図　ＮＳＢ29・30実測図…… 103
第 91 図　ＮＳＢ31実測図…… 104
第 92 図　ＮＳＢ32実測図…… 105
第 93 図　ＮＳＢ33実測図…… 105
第 94 図　ＮＳＢ34実測図・柱穴出土土器実測図…… 107
第 95 図　ＮＳＢ35実測図…… 109
第 96 図　ＮＳＢ36・37実測図…… 109
第 97 図　ＮＳＨ１実測図・出土土器実測図…… 111
第 98 図　ＮＳＨ２出土土器実測図（１）…… 112
第 99 図　ＮＳＨ２出土土器実測図（２）…… 113
第 100 図　ＮＳＨ３実測図・出土土器実測図…… 114
第 101 図　ＮＳＨ４実測図・出土土器実測図（１）…… 115
第 102 図　ＮＳＨ４出土土器実測図（２）…… 116
第 103 図　ＮＳＨ５実測図・出土土器実測図…… 117
第 104 図　ＮＳＨ６実測図・出土土器実測図…… 118
第 105 図　ＮＳＨ７実測図・出土土器実測図…… 119
第 106 図　ＮＳＨ８実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）…… 120
第 107 図　ＮＳＨ８実測図・出土土器実測図（２）…… 121
第 108 図　ＮＳＨ８出土土器実測図（３）…… 122
第 109 図　ＮＳＨ９実測図…… 123
第 110 図　ＮＳＨ９出土土器実測図…… 124
第 111 図　ＮＳＥ１実測図・出土土器実測図…… 126
第 112 図　ＮＳＥ２実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）…… 127
第 113 図　ＮＳＥ２出土土器実測図（２）…… 128
第 114 図　ＮＳＩ２実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）…… 129

第115図　ＮＳＩ２出土土器実測図（２）…… 130
第116図　ＮＳＩ２出土土器実測図（３）…… 131
第117図　ＮＳＩ２出土土器実測図（４）…… 132
第118図　ＮＳＩ３実測図・出土土器実測図…… 133
第119図　ＮＳＩ11実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）…… 136
第120図　ＮＳＩ11出土土器実測図（２）…… 137
第121図　ＮＳＩ13実測図・遺物出土状態・出土土器実測図…… 138
第122図　ＮＳＩ14・15・16実測図　ＮＳＩ15出土土器実測図（１）…… 139
第123図　ＮＳＩ15出土土器実測図（２）　ＮＳＩ16出土土器実測図 …… 140
第124図　ＮＳＩ17・18実測図　ＮＳＩ17出土土器実測図…… 142
第125図　ＮＳＩ23実測図・遺物出土状態・出土土器実測図…… 143
第126図　ＮＳＩ１・４・５・６・７・８実測図…… 144
第127図　ＮＳＩ９・10・12・19・20・21・22実測図…… 145
第128図　ＮＳＩ５・７・19・21・22出土土器実測図…… 146
第129図　ＮＳＸ１実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）…… 147
第130図　ＮＳＸ１出土土器実測図（２）…… 148
第131図　包含層出土土器実測図……164・165
第132図　ヘラ記号のある土器実測図・拓影…… 166
第133図　硯・転用硯実測図…… 167
第134図　陶製紡錘車実測図…… 169
第135図　ミニチュア土器実測図…… 169
第136図　土製品実測図（馬形・人形・土錘・鞴口）…… 170
第137図　土製支脚実測図…… 171
第138図　瓦・塼実測図・拓影…… 173
第139図　柱根実測図（１）…… 174
第140図　柱根実測図（２）　礎板実測図 …… 175
第141図　杭実測図（１）…… 176
第142図　杭実測図（２）…… 177
第143図　部材実測図…… 179
第144図　ＮＳＤ３西張り出し施設部材実測図…… 180
第145図　木製品実測図（１）…… 182
第146図　木製品実測図（２）…… 184
第147図　木製品実測図（３）…… 185
第148図　木製品実測図（４）…… 186
第149図　木製品実測図（５）　木簡実測図 …… 187
第150図　金属製品実測図…… 189
第151図　和銅開珎拓影…… 190
第152図　石製品実測図（１）…… 192
第153図　石製品実測図（２）…… 194
第154図　石製品実測図（３）…… 195

第155図　石製品実測図（4）…… 196
第156図　土器墨書出土遺構位置図…… 211
第157図　土器墨書実測図（1）…… 248
第158図　土器墨書実測図（2）…… 249
第159図　土器墨書実測図（3）…… 250
第160図　土器墨書実測図（4）…… 251
第161図　土器墨書実測図（5）…… 252
第162図　土器墨書実測図（6）…… 253
第163図　土器墨書実測図（7）…… 254
第164図　土器墨書実測図（8）…… 255
第165図　土器墨書実測図（9）…… 256
第166図　土器墨書実測図（10）…… 257
第167図　土器墨書実測図（11）　ヘラ描き文字拓影 …… 258
第168図　坂尻遺跡における須恵器（食器）編年表1 …… 278
第169図　坂尻遺跡における土師器（食器）編年表2 …… 279
第170図　坂尻遺跡における須恵器（貯蔵具）編年表3 …… 280
第171図　坂尻遺跡における土師器（貯蔵具　煮炊具）編年表4 …… 281
第172図　奈良時代遺構変遷図…… 291
第173図　坂尻遺跡主要遺構全体図……297・298

表　目　次

第 1 表　中・東遠地方の奈良時代遺跡一覧表……3
第 2 表　石製品計測表…… 198
第 3 表　石材分類表…… 198
第 4 表　遺跡別碁石計測表…… 199
第 5 表　時代別碁石計測グラフ…… 199
第 6 表　土器墨書分類表…… 203
第 7 表　佐野・山名・長下郡郷名一覧…… 207
第 8 表　駅家関係墨書出土遺構一覧…… 212
第 9 表　墨書土器の器種と構成比…… 213
第 10 表　千山関係墨書土器の器種と構成比…… 213
第 11 表　平安時代以降の土器墨書の時代区分…… 216
第 12 表　坂尻遺跡出土土器墨書一覧表……223～247

写　真　図　版

カラー図版（巻頭）　銙帯具　和銅開珎（表）　　銙帯具　和銅開珎（裏）

ＰＬ．１　２・３Ｆ～２・３Ｊ区発掘調査前全景　　２・３Ｆ～２・３Ｊ区完掘全景

ＰＬ．２　３Ａ～３Ｃ区発掘調査前全景　　３Ａ～３Ｃ区完掘全景

ＰＬ．３　２・３Ｆ～２・３Ｊ区完掘全景　　２Ａ～２Ｅ区完掘全景

ＰＬ．４　２Ａ～２Ｅ区完掘全景　　２・３Ｇ　２・３Ｈ区全景（Ⅲ層２面）

ＰＬ．５　２Ａ・Ｂ区全景（Ⅲ層１面）　　２Ａ・Ｂ区全景（Ⅲ層２面）

ＰＬ．６　ＮＳＤ１・２南半完掘状況（Ⅲ層３面）　　ＮＳＤ２東西断面　　ＮＳＤ１完掘状況
ＮＳＤ２銙帯金具（丸鞆）出土状況

ＰＬ．７　ＮＳＤ３（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ３遺物出土状況　　ＮＳＤ３南岸杭列検出状況
ＮＳＤ３（Ⅲ層３面）

ＰＬ．８　ＮＳＤ３下層遺物出土状況　　ＮＳＤ３杭列検出状況

ＰＬ．９　ＮＳＤ３東張り出し施設検出状況　　ＮＳＤ３貝塚検出状況　　ＮＳＤ３遺物出土状況
ＮＳＤ３斎串出土状況　　ＮＳＤ３和銅開珎出土状況
ＮＳＤ３銙帯金具（鉸具）出土状況　　ＮＳＤ３土器墨書出土状況

ＰＬ．10　ＮＳＤ３西張り出し施設検出状況　　ＮＳＤ３西張り出し施設組材の状況

ＰＬ．11　ＮＳＤ４北半（Ⅲ層２面）　　ＮＳＤ４南半（Ⅲ層２面）　　ＮＳＤ４東西断面

ＰＬ．12　ＮＳＤ４南端遺物出土状況　　ＮＳＤ４西岸護岸施設検出状況
ＮＳＤ４銙帯金具（丸鞆）出土状況　　ＮＳＤ４西岸杭列断面　　ＮＳＤ４獣足出土状況
ＮＳＤ４馬形出土状況　　ＮＳＤ４第１号木簡出土状況

ＰＬ．13　ＮＳＤ５東半完掘状況（Ⅲ層２面）　　ＮＳＤ５枝溝（Ⅲ層３面）
ＮＳＤ５西半完掘状況（Ⅲ層３面）

ＰＬ．14　ＮＳＤ６・７（３Ｇ・Ｈ区）（Ⅲ層２面）　　ＮＳＤ６彎曲部の状況
ＮＳＤ10（２Ｆ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ８北半完掘状況（Ⅲ層２面）
ＮＳＤ11（２・３Ｆ区）（Ⅲ層３面）

ＰＬ．15　ＮＳＤ11東半完掘状況（Ⅲ層３面）　　ＮＳＤ11東半南岸護岸施設検出状況
ＮＳＤ11東半南岸杭列・貝塚検出状況

ＰＬ．16　ＮＳＤ11西半遺物出土状況　　護岸施設検出状況　　ＮＳＤ11西半下層遺物出土状況

ＰＬ．17　ＮＳＤ11西半西岸護岸施設検出状況　　ＮＳＤ11東半貝塚検出状況
ＮＳＤ11第２号木簡出土状況　　ＮＳＤ11木簡状木製品出土状況
ＮＳＤ11第３号木簡出土状況　　ＮＳＤ11土器墨書出土状況

ＰＬ．18　ＮＳＤ13（２・３Ｅ・Ｆ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ13（Ⅲ層１面）
ＮＳＤ13完掘状況（Ⅲ層３面）

ＰＬ．19　ＮＳＢ13南端（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ13南端遺物出土状況（第２土器集中部）
ＮＳＤ13南端完掘状況　　ＮＳＤ13南北断面　　ＮＳＤ13銙帯金具（巡方）出土状況

ＰＬ．20　ＮＳＤ14～16（２Ｄ・Ｅ区）（Ⅲ層３面）　　ＮＳＤ14・15（Ⅲ層３面）
ＮＳＤ14～16（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ14・15完掘状況（Ⅲ層１面）
ＮＳＤ16遺物出土状況（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ16完掘状況（Ⅲ層１面）

ＰＬ．21　ＮＳＤ17（３Ｄ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＤ17（３Ｄ区）（Ⅲ層２面）

ＮＳＤ17遺物出土状況　ＮＳＤ17銙帯金具（巡方）出土状況
ＰＬ．22　ＮＳＤ19（Ⅲ層２面）　ＮＳＤ20（３Ｃ・Ｄ区）（Ⅲ層３面）　ＮＳＤ22完掘状況（Ⅲ層１面）
ＰＬ．23　ＮＳＤ21（２Ａ・Ｂ・Ｃ区）（Ⅲ層２面）　ＮＳＤ21（２Ａ・Ｂ区）（Ⅲ層１面）
ＮＳＤ21南北断面
ＰＬ．24　ＮＳＤ21（２Ｂ・Ｃ区）（Ⅲ層２面）　ＮＳＤ21遺物出土状況（第５土器集中部）
ＮＳＤ21礫集中部検出状況　ＮＳＤ21遺物出土状況（第２土器集中部）
ＮＳＤ21遺物出土状況（第４土器集中部）
ＰＬ．25　ＮＳＢ１（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ２（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ２掘方断面
ＮＳＢ２掘方検出状況　ＮＳＢ２柱根検出状況
ＰＬ．26　ＮＳＢ２・３（２・３Ｇ・Ｈ区）（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ３（Ⅲ層１面）
ＮＳＢ３柱根検出状況　ＮＳＢ３掘方断面・柱根検出状況
ＰＬ．27　ＮＳＢ４（Ⅲ層２面）　ＮＳＢ４柱穴断面　ＮＳＢ４柱根検出状況
ＮＳＢ５（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ６（Ⅲ層１面）
ＰＬ．28　ＮＳＢ６～９（３Ｆ区）（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ７（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ８（Ⅲ層３面）
ＰＬ．29　ＮＳＢ10（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ11・12上面の掘立柱建物（Ⅲ層１面）
ＮＳＢ11～13（３Ｅ・Ｆ区）（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ12根固め礫検出状況
ＰＬ．30　ＮＳＢ12（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ12掘方検出状況　ＮＳＢ13（Ⅲ層３面）
ＰＬ．31　ＮＳＢ14～22（３Ｄ区）（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ14（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ15～17（Ⅲ層３面）
ＮＳＢ16東側柱列（Ⅲ層２面）　ＮＳＢ16掘方断面
ＰＬ．32　ＮＳＢ18北側柱列（Ⅲ層２面）　ＮＳＢ19北側柱列（Ⅲ層２面）
ＮＳＢ19根固め礫検出状況　ＮＳＢ19掘方検出状況
ＮＳＢ20～22（３Ｄ区）（Ⅲ層３面）
ＰＬ．33　ＮＳＢ20北側柱列（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ20礎板検出状況　ＮＳＢ21・22（Ⅲ層３面）
ＮＳＢ25（Ⅲ層２面）
ＰＬ．34　ＮＳＢ23・24（３Ｃ・Ｄ区）（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ26礎板検出状況
ＮＳＢ28（Ⅲ層３面）　ＮＳＢ29西半（Ⅲ層１面）
ＰＬ．35　ＮＳＢ29東半（Ⅲ層２面）　ＮＳＢ31（Ⅲ層２面）　ＮＳＢ32北側柱列（Ⅲ層３面）
ＮＳＢ32礎板検出状況
ＰＬ．36　ＮＳＢ33（３Ｂ区）（Ⅲ層１面）　ＮＳＢ35（３Ａ・Ｂ区）（Ⅲ層３面）
ＰＬ．37　ＮＳＢ36・37（Ⅲ層３面）　ＮＳＡ２（３Ｅ区）（Ⅲ層２面）
ＮＳＨ１（３Ｇ区）（Ⅲ層３面）
ＰＬ．38　ＮＳＨ３～５（２Ｅ・Ｆ区）（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ３（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ４（Ⅲ層１面）
ＰＬ．39　ＮＳＨ５（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ６・７（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ７（Ⅲ層１面）
ＰＬ．40　ＮＳＨ８（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ８完掘状況（Ⅲ層１面）　ＮＳＨ８遺物出土状況
ＰＬ．41　ＮＳＨ９（３Ｂ区）（Ⅲ層２面）　ＮＳＨ９西半東西断面　ＮＳＨ９東半東西断面
ＮＳＨ９中央東西断面　ＮＳＨ９遺物出土状況
ＰＬ．42　ＮＳＥ１（３Ｄ区）（Ⅲ層３面）　ＮＳＥ１完掘状況（Ⅲ層２面）
ＮＳＥ２（３Ｃ区）（Ⅲ層１面）
ＰＬ．43　ＮＳＥ２（Ⅲ層１面）　ＮＳＥ２完掘状況　ＮＳＥ２南北断面

ＮＳＥ２中央遺物出土状況　　ＮＳＥ２南端遺物出土状況
ＰＬ．44　ＮＳＩ２（２・３Ｇ・Ｈ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＩ２（Ⅲ層１面）
ＮＳＩ２獣足出土状況　　ＮＳＩ２遺物出土状況
ＮＳＩ３南西部遺物出土状況（Ⅲ層１面）
ＰＬ．45　ＮＳＩ４（２Ｆ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＩ５机出土状況（Ⅲ層１面）
ＮＳＩ５完掘状況（Ⅲ層１面）
ＰＬ．46　ＮＳＩ８（Ⅲ層３面）　　ＮＳＩ11（Ⅲ層１面）　　ＮＳＩ11西半遺物出土状況
ＮＳＩ11東半遺物出土状況
ＰＬ．47　ＮＳＩ13遺物出土状況（Ⅲ層１面）　　ＮＳＩ13完掘状況（Ⅲ層２面）
ＮＳＩ13（Ⅲ層２面）　　ＮＳＩ17（Ⅲ層２面）　　ＮＳＩ17焼土検出状況
ＮＳＩ17砥石出土状況
ＰＬ．48　ＮＳＩ15・16（３Ｃ区）（Ⅲ層１面）　　ＮＳＩ15（Ⅲ層１面）
ＮＳＩ21・22（３Ｂ区）（Ⅲ層２面）
ＰＬ．49　ＮＳＩ22遺物出土状況　　ＮＳＩ23遺物出土状況　　ＮＳＸ１遺物出土状況（Ⅲ層１面）
ＰＬ．50　ＮＳＤ３出土土器
ＰＬ．51　ＮＳＤ３・４出土土器
ＰＬ．52　ＮＳＤ４出土土器
ＰＬ．53　ＮＳＤ11出土土器
ＰＬ．54　ＮＳＤ11・13出土土器
ＰＬ．55　ＮＳＤ13出土土器
ＰＬ．56　ＮＳＤ13・16出土土器
ＰＬ．57　ＮＳＤ16・17・21出土土器
ＰＬ．58　ＮＳＤ21　　ＮＳＢ34出土土器
ＰＬ．59　ＮＳＨ２～４・９　　ＮＳＥ２　　ＮＳＩ２出土土器
ＰＬ．60　ＮＳＩ２・３・11・13・15出土土器
ＰＬ．61　ＮＳＩ15・23　　ＮＳＸ１　　包含層出土土器
ＰＬ．62　包含層出土土器　　ヘラ描き文字　　ヘラ記号
ＰＬ．63　円面硯・転用硯　　ミニチュア土器
ＰＬ．64　ミニチュア土器　　漆付着土器　　土製品
ＰＬ．65　土製品・鞴羽口　　土製支脚
ＰＬ．66　瓦・塼　　窯滓・鉄滓（ＮＳＤ３・４等）
ＰＬ．67　柱根
ＰＬ．68　礎板　　杭
ＰＬ．69　杭　　ＮＳＤ３西張り出し施設部材
ＰＬ．70　杭・建築部材　　木製品
ＰＬ．71　木製品
ＰＬ．72　薪材（ＮＳＤ３・４・11等）　　金属製品　　石製品
ＰＬ．73　石製品

第Ⅳ章　墨書写真図版

PL. 1　NSD1・2・3 …… 259
PL. 2　NSD3 …… 260
PL. 3　NSD3 …… 261
PL. 4　NSD3 …… 262
PL. 5　NSD3・4 …… 263
PL. 6　NSD4 …… 264
PL. 7　NSD4・9 …… 265
PL. 8　NSD9・11 …… 266
PL. 9　NSD11・13 …… 267
PL. 10　NSD13・21 …… 268
PL. 11　NSD21　NSB1・5・6　NSH1・2・3　NSI11　NSE2 …… 269
PL. 12　NSE2　包含層 …… 270
PL. 13　包含層　HSX1　HSD2 …… 271
PL. 14　HSI1　HSD5・6・12・20　包含層　HSX1　NSD4・11 …… 272

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

第1節　立　　地

遺跡立地については、序文・古墳時代編に詳述されている。また坂尻遺跡をめぐる地形・地学的背景については、自然科学編の加藤論文に詳しいので参照願いたい。ここでは奈良時代にかかる遺跡立地の要件を整理するにとどめる。

掛川市八高山に源を発した原野谷川は、垂木川・逆川と合流して河道を西に転じる。坂尻遺跡は河道転換点の右岸に形成された自然堤防上（標高15.50～17.50m）に立地している。この自然堤防は旧東海道が通る久津部・新屋の微高地へと続き、北西方は後背低地となる。北側には、各和原台地（標高50m前後）の末端丘陵が迫っている。

この自然堤防を横断し古墳時代中期まで溝（川）としての機能を保っていた小河川（古名栗川）が、坂尻遺跡の成立に大きなかかわりを持ったとする見解がある（加藤論文参照）。遺跡の東・南方には原野谷川・逆川等の蛇行痕が観察でき（序文・古墳時代編巻頭図版）、古墳時代の遺構群は、確かに古名栗川の自然地形に左右されていたようであるが、8世紀初頭に掘削されたと思われる溝状遺構（ＮＳＤ21）は古名栗川を切断し、現自然堤防の北縁に沿って東西に流れている。旧流路上には数棟の掘立柱建物（ＮＳＤ34～37）が建てられており、古名栗川は古墳時代の末葉までにすでに埋没していたと考えられよう。旧東海道に沿って東西に長く自然堤防が発達し、奈良時代における遺跡付近の自然景観は現在とよく似た状況を呈していたと思われる（序文・古墳時代編第6図）。現自然堤防の堆積物の下、古名栗川の流域にはグライ層が広く分布している。加藤論文ではこのグライ層の深度が地下水の年間飽和しているところにほぼ等しいため、自然堤防上は比較的水はけの良いいわゆる「高燥の地」であったのだろうと推定されている。

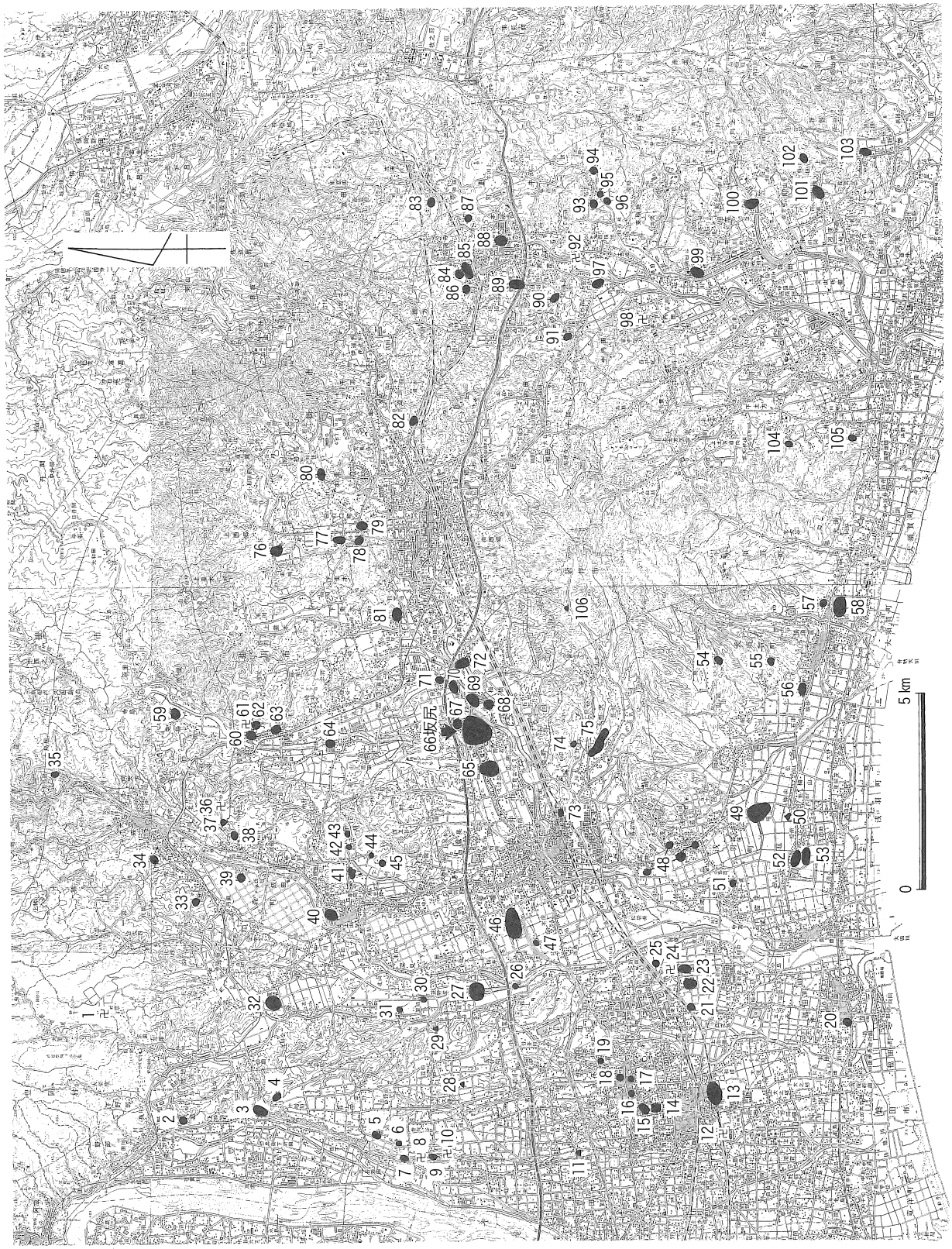
視野を中遠地方全体の地形にまで広げてみると、遺跡北側の各和原台地は掛川市幡鎌・寺島をへて赤石の山稜へと続いて行く。南側には標高264mの小笠山を中心として、海岸線近くまで丘陵地が広がっている。南北に連なる地形的な高まりのなかで坂尻遺跡が河川に沿い、東西の沖積地を結ぶ唯一の沈降部に位置していたことは奈良時代の遺跡の性格を論ずるうえで重要な地理的要件となろう。

奈良時代にかかる遺跡立地の地理的要件は、次の4項目に整理できる。

1．遺跡は原野谷川右岸の自然堤防上に立地している。自然堤防上は比較的水はけがよく、良好な生活環境であった。
2．遺跡のすぐ南側で原野谷川が屈曲・蛇行し流れ（勾配）は緩やかとなる。また垂木川逆川と合流する。水運の面で河川を利用しやすい地点に位置していた。
3．近くに河川・湧水があり、井戸以外にも生活用水を確保することができた。
4．遺跡は南北に続く山稜（高地）のなかで、唯一の沈降部に位置している。東西陸上交通要衝となるべき地理的条件をそなえていた。

第2節　歴史的環境

大宝令の施行直後、遠江国10郡のうち袋井市域には長田・佐益の2郡が設置された。和銅2（709）年、長田郡は長上・長下に分割され、さらに降って養老6（722）年、佐益郡の8郷を割いて山名郡が置かれた。郡の分割が進み、奈良時代中期には、長下・佐益（後佐野と表記）・山名の3郡になったと考えられる（註1）。



第１図　東・中遠地方の奈良時代遺跡分布図
（数字は第１表と一致する。）

第1表　中・東遠地方の奈良時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	備考
1	岩室廃寺　(豊岡村)	奈良後～中世	塔礎石・瓦
2	押越古墳群(同)	古墳後～奈良前	
3	大手内古墳群(同)	古墳前～奈良前	
4	山田原古墳群(袋井市)	古墳後～奈良前	
5	寺谷古墳群(磐田市)	古墳後～奈良前	
6	長者屋敷　(同)	奈良	土塁・堀・掘立柱建物
7	寺谷瓦窯　(同)	奈良?～平安	瓦
8	寺谷廃寺　(同)	古墳後～奈良	瓦
9	馬坂　(同)	古墳～平安	蔵骨器(?)
10	岩田廃寺　(同)	奈良(?)～平安	礎石
11	加茂東原　(豊田町)	旧石器～中世	蔵骨器
12	大宝院廃寺(磐田市)	古墳後～奈良	瓦
13	御殿・二之宮(同)	弥生～中世	木簡・墨書土器・掘立柱建物
14	遠江国分寺(同)	奈良～平安	礎石・瓦・墨書土器
15	国府台　(同)	奈良～平安	瓦・基壇
16	見性寺　(同)	縄文～中世	
17	新通り8　(同)	奈良～平安	陶馬
18	見付端城　(同)	奈良～近世	瓦塔・円面硯・掘立柱建物
19	(仮)三本松(同)	奈良(?)	
20	島　(福田町)	古墳後～奈良	
21	野際　(磐田市)	弥生～中世	墨書土器・掘立柱建物
22	長江崎　(磐田市)	古墳～中世	
23	鍬影　(同)	弥生～中世	瓦・墨書土器・人形
24	全久院廃寺(磐田市)	古墳後～奈良	瓦・雨落溝
25	(仮)新貝　(磐田市)	奈良～中世	
26	(仮)西村　(同)	古墳～中世	
27	七反田　(同)	古墳前～中世	
28	(仮)大久保(同)	奈良前	蔵骨器
29	新豊院山　(同)	縄文～平安	蔵骨器
30	笠梅　(同)	弥生～中世	
31	中村　(同)	弥生～中世	
32	萱間Ⅱ　(袋井市)	奈良～中世	
33	文珠堂古墳群(森町)	古墳後～奈良	
34	円明寺古墳群(同)	古墳後～奈良	
35	大鳥居Ⅱ　(同)	奈良～平安	古墳群?
36	平戸廃寺　(森町)	奈良～平安	瓦
37	東平戸　(同)	弥生・奈良～平安	
38	観音堂横穴群(同)	古墳後～奈良前	
39	実見　(同)	古墳後～平安	
40	稲荷領家　(袋井市)	奈良～平安	墨書土器・円面硯
41	宇刈横穴群(同)	古墳後～奈良	
42	(仮)三沢本村Ⅰ(同)	弥生～中世	
43	(仮)三沢本村Ⅱ(同)	奈良	
44	(仮)宇刈一色(同)	奈良	
45	(仮)宇刈岩先(同)	弥生～奈良	
46	土橋　(同)	弥生～近世	墨書土器・掘立柱建物
47	玉越　(磐田市)	弥生～中世	
48	諸井遺跡群(浅羽町)	弥生～中世	
49	青木　(同)	古墳前～中世	陶馬・掘立柱建物
50	宮西　(同)	弥生～中世	蔵骨器
51	釜下　(同)	古墳～中世	
52	宮ノ腰　(同)	古墳後～中世	
53	権現山　(同)	弥生～中世	
54	五郎右衛門窯(大須賀町)	奈良	
55	水ヶ谷奥窯(同)	奈良後	円面硯・陶人形
56	横砂　(同)	弥生～近世	
57	川原町　(同)	奈良～中世	
58	天王森　(同)	弥生～中世	
59	雨垂　(掛川市)	奈良	
60	長福寺西　(同)	奈良～平安	
61	長福寺廃寺(同)	奈良(?)～平安	
62	古城　(同)	奈良～近世	
63	堂下　(同)	奈良	
64	林　(同)	奈良	瓦
65	国本=鳥居裏(袋井市)	弥生～平安	
66	坂尻　(同)	弥生～中世	木簡・墨書土器・和銅開珎
67	石ノ形　(同)	古墳～中世	掘立柱建物
68	垂木川　(掛川市)	奈良～中世	
69	原川　(同)	弥生～中世	陶牛・緑釉陶器
70	二ツ池　(同)	奈良～平安	
71	岡津横穴群(掛川市)	古墳後～奈良前	
72	領家　(同)	弥生～平安	
73	地蔵ヶ谷横穴群(袋井市)	古墳後～奈良前	
74	宝野金山古墳群(同)	古墳後～奈良前	
75	長者平古墳群(同)	古墳後～奈良前	
76	石畑Ⅱ　(掛川市)	古墳～中世	
77	小市　(同)	弥生～中世	
78	次郎丸　(同)	古墳～奈良	
79	加島戸塚　(掛川市)	奈良	
80	谷ノ坪　(同)	奈良～平安	
81	絹張塚　(同)	奈良(?)～平安	
82	畑中　(同)	弥生～中世	
83	堂ノ前　(菊川町)	奈良～中世	
84	藤ヶ谷横穴群(同)	古墳後～奈良前	
85	八斗田　(同)	古墳～平安	墨書土器
86	大淵ヶ谷横穴群(同)	古墳後～奈良前	環頭大刀
87	八王寺　(同)	奈良～中世	
88	中島　(同)	縄文・古墳～中世	
89	白岩　(同)	弥生～中世	木簡
90	西袋　(同)	弥生・奈良～平安	
91	御門　(同)	弥生～奈良	
92	小川端廃寺(同)	奈良～中世	瓦
93	大平　(菊川町)	古墳後～奈良	
94	芝原　(同)	古墳後～奈良	
95	山脇　(同)	縄文～奈良	
96	杉の谷　(同)	古墳後～奈良	
97	長池　(同)	縄文・奈良～中世	
98	段平屋廃寺(同)	奈良(?)～平安	
99	城山下　(小笠町)	古墳後～奈良	
100	釜太夫　(同)	古墳後～奈良	
101	高橋　(同)	弥生～平安	
102	西ノ谷横穴群(浜岡町)	古墳後～奈良前	
103	新野川A　(同)	弥生～平安	
104	星川窯　(大東町)	古墳後～奈良	埴輪
105	三井山Ⅲ　(同)	古墳後～奈良	
106	長者屋敷廃寺	奈良～平安	銅鏡・礎石

※　第1図および本一覧表の作成にあたり、加藤賢三、柴田稔、大橋保夫、中島郁夫、山崎克己、前田庄一、足立順司、松本一男、水島和弘の各氏から多くのご教示をいただいた。遺跡名は静岡県遺跡地図・遺跡地名表（静岡県教委1979）各市町村教育委員会発行の遺跡地図等にならい記入したが、既刊の遺跡地図等に未記載の散布地については、その地の大字・小字をもって遺跡名とし、頭に（仮）を付けた。

『和名抄』高山寺本により以上3郡に属していた郷名を記すと、佐野郡－山口、小松、邑代（以比之呂）、幡羅、日根－の5郷（東急本では驛家郷を加え6郷）、山名郡－山名、衾田（不須末多）、宇知、信芸、荻戸、久努－の6郷、長下郡－大田、長野（奈加乃）、貫名（沼岐奈）、伊筑、幡多（判多）、大場、老馬（於以万）、通隈（止保利久万）－の8郷である。遠江においては郡の変遷が著しいため郡境の復元は難しいのであるが、原秀三郎氏は今に残る地名・坂尻遺跡出土の土器墨書等を検討され佐益郡を現在の掛川市域と袋井市国本あたりに、山名郡を袋井市鷲巣・久能から太田川中流域、森町上飯田に至る地域に、長下郡を天竜川河口付近の大楊・老間から掛塚・福田を経て、袋井市南半の上貫名・下貫名・法多、浅羽町あたりまでと推定された（原1983）。山名郡分割以前の佐益郡域は掛川市域と原野谷川以北の袋井市、敷地川流域と森町の一部を含んでいたことになる。坂尻遺跡が国郡制発足当初の佐益郡のほぼ中央に位置し、その名も国本と呼ばれる地に営まれていたことは興味深い。

佐益郡と山名郡はかつての久努国造の支配領域にあたる。『先代旧事本紀』巻＋「国造本紀」には遠江の国造として遠淡海国造・久努国造・素賀国造の名が見え、巻五「天孫本紀」によれば志紀県主、遠江（遠淡海）国造、久努直（久努国造）、佐夜直は印岐美連を祖とし、すべて物部系（同系）の氏族であったという。素賀国造の本拠地は久努国造の支配領域と重なり、坂尻遺跡から東へ約2㎞離れた掛川市領家・高御所の一帯とされる。素賀国造の始祖、美志印名の名が印岐美連をもとに生み出されたと考えられる（遠藤1979）ことから、素賀国造は6世紀後半以降の物部対蘇我の争いのなか物部系の久努直（久努国造）に対抗して、蘇我氏により擁立された小氏族であったとする解釈がなされている。一時期、久努国造に代ってこの地域を支配していたのであろうか。久努国造は他の国造において一般的なように、令制施行後、国郡名となることはなかった。久努の名は郷名としてのみ残り、郡名には佐益＝佐野（佐夜）が採用されている（註2）。久努直一族は没落し国郡制発足のころには、同族の佐夜直一族が大きな力を持つようになっていたと思われる。

こうした歴史的背景のもと、奈良時代の佐益郡域には久努・素賀国造の系譜をひく有力豪族や、同族とはいえ早くから別性を称していた佐夜直に連なる氏族が共存していたと考えられる。また天平10（738）年の「駿河国正税帳」には佐益郡散事丈部塩麻呂の名が見え、安部氏と同族の丈部氏もこの地域に確固たる基盤を築いていたと推定できる。坂尻遺跡をとりまく社会的・政治的状況は、古墳時代以来の支配階層内部の矛盾を継承している。養老6年に行われた山名郡の分割は佐益郡が広く、16郷以上を擁する大郡であったということばかりでなく、こうした支配階層内部の不安定さを反映したものなのではあるまいか（註3）。

第3節　奈良時代の遺跡分布

中遠地方に分布する奈良時代の遺跡数は現在100余箇所を数える（第1表、以下文中の遺跡番号は第1表の通し番号と同じである）。従来、遺跡分布に対する興味は古墳時代以前に片寄る傾向にあった。奈良時代以降の人口増加を考慮すれば、さらに多くの未発見（すでに知られている遺構・遺物の再検討も含め）の遺跡があると思われる。表面採集によるものが多いが位置を第1図に記してみた。

9箇所（6・13・14・18・21・46・49・66・67）の遺跡で掘立柱建物・溝等の遺構が確認されている。竪穴住居群を主体とするいわゆる集落跡は未だ明らかでない。木簡を出土した遺跡（13・66・89）のうち磐田市御殿・二ノ宮遺跡（13）は遠江国衙の一部とも考えらてれる（中嶋1981）。菊川町白岩遺跡（89）は、弥生時代中・後期の集落として著名であるが奈良時代の遺物散布量も多くその範囲は広く木簡は中世に属するものらしい。墨書土器、円面硯が採集された袋井市稲荷領家遺跡（40）

は山名郡家に比定される（原　1983)。また磐田市長者屋敷遺跡（６）は方形に土塁をめぐらし、南外側には２重の堀と土橋を築いていた。掘立柱建物が並び官衙的色彩の濃い遺跡である。

寺院跡は遠江国分寺（14）を含め11箇所（１・８・10・12・14・24・36・61・92・98・106）ある。多くが平安時代以降に盛期を迎えるが、豊岡村岩室廃寺（１）の採集品のなかに奈良時代後半の須恵器が見られ、森町平戸廃寺（36）の軒丸瓦の瓦当の文様（単弁八葉蓮華文）は平城宮第Ⅱ期のものと大変よく似ている。『静岡県史』第２巻には袋井市長者屋敷廃寺（106）から出土したとされる麟鳳八葉鏡の写真が掲載されている。中遠地方においても奈良時代後半から郡（官）寺とは別に、１郡内に１・２箇所の氏（私）寺が建立されるようになったのであろう。

蔵骨器の出土は少ない（９・11・28・29・50)。群集せず単独で見つかることが多く主に須恵器壺を用いている。浅羽町宮西遺跡（50）から出土した蔵骨器は土師器甕に火を受けたヒト（？）の四肢骨・指骨のみを納めていた。また後期古墳群・横穴群（２～５・33・34・38・41・71・73～75・84・86・102）のいくつかは、明らかに奈良時代前葉まで使用されている。奈良時代の墓制がどのように変化していったか把握できていないが、中遠地方にあってはかなり高い頻度で、横穴式石室・横穴への追葬が奈良時代初頭まで引き続き行われていたと考えられる。

須恵器窯は小笠山の南麓に３箇所（54・55・104）確認されている。大東町星川窯（104）はむしろ古墳時代（６世紀代）に中心がある。中遠地方で奈良時代の須恵器生産が始まるのは中葉以降（大須賀町五郎右衛門窯－54－）と考えられてきた（註４)。大須賀町水ヶ谷奥窯（55）は後葉から営まれ、須恵器（獣足付土器を含む）の他に硯、土製品（陶馬・人形・錘）等も焼かれている（市原1980)。水ヶ谷奥窯に継続して多くの窯が営まれるようになり、大須賀古窯群の生産は平安時代にかけて本格化していった。

遺跡の営まれた時期を見ると弥生・古墳時代前期から連続する遺跡（13・31・66等）と古墳時代後葉・奈良時代になって成立し、平安時代・中世へとつながっていく遺跡（18・52・68等）とがある。古墳時代後葉・奈良時代に集落拡大（拡散）の１つの企画があったと考えられよう。自然地形（条件）の変化によるものかもしれないが主たる要因はやはり律令制の施行にあったと思われる。磐田原台地の南縁（磐田市中泉・御殿・鎌田付近)、坂尻遺跡周辺の自然堤防上・丘陵上、浅羽町梅山の砂丘上、菊川上流の菊川町堀之内付近に濃密な遺跡分布が見られる。特に坂尻遺跡周辺には弥生・古墳時代以来の集落が密集し、古くから伝統的な要地（中心地）であったことを示していよう。

【補　註】

註１）『大日本地名辞書』『静岡県史』第３巻をはじめ、奈良～平安時代中期の長上・長下両郡を天竜川下流域および河口の西岸地域に比定する考えも少なくない。ここでは原秀三郎氏の説に従った。袋井市域の古代史は、(原1983）に詳しく叙述されており以下の記述もこの論考によった。あわせて参照願いたい。

註２）坂尻遺跡の西方２㎞（久津部）の旧東海道沿いに「久努神社」の扁額を掲げる七ツ森神社がある。郡辺をクツベと読んで、式内郡辺神社を七ツ森神社にあてる説が有力である。久努国造を祀る郡辺神社が久津部にあったとすれば、久努国造の本拠地も久津部・国本付近とするのが妥当と思われる。

註３）分割された山名郡（８郷）が母体である佐益郡より大きかったとはまず考えられない。

註４）坂尻遺跡出土土器の胎土分析結果（自然科学編　清水論文）では、奈良時代前葉に位置づけられる無台杯身（清水論文第３図－65）の生産地を大須賀（清ヶ谷）窯と推定されている。五郎右衛門窯よりさらに遡る窯が存在する可能性もある。

第Ⅱ章　遺　　構

奈良時代に属する遺構には、溝状遺構（ＮＳＤ）22条、掘立柱建物（ＮＳＢ）37棟、柵（ＮＳＡ）２条、竪穴住居（ＮＳＨ）９棟、井戸状遺構（ＮＳＥ）２基、竪穴状遺構（ＮＳＩ）23箇所がある。他に奈良時代前葉の土器を主体とする土器集中部（ＮＳＸ）が１箇所検出された。

各遺構の記述を進める前に、遺物包含層（特にⅢ層）内の遺構検出状況について若干説明しておきたい。すでに古墳時代編第Ⅳ章第２節に詳述されているが、坂尻遺跡の基本層位を再度整理すれば次のとおりである。

Ⅰａ層＝暗灰色粘土（現在の耕作土）。厚20～30㎝。

Ⅰｂ層＝管鉄（酸化鉄の沈着した植物根の痕）混り（暗）灰色粘土。厚15～20㎝。

黒色粘土層＝若干有機質を帯びる。中世に比定される遺構の主体的覆土。発掘区中央（２Ｆ区）から西半（２・３Ａ区）にかけてのみ分布する。厚５㎝前後と薄い。

Ⅱ層＝炭化物（粒）・細礫混り灰色砂質粘土。３Ｄ・Ｅ区付近ではわずかに管鉄を含む。平安時代を中心とする遺物包含層・遺構覆土。厚20～30㎝。

Ⅲａ層＝マンガン粒を多量に含む褐灰色砂質粘土。奈良・古墳時代の遺物包含層・遺構覆土。厚20～50㎝。

Ⅲｂ層＝マンガン粒を少量含む褐灰色砂質粘土。奈良・古墳時代の遺物包含層。２・３Ｇ区以東では砂質が強まり、マンガン粒の量も低下して、Ⅲａ・ｂ層の区分は不明瞭となる。厚15～30㎝。

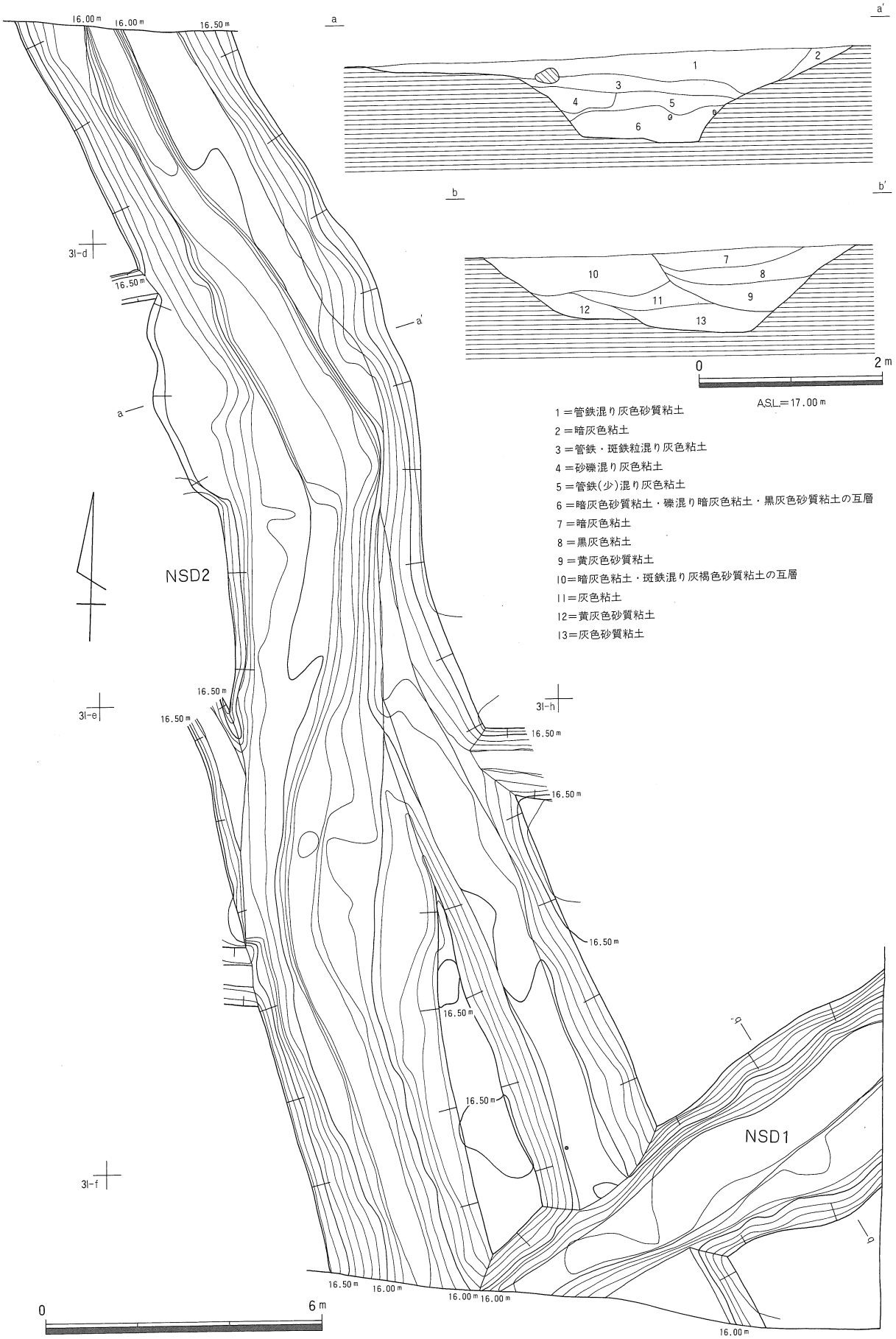
Ⅳ層＝緑灰色粘土。炭化粒をわずかに含み粘性が強い。古墳時代前期（？）～中期の遺物包含層。３Ｄ・Ｅ区付近に顕著である。厚５～10㎝。

Ⅴ層＝灰白色粘土・砂・礫の互層（２Ｂ・３Ｃ区以東）あるいは礫層（古名栗川流路＝自然科学編加藤論文参照）（遺跡基盤層）。

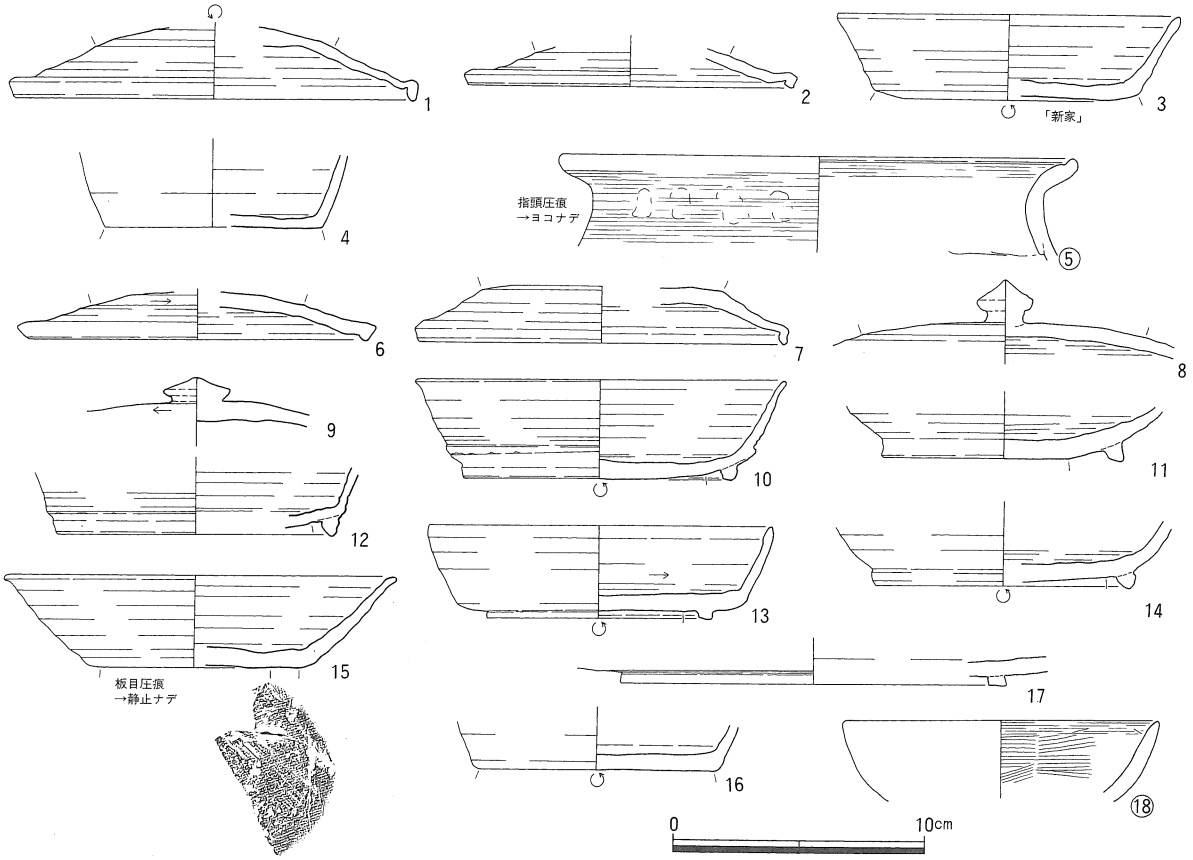
Ⅰａ・ｂ・Ⅱ層中にも奈良・古墳時代の遺物が混在する。Ⅳ層は古墳時代中期以前の遺物包含層と考えているが、Ⅴ層の堆積順位は明確でない。Ⅳ・Ⅴ層は近時して形成された可能性もある。

奈良時代の遺物は主にⅢａ・ｂ層から出土する。またⅢ層は古墳時代後期（６～７世紀）の遺物包含層でもある。比較的大きな土器破片は奈良・古墳時代ともⅢａ層内に集中する傾向にあり、土器細片は両時代が混在しⅢａ層上位からⅢｂ層にかけて均一に含まれている。Ⅲａ・ｂ層をあわせ、古墳時代後期～奈良時代末葉（９世紀前半代を含むか？）にいたる遺物包含層とするのが妥当なのかもしれない。Ⅲ層は発掘区東側で薄く（30～35㎝）、西に向い徐々に厚さを増す。３Ｂ区では層厚80～90㎝を測った。

試掘調査（永井他1981）時からマンガン粒の量が急激に減少するⅢｂ層上面を含め、Ⅲ層中には複数の生活面が存在すると推定されたため、Ⅲ層を厚10～15㎝単位で掘り下げ順次遺構検出作業を行ったのであるが、検出面を異にする遺構とその伴出遺物の編年時期に規則的な対応関係は見い出せなかった。２・３Ｇ区以東（Ⅲ層薄い）の奈良時代遺構はⅡ層を除去した段階（Ⅲａ層上面）でほぼ検出される。一方Ⅲ層の発達した発掘区西側（２・３Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区等）では、掘り下げが進むに従って遺構数は増加していく。発掘技術の未熟さにもよろうが、近時する遺構群が検出面を異にして見つかったり、一つの掘立柱建物の柱列でさえ大きく上下にわかれ検出されることも少なくなかった。奈良時代の遺構群は総じて古墳時代に先行して（Ⅲ層上位から）検出されるが、奈良時代を主体とす



第2図　ＮＳＤ１・２実測図



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.1)			杯蓋A3	6	(14.2)			杯蓋A2	11				有台杯身A1	16				無台杯身D2
2	(13.1)			杯蓋A3	7	(14.8)			杯蓋A3	12				有台杯身C1	17				有台皿A3
3	(13.6)		(3.4)	無台杯身D3	8				杯蓋A3	13	13.7		3.6	有台杯身C3	⑱	(12.5)			無台杯身C1
4				無台杯身D2	9				杯蓋A3	14				有台杯身A3					
⑤	(20.6)			甕D1	10	14.7		3.9	有台杯身A3	15	(15.5)		(3.6)	無台杯身A2					

第3図　ＮＳＤ１・２出土土器実測図

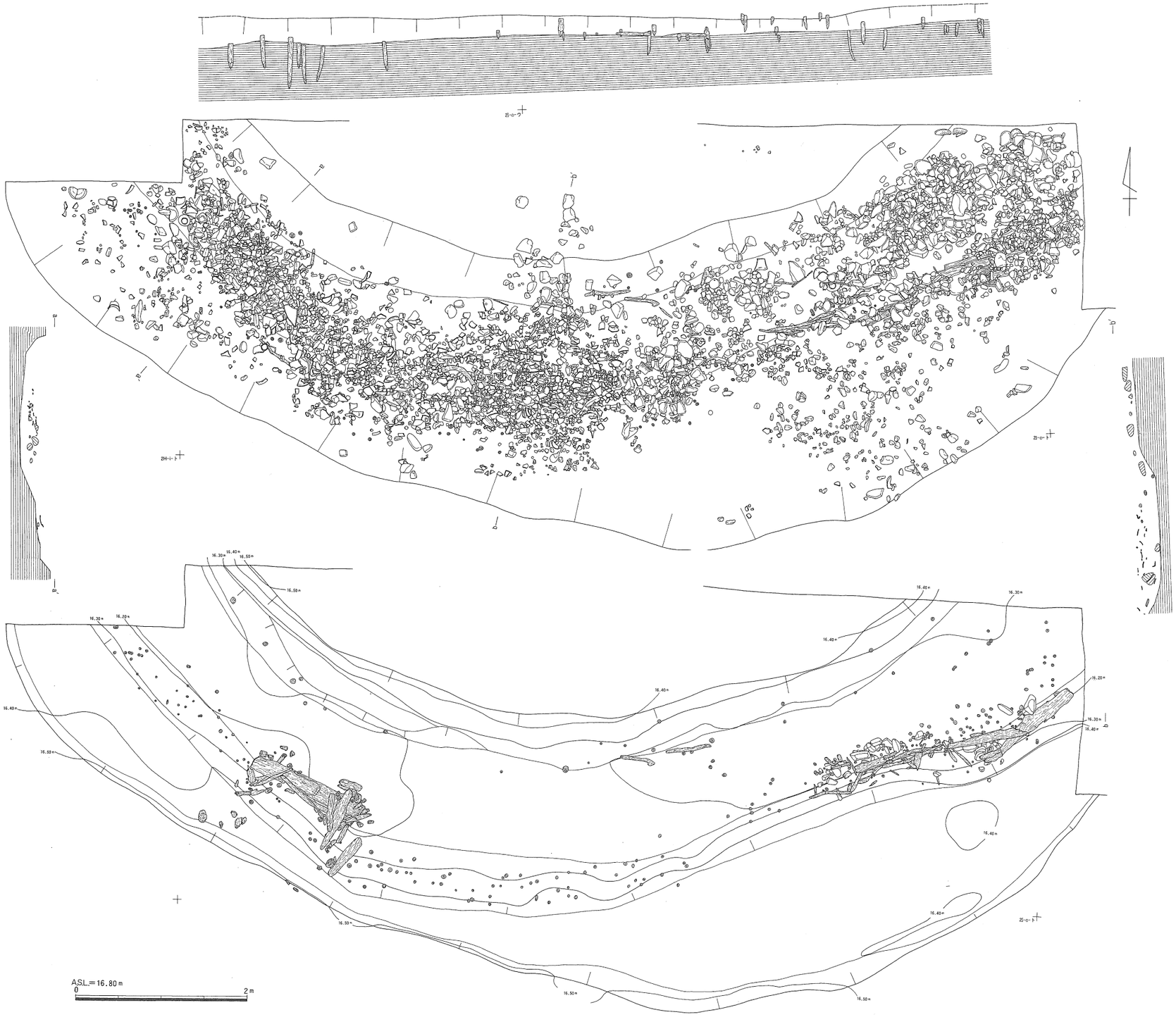
る検出面において古墳時代後期の遺構輪郭がまったく見えていない訳ではない。むしろ奈良・古墳時代の遺構群は検出面を同じくしている状況が一般的であり、奈良時代の遺構群の全様を知りえたのは古墳時代の遺構群をもほぼ検出し終えたⅢｂ層上面ないしはⅣ・Ⅴ層に至ってからであった。

以下記述する各遺構を奈良時代に位置づけた根拠は、その覆土から出土した遺物と古墳時代・平安時代以降の遺構との重複関係にある。よって伴出遺物が少なく、他遺構との重複関係も明確でなかった遺構（特に掘立柱建物）を奈良時代とした根拠は希薄と言わざるを得ない。また遺構検出面を１・２・３面に区分し記してみたが、この３区分は各遺構の位置する地点（おおよそ大グリット単位）でのⅢ層内における検出面の相対的高さ（１面上位・２面中位・３面下位＝Ⅲｂ層上面以下）を表わしているにすぎない。遺構検出面の対応関係を把握していない以上、３つの検出面が遺構形成時期の一応の目安にはなるとしても、発掘区全域にわたる各遺構の近似性や前後関係を厳密に表示するものではないことをまずことわっておきたい。

第１節　溝状遺構（ＮＳＤ）

ＮＳＤ１

発掘区東端（３Ｉ－ｉ・３Ｊ－ｂ・Ｃ区）のⅢ層下位（３面）から検出された。ＮＳＤ２に切断さ



第４図　ＮＳＤ３実測図・遺物出土状態

れる。確認長は約9.0mと短く、底面の海抜高も15.50m前後で一定している。現地形から判断して流路は北東から南西へ向っていたと思われる。幅3.10～4.05m、深さ0.85～0.95mを測る。

南岸は底面近くでわずかに膨らみ平坦面をつくるが、壁の傾斜は総じて直線的であり底面との境に明瞭な屈曲部を持つ。断面は整ったU状を呈する。覆土の堆積状態は当溝が長期間存続しほぼ埋没した後、再び南寄りに幅の狭い流路が掘削されたことを示している。底面にこぶし大礫が落ち込んでいた。

土器片（須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ｄ２・Ｄ３－墨書土器－、土師器甕Ｄ１）のみ少量出土している。

ＮＳＤ２

２Ｉ－ｆ・ｉ区～３Ｊ－Ｃ区にかけて直線的にのびる。Ⅲ層２面に至りほぼすべての輪郭を確認しえた。長さ約29.5m、幅2.35～4.10m、深さ0.45～1.15mを測り、両端は発掘区外におよんでいる。南北両端の比高差は約0.35mあり（海抜高15.60～15.95m）、北に向い流れていたと推定される。

平安時代以降の溝３条と直交しＮＳＤ１を切断する。後世の溝と流路を同じくする北半の形状は明らかでないが、南半では底面（平坦）の幅が均一で断面U字状を呈する。西側壁と底面との境５本の杭（径2.5～3.5cm）が密集して打ち込まれていた。

出土量は多くないが須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、有台杯身Ａ１・Ａ３・Ｃ１・Ｃ３、無台杯身Ａ２・Ｄ２、有台皿Ａ３、土師器無台杯身Ｃ１がほぼ等しい割合で出土している（墨書土器３点含む）。流路を若干移動させるものの、当溝は奈良時代前葉から後葉、さらに平安時代以降にいたるまで生きた溝として長期間存続していたと考えられる。伴出遺物に銙帯具（丸鞆－第150図－２、巻頭カラー図版）が１点ある。

ＮＳＤ３

２Ｈ－ｉ・２Ｉ－Ｃ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。北東から北西へ大きく蛇行している。長さ約12.5m、幅2.70～3.70m、深さ0.25～0.30m、底面の海抜高16.15m前後を測る。

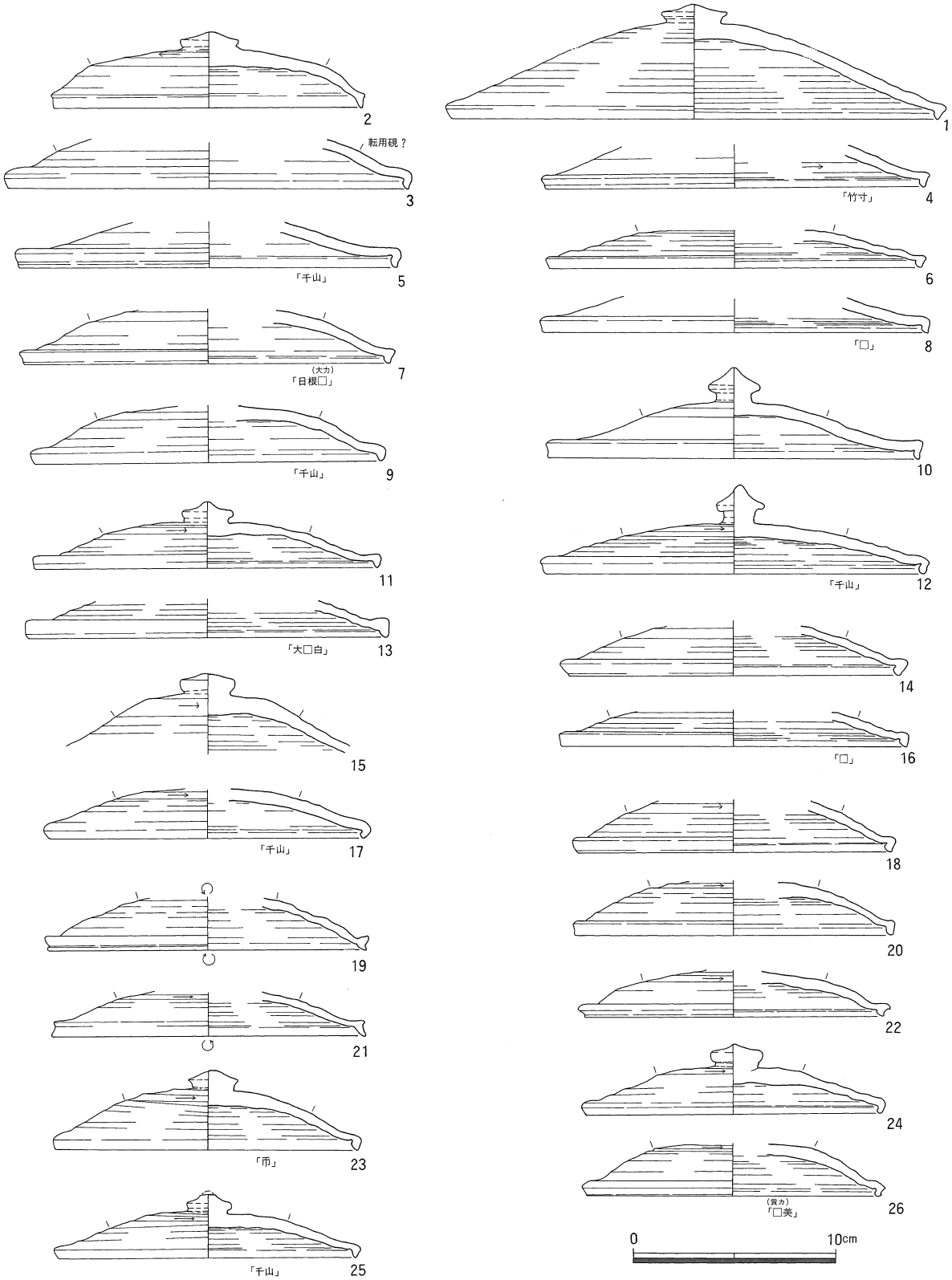
壁は緩やかに傾斜し北寄りにさらに一段深い流路を有していた。この一段深い流路の壁・底縁には多数の杭が打ち込まれ、乱雑ながら両岸に沿う２条の杭列をなしていた。多量のこぶし大礫と土器片が混在して一段深い流路を埋めつくし、また南岸上位の緩斜面には礫の集積が認められた。

使用された杭には太・細（径5.0～7.0cm・2.5～4.0cm）の別、自然の丸木材と角材（転用材か？）があり先端を３通りの方法のより尖らせていた。（長い削り面を多方向から加えた作りのていねいな太杭、短い削り面を３ないし４方向から加えた太杭、１方向の削りにより先端を尖らせた細杭）太杭の多くは深くまで（底面下0.5～0.7m）垂直に打ち込まれ、先端はⅢ層下の砂層にまで達していた。杭の間隔に規則性は認められず、量的には粗雑な削りの細杭が圧倒的に多い。杭列の外側には人為的なものか、自然に絡みついたものか、樹皮を残す丸木材（横木）が残り多くの礫はこの横木を押し潰すように集積していた。断定できないが木杭と横木で礫止めを築り、その上位の斜面にこぶし大礫を張りしめて護岸施設を施けていたと考えられる。乱雑に打ち込まれた細杭は補修工事に伴うものかもしれない。流水の浸食が著しい南岸（攻撃斜面）に多量の杭が検出されたことは、補修工事がかなり頻繁に行われていたことを示していよう。

約5.0m離れ東西に２箇所張り出し施設が築かれていた。両施設とも一段深い流路の南斜面に位置している。東側の張り出し施設では長さ約2.70mにわたり板材（長さ100～110cm、幅15～20cm、厚さ2.5～4.0cm）と木杭列が残り、部分的に板材が太杭の上に乗っていたが詳細な構造は不明である。西側の張り出し施設は階段状（２段）をなしていた（南北幅1.00m、東西幅1.40m）。先端をていねい

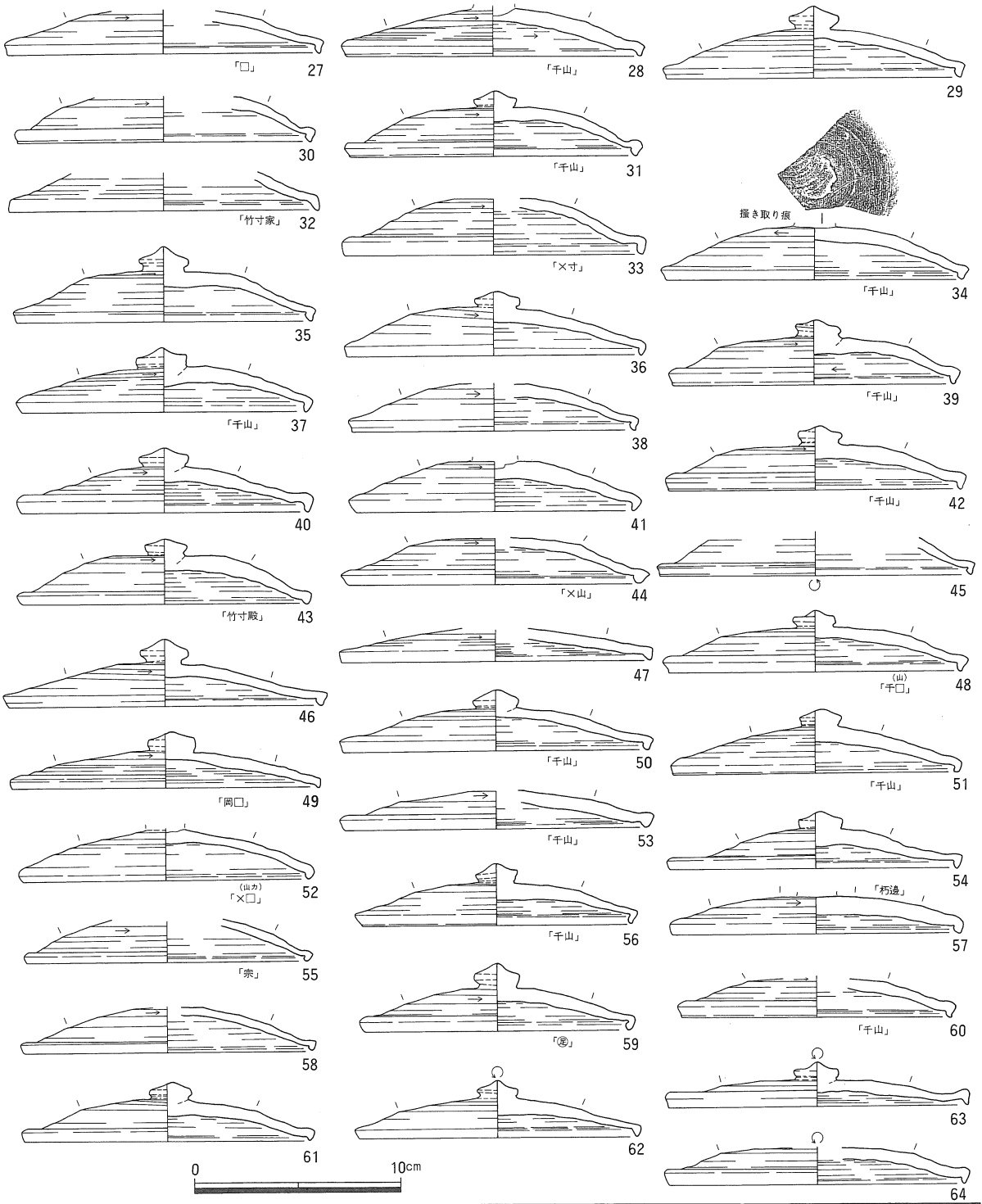


第5図　ＮＳＤ３東・西張り出し施設実測図



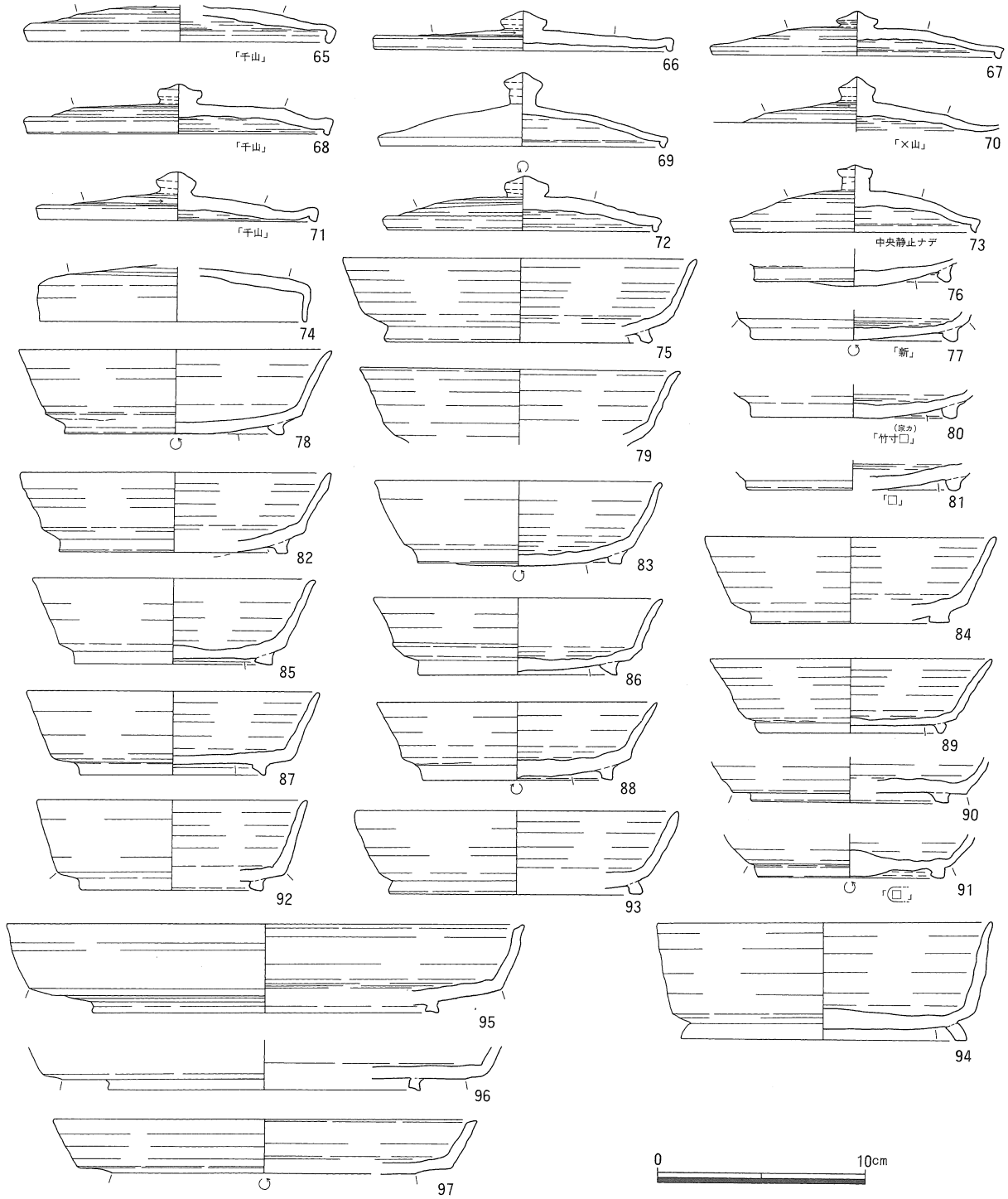
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(24.7)		(5.6)	皿蓋	8	(19.2)			杯蓋A3	15				杯蓋A1	22	(15.4)			杯蓋A3
2	15.5		3.7	杯蓋A1	9	(17.6)			杯蓋A2	16	(17.2)			杯蓋A3	23	15.2		3.9	杯蓋A3
3	(20.1)			杯蓋A3	10	18.6		4.4	杯蓋A3	17	(16.1)			杯蓋A3	24	15.0		3.5	杯蓋A3
4	(19.1)			杯蓋A3	11	17.2		3.3	杯蓋A3	18	(16.0)			杯蓋A3	25	15.1		3.2	杯蓋A3
5	(19.1)			杯蓋A3	12	19.2		4.3	杯蓋A3	19	(16.0)			杯蓋A2	26	15.0			杯蓋A3
6	(18.8)			杯蓋A3	13	(18.0)			杯蓋A3	20	(15.9)			杯蓋A3					
7	(18.5)			杯蓋A3	14	(17.1)			杯蓋A3	21	(15.5)			杯蓋A2					

第6図　ＮＳＤ３出土土器実測図（１）



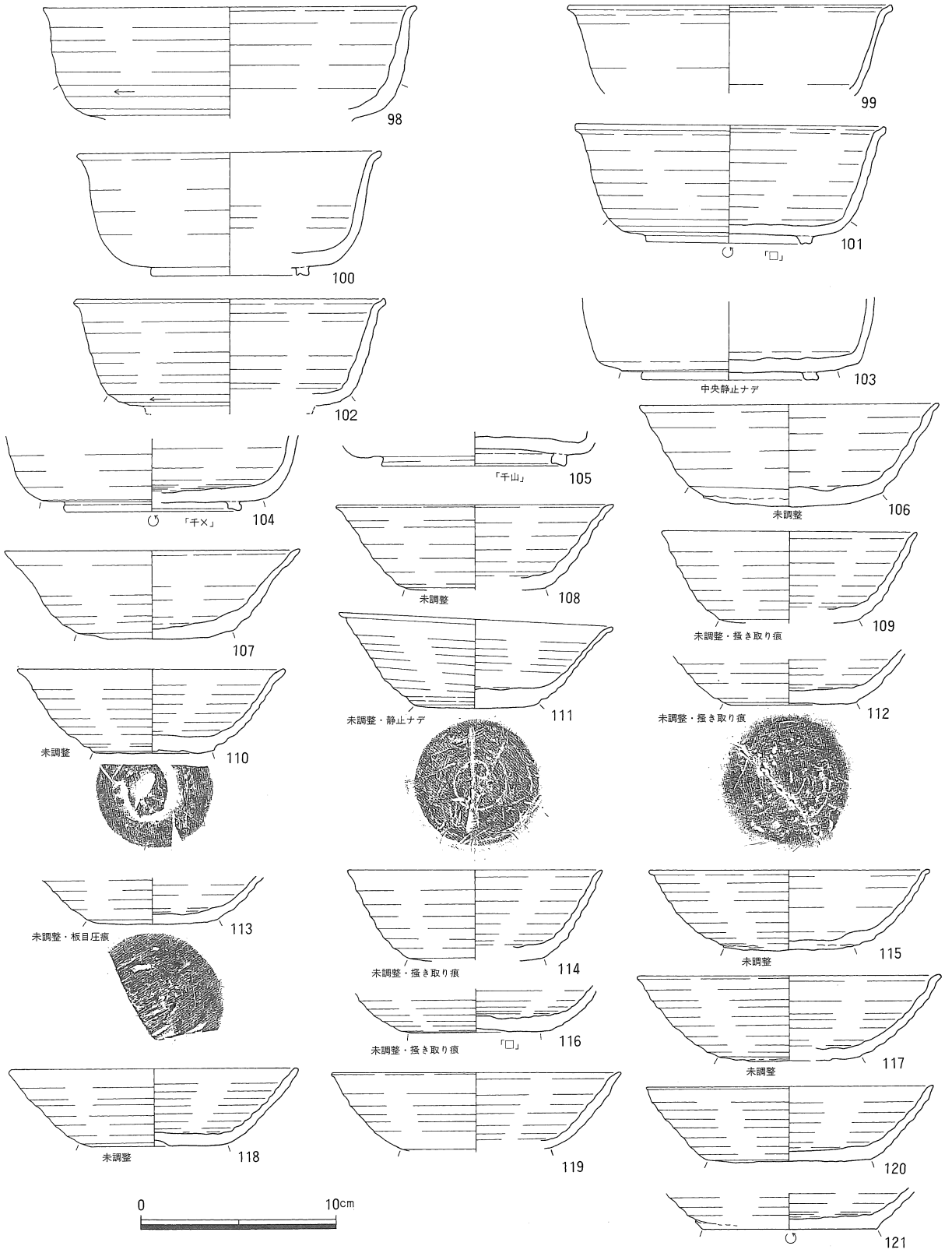
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
27	(15.4)			杯蓋A3	37	14.3		3.1	杯蓋A3	47	(15.1)			杯蓋A1	57	(14.2)			杯蓋A3
28	(14.7)			杯蓋A2	38	(14.0)			杯蓋A3	48	14.8		2.9	杯蓋A3	58	(14.3)			杯蓋A3
29	14.7		3.5	杯蓋A3	39	14.1		3.1	杯蓋A3	49	15.0		2.7	杯蓋A1	59	13.4		3.2	杯蓋A3
30	(14.5)			杯蓋A3	40	14.3		3.1	杯蓋A3	50	15.2		2.9	杯蓋A3	60	(13.5)			杯蓋A3
31	14.4		3.1	杯蓋A3	41	(14.2)			杯蓋A3	51	14.1		3.1	杯蓋A3	61	14.1		2.8	杯蓋A2
32	(15.0)			杯蓋A2	42	14.6		3.1	杯蓋A3	52	(14.3)			杯蓋A3	62	13.8		2.7	杯蓋A2
33	(14.7)			杯蓋A3	43	14.2		3.1	杯蓋A2	53	(15.2)			杯蓋A2	63	14.8		2.1	杯蓋A2
34	(14.9)			杯蓋A3	44	(15.0)			杯蓋A3	54	14.4		2.7	杯蓋A3	64	(14.8)			杯蓋A3
35	14.6		3.6	杯蓋A3	45	(15.4)			杯蓋A3	55	(14.0)			杯蓋A3					
36	14.6		3.1	杯蓋A3	46	(15.7)		3.2	杯蓋A3	56	13.7		2.9	杯蓋A3					

第7図　ＮＳＤ３出土土器実測図（２）



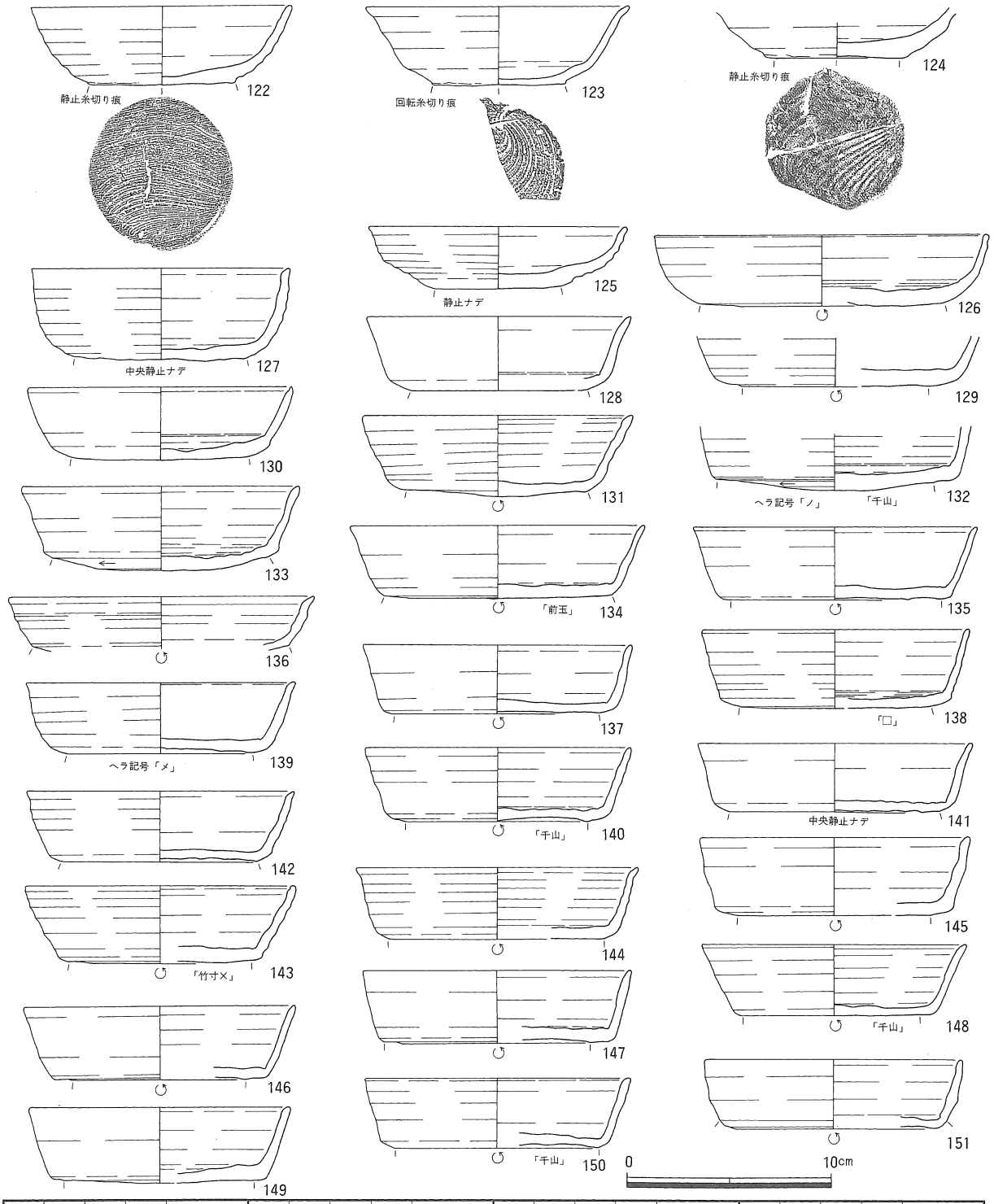
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
65	(15.0)			杯蓋A3	74	(13.1)			壺蓋A2	83	13.8		4.0	有台杯身A3	92	(13.0)		(4.3)	有台杯身C3
66	14.4		1.9	杯蓋A3	75	(16.9)		(4.0)	有台杯身A3	84	(13.9)		(4.1)	有台杯身B	93	(15.5)		(4.0)	有台杯身C2
67	14.1		2.1	杯蓋A3	76					85	13.6		4.1	有台杯身B	94	16.1		5.5	有台杯身D
68	14.8		2.4	杯蓋A3	77				有台杯身A3	86	13.8		3.8	有台杯身B	95	(24.8)		4.2	有台皿A3
69	13.9		3.5	杯蓋A3	78	15.0		4.0	有台杯身B	87	14.0		4.0	有台杯身C3	96				有台皿A3
70				杯蓋A3	79	(15.4)			有台杯身A3	88	13.4		3.7	有台杯身B	97	(20.3)			無台皿A2
71	13.5		2.3	杯蓋A3	80				有台杯身A3	89	13.5		3.5	有台杯身C1					
72	13.4		2.6	杯蓋A3	81					90				有台杯身C1					
73	12.0		3.2	杯蓋A3	82	(14.9)		(3.8)	有台杯身B	91				有台杯身C1					

第8図　ＮＳＤ３出土土器実測図（３）



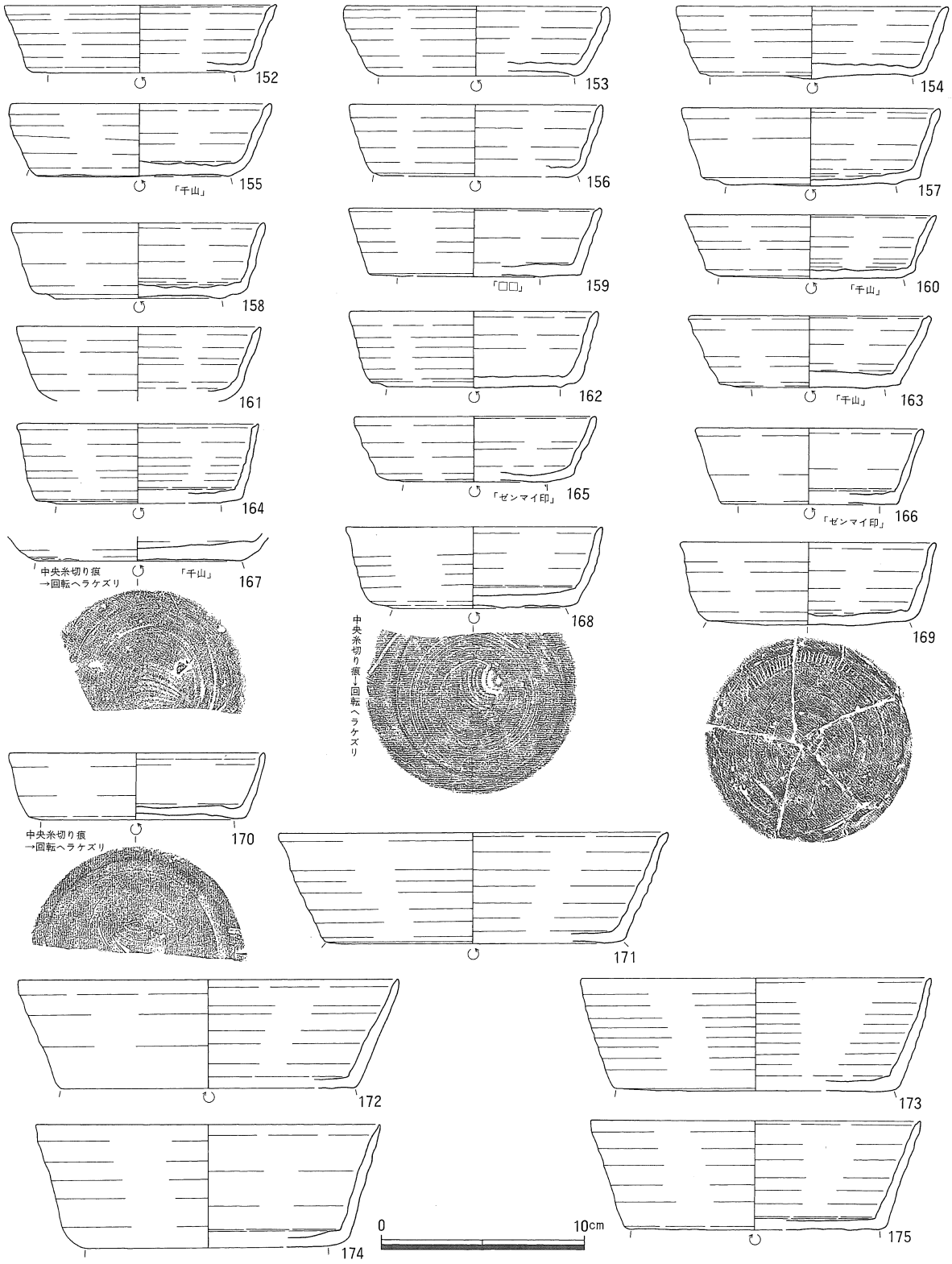
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
98	(19.1)			有台杯身E	105				有台杯身E				(小)4.1		118	14.8		3.9	無台杯身A2
99	(16.5)			有台杯身E	106	15.3		5.2	無台杯身B1	112				無台杯身A1	119	(14.8)			無台杯身A1
100	(15.6)		(6.2)	有台杯身E	107	15.1		4.5	無台杯身B1	113				無台杯身A1	120	14.6		3.9	無台杯身A2
101	15.8		6.0	有台杯身E	108	(14.2)			無台杯身B1	114	(13.0)			無台杯身A1	121				無台杯身A3
102	(15.9)			有台杯身E	109	(13.0)			無台杯身A1	115	14.3		4.1	無台杯身A1					
103				有台杯身E	110	13.7		4.2	無台杯身B2	116				無台杯身A1					
104				有台杯身E	111	14.0		(大)4.9	無台杯身B2	117	(15.5)		(4.3)	無台杯身A1					

第9図　ＮＳＤ３出土土器実測図（４）



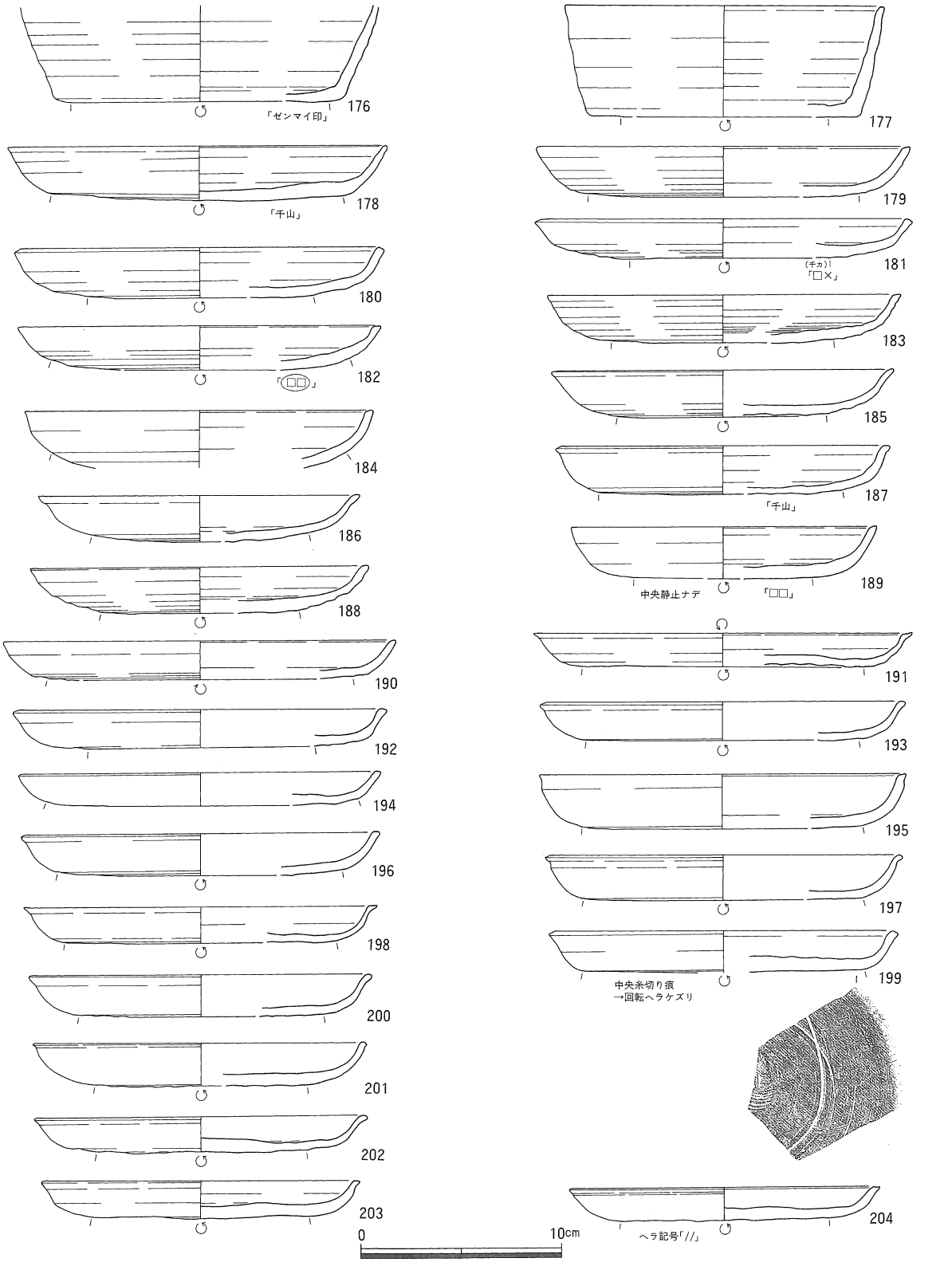
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
122	12.7		3.8	無台杯身A3	130	13.0		3.6	無台杯身C	138	(13.1)		(3.8)	無台杯身D3	146	(13.3)		(3.6)	無台杯身D4
123	12.9		3.8	無台杯身B3	131	13.2		3.9	無台杯身D3	139	13.2		3.5	無台杯身D4	147	(13.1)		(3.5)	無台杯身D4
124				無台杯身A1	132				無台杯身D1	140	13.0		3.6	無台杯身D4	148	12.9		3.5	無台杯身D3
125	12.6		3.0	無台杯身C	133	13.6		4.1	無台杯身D1	141	13.4		3.4	無台杯身D3	149	(12.8)		(3.7)	無台杯身D4
126	(16.3)		(3.5)	無台杯身C	134	14.4		3.6	無台杯身D2	142	13.1		3.4	無台杯身D3	150	(13.0)		(3.4)	無台杯身D3
127	12.6		4.5	無台杯身C	135	13.8		3.5	無台杯身D3	143	(13.3)		(3.7)	無台杯身D3	151	(12.6)		(3.4)	無台杯身D3
128	(12.9)		(3.6)	無台杯身D3	136	15.0			無台杯身D3	144	(13.8)		(3.5)	無台杯身D3					
129				無台杯身D4	137	13.1		3.4	無台杯身D3	145	(13.2)		(3.8)	無台杯身D4					

第10図　ＮＳＤ３出土土器実測図（５）



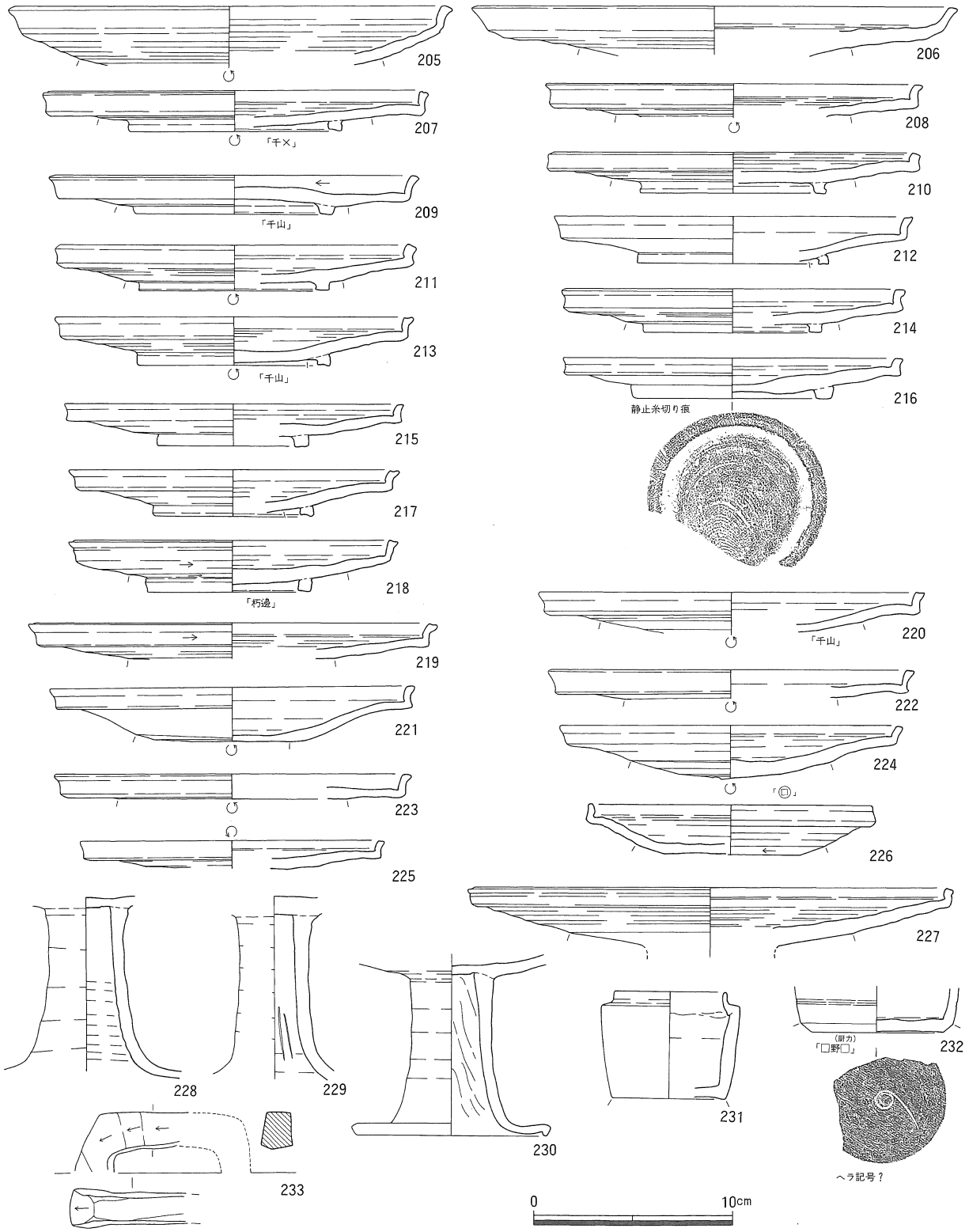
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
152	(13.4)		(3.3)	無台杯身D4	158	12.5		3.7	無台杯身D4	164	(11.8)		(3.9)	無台杯身D4	170	12.6		3.3	無台杯身D3
153	(13.1)		(3.4)	無台杯身D3	159	(12.4)		(3.3)	無台杯身D2	165	(11.9)		(3.2)	無台杯身D4	171	(19.2)		(5.4)	無台杯身D2
154	13.4		3.6	無台杯身D4	160	12.4		3.1	無台杯身D3	166	(11.2)		(3.7)	無台杯身D2	172	(18.7)		(5.3)	無台杯身D2
155	12.9		3.6	無台杯身D3	161	12.0			無台杯身D3	167				無台杯身D3	173	(17.3)		(5.5)	無台杯身D2
156	(12.4)		(3.5)	無台杯身D3	162	12.2		3.7	無台杯身D4	168	12.6		4.0	無台杯身D4	174	(16.9)		(6.0)	無台杯身D3
157	12.7		3.8	無台杯身D4	163	11.9		3.5	無台杯身D4	169	12.6		4.1	無台杯身D3	175	(16.3)		(5.4)	無台杯身D3

第11図　ＮＳＤ３出土土器実測図（６）



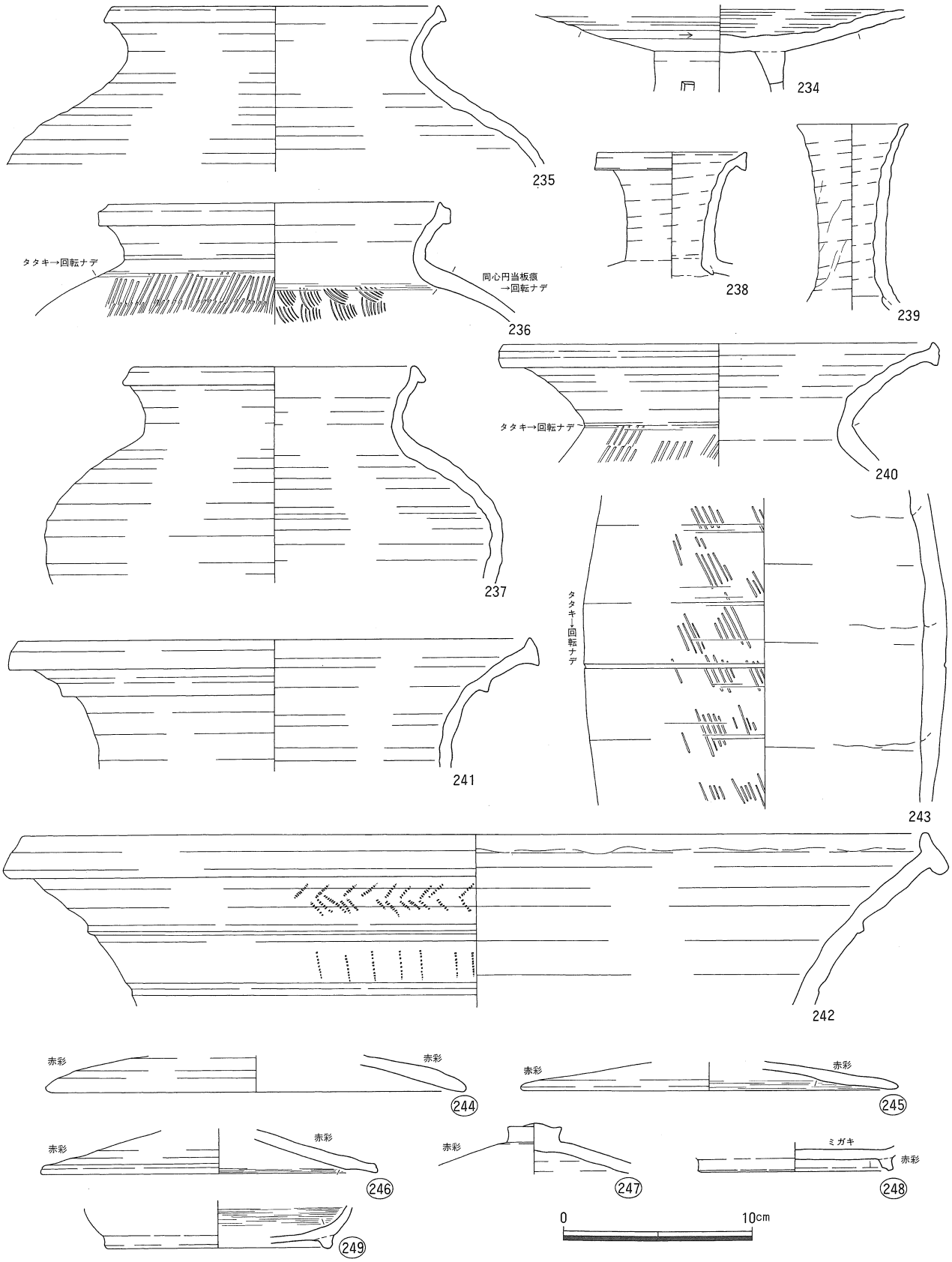
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
176				無台杯身D3	184	(17.3)			無台皿D2	192	(18.6)		(1.9)	無台皿D2	200	(17.1)		(2.1)	無台皿D2
177	(15.9)		(5.5)	無台杯身D4	185	(17.0)		(2.3)	無台皿D2	193	(18.2)		(1.9)	無台皿D1	201	(16.6)		(2.2)	無台皿D1
178	18.9		2.7	無台皿D1	186	(16.0)		(2.3)	無台皿D2	194	(18.0)		(1.7)	無台皿D2	202	16.6		1.8	無台皿D2
179	(18.6)			無台皿D1	187	(16.6)		(2.4)	無台皿D1	195	(18.1)		(2.7)	無台皿D1	203	(15.8)			無台皿D1
180	(18.4)		(2.5)	無台皿D2	188	(16.8)		(2.3)	無台皿D2	196	(17.8)		(2.1)	無台皿D2	204	15.4		1.7	無台皿D1
181	(18.8)		(2.0)	無台皿D2	189	(15.1)		(2.6)	無台皿D1	197	(17.7)		(2.3)	無台皿D1					
182	(18.0)		(2.2)	無台皿D2	190	(19.5)		(1.9)	無台皿D2	198	(17.6)		(1.8)	無台皿D1					
183	(17.5)		(2.4)	無台皿D2	191	(18.8)		(1.7)	無台皿D1	199	(17.4)			無台皿D1					

第12図　ＮＳＤ３出土土器実測図（７）



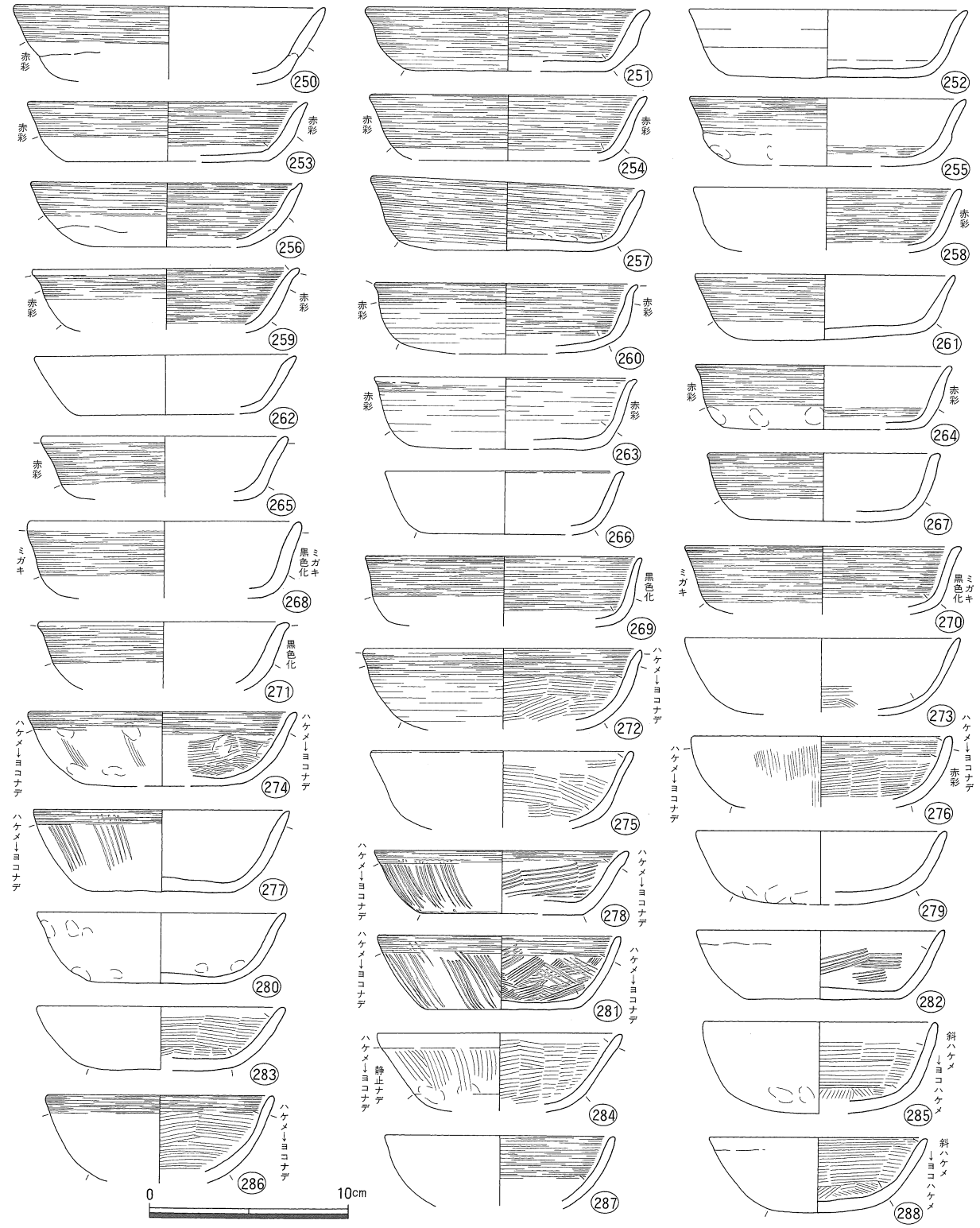
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
205	(22.3)			無台皿C	213	18.0		2.4	有台皿B1	221	18:3		2.7	無台皿B1	229				高盤B
206	(24.3)			無台皿C	214	(17.2)		(2.2)	有台皿B1	222	(18.3)			無台皿B1	230				高盤B
207	(19.3)		(2.0)	有台皿B1	215	(17.0)		(2.1)	有台皿B2	223	(17.9)			無台皿B1	231	(5.7)	(6.9)	(5.3)	小型壺B
208	(18.9)			有台皿B1	216	17.0		2.0	有台皿B2	224	17.2		2.7	無台皿B1	232				小型杯身B2
209	18.6		2.0	有台皿B1	217	(16.5)		(2.3)	有台皿B1	225	15.2			無台皿B1	233				平瓶
210	(18.7)		(2.0)	有台皿B2	218	16.5		2.6	有台皿B1	226	(14.5)		(2.5)	杯蓋B					
211	(18.1)		(2.3)	有台皿B1	219	(20.5)			無台皿B1	227	(24.3)			高盤B					
212	(17.9)		(2.4)	有台皿B1	220	(19.3)			無台皿B1	228				高盤B					

第13図　ＮＳＤ３出土土器実測図（８）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
234					238	(8.0)				242	(50.0)			甕B2	(246)	(17.8)			杯蓋A1
235	(18.1)			壺C1	239	(5.9)			長頸壺A1	243	(19.1)				(247)				皿蓋
236	(18.7)			甕A2	240	(23.3)			甕B3	(244)	(22.2)			皿蓋	(248)				有台杯身A1
237	(16.1)	(24.2)		壺C1	241	(28.1)			甕B2	(245)	(19.9)			皿蓋	(249)				有台杯身A1

第14図　ＮＳＤ３出土土器実測図（９）



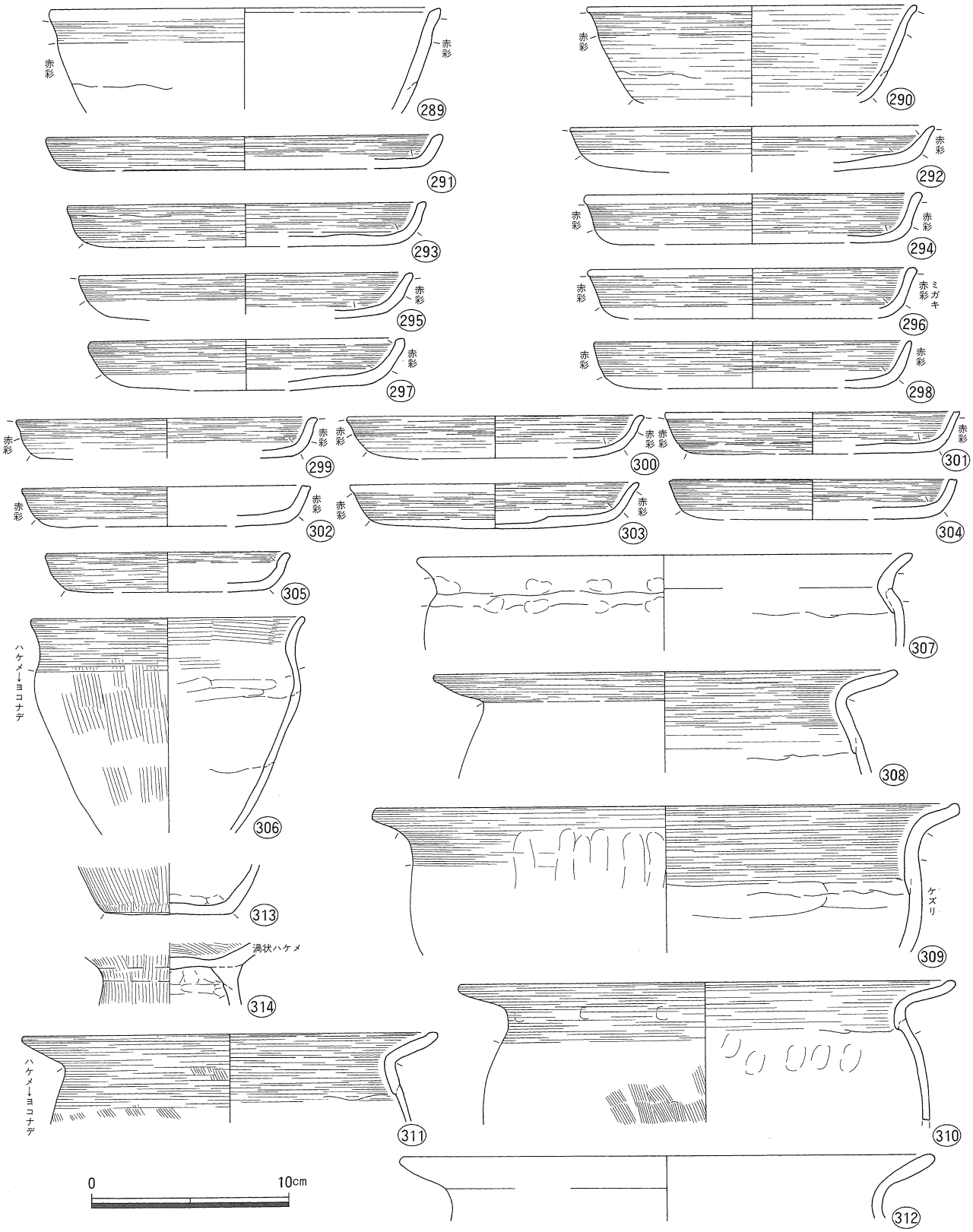
番号	口径	最大径	器高	器種
250	(15.6)			無台杯身C3
251	(14.2)		(3.1)	無台杯身C3
252	13.9		3.4	無台杯身C3
253	(14.0)		(3.0)	無台杯身 E
254	(13.9)		(3.3)	無台杯身C3
255	(13.8)		(3.4)	無台杯身C3
256	(13.6)		(3.2)	無台杯身C1
257	13.2		(大) 3.7	無台杯身C3
			(小) 3.1	
258	(13.4)			無台杯身C3

番号	口径	最大径	器高	器種
259	(13.4)			無台杯身C3
260	(13.2)		(3.5)	無台杯身C3
261	13.0		3.3	無台杯身C3
262	(13.1)		(3.0)	無台杯身E
263	(13.1)		(3.6)	無台杯身C3
264	(12.8)		(3.2)	無台杯身C3
265	(12.3)			無台杯身C3
266	(11.9)		(3.1)	無台杯身C3
267	(11.6)		(3.4)	無台杯身C3
268	(13.7)			無台杯身C3

番号	口径	最大径	器高	器種
269	(13.8)			無台杯身C3
270	(13.8)			無台杯身C3
271	(12.6)			無台杯身C3
272	(13.9)			無台杯身C1
273	(13.7)			無台杯身C1
274	(13.4)		(3.7)	無台杯身C1
275	(13.1)			無台杯身B1
276	(13.0)			無台杯身C1
277	12.8		4.0	無台杯身E
278	(12.7)		(3.1)	無台杯身E

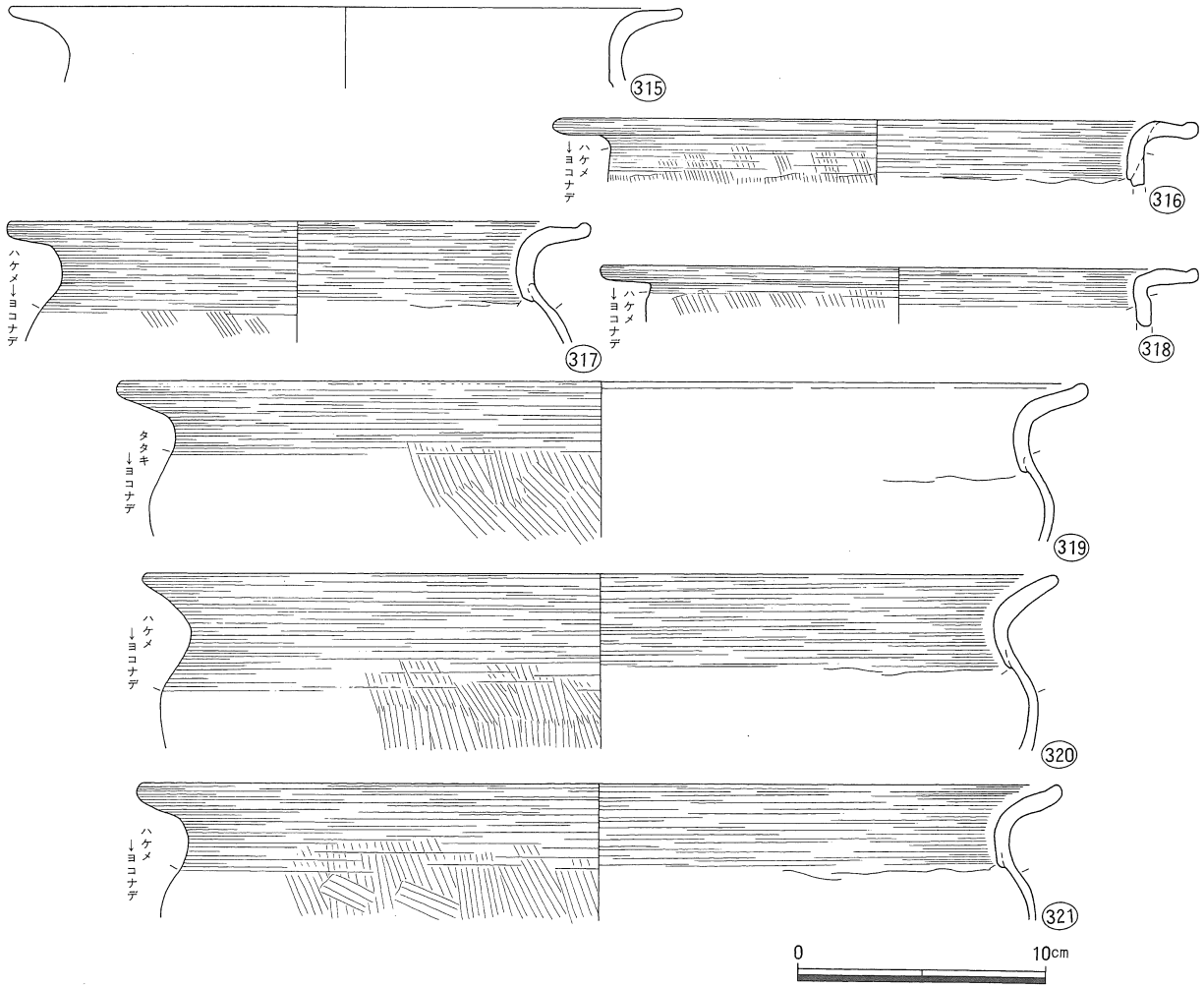
番号	口径	最大径	器高	器種
279	(12.5)		(3.6)	無台杯身C1
280	12.4		3.5	無台杯身C1
281	12.1		3.7	無台杯身E
282	12.4		3.5	無台杯身E
283	(12.4)		(3.2)	無台杯身C1
284	(12.2)			無台杯身B1
285	(11.7)		(4.6)	無台杯身B2
286	(11.4)			無台杯身B2
287	(11.5)			無台杯身B2
288	10.9		3.7	無台杯身B1

第15図　ＮＳＤ３出土土器実測図（10）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
289	(19.6)			無台杯身C3	296	(16.5)		(2.5)	無台皿B2	303	(14.5)		(2.3)	無台皿B3	310	(25.0)			甕D3
290	(16.6)			有台杯身B	297	(15.9)		(2.5)	無台皿B3	304	(14.5)		(2.0)	無台皿B1	311	(20.9)			甕C
291	(19.9)		(1.7)	無台皿B1	298	(16.0)		(2.4)	無台皿B1	305	(12.3)		(2.0)	無台皿B1	312	(27.0)			甕D3
292	(18.3)			無台皿B3	299	(15.1)			無台皿B2	306	(13.8)			甕A	313				
293	(18.0)		(2.1)	無台皿B1	300	(14.9)		(2.1)	無台皿B3	307	(24.9)			鍋B1	314				台
294	(17.0)		(2.5)	無台皿B2	301	(14.8)		(2.1)	無台皿B1	308	(23.4)			甕C					
295	(16.8)			無台皿B3	302	(14.5)		(2.0)	無台皿B1	309	(29.5)			鍋A					

第16図　ＮＳＤ３出土土器実測図（11）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
315	27.1			甕D4	317	23.5			甕D4	319	39.0			鍋B2	321	37.2			鍋B2
316	25.9			甕D4	318	24.0			甕D4	320	36.9			鍋B1					

第17図　ＮＳＤ３出土土器実測図（12）

に尖らせた太杭（自然丸木材・角材）を各段足場の４隅に打ち込み、この太杭に並列ないし交差する杭を数本添えている。交差部分を利用して東西両端に横木を架け、横木の上に足場板（長さ85～110cm、幅20～25cm、厚さ４～６cm）を渡す。さらに足場板の上に横木を乗せ上下から足場板を挟みつけていた。北東端の杭近くから桜皮（幅0.7～1.0cm）が一括出土しており、おそらくこうした樹皮・蔓・縄等により杭・横木・足場板を縛り固定していたものと考えている。一枚の足場板だけで両端の横木にとどかない時は、中間に同様の横木を施け２枚の足場板を繋ぎ架け渡していた。足場板には矢板・壁板等が転用され、その使用材・構造は仮設的である。東西張り出し施設の横木・足場板（海抜高16.30～16.40m）から底面までの高低差はわずか20～30cmしかない。

東張り出し施設の西北方に小規模な貝塚（60×60×10cm）が形成されていた。溝最下には粘土と砂が細互層をなして堆積していたが、土器群より上位の覆土の層位的な変化は明確でなかった。使用時、管理のいきとどいた溝であったと思われる。

出土遺物には土器、転用硯、ミニチュア土器、陶人形、土錘等の土製品、鞴口、瓦、斎串、柄材等の木製品、銙帯具（鉸具）、和同開珎等がある。一段深い流路内に集積していた土器量は膨大で（ポ

リコンテナー－44×60×15cm－４箱分）189点の墨書土器を含んでいた。須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ｄ３・Ｄ４、有台皿Ｄ１・Ｄ２、土師器無台杯身Ｃ３、無台皿Ｂ１、甕Ｄ４を主体とし、須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ３・Ｂ・Ｅ、無台杯身Ａ１・Ｄ２、無台皿Ｂ１、高盤Ｂ、土師器無台杯身Ｃ１・Ｅ、無台皿Ｂ３等も比較的高い比率で伴出している（他に須恵器杯蓋Ａ１・Ｂ、有台杯身Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３・Ｄ、無台杯身Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｃ・Ｄ１、小型杯身Ｂ２、皿蓋、有台皿Ａ３・Ｂ２、無台皿Ａ２・Ｃ、壷蓋Ａ２、壷Ｃ１、小型壷Ｂ、長頸壷Ａ１、平瓶、甕Ａ２・Ｂ２・Ｂ３、土師器杯蓋Ａ１、有台杯身Ａ１・Ｂ、無台杯身Ｂ１・Ｂ２、皿蓋、無台皿Ｂ２、甕Ａ・Ｃ・Ｄ３、鍋Ａ・Ｂ１・Ｂ２、台がある。）。当溝は奈良時代を通じ（前葉～後葉）生きた溝として機能していたと考えているが、覆土の状況が示す埋没期間は著しく短かったと推定できる。

ＮＳＤ４

Ⅲ層を約10cm掘り下げたところで（２面）、すべての輪郭を確認した。２Ｈ－ｃ区～３Ｈ－ｅ区にかけてわずかに蛇行しつつのびている。溝幅は南に向い徐々に狭まり（5.25～2.65m）、確認長約24.5m、深さ0.7～0.4mを測る。北半底面の海抜高（15.90m前後）は南半（16.00m前後）に比べ若干低い。平安時代以降の溝２条に切断されＮＳＤ６と交差していた。

溝底をさらに一段深い流路が蛇行し、この流路はところどころ幅を広げてすり鉢状の凹みをなしていた。一段深い流路の西壁には20～50cm間隔で整然と木杭（径2.5～4.0cm、5.0～7.0cm）が打ち込まれ（長さ85cm）、木杭より上位の西側斜面に多量のこぶし大礫と丸木材（自然木）が集積していた。杭の先端は２通りの削り技法（短い削り面を３ないし４方向から加える、１方向から削りにより尖らせる）により仕上げられている。ＮＳＤ３と同様の護岸施設（杭と横木で礫止めを造り、斜面にこぶし大礫を張りしめる）を西岸のみに設けていたと考えているが、残存する杭列は一列のみで顕著な補修工事の痕跡は見られない。東側斜面に１箇所、礫と土器片の集中部（0.5×1.2m）が検出された。西岸は一部大きく張り出していた。

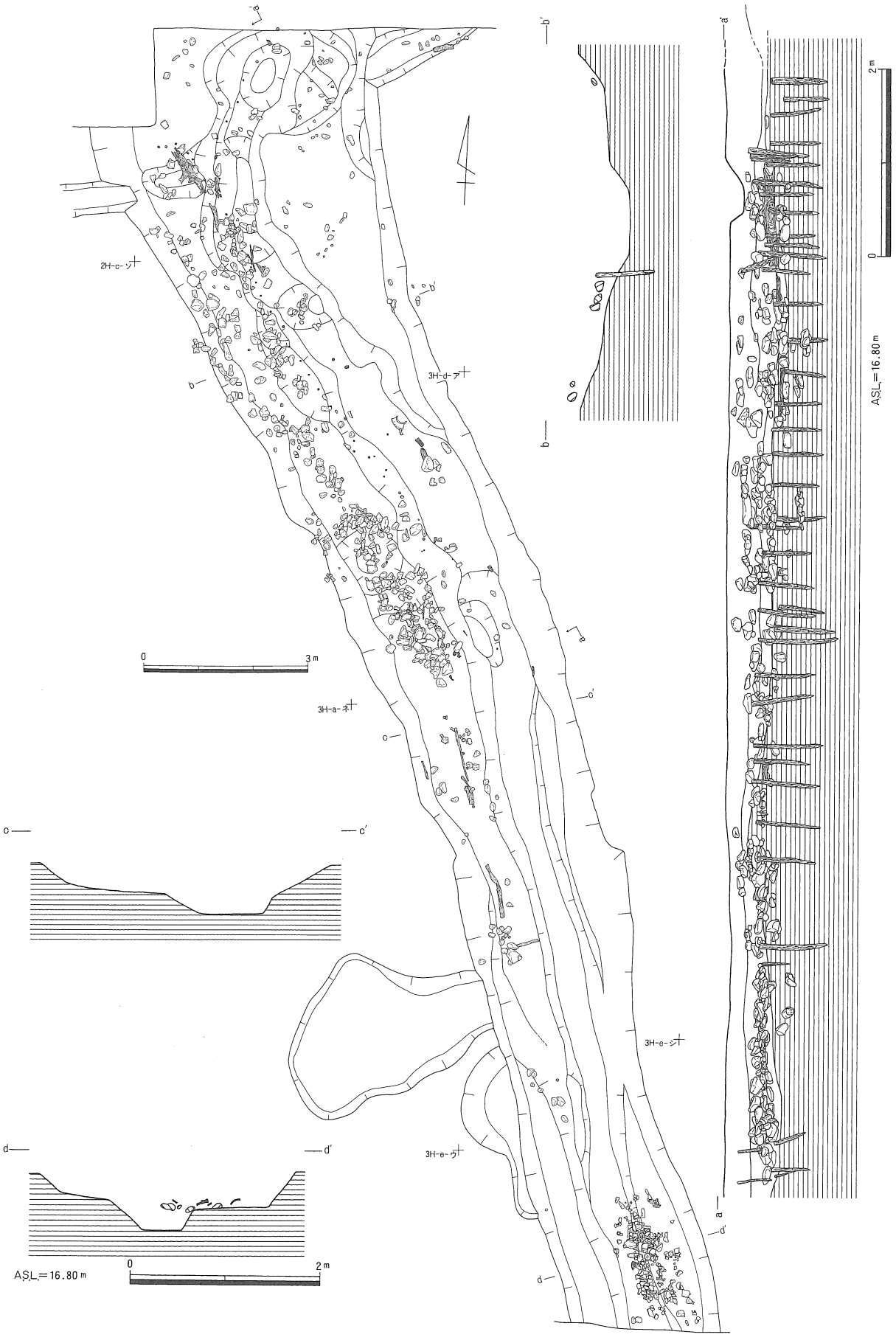
覆土は大きく３層に区分でき（上層＝茶灰色砂質粘土、中層＝暗灰色粘土、下層＝暗灰色砂質粘土－一段深い流路内－）、遺物は主に中・下層から出土する。護岸施設（礫、横木、杭等）は中層に覆われていた。

出土遺物には土器、転用硯、ミニチュア土器・土馬等の土製品、土製支脚、梯子状の建築（？）部材、馬形・曲物底板・錘・鍬・横槌・櫛等の木製品、木簡、銙帯具（丸鞆）、石製紡錘車等がある。土器は須恵器杯蓋Ａ３の出土量が圧倒的に多く、有台杯身Ａ３・Ｂ・Ｅ、無台杯身Ａ１・Ｄ３、無台皿Ｂ１・Ｄ１・Ｄ２、鉢Ｂ、土師器無台杯身Ｂ１・Ｃ３、無台皿Ｂ２、甕Ｄ３・Ｅを主体とする（他に須恵器杯蓋Ａ１・Ａ２、有台杯身Ａ１・Ａ２・Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３、無台杯身Ａ３・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ・Ｄ１・Ｄ２・Ｄ４、小型杯身Ｂ１、有台皿Ａ１・Ａ２、無台皿Ｂ２・Ｃ、高盤Ｂ、鉢Ｃ、壷蓋Ａ２、壷Ｂ、長頸壷Ａ１、獣足壷、甑、甕Ａ１・Ａ２・Ｂ２、土師器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ１・Ａ２・Ｂ、無台杯身Ｂ２・Ｂ３・Ｃ１・Ｄ、皿蓋、有台皿Ｂ２、無台皿Ｂ１・Ｂ３、高盤Ｃ、甕Ｂ・Ｄ１、鍋Ｂ１・Ｂ２を出土している）。杯蓋・杯身を主に101点の墨書土器を含んでいた。奈良時代前葉から後葉にかけて機能していたと考えられる。

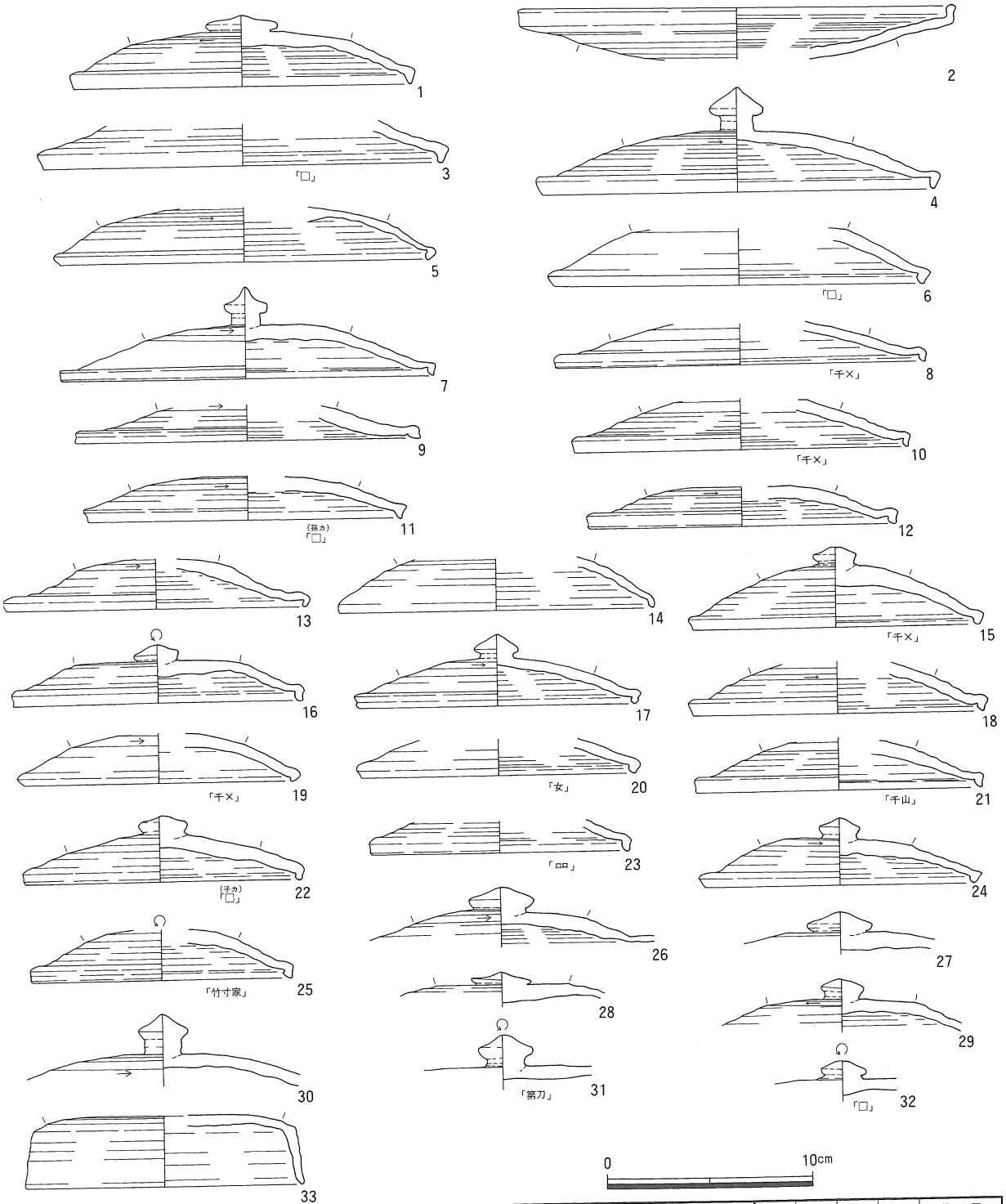
ＮＳＤ５

２Ｇ－ａ・ｄ・ｇ区のⅢ層２面から検出された。北東東から南西西へ向い直線的にのびている。確認長約21.5m、推定幅2.50m、深さ0.55～0.65mを測り、南東方より合流する枝溝（幅不明、深さ0.6～0.7m）が１条ある。

両壁ともわずかに内彎しつつ傾斜し、平坦な底面（海抜高15.75～15.85m）に至る（断面Ｕ字状）。



第18図　ＮＳＤ４実測図



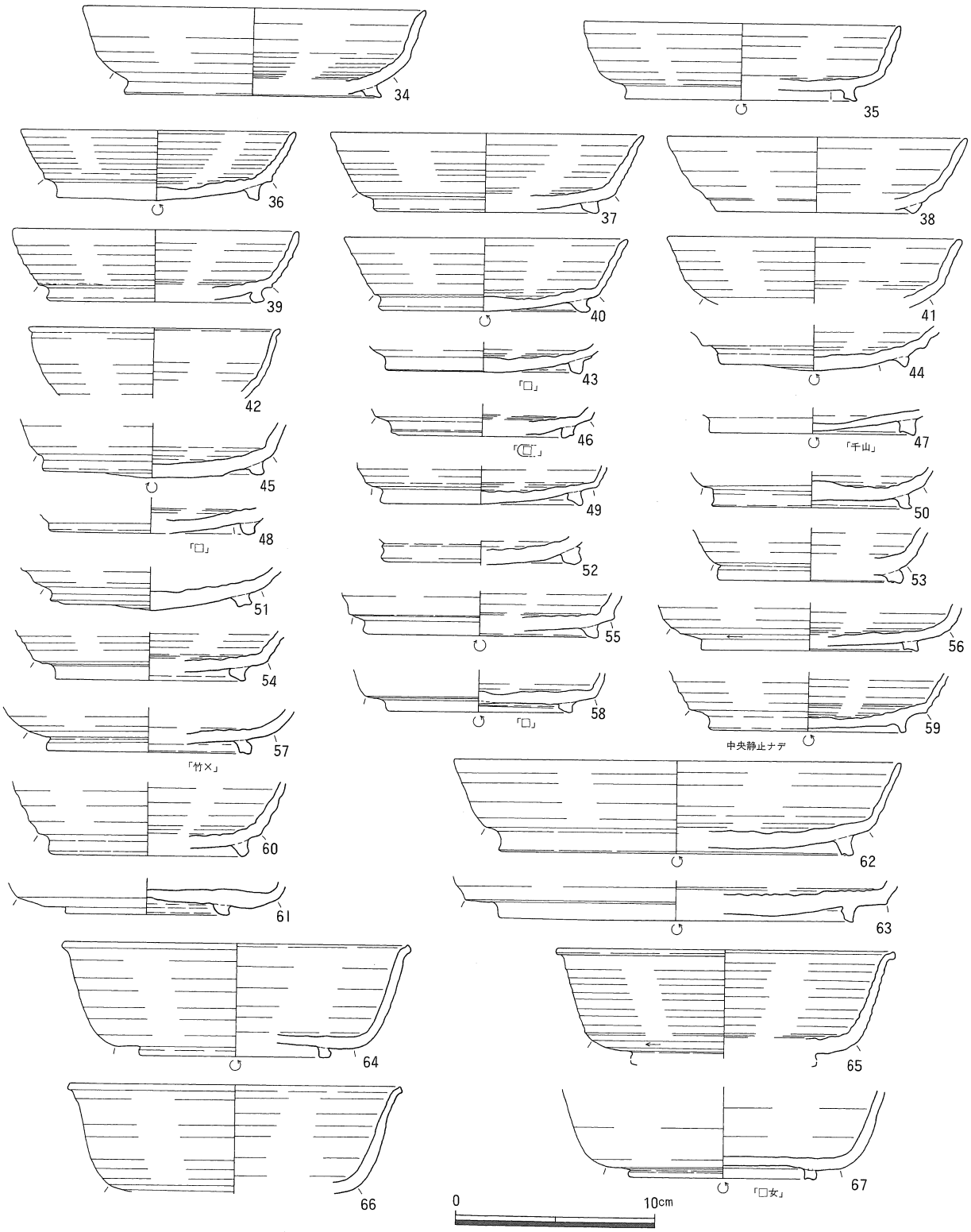
番号	口径	最大径	器高	器種
1	16.7		3.4	杯蓋A2
2	(21.3)			無台皿C
3	(20.0)			杯蓋A3
4	19.6		5.1	杯蓋A3
5	(18.5)			杯蓋A3
6	(18.6)			杯蓋A3
7	18.3		4.4	杯蓋A3
8	(18.1)			杯蓋A3
9	(16.8)			杯蓋A2

番号	口径	最大径	器高	器種
10	(16.5)			杯蓋A3
11	(15.6)			杯蓋A1
12	(15.1)			杯蓋A3
13	(15.0)			杯蓋A3
14	(15.4)			杯蓋A2
15	14.4		3.9	杯蓋A3
16	14.2		2.9	杯蓋A3
17	14.0		3.5	杯蓋A3
18	(14.5)			杯蓋A3

番号	口径	最大径	器高	器種
19	(13.8)			杯蓋A2
20	(13.8)			杯蓋A3
21	(14.0)			杯蓋A3
22	13.7		3.2	杯蓋A3
23	(12.8)			杯蓋A3
24	13.7		3.2	杯蓋A3
25	12.8			杯蓋A3
26				杯蓋A2
27				杯蓋A2

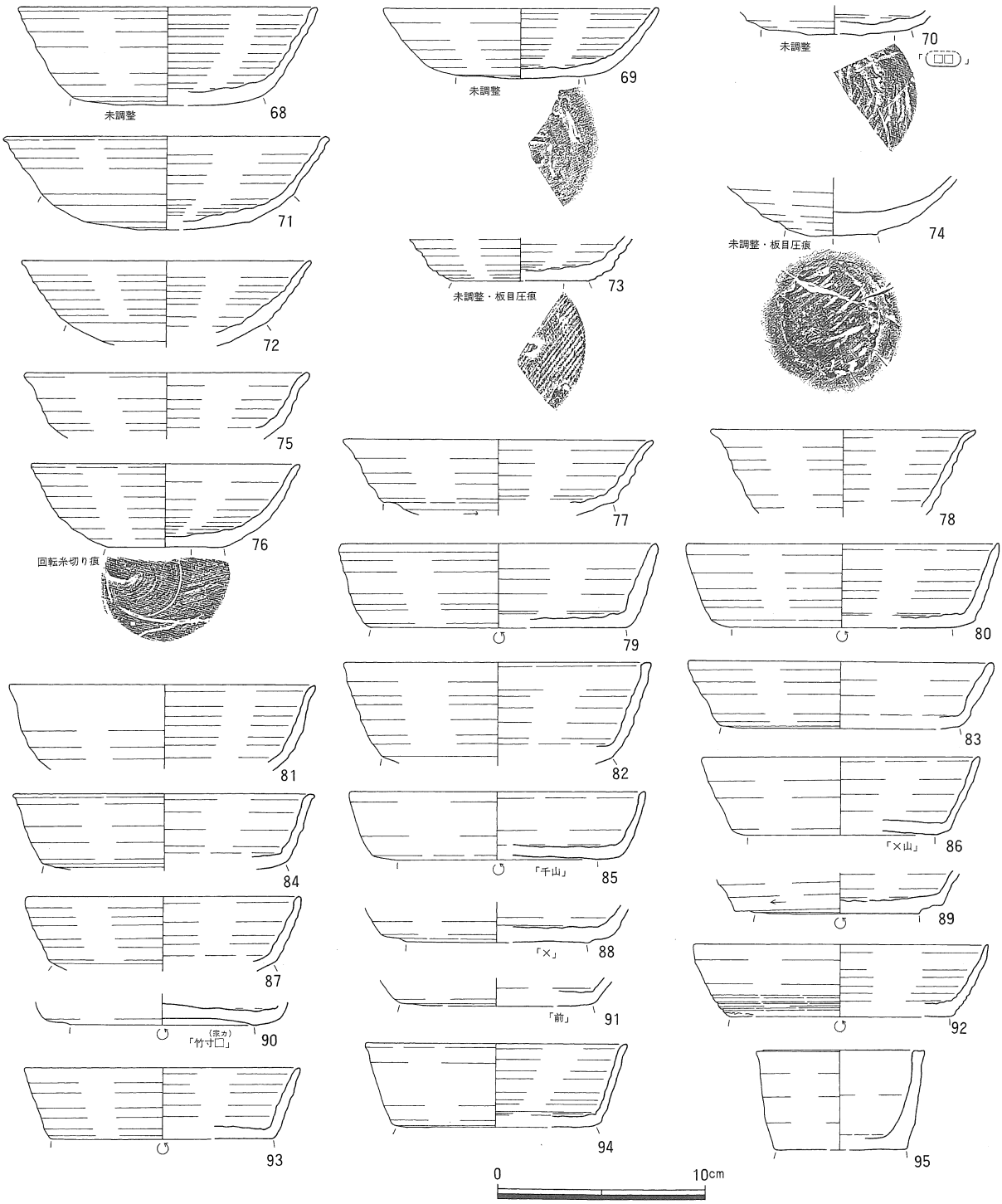
番号	口径	最大径	器高	器種
28				杯蓋A3
29				杯蓋A3
30				杯蓋A3
31				杯蓋A3
32				杯蓋A3
33	(13.6)			壺蓋A2

第19図　ＮＳＤ４出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
34	(17.2)		(4.3)	有台杯身A3	43					52					61				有台杯身E
35	(15.9)		(3.8)	有台杯身A2	44				有台杯身B	53				有台杯身C2	62	(22.4)		(4.6)	有台皿A1
36	(13.8)		(3.5)	有台杯身B	45				有台杯身A3	54				有台杯身B	63				有台皿A2
37	(15.7)		(3.9)	有台杯身A3	46				有台杯身B	55				有台杯身B	64	(17.5)		(5.6)	有台杯身E
38	(15.0)		(3.8)	有台杯身A1	47				有台杯身E	56				有台杯身A3	65	(17.0)			有台杯身E
39	(14.4)		(3.6)	有台杯身A2	48					57				有台杯身A3	66	(16.8)			有台杯身E
40	(14.2)		(3.7)	有台杯身C1	49					58				有台杯身C3	67				有台杯身E
41	(14.7)			有台杯身A3	50				有台杯身A3	59				有台杯身B					
42	(12.6)			無台杯身A1	51				有台杯身A1	60				有台杯身A3					

第20図　ＮＳＤ４出土土器実測図（２）



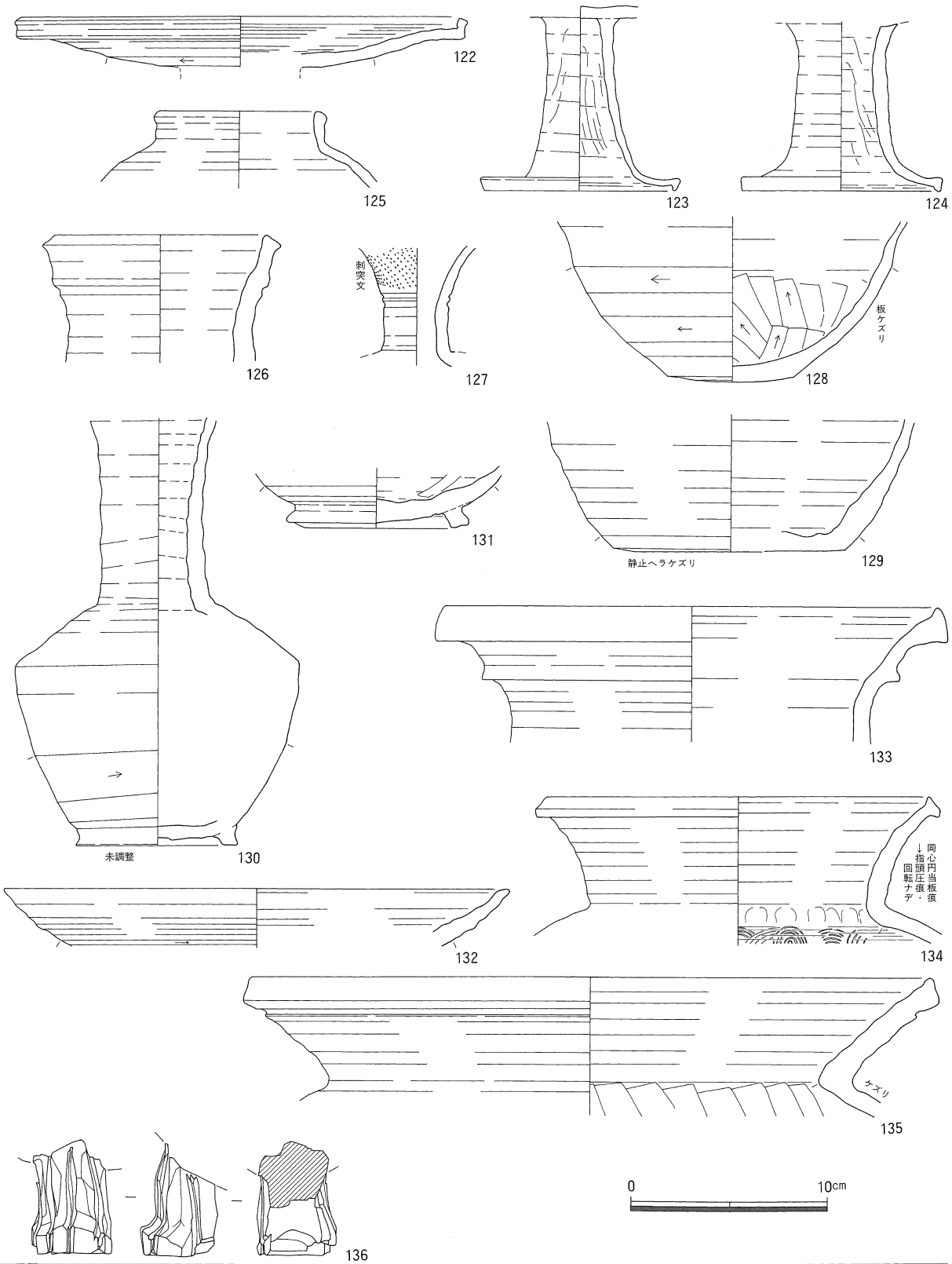
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
68	(14.3)		(4.7)	無台杯身A1	75	(13.7)			無台杯身B3	82	(14.8)			無台杯身D3	89				無台杯身D4
69	13.2		3.3	無台杯身A1	76	12.9		4.0	無台杯身A3	83	(14.7)			無台杯身D3	90				無台杯身D4
70				無台杯身A1	77	(14.9)			無台杯身B1	84	(14.4)			無台杯身D3	91				無台杯身D3
71	(15.6)		(4.5)	無台杯身A1	78	(12.7)			無台杯身B1	85	(14.2)		(3.2)	無台杯身D4	92	(14.1)		(3.4)	無台杯身D2
72	(13.9)			無台杯身A1	79	(15.3)		(4.0)	無台杯身D3	86	(13.3)		(3.7)	無台杯身D3	93	(13.2)		(3.4)	無台杯身D2
73				無台杯身A3	80	(15.0)		(4.0)	無台杯身D3	87	(13.2)			無台杯身D3	94	(12.6)		(4.1)	無台杯身D2
74				無台杯身A1	81	(14.7)			無台杯身C	88				無台杯身D4	95	(8.1)		(4.8)	小型杯身B1

第21図　ＮＳＤ４出土土器実測図（３）



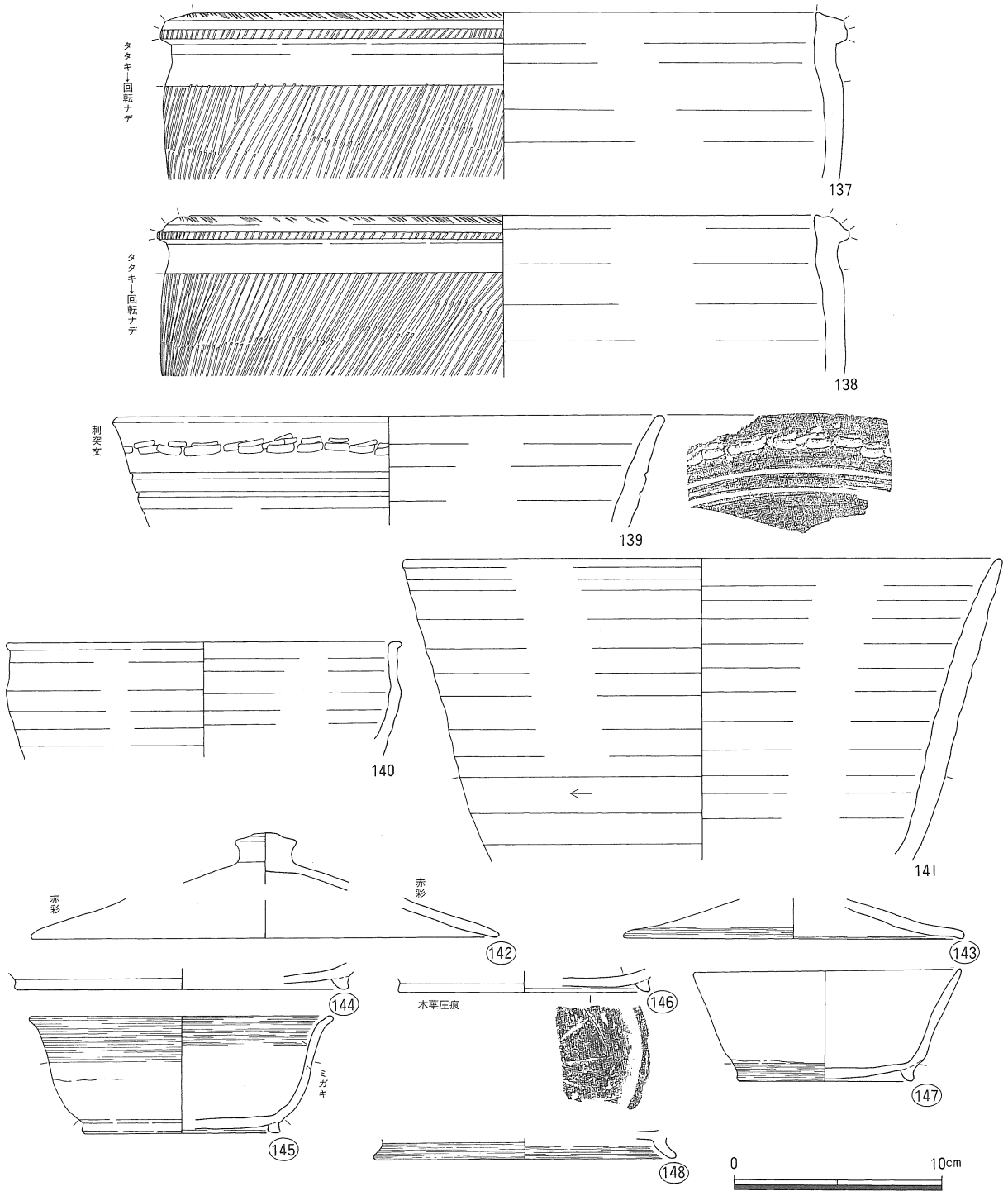
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
96	(17.5)			無台杯身D3	103	(17.5)			無台皿D1	110	(19.1)			無台皿D2	117	(17.3)			無台皿B2
97	(17.2)		(5.7)	無台杯身D1	104	(17.2)		(2.2)	無台皿D2	111				無台皿D2	118	(20.5)		(2.0)	無台皿B1
98	(16.1)		(6.3)	無台杯身D1	105	(17.1)		(2.6)	無台皿D1	112	(23.9)			無台皿C	119	(16.3)			無台皿B2
99	(14.4)		(5.8)	無台杯身D1	106	(16.6)		(2.9)	無台皿D2	113	(19.1)			無台皿B1	120	(19.4)			無台皿B1
100	(18.3)		(2.9)	無台皿D1	107	(18.1)		(2.2)	無台皿D1	114	(22.9)			無台皿B2	121	(14.6)		(2.0)	無台皿B1
101	(18.4)		(2.4)	無台皿D2	108	(18.0)		(2.5)	無台皿D1	115	(18.8)			無台皿B1					
102	17.8		2.7	無台皿D2	109	(17.0)		(2.0)	無台皿D1	116	(22.6)			無台皿B1					

第22図　ＮＳＤ４出土土器実測図（４）



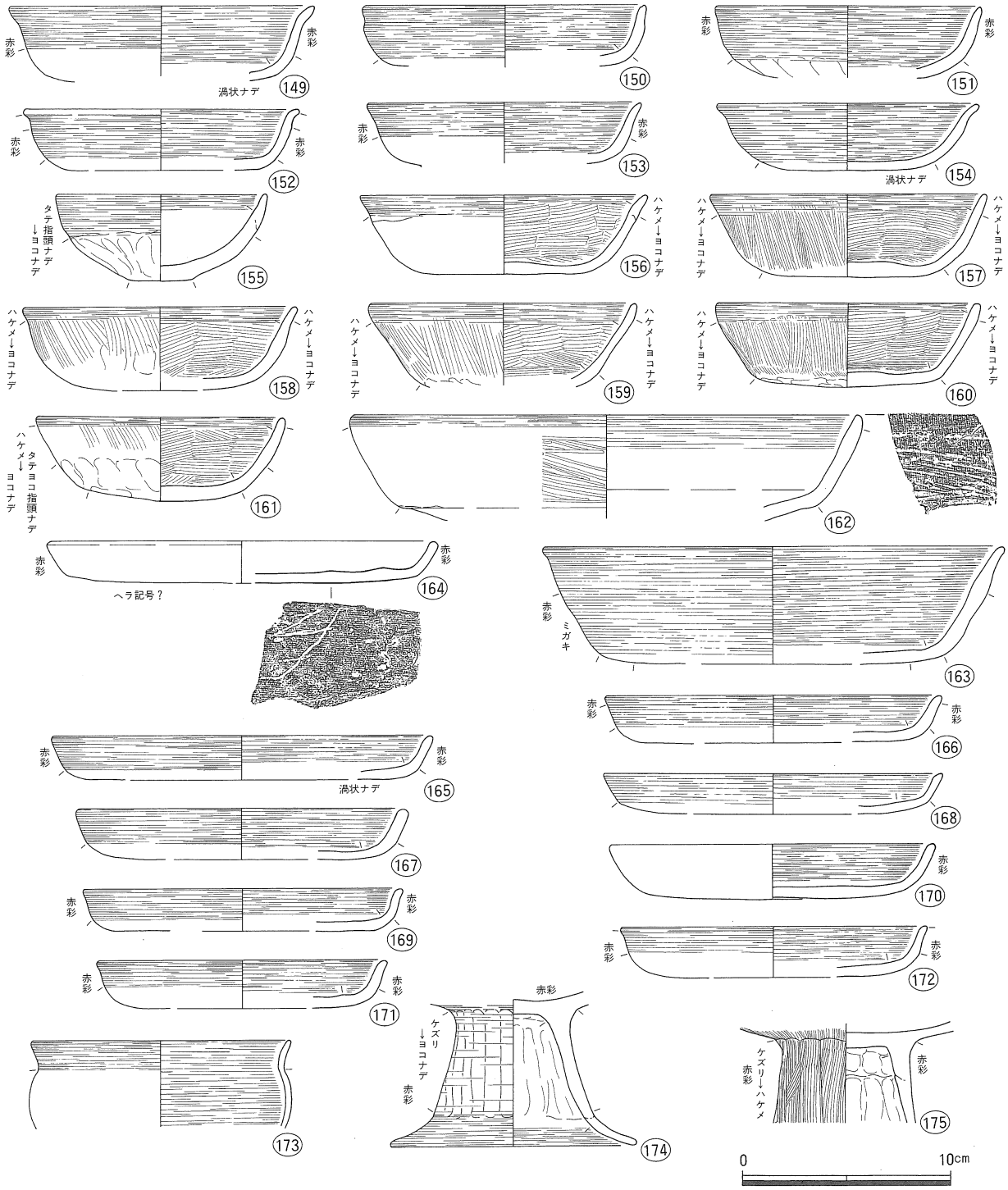
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
122	(22.9)			高盤B	126	(12.1)			甕B1	130		(14.4)		長頸壺A1	134	(20.5)			甕B2
123				高盤B	127				甑	131				長頸壺	135	(35.3)			甕A2
124				高盤B	128				鉢B	132	(25.6)			無台皿D2	136				獣足壺
125	(8.8)			壺B	129				鉢B	133	(25.9)			甕B2					

第23図　ＮＳＤ４出土土器・獣足実測図（５）



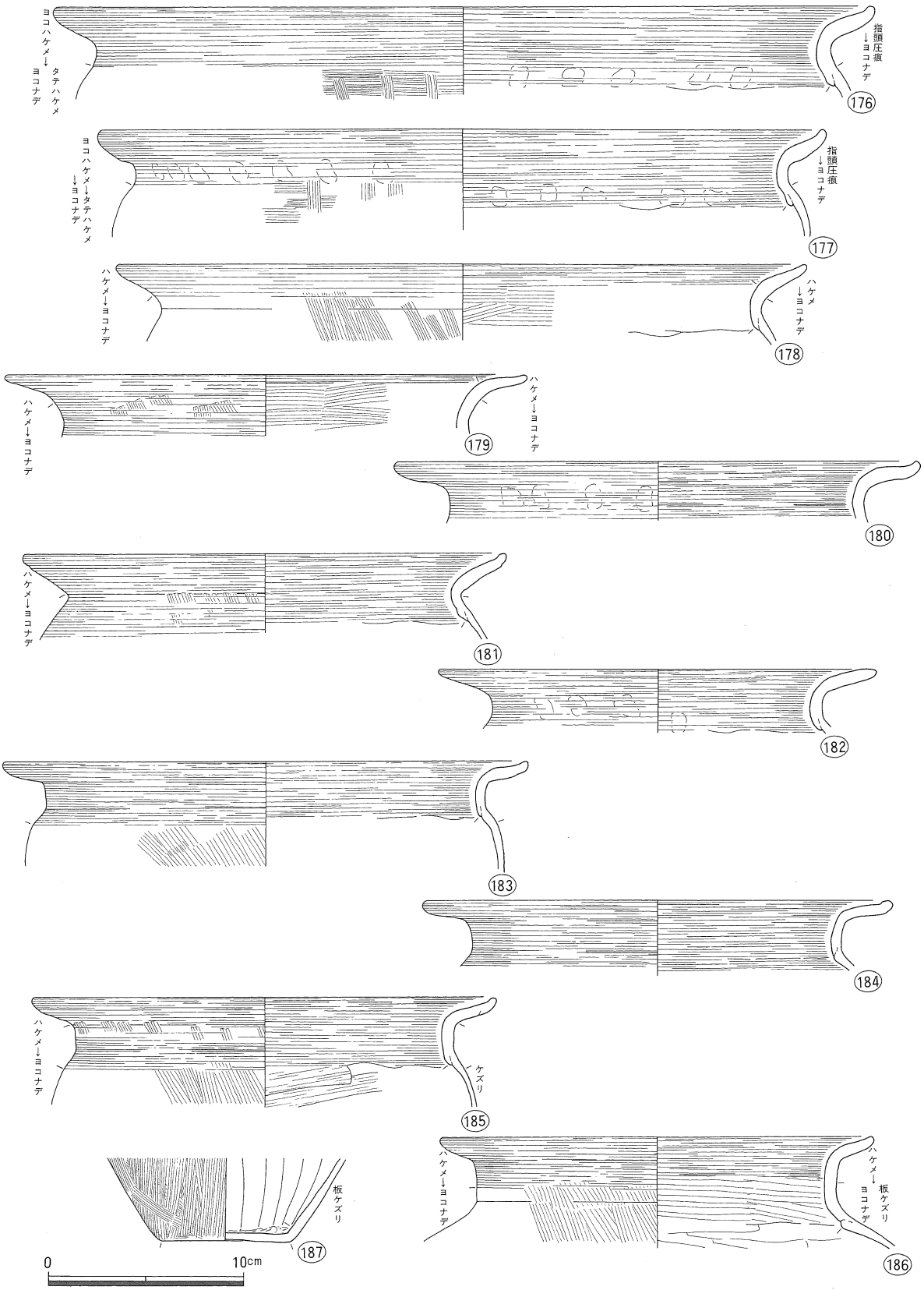
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
137	(33.1)			鉢B	141	(28.8)			鉢C	⑮	(14.6)		(5.6)	有台杯身B	⑱				有台皿B2
138	(33.3)			鉢B	⑫	(22.5)		5.0	皿蓋	⑯				有台杯身A1					
139	(26.6)			鉢C	⑬	(16.3)			杯蓋A2	⑰	(12.9)		(大)(5.4)	有台杯身A2					
140	(19.0)			鉢B	⑭				有台杯身A1				(小)(5.2)						

第24図　ＮＳＤ４出土土器実測図（６）



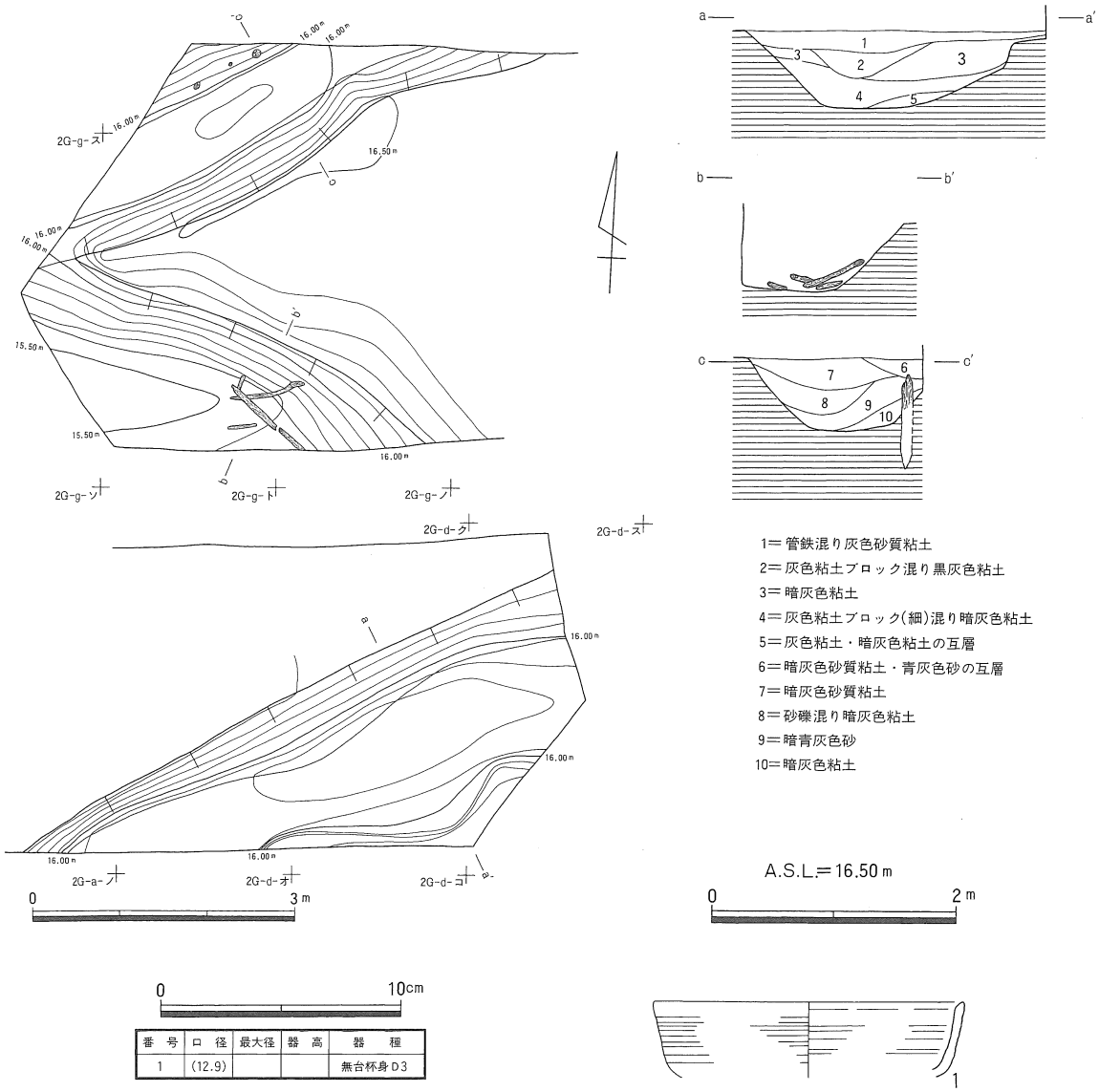
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
⑭⑨	(14.6)			無台杯身C3	⑮⑥	13.8		3.8	無台杯身B1	⑯③	(22.2)		(5.4)	無台杯身C3	⑰⓪	15.6		2.6	無台皿B1
⑮⓪	(13.6)			無台杯身C3	⑮⑦	13.3		4.0	無台杯身B1	⑯④	(18.8)		(2.0)	無台皿B3	⑰①	(14.0)		(2.3)	無台皿B2
⑮①	(12.8)			無台杯身C1	⑮⑧	(13.2)		(4.0)	無台杯身B1	⑯⑤	(18.3)		(2.1)	無台皿B1	⑰②	(14.7)		(2.4)	無台皿B2
⑮②	(13.2)		(2.9)	無台杯身C3	⑮⑨	(12.9)			無台杯身B1	⑯⑥	(16.1)		(2.2)	無台皿B2	⑰③	(12.5)	(12.6)		壺B
⑮③	(13.2)			無台杯身C3	⑯⓪	12.7		4.0	無台杯身B2	⑯⑦	(16.0)		(2.4)	無台皿B1	⑰④				高盤C
⑮④	12.6		3.2	無台杯身D	⑯①	11.9		4.0	無台杯身B2	⑯⑧	(16.2)		(2.0)	無台皿B3	⑰⑤				高盤C
⑮⑤	10.1		4.2	無台杯身B3	⑯②	(24.6)				⑯⑨	(15.4)		(2.0)	無台皿B2					

第25図　ＮＳＤ４出土土器実測図（７）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
176	(41.9)			鍋B2	179	(26.2)			甕D3	182	(22.3)			甕D3	185	(23.7)			甕E
177	(37.1)			鍋B2	180	(26.8)			甕D3	183	(26.8)			甕E	186	(22.1)			甕E
178	(35.2)			鍋B1	181	(24.7)			甕D1	184	(24.0)			甕E	187				

第26図　ＮＳＤ４出土土器実測図（８）



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(12.9)			無台杯身D3

第27図　ＮＳＤ５実測図・出土土器実測図

覆土は４～５層に区分され、南西半（下流側）ではほぼ中央に、北東半（上流側）では南岸寄りに、新しい時期の流路を思わせるレンズ状の粘土層（灰色粘土ブロック混り黒灰色粘土・砂礫混り暗灰色粘土）が確認できた。北側壁の底面近くに丸木杭（径3.0～8.0cm）が３本打ち込まれ、枝溝の底面には自然木が集積していた。また底面に密着して建築部材が発見されたが、最下層から出土する土器は古墳時代後期を主体とするため奈良時代の遺物に含めていない。奈良時代の土器の多くは細片で器形を知りえたのはわずか１点（須恵器無台杯身Ｄ３）である。古墳時代後期～奈良時代後葉にかけて存続した溝と考えているが、奈良時代の流路・形状はかなり小規模であったと思われる。

ＮＳＤ６

２Ｈ－ｆ区～２Ｇ－ｉ区にかけて西進し流路を南に転じて、３Ｇ－ｈ区に至る。確認長約38.0m、幅0.3～0.85m、深さ0.10～0.25mを測りⅢ層上面（１面）で確認できた。

平安時代以降の溝２条に切断されＮＳＤ４と交差していた。ＮＳＢ２の梁間を抜けＮＳＢ３の西側

を取り巻くように進む。ＮＳＩ２に覆われていた。ＮＳＢ３の南側にのびる溝を含め枝溝が２条（長さ4.2m、3.1m）あり、ＮＳＢ４の西方でＮＳＤ７と重複（？）していた。

平坦な底面（海抜高16.20～16.40m）をなし断面は整ったU状を呈する。溝内には炭化物混り暗灰色粘土が堆積し、ところどころ底面近くに白色粘土塊が認められた。

出土土器は少なくかつ細片であるため図示できなかったが、須恵器無台杯身Ｄ４等、奈良時代後葉に属する土器が主体を占める。ＮＳＢ２・３・４の等掘立柱建物群と関連するいわゆる排水溝であろう。

ＮＳＤ７

３Ｇ－ｈ・３Ｈ－ｂ区のⅢ層２面に至りその所在を確認した。わずかに蛇行しながら東西方向にのびる。全長約14.20m、幅0.40～0.95m、深さ0.10～0.15mを測り、西端は約90度南方へ屈曲し、ＮＳＤ６と重複（？）していた。溝を跨いでＮＳＢ４が建てられ、南方へのびる枝溝（幅0.25～0.40m、深さ約0.10m）が１条ある。

溝幅は均一でない。総じて底面に丸味を持ち断面はU字状を呈していた。覆土は２層に区分できる（上層＝管鉄混り灰褐色砂質粘土、下層＝暗灰色粘土）。ＮＳＤ６と同様に掘立柱建物群と関連する排水溝と考えている。

出土土器（須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｂ、無台杯身Ｄ２）の大半は、奈良時代前葉～中葉に属するものである。

ＮＳＤ８

北半はⅢ層上面（１面）においてほぼその所在を知ることができたが、すべての輪郭を確認したのはⅢ層を約15㎝掘り下げた後（２面）である。２Ｇ－ｆ区～３Ｇ－ｂ区にかけてほぼ直線的に伸びる。底面の海抜高は16.10m前後で一定していたが流れの方向は明確でない。確認長約22.20m、幅0.90～1.60m、深さ0.25～0.50mを測る。北半の溝幅が一見南半に比べて広いのは、遺構確認面の深さよる差と考えている。ＮＳＤ９を切断しＮＳＨ１と重複していた。

両壁とも直線的・急峻な傾斜を示し、平坦な底面をなす（断面U字状）。底面の幅が広がった所にこぶし大礫が集中していた。覆土は基本的に４層のレンズ状堆積に区分できる。

出土遺物のうち３箇所の小孔を穿った有孔板・曲物側板等の木製品は最下層（暗灰色粘土）から出土した。器形を復元しえた土器片（須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｅ－墨書土器－、無台杯身Ｄ３、土師器甕Ｂ、鍋Ｂ２等）の多くは主に上位の覆土（斑鉄混り暗灰色粘土炭化物混り灰色粘土）中に含まれていた。奈良時代後葉の土器を主体とするがその形成時期は明確でない。小溝ながら平安時代以降まで継続使用されていた可能性もある。

ＮＳＤ９

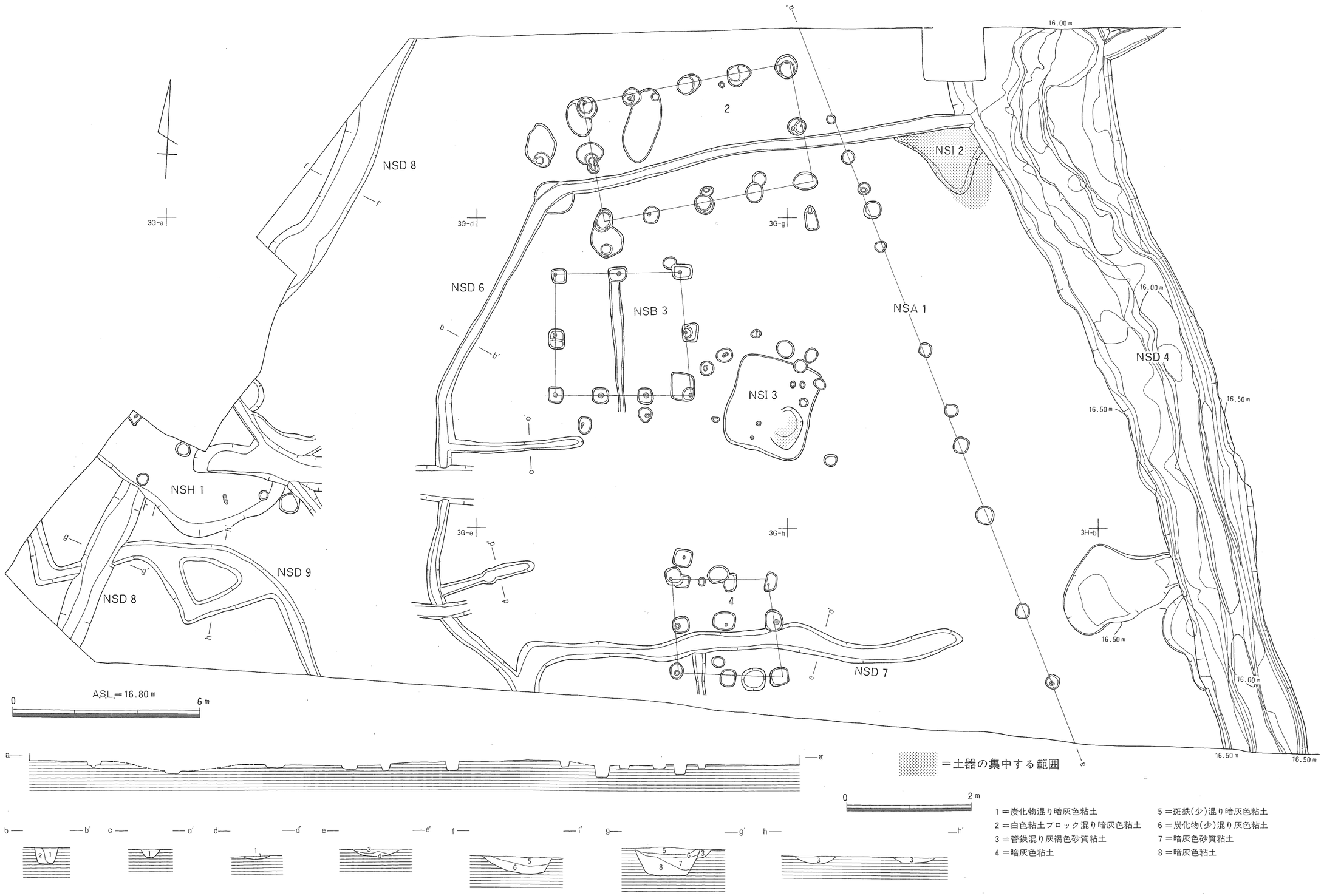
３Ｇ－ｂ・ｅ区のⅢ層２面に至り検出できた。確認長約12.30m、幅0.40～0.70m、深さ0.10～0.15mを測る。底面の海抜高は東半がわずかに高い（16.30～16.40m）。

ＮＳＨ１に南接し、屈曲・蛇行を繰り返す。蛇行部を結ぶ副流路があり副流路もほぼ直角に屈曲していた。ＮＳＤ８に切断される。断面は底面に丸味を持つ浅いU字状を呈し、溝内にはＮＳＤ７の上層と類似した管鉄混り灰褐色砂質粘土が堆積していた。

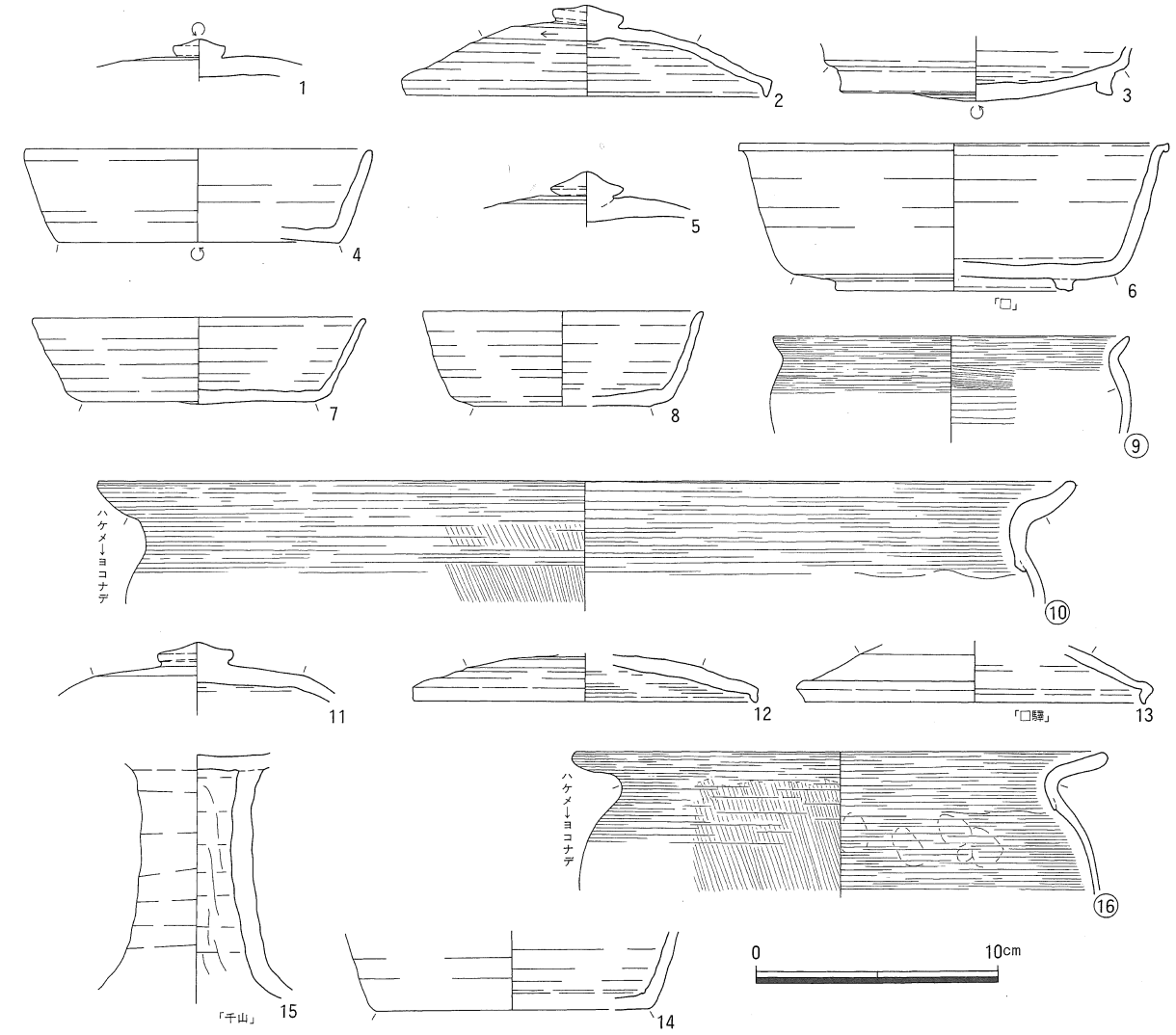
出土土器（須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、無台杯身Ｄ２、高盤Ｂ、土師器甕Ｄ２）の多くは奈良時代前葉～中葉に位置づけられる（墨書土器３点含む）。

ＮＳＤ10

２Ｆ－ａ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＨ４・５の間をほぼ南北方向に伸びる。確認長



第28図　２Ｇ－ｆ・ｉ　３Ｇ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ　２Ｈ－ｃ・ｆ　３Ｈ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ区奈良時代遺構分布図



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1				杯蓋A2	5				杯蓋A2	⑨	(14.7)	(14.9)		甕B	13	(14.7)			杯蓋A3
2	15.3		4.7	杯蓋A2	6	(17.8)		(6.0)	有台杯身E	⑩	(40.3)			鍋B2	14				無台杯身D2
3				有台杯身B	7	14.8		3.5	無台杯身D3	11				杯蓋A2	15				高盤B
4	(14.4)		(4.8)	無台杯身D2	8	(11.5)		(4.9)	無台杯身D3	12	(14.2)			杯蓋A2	⑯	(22.1)			甕D2

第29図　ＮＳＤ７・８・９出土土器実測図

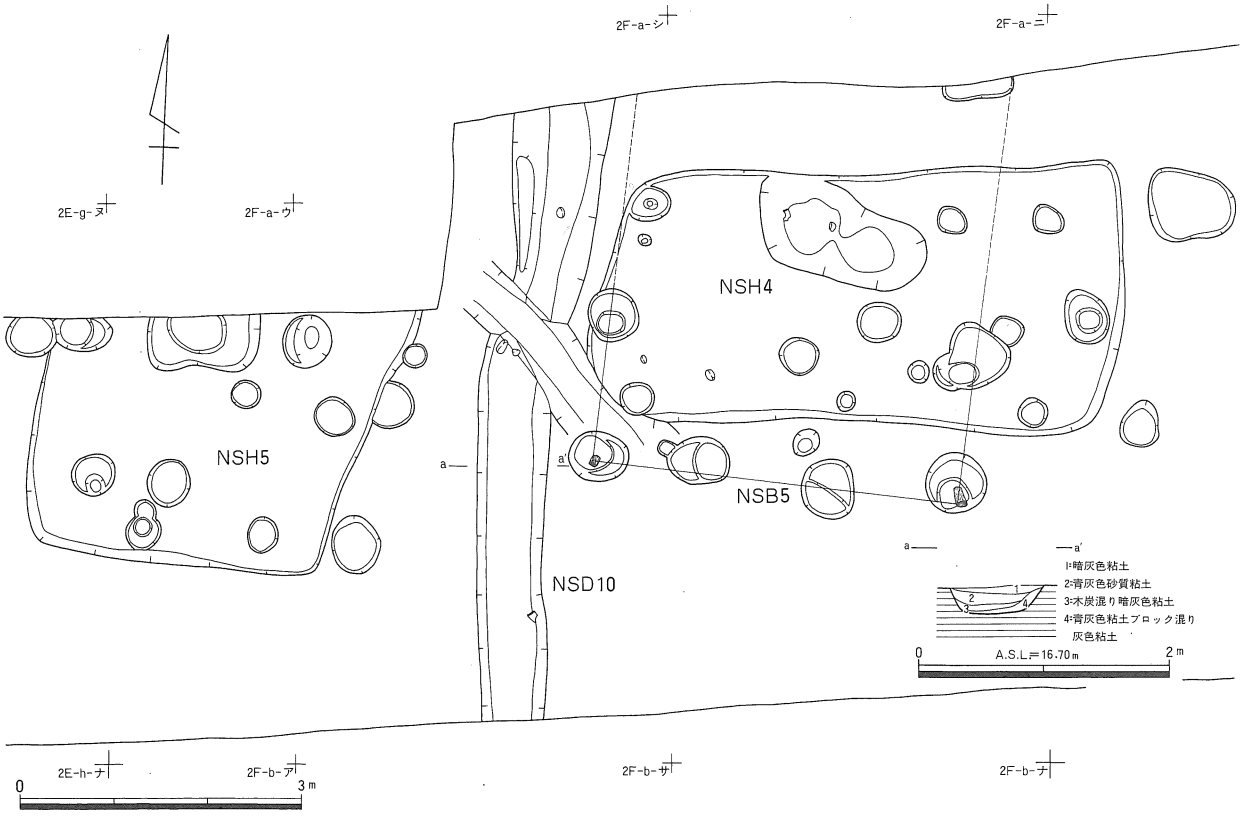
約6.60m、幅0.65～1.05m、深さ0.20～0.25mを測る。平安時代以降の溝１条に切断されていた。

北に向い徐々に幅を増し西側壁に一部平坦面が認められた。断面は基本的にＵ字状をなすが底面（海抜高16.20m前後）には凹凸がある。こぶし大礫が数個落ち込んでいた。覆土は大きく４層に区分でき、溝全体がＮＳＨ４・５の主体的な覆土である黒色有機質土に覆われていた。

出土遺物には３箇所の小孔を穿ち一辺を抉り削った有孔板と土器細片がある。須恵器食器類（杯・皿等）の破片がめだつが型式を知りえた資料はない。ある期間存続しＮＳＨ４・５とほぼ同時期（奈良時代後葉）に埋没したと考えている。

ＮＳＤ11

溝幅4.80～7.65m以上、深さ0.70～1.05mを測り、本発掘調査において確認された最大規模の溝である。現国道１号線下（長さ約30m）を調査していないが、２Ｇ－Ｃ・３Ｇ－ａ区～２Ｅ－ｄ区にか



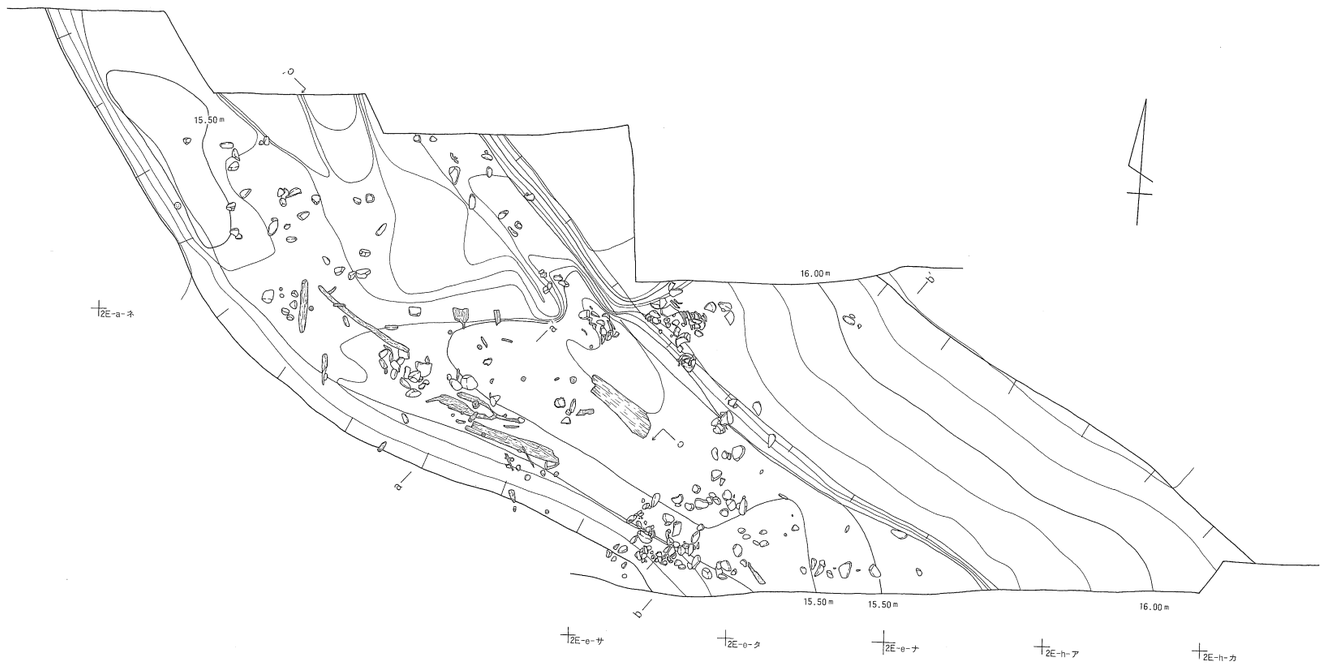
第30図　２Ｅ－ｇ　２Ｆ－ａ・ｄ区奈良時代遺構分布図

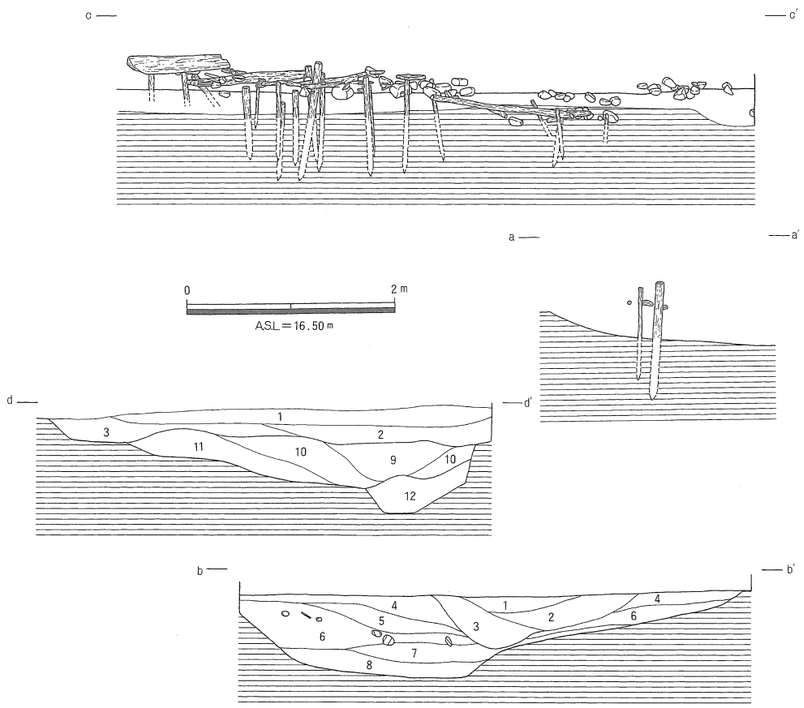
けて確認長は約60.50mにおよぶ。２Ｅ区付近ではⅢ層を約10㎝掘り下げたところ（２面）でその所在を知ることができたが、２・３Ｆ区付近の輪郭を捉えたのは、遺跡基盤層（灰白色粘土）近くまで掘り下げ（３面)、南側に隣接する掘立柱建物群（ＮＳＢ６～10）をほぼ検出しおえた後である。２・３Ｆ区では東西方向に走る複数の平安時代以降の小溝と重複していた。

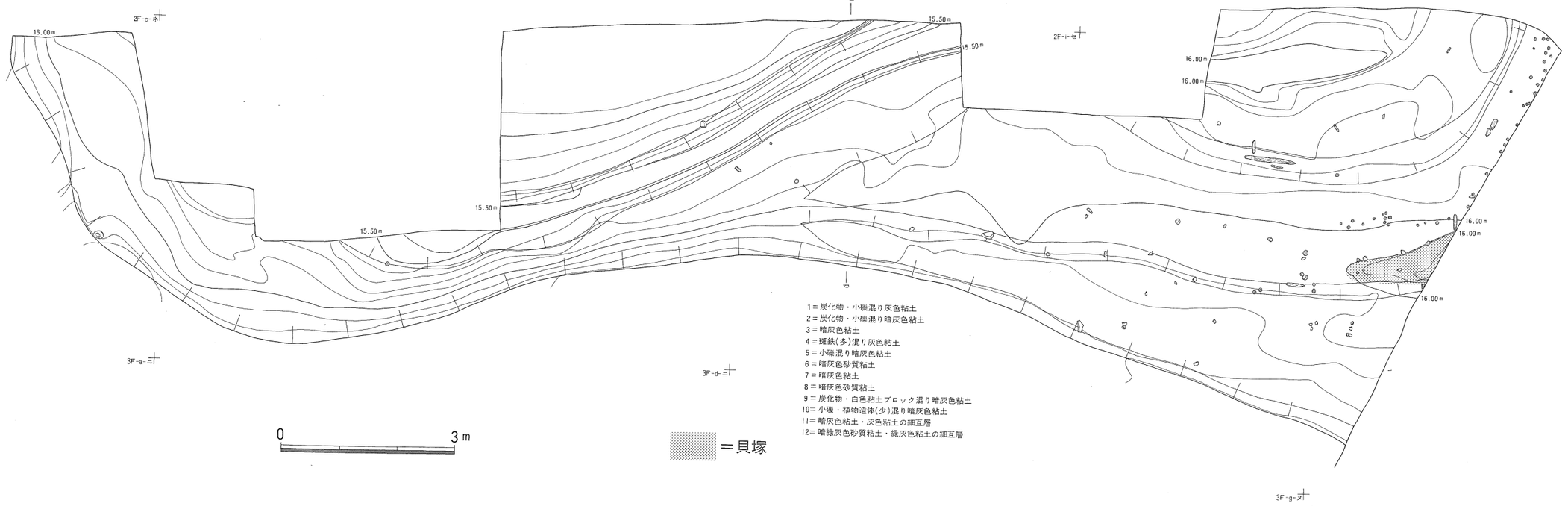
底面の海抜高（15.40～15.50m）は南東方でわずかに高く、北西に向って流れていたと考えられる。２Ｅ区付近（北半）では直線上２・３Ｆ区付近（南半）ではゆるく蛇行し、東端の発掘区限界近くでは北に転じ始めている。この彎曲部分の溝幅は広い。底面にさらに一段深い流路を有し砂質粘土が堆積していた。最下層に含まれる土器は古墳時代後期に属するものである。奈良時代の溝の壁にも若干の段差が見られたが、一段深い流路の幅は広く浅く不明瞭で断面はＵ字状を呈していたと思われる。奈良時代の覆土は４～５層のレンズ状堆積に区分され相対的に粘性が強い。

南半の南岸、底面近くに杭列（確認長約5.50m）が築かれていた。使用された丸木杭（角杭－転用材－は少ない）は総じて太く（径5.0～7.5㎝)、先端を３ないし４方面から削りを加え尖らせている。杭列に絡みつく流木・横木等は無く、ＮＳＤ３・４のようなこぶし大礫の集積は顕著でなかった。杭列に南側に種子・木葉等を含む小規模な貝塚（150×80×20㎝）が形成されていた。貝塚の南側から発見された礫群は平安時代以降に属するものと思われる。北半の西岸にも杭列（丸木杭・角杭）があり、自然木・板材・礫が集積していたが（護岸施設か？）木杭は一段深い流路の壁上端に沿って打ち込まれており古墳時代に属する可能性も高い。

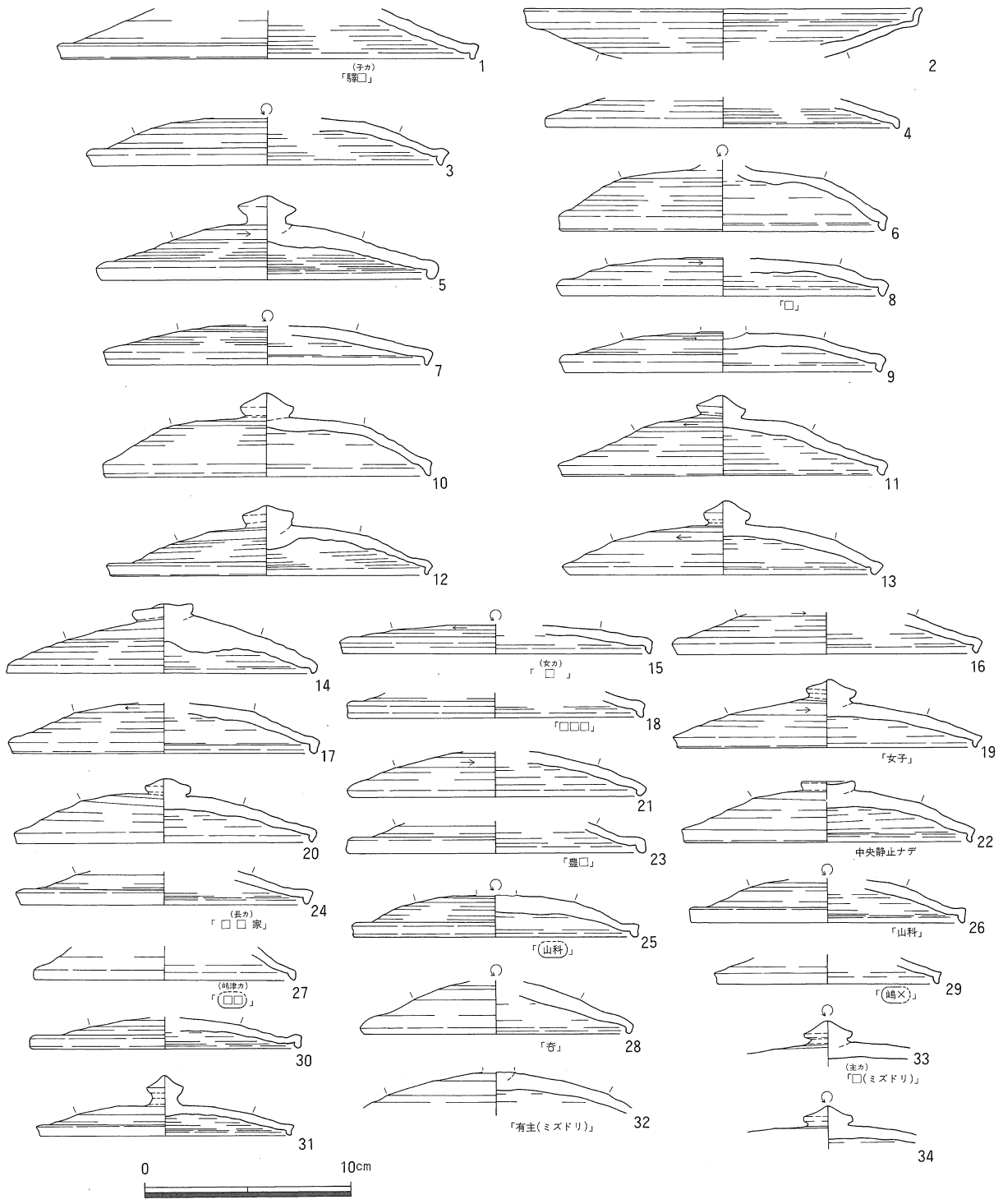
奈良時代下層の覆土（暗灰色粘土）には多量の流木・木葉等植物遺体が含まれていた。出土遺物に





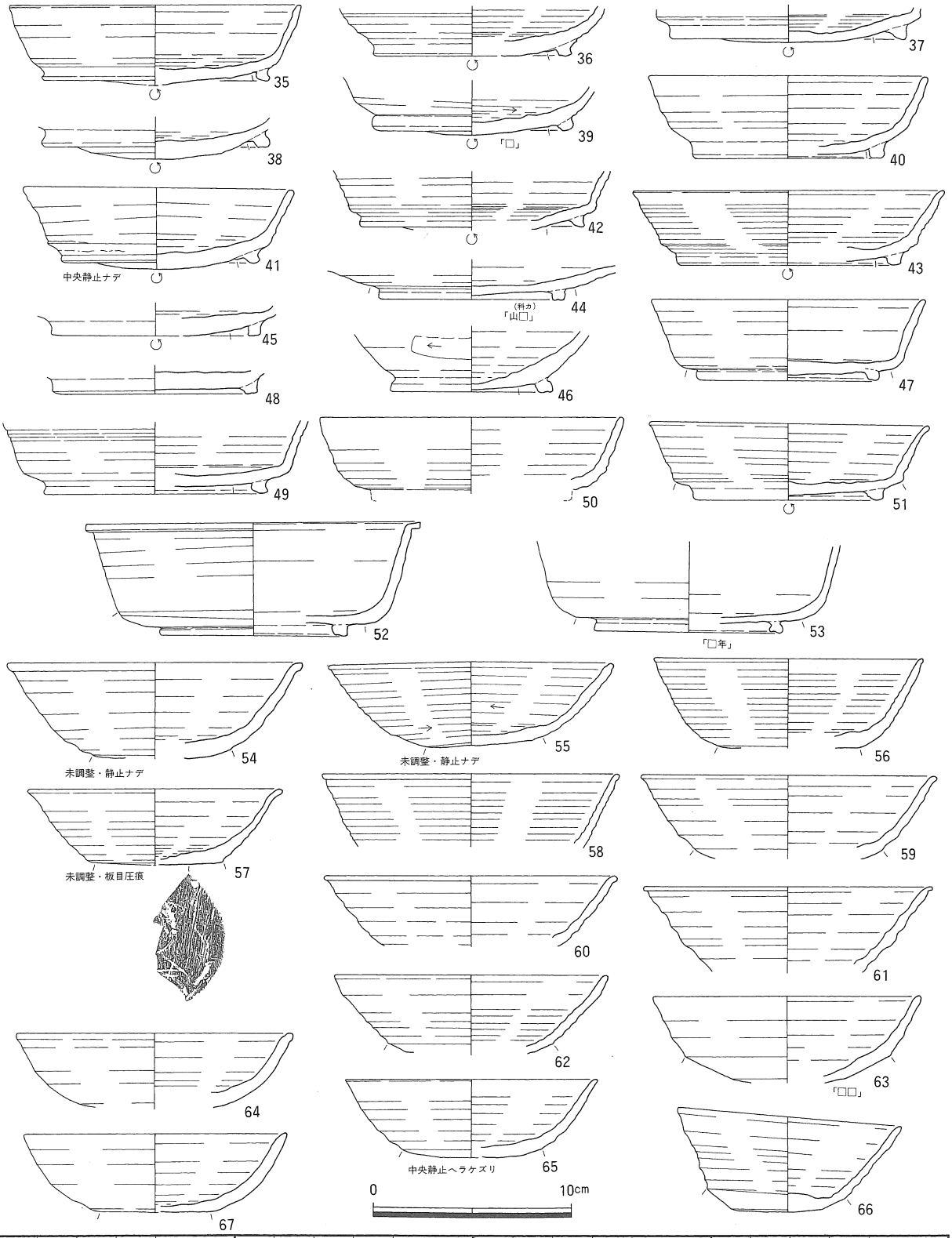


第31図　ＮＳＤ11実測図



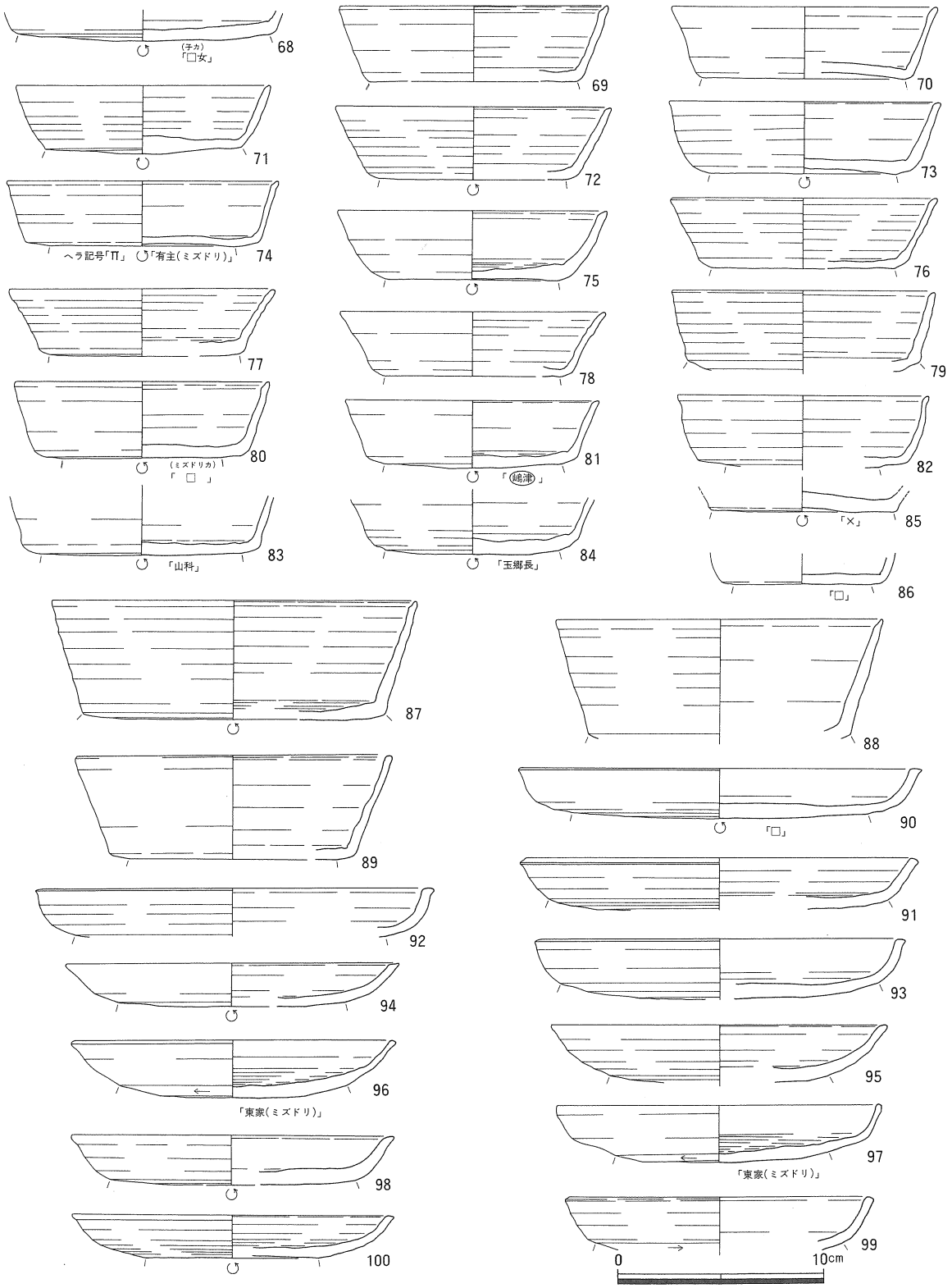
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(20.4)			杯蓋A3	10	15.9		4.0	杯蓋A1	19	14.9		3.3	杯蓋A3	28	(13.2)			杯蓋A3
2	(19.3)			無台皿C	11	15.9		3.9	杯蓋A3	20	14.6		3.1	杯蓋A3	29	(11.0)			杯蓋A2
3	(17.5)			杯蓋A3	12	15.8		3.4	杯蓋A3	21	(14.4)			杯蓋A3	30	(13.2)			杯蓋A3
4	(17.1)			杯蓋A2	13	15.5		3.6	杯蓋A3	22	14.2		2.9	杯蓋A3	31	12.5		2.9	杯蓋A3
5	16.6		4.0	杯蓋A3	14	15.0		3.4	杯蓋A1	23	(14.4)			杯蓋A3	32				杯蓋A
6	(15.9)			杯蓋A2	15	(15.0)			杯蓋A3	24	(14.4)			杯蓋A3	33				杯蓋A3
7	(15.9)			杯蓋A3	16	(15.0)			杯蓋A3	25	(13.8)			杯蓋A2	34				杯蓋A3
8	(16.1)			杯蓋A3	17	(15.0)			杯蓋A3	26	(13.4)			杯蓋A3					
9	(15.8)			杯蓋A3	18	(14.4)			杯蓋A2	27	(12.7)			杯蓋A2					

第32図　ＮＳＤ11出土土器実測図（１）



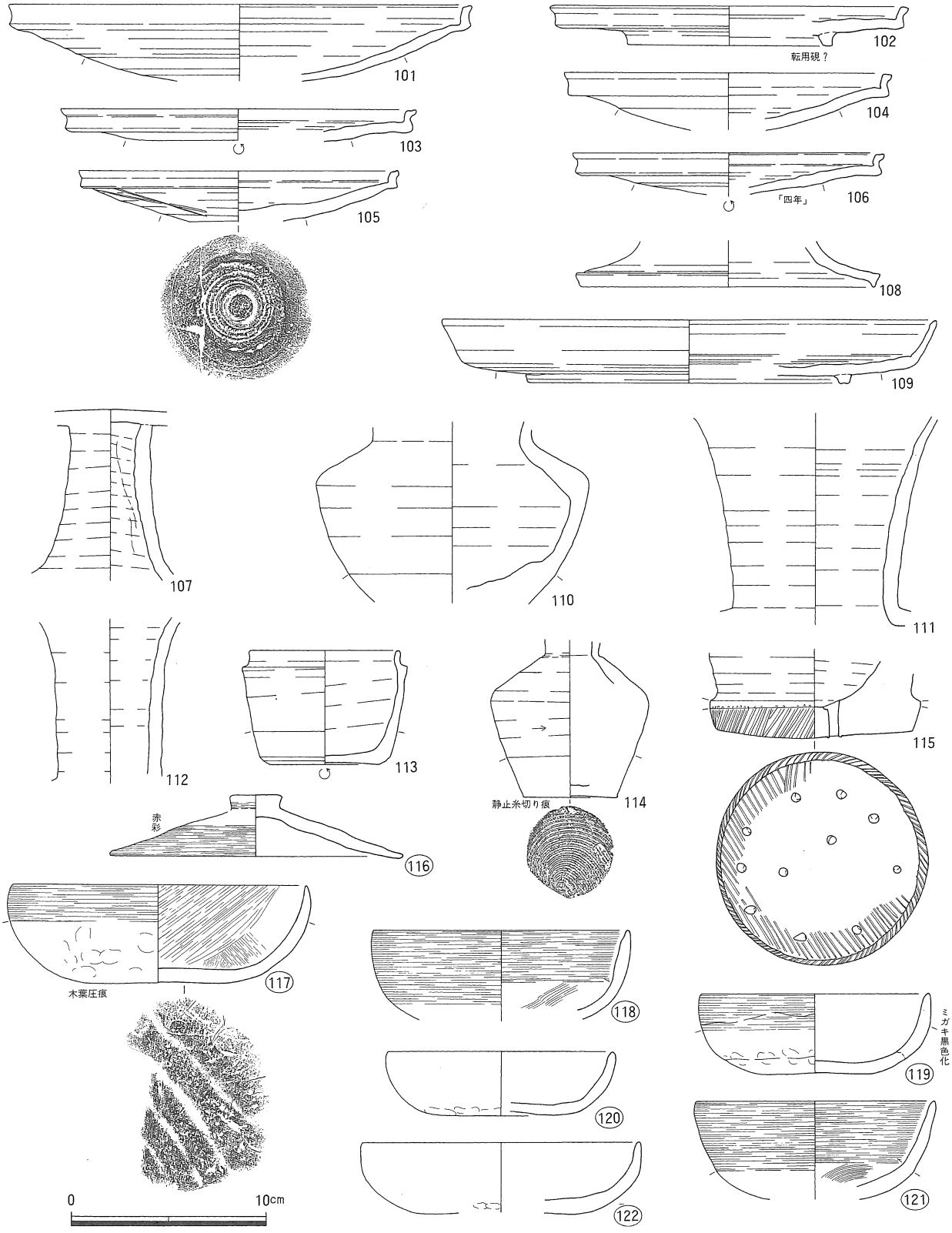
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
35	(14.8)		(4.0)	有台杯身A3	44				有台皿B	52	(17.0)		(5.7)	有台坏身E	61	(14.6)			無台杯身B1
36				有台杯身A1	45					53				有台坏身E	62	(13.7)		(3.9)	無台杯身A1
37				有台杯身B	46				長頸壺	54	(15.0)		(4.8)	無台杯身A1	63	(13.6)			無台杯身A1
38				有台杯身A1	47	13.9		4.1	有台杯身C3	55	14.3		4.3	無台杯身A1	64	(14.0)		(3.7)	無台杯身A3
39				有台杯身A1	48					56	(13.6)		(4.5)	無台杯身A2	65	(12.7)		(4.0)	無台杯身A1
40	(14.1)		(4.2)	有台杯身A1	49				有台杯身C3	57	(12.9)		(3.9)	無台杯身B2	66	11.4		(大) 5.5	無台杯身A1
41	13.8		4.1	有台杯身A1	50	(15.3)			有台杯身C2	58	(14.9)			無台杯身A2				(小) 4.4	
42				有台杯身B	51	14.2		(大) 4.0	有台杯身B	59	(15.0)			無台杯身A1	67	(13.3)		(4.0)	無台杯身A3
43	(15.7)		(3.7)	有台杯身C1				(小) 3.7		60	(14.8)			無台杯身A1					

第33図　ＮＳＤ11出土土器実測図（２）



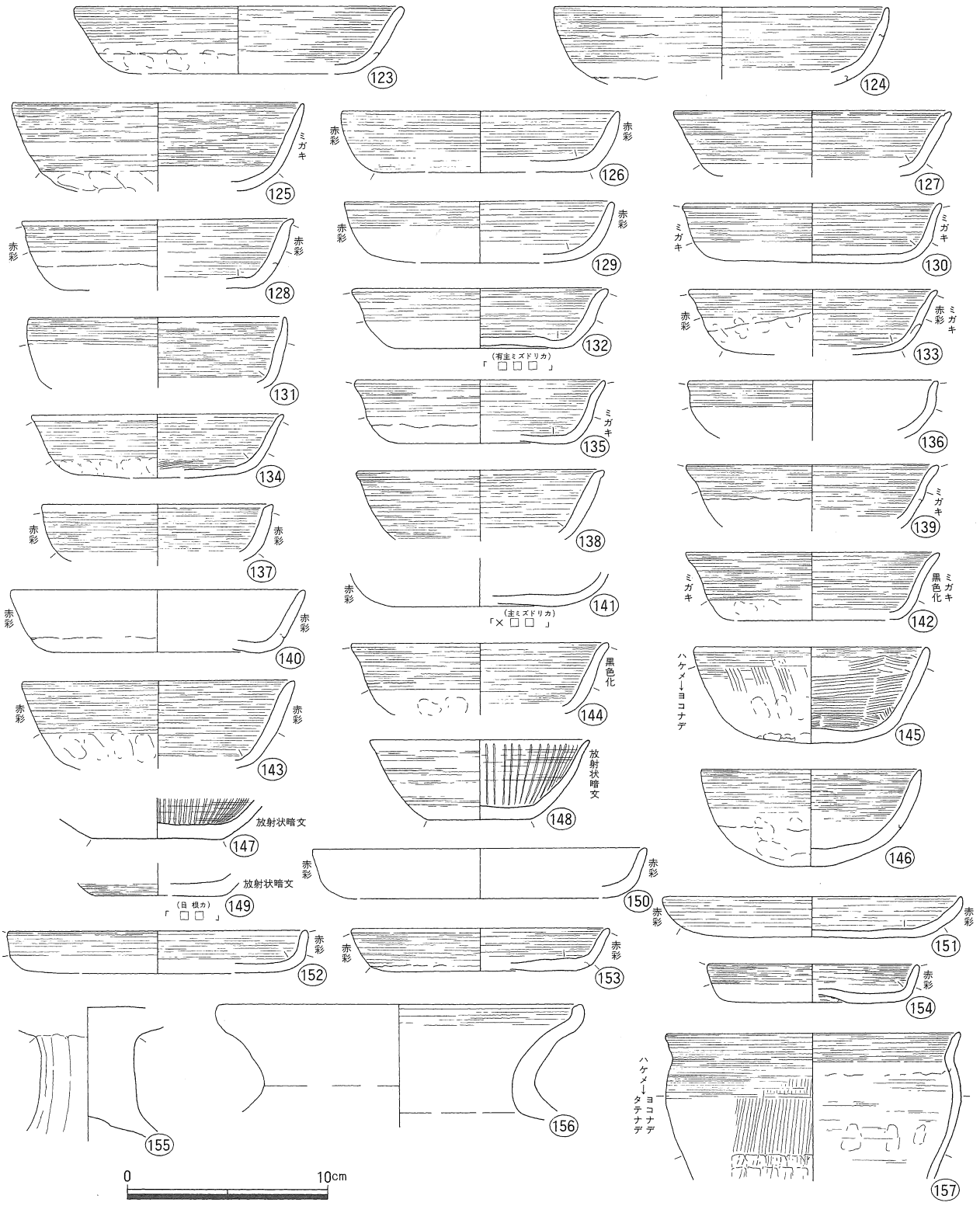
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
68				無台杯身D1	77	(13.0)		(3.3)	無台杯身D3	86				無台杯身D4	95	(16.3)			無台皿D2
69	(13.0)		(3.7)	無台杯身D2	78	(12.8)		(3.1)	無台杯身D3	87	(17.8)		(5.7)	無台杯身D2	96	15.7		2.8	無台皿D2
70	(13.0)		(3.5)	無台杯身D2	79	(12.8)		(3.8)	無台杯身D3	88	(15.9)			無台杯身D3	97	15.7		2.8	無台皿D2
71	12.4		3.3	無台杯身D1	80	12.4		3.7	無台杯身D4	89	(15.4)		(5.0)	無台杯身D3	98	(15.6)		(2.4)	無台皿D2
72	(13.4)		(3.5)	無台杯身D3	81	12.2		3.2	無台杯身D3	90	19.5		2.4	無台皿D2	99	(14.9)			無台皿D2
73	13.2		3.5	無台杯身D4	82	(12.2)		(3.4)	無台杯身D4	91	(19.3)		(2.5)	無台皿D2	100	(15.6)			無台皿D2
74	13.2		3.1	無台杯身D3	83				無台杯身D4	92	(19.3)			無台皿D1					
75	13.0		3.3	無台杯身D3	84				無台杯身D1	93	(18.0)		(2.9)	無台皿D2					
76	(13.0)		(3.4)	無台杯身D3	85				無台杯身D2	94	(16.1)		(2.1)	無台皿D2					

第34図　ＮＳＤ11出土土器実測図（３）



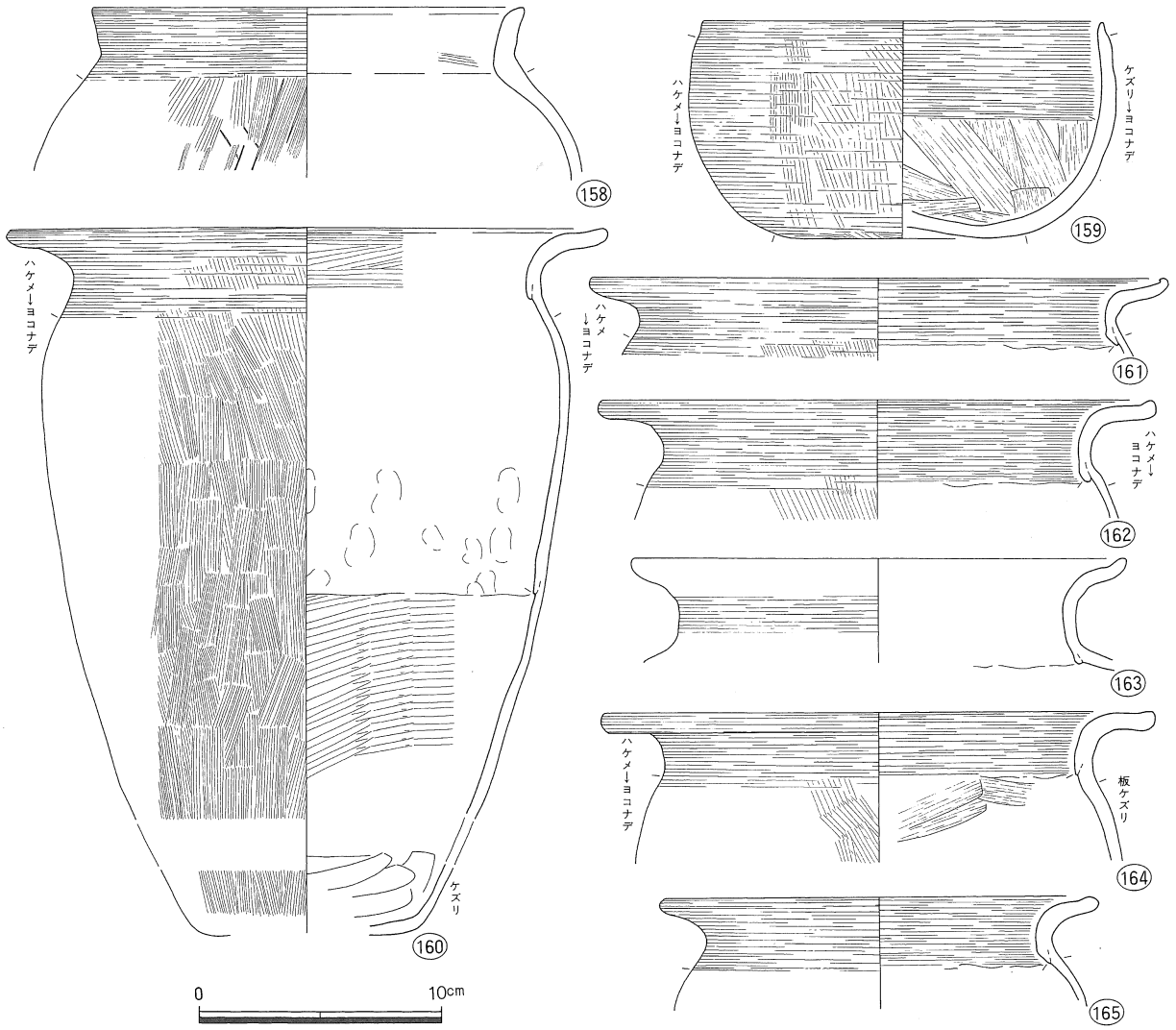
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
101	(23.6)			無台皿B1	107				高盤B	113	7.7	8.4	5.8	小型壺B	(119)	(11.9)		(4.1)	無台杯身A
102	(18.3)		(1.9)	有台皿B1	108				高盤B	114		(8.1)		水瓶	(120)	(11.7)		(3.3)	無台杯身A
103	(18.1)			無台皿B1	109	(25.2)		(3.2)	有台皿A3	115				陶臼	(121)	(12.3)		(5.0)	無台杯身B2
104	(16.7)			無台皿B1	110		(13.9)		長頸壺B2	(116)	15.0		3.1	杯蓋A1	(122)	(14.2)		(3.7)	無台杯身A
105	(16.4)			高盤B	111				長頸壺B	(117)	15.1	15.5	5.0						
106	(15.9)			無台皿B1	112				長頸壺A1	(118)	(13.2)			無台杯身A					

第35図　ＮＳＤ11出土土器実測図（４）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
123	(16.5)		(3.3)	無台杯身E	132	12.7		3.0	無台杯身C3	140	(14.7)		(3.1)	無台杯身C3	149				無台杯身H
124	(16.7)			無台杯身C1	133	(12.4)		(3.2)	無台杯身C3	141				無台杯身C1	150	(16.6)		(2.5)	無台皿B1
125	(14.6)		(4.3)	無台杯身C1	134	(12.6)		(3.1)	無台杯身C3	142	(12.6)		(3.2)	無台杯身C3	151	14.9		2.0	無台皿B3
126	(13.8)		(3.0)	無台杯身C2	135	(12.4)		(大)(3.2)	無台杯身C3	143	(13.6)			無台杯身C1	152	(15.0)		(2.1)	無台皿B1
127	(13.8)		(3.3)	無台杯身E				(小)(3.0)		144	(12.8)			無台杯身C3	153	(12.8)		(2.1)	無台皿B1
128	(13.6)		(3.4)	無台杯身C3	136	(12.5)			無台杯身C1	145	11.8		4.8	無台杯身B2	154	(10.6)		(1.9)	無台皿B1
129	(13.4)		(3.0)	無台杯身C2	137	(11.6)			無台杯身C2	146	11.0		4.8	無台杯身B2	155				高盤D
130	13.0		2.9	無台杯身C3	138	(12.3)			無台杯身C3	147				無台杯身H	156	(18.2)			甕D1
131	(13.0)			無台杯身C2	139	(12.6)			無台杯身C3	148	10.8		3.9	無台杯身H	157	(14.7)			甕A

第36図　ＮＳＤ11出土土器実測図（５）



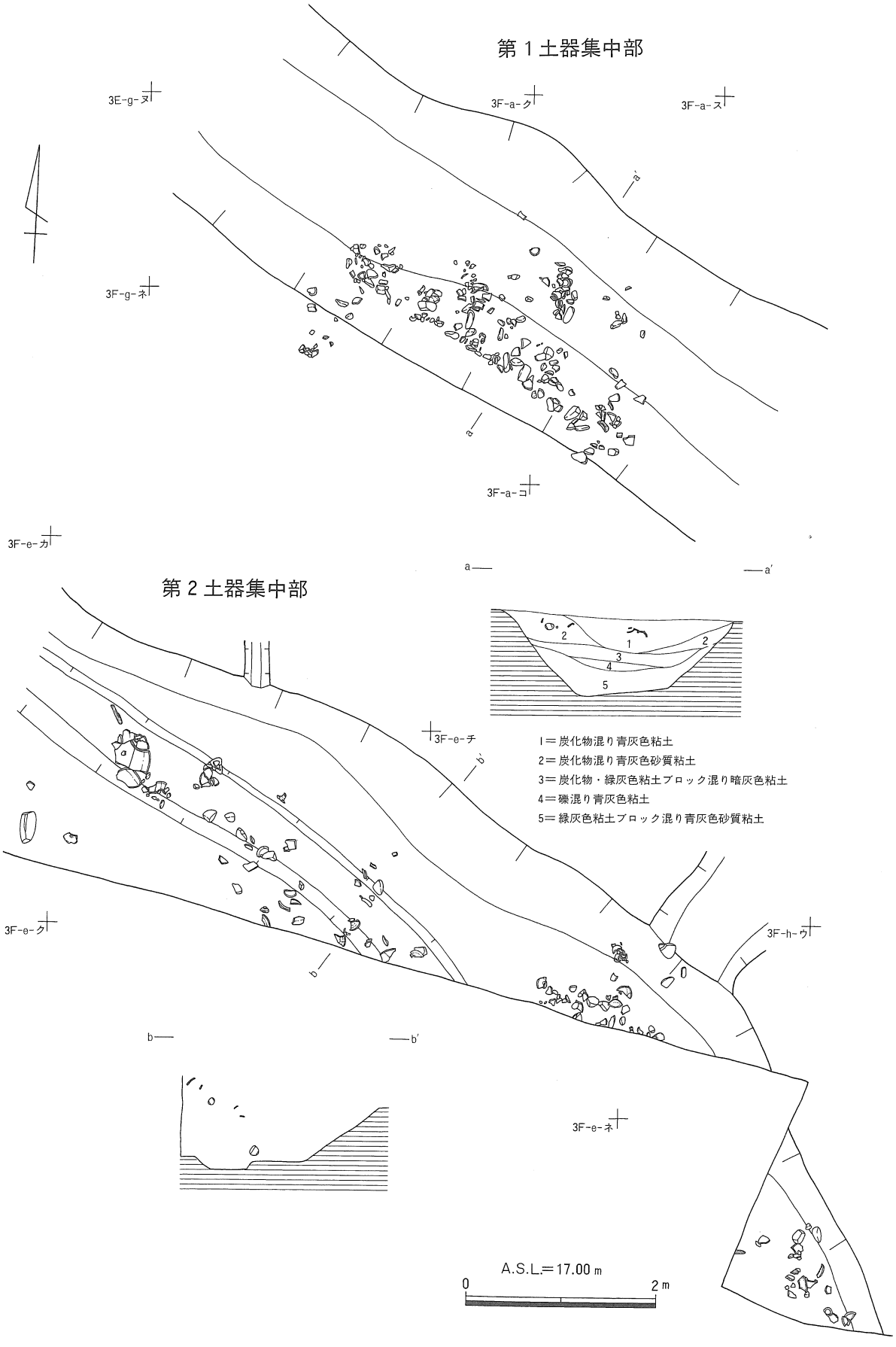
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
158	(17.8)			甕B	160	(24.8)		(28.8)	甕D3	162	(23.0)			甕D4	164	(22.8)			甕D4
159	(16.6)	(17.6)	(8.9)	鉢	161	(23.8)			甕D3	163	(20.4)			甕E	165	(18.1)			甕D3

第37図　ＮＳＤ11出土土器実測図（６）

は土器（内墨書土器57点）、木簡、転用硯、ミニチュア土器、土馬、鉄製鎌、砥石の他、両端に削り面取りを加えた丸太材（建築部材？）や多量の木製品（舟形・馬形・曲物底板・櫛・箸・錘・柄材・鋤・槽・下駄等）がある。層位的な型式変化を捉えきれなったが、土器は須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ｄ３、無台皿Ｄ２、土師器無台杯身Ｃ３を主体とし、須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ１、無台杯身Ａ１・Ｄ２・Ｄ４、無台皿Ｂ１、高盤Ｂ、土師器無台杯身Ａ・Ｃ１・Ｃ２、無台皿Ｂ１、甕Ｄ３等も比較的高い比率で伴出している（他に須恵器杯蓋Ａ１、有台杯身Ａ３・Ｂ・Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３・Ｅ、無台杯身Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｄ１、有台皿Ａ３・Ｂ１、無台皿Ｃ・Ｄ１、陶臼、小型壷Ａ１・Ｂ２、水瓶、土師器杯蓋Ａ１、無台杯身Ｂ２・Ｅ・Ｈ、無台皿Ｂ３、高盤Ｄ、鉢、甕Ａ・Ｂ・Ｄ１・Ｄ４・Ｅがある）。古墳時代後期以来の流路を踏襲し、８世紀初頭から奈良時代を通じて生きた溝として機能していたと考えられる。



第38図　２Ｅ－ｉ　３Ｅ－ｇ・ｈ　２Ｆ－ｃ・ｆ・ｉ　３Ｆ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ　２Ｇ－ｃ　３Ｇ－ａ区奈良時代遺構分布図



第39図　ＮＳＤ13土器集中部実測図

NSD12

3F－d・e区のⅢ層中位（2面）に至り確認できた。ほぼ南北方向に直線的にのびNSD13と合流する。全長6.50m、幅0.20～0.35m、深さ0.05～0.15mを測る。北端はNSB8の柱穴に切断され止切れていた。またNSB7・9の柱穴が溝の一部を壊していた。断面は整ったU字状を呈する（底面海抜高16.30m）。

出土土器はきわめて少量・細片であった。

NSD13

Ⅲ層上面（1面）で確認できた。2つの掘立柱建物群（NSB6～10・11～13）の間を通り、3F－h区～2E－i区にかけてほぼ直線的に伸びる。南東端は南方へ曲がり始めている。確認長約34.50m、幅2.00～2.85m、深さ0.65～1.05mを測る。底面の海抜高（15.60～15.70m）は南東半でわずかに高く溝幅も広い。平安時代以降の溝2条に切断されていた。

底面は総じて平坦であるが南東端に一段深い流路を有し、また北西端の西壁は一部張り出して浅部（平坦面）となっていた。両壁とも傾斜は均一・直線的で、整ったU字状の断面を示す。

NSB6・9とNSB11近くの溝内に2箇所、土器片と礫の集積が認められた。（第1土器集中部＝3.60×1.30×0.15m、第2土器集中部＝9.50×0.75×0.40m）。礫は大小差（径4～20cm）があり、楕円形様のものがめだつ。完形に復元しうる砂片は少なく破損した土器等の廃棄跡（いわゆる土器留め）であろう。第1土器集中部は西（南）壁寄りに第2土器集中部はさらに3つの密集箇所に分かれて、溝中央から東（北）壁寄りに形成されていた。覆土は大きく5層に区分できるが、これら土器・礫等の集積が上位2層（炭化物混り青灰色粘土・砂質粘土）内に含まれていたことから奈良時代の溝はかなり浅かったとも考えられる。

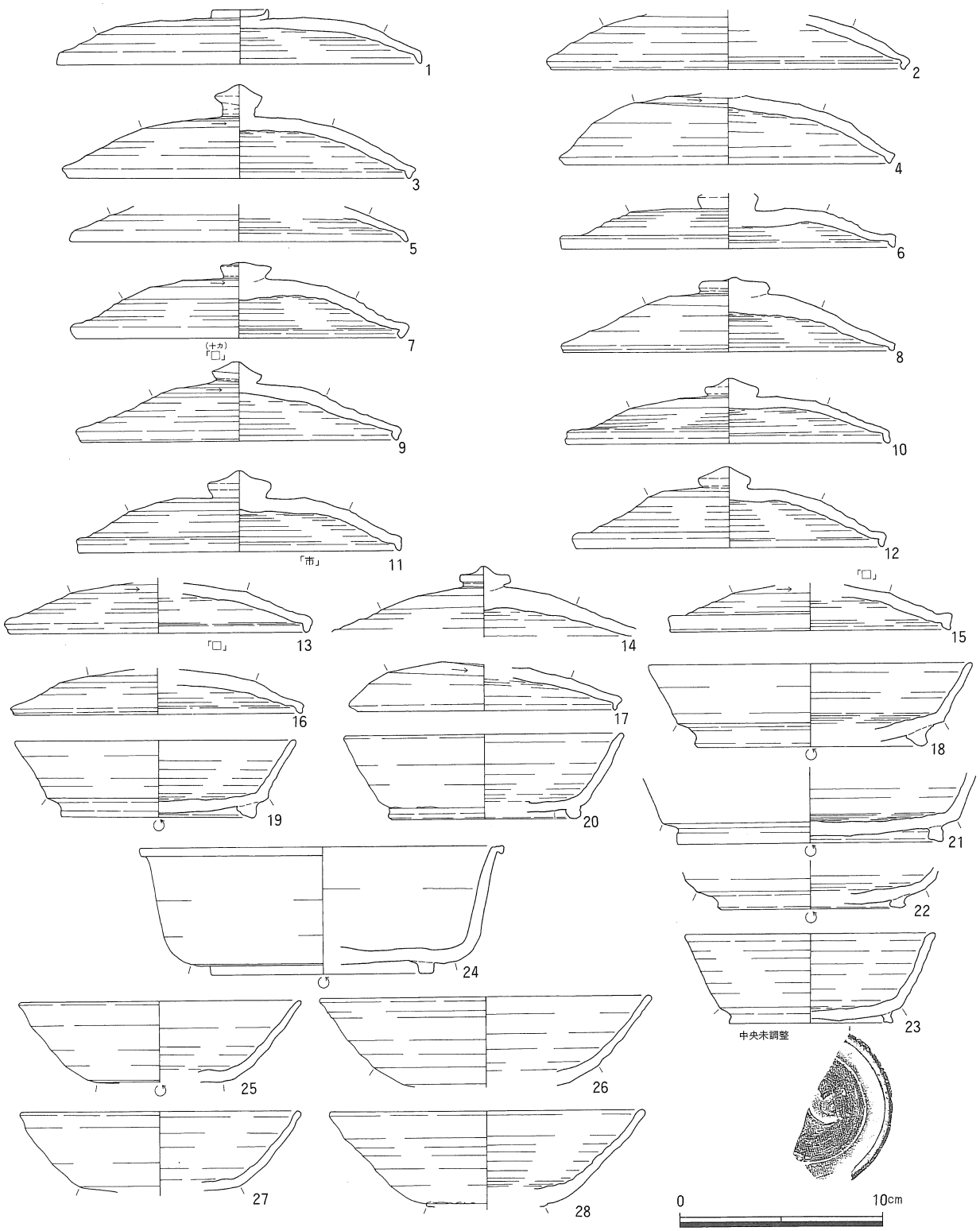
北西端の浅部から銙帯具（巡方）が出土し、第1土器集中部にはミニチュア土器、土製支脚、砥石が、第2土器集中部にはミニチュア土器、土馬が混在していた。墨書土器13点を含む。第2土器集中部の器種組成を見ると須恵器杯蓋A2・A3が主体をなし、次いで無台杯身A1・D3、土師器甕D3の出土比率が高い（他に須恵器杯蓋A1、有台杯身A3・B・D・E、無台杯身A2・D1・D2・D4、無台皿B1・B2・D2、高盤A・B、壷蓋A2、壷C2・D2、長頸壷A1・B1、水瓶、甕B2、土師器無台杯身C2・C3・D・G、皿蓋、無台皿B2・B3、高盤Bがある）。第1土器集中部もほぼ同様の組成を示すが、須恵器無台杯身A1、土師器甕D3は少ない。代って須恵器有台杯身A1・A3、長頸壷B2が比較的多く出土している。土器集中部に見られず覆土中から出土した器種には、須恵器無台杯身B2・C、有台皿A3、無台皿D1、鉢B、壷D1、瓶、土師器杯蓋A1、有台杯身A1、無台杯身A・E、鍋B2がある。

溝底面に密着して古墳時代中期の土器が多量に発見され、6世紀中葉から7世紀代の遺物はきわめて希薄であった。幅・深さとも数mの溝が約1世紀半の間、何ら人為的な働きかけを受けずに残存し続けたとは考えがたいが、NSD13は古墳時代以来の流路を基本的に踏襲し、奈良時代前葉になると再び生きた溝として機能し始めている。

NSD14

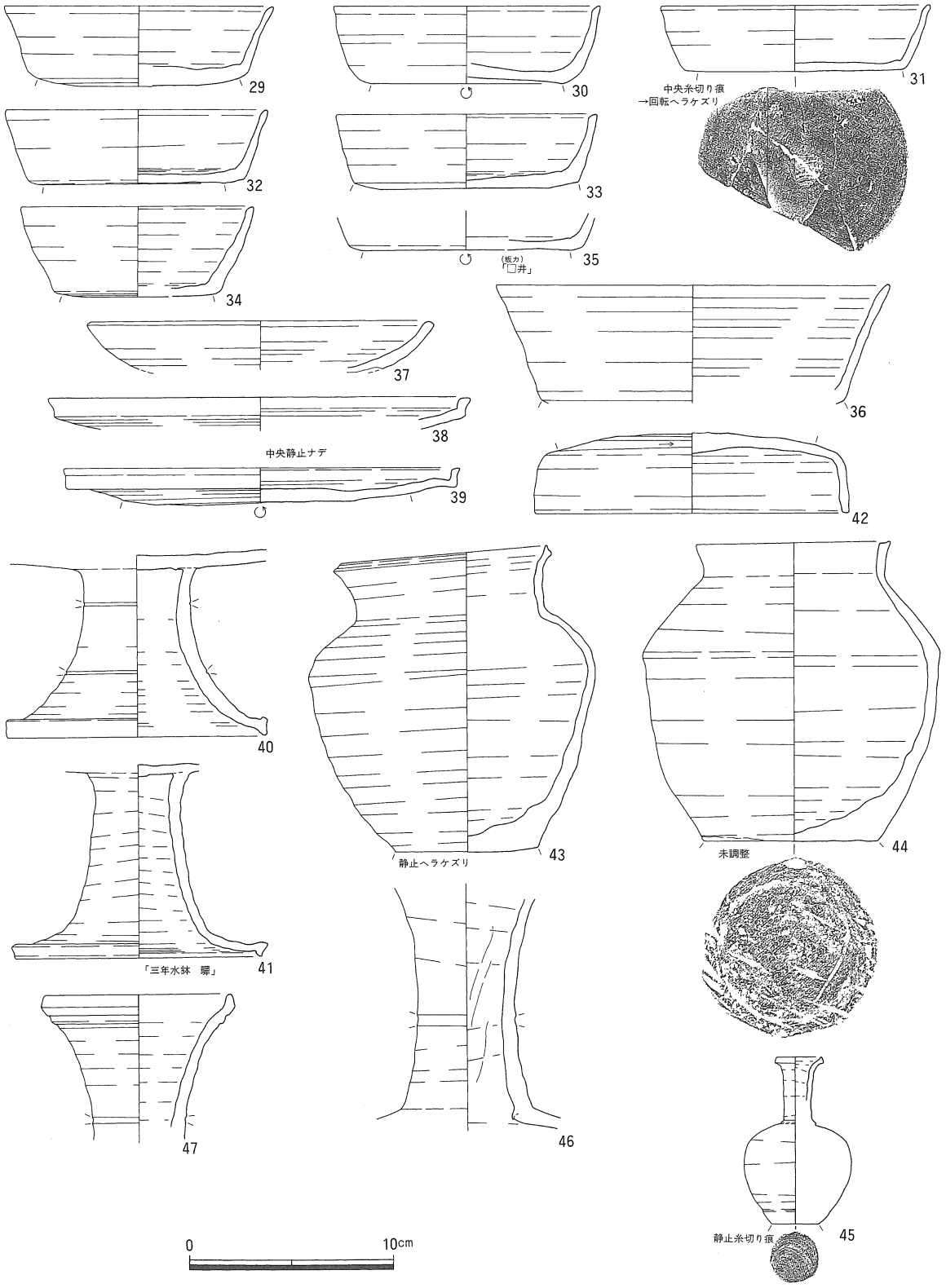
2D－g・h区のⅢ層上面（1面）で確認できた。確認長約5.70m、幅0.90～1.15m、深さ0.25～0.30mを測る。流路は北北東～南南西へ真っすぐのび、調査区外南方でNSD15と交差していると思われるが流れの方向は明らかでない。

底面（海抜高15.50m前後）の幅は著しく狭く丸味を持つ。壁が直線的に傾斜しているため、断面は一見扁平なV字状を呈する。約1m離れて東壁の上位と底面との境に丸木杭（径6～8cm）が打ち



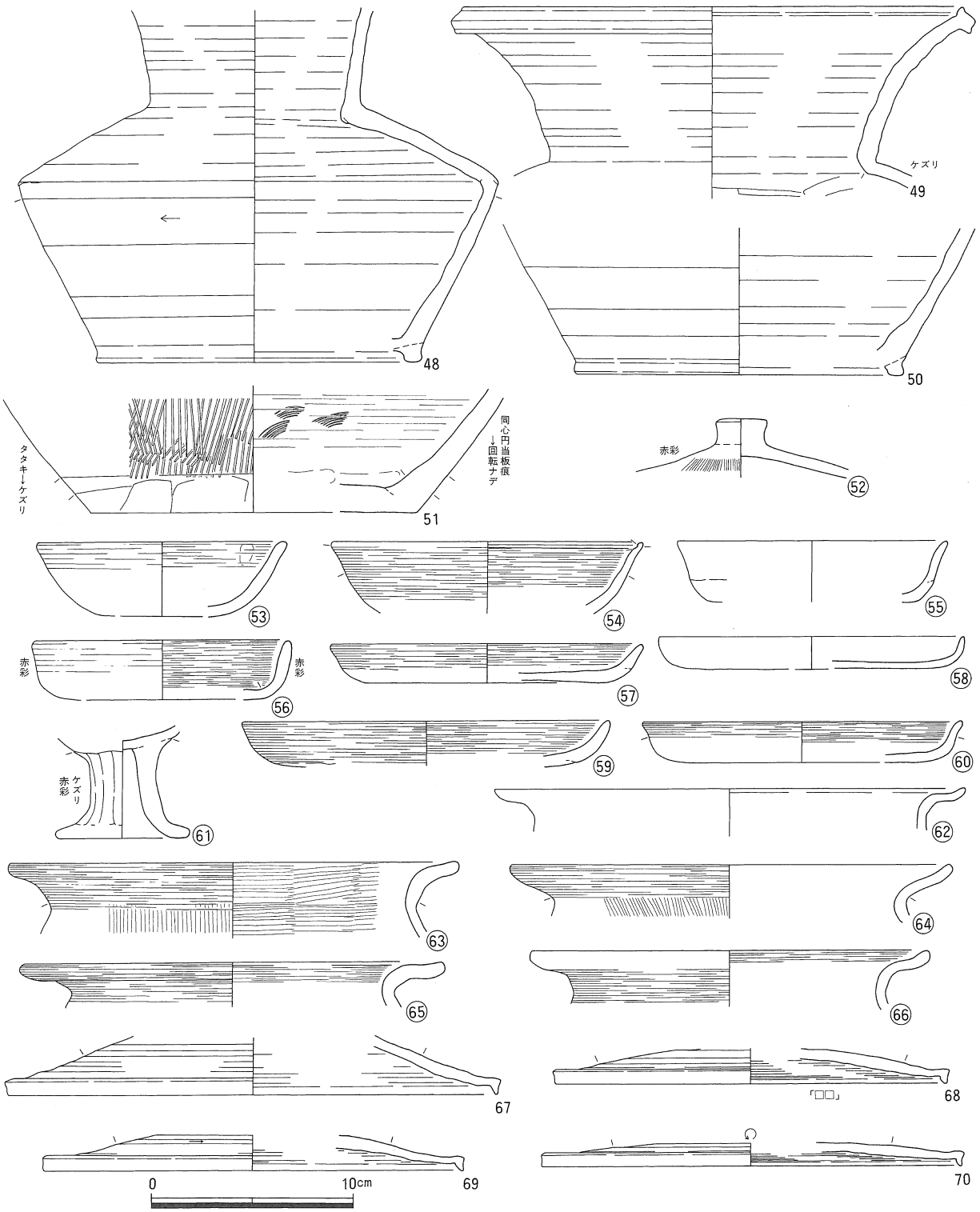
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	17.9		2.1	杯蓋A2	8	16.4		3.6	杯蓋A2	15	(13.9)			杯蓋A3	22				
2	(17.8)			杯蓋A3	9	15.9		3.9	杯蓋A3	16	(14.3)			杯蓋A1	23	(12.3)		(4.3)	有台杯身A3
3	17.3		4.6	杯蓋A3	10	16.0		3.2	杯蓋A2	17	(13.4)			杯蓋A3	24	(17.9)		(6.2)	有台杯身E
4	(16.4)			杯蓋A2	11	15.9		3.9	杯蓋A2	18	(15.9)		(4.1)	有台杯身B	25	(13.8)		(4.0)	無台杯身A2
5	(16.6)			杯蓋A1	12	15.4		4.0	杯蓋A3	19	13.8		3.7	有台杯身B	26	(16.3)		(4.4)	無台杯身A1
6	(16.5)			杯蓋A2	13	(15.0)			杯蓋A3	20	(13.8)		(4.1)	有台杯身A3	27	(13.8)		(3.9)	無台杯身A1
7	16.6		3.7	杯蓋A3	14				杯蓋A3	21				有台杯身D	28	(15.5)		(4.7)	無台杯身A1

第40図　ＮＳＤ13第２土器集中部出土土器実測図（１）



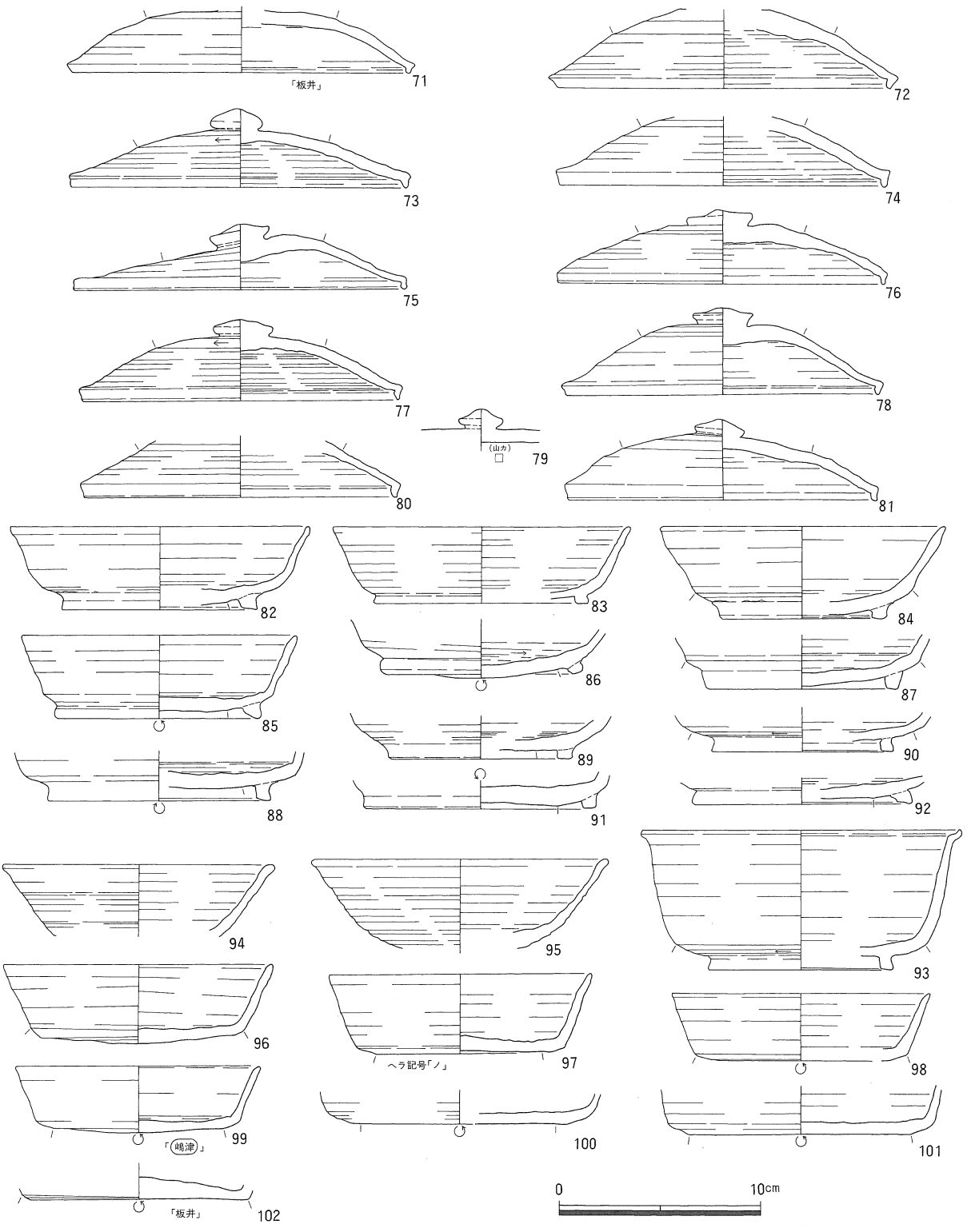
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
29	(13.1)		(3.9)	無台杯身D1	35				無台杯身D3	41				高盤B	45	2.4	5.3	8.1	水瓶
30	(13.0)		(3.7)	無台杯身D3	36	(19.1)			無台杯身D3	42	15.3			壺蓋A2	46				長頭壺A1
31	13.1		3.2	無台杯身D2	37	(16.8)			無台皿D2	43	10.6	14.0	(大)14.8	壺C2	47	9.7			
32	12.7		3.6	無台杯身D4	38	(20.5)			無台皿B2				(小)14.0						
33	12.7		3.6	無台杯身D3	39	19.2			無台皿B1	44	9.5	14.4	(大)14.6	壺D2					
34	(11.3)		(4.4)	無台杯身D1	40				高盤A				(小)14.4						

第41図　ＮＳＤ13第２土器集中部出土土器実測図（２）



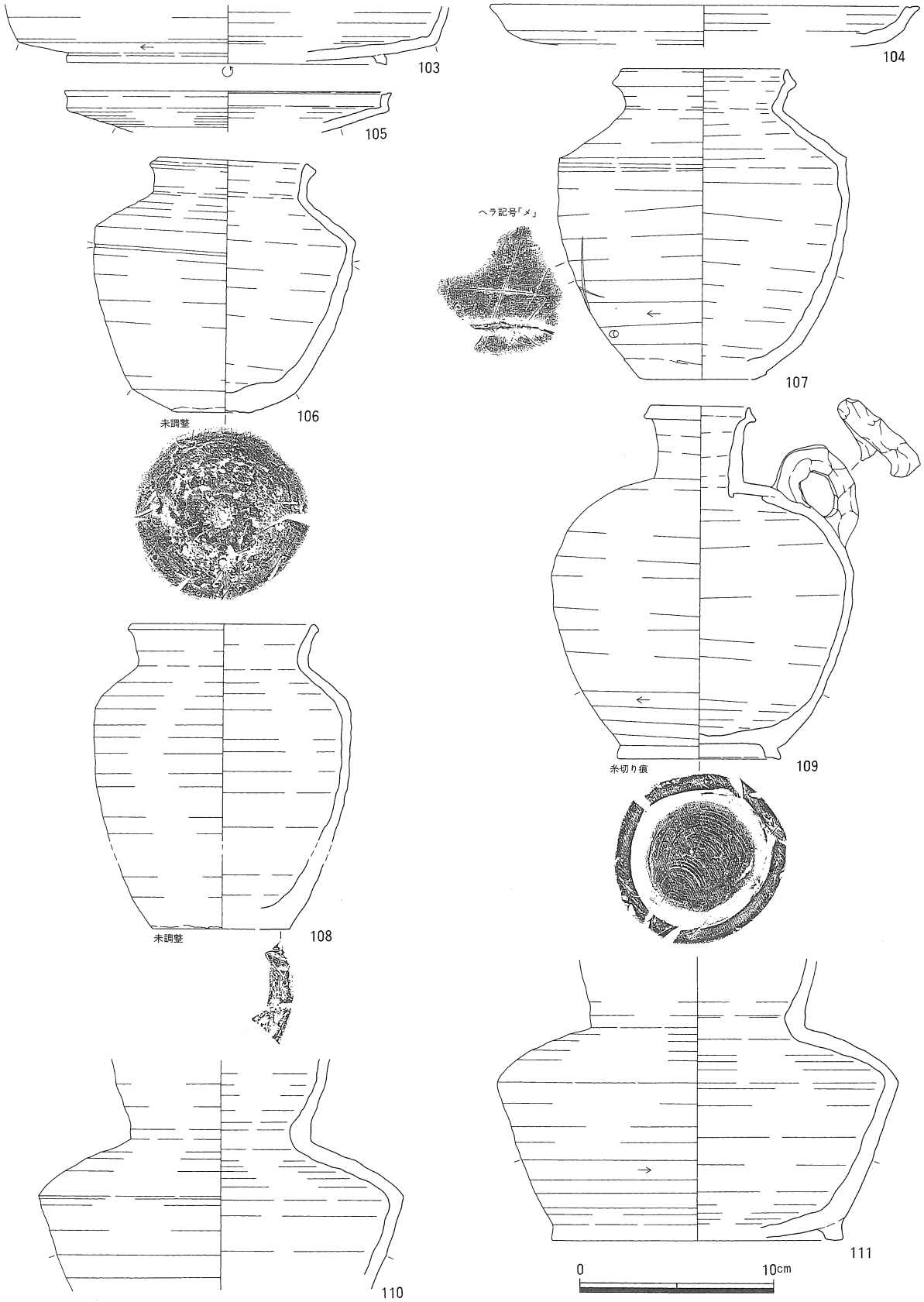
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
48		(23.6)		長頸壺B1	⑭	(15.3)			無台杯身G	⑩	(15.7)		(2.0)	無台皿B2	⑯	(19.7)			甕D3
49	(25.8)			甕B2	⑮	(13.3)		(3.0)	無台杯身C3	⑪				高盤B	67	(24.3)			杯蓋A2
50				長頸壺B1	⑯	(12.8)		(2.9)	無台杯身C2	⑫	(23.1)			甕D3	68	(19.5)			杯蓋A3
51				甕B2	⑰	(15.4)		(1.9)	無台皿B2	⑬	(22.1)			甕D3	69	(20.7)			杯蓋A2
⑫				皿蓋	⑱	(15.0)		(1.6)	無台皿B1	⑭	(21.7)			甕D3	70	(20.8)			杯蓋A3
⑬	(12.3)		(3.6)	無台杯身D	⑲	(18.1)		(2.3)	無台皿B1	⑮	(20.9)			甕D3					

第42図　ＮＳＤ13第２土器集中部・ＮＳＤ13出土土器実測図（３）



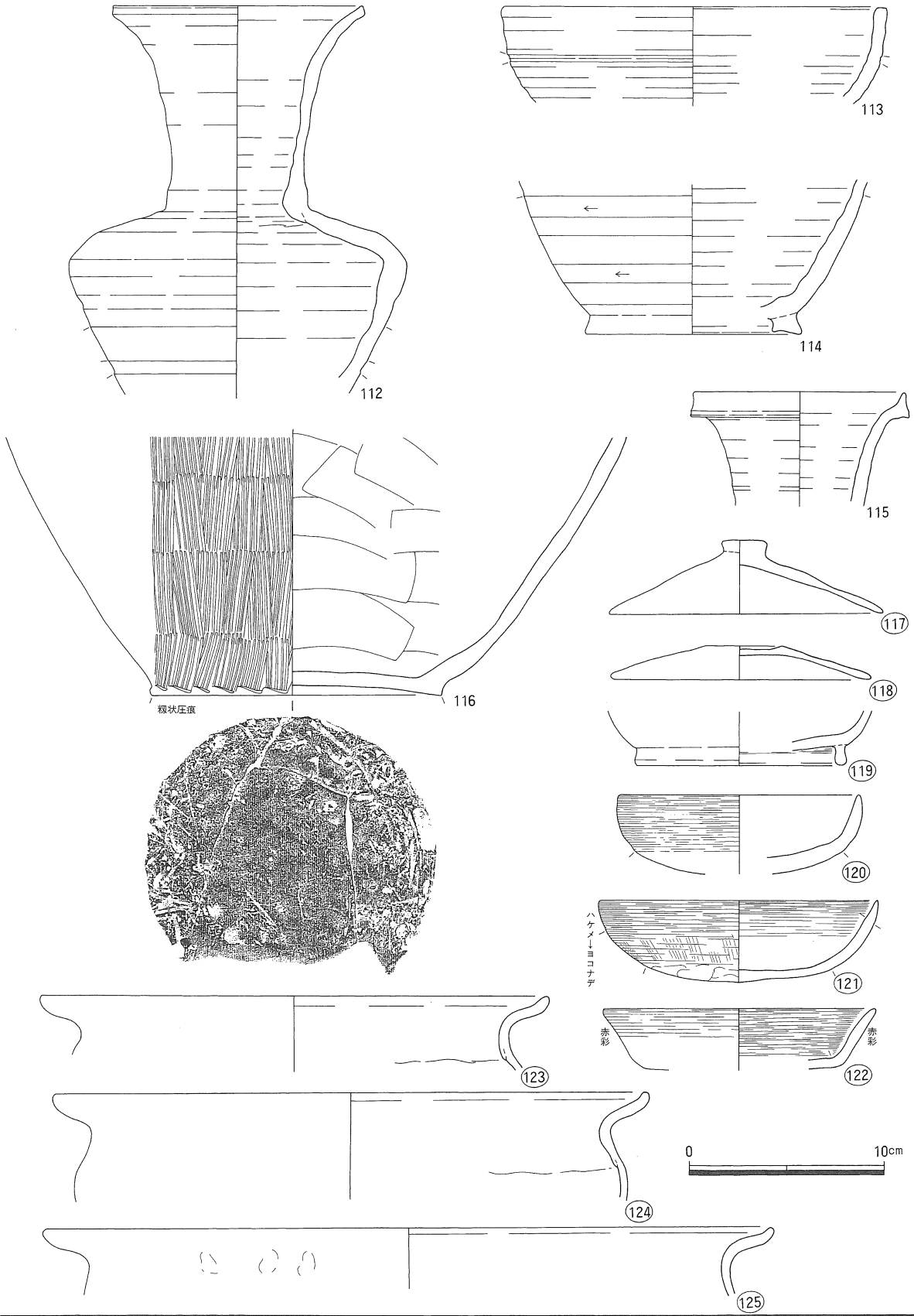
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
71	(17.3)			杯蓋A3	79				杯蓋A3	87				有台杯身B	95	(14.8)		(4.4)	無台杯身A1
72	(17.3)			杯蓋A3	80	(15.9)			杯蓋A3	88				有台杯身A3	96	13.4		3.9	無台杯身D1
73	17.0		3.9	杯蓋A1	81	15.6		4.0	杯蓋A2	89					97	13.1		3.9	無台杯身D3
74	(16.5)			杯蓋A2	82	(14.9)		(4.1)	有台杯身A3	90				有台杯身A1	98	(12.8)		(3.3)	無台杯身D3
75	16.6		3.3	杯蓋A3	83	(14.8)		(3.8)	有台杯身A3	91					99	12.2		3.3	無台杯身D1
76	16.4		3.7	杯蓋A2	84	(14.2)		(4.6)	有台杯身A1	92					100				無台杯身C
77	16.1		4.0	杯蓋A3	85	13.7		4.2	有台杯身B	93	(15.9)		(6.9)	有台杯身E	101				無台杯身D3
78	15.9		4.3	杯蓋A3	86				有台杯身A1	94	(13.6)			無台杯身B2	102				無台杯身D2

第43図　ＮＳＤ13出土土器実測図（４）



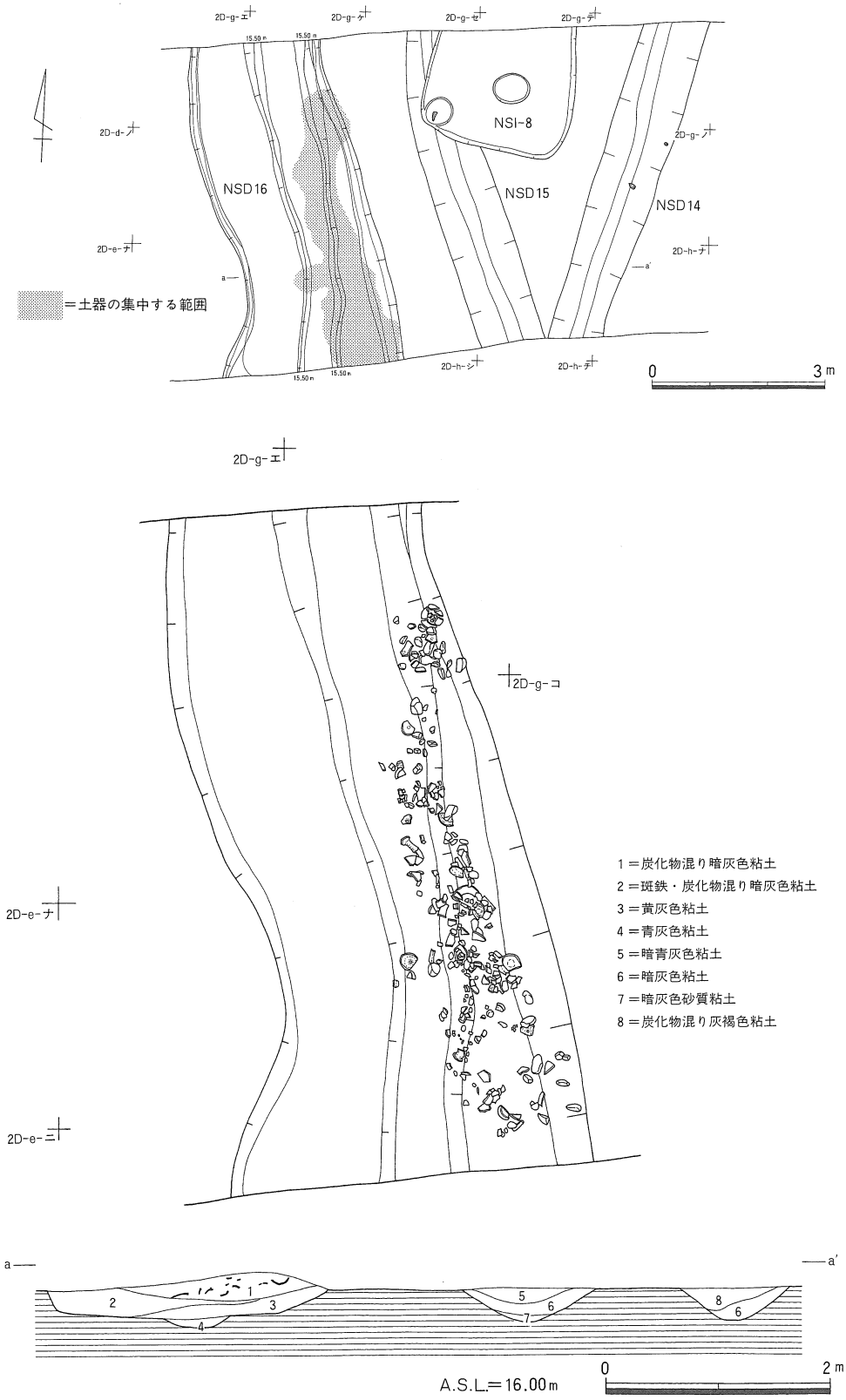
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
103				有台皿A3	106	8.6	13.4	(大)13.0	壺D1	110		(18.7)		長頸壺B2	108	(9.8)	(13.2)	(15.5)	壺C2
104	(22.0)			無台皿D1				(小)12.6		111		(20.6)		長頸壺B2	109	5.8	15.6	(大)18.0	瓶
105	(16.8)			無台皿B1	107	(9.5)	(13.0)	(15.8)	壺D2									(小)17.9	

第44図　ＮＳＤ13出土土器実測図（５）

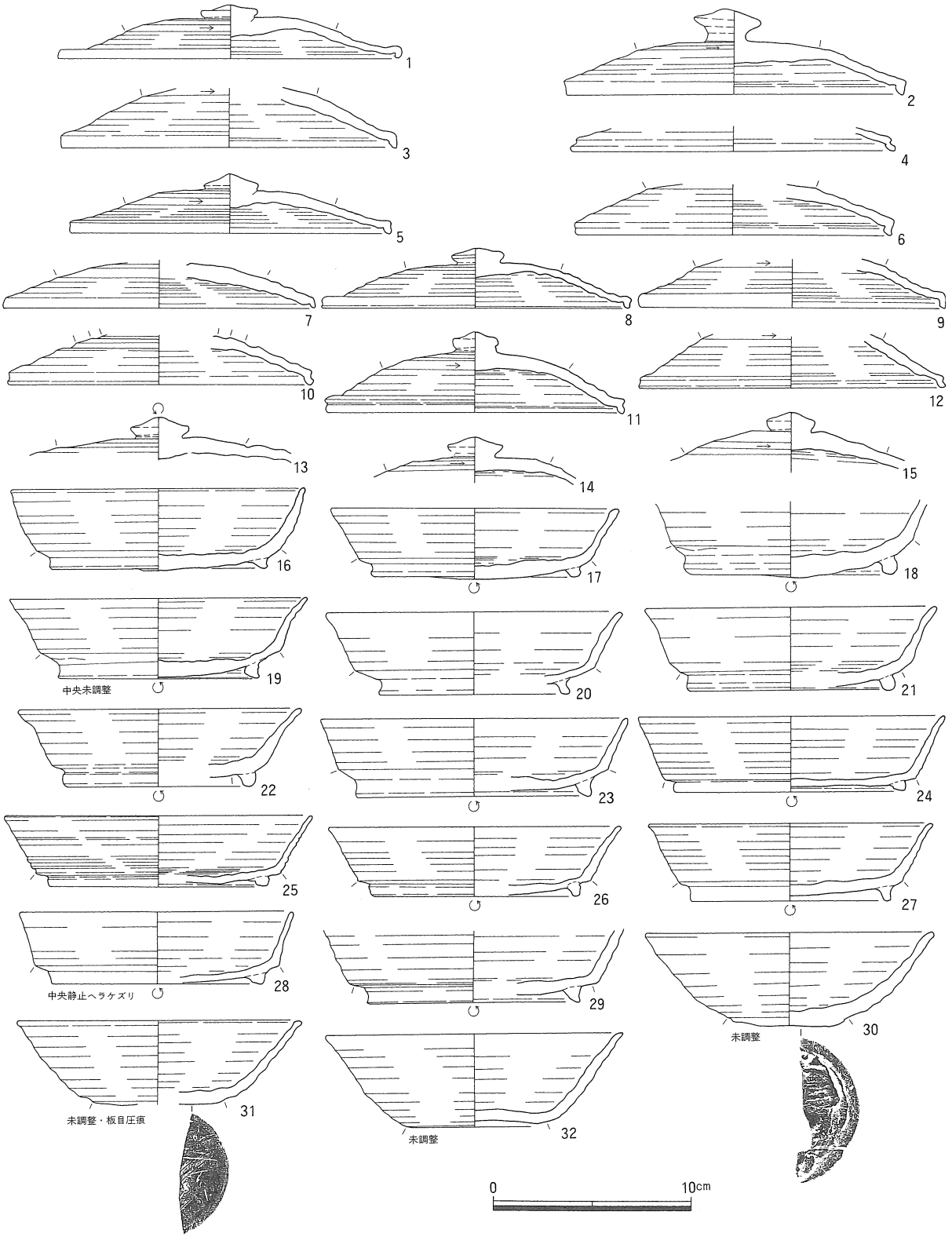


番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
112	(13.0)	(17.4)		長頸壺B2	116				甕B2	⑳	(12.4)	(12.6)	(4.0)	無台杯身A	㉔	(30.7)			鍋B2
113	(19.8)			鉢B	⑰	14.1		3.8	杯蓋A1	㉑	14.4		4.2	無台杯身A	㉕	(37.6)			鍋B2
114				長頸壺B2	⑱	13.4			杯蓋A1	㉒	(14.0)		(3.1)	無台杯身E					
115	(11.2)				⑲				有台杯身A1	㉓	(26.2)			甕D3					

第45図　ＮＳＤ13出土土器実測図（６）

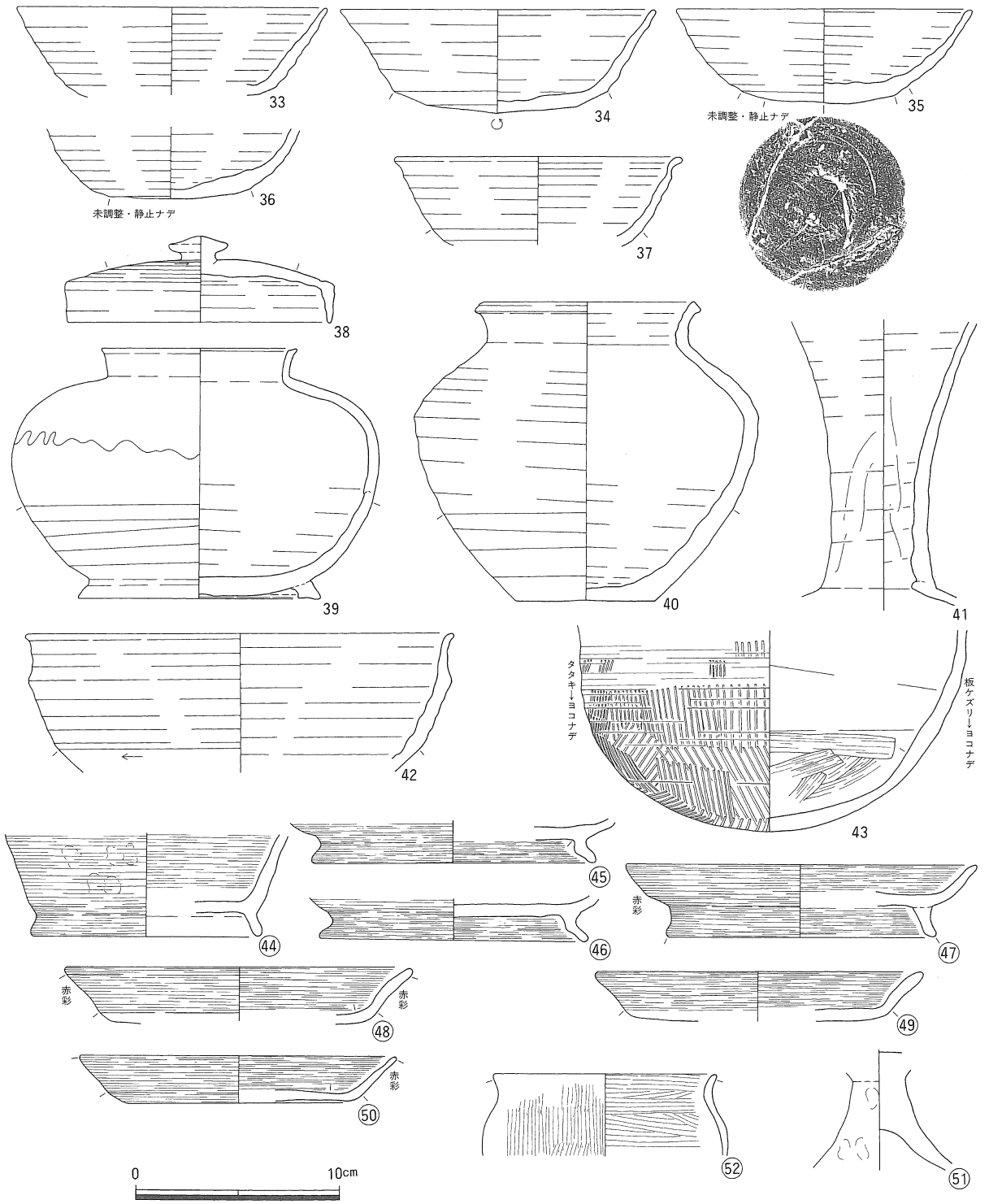


第46図　２Ｄ－ｇ・ｈ区奈良時代遺構分布図・ＮＳＤ16遺物出土状態



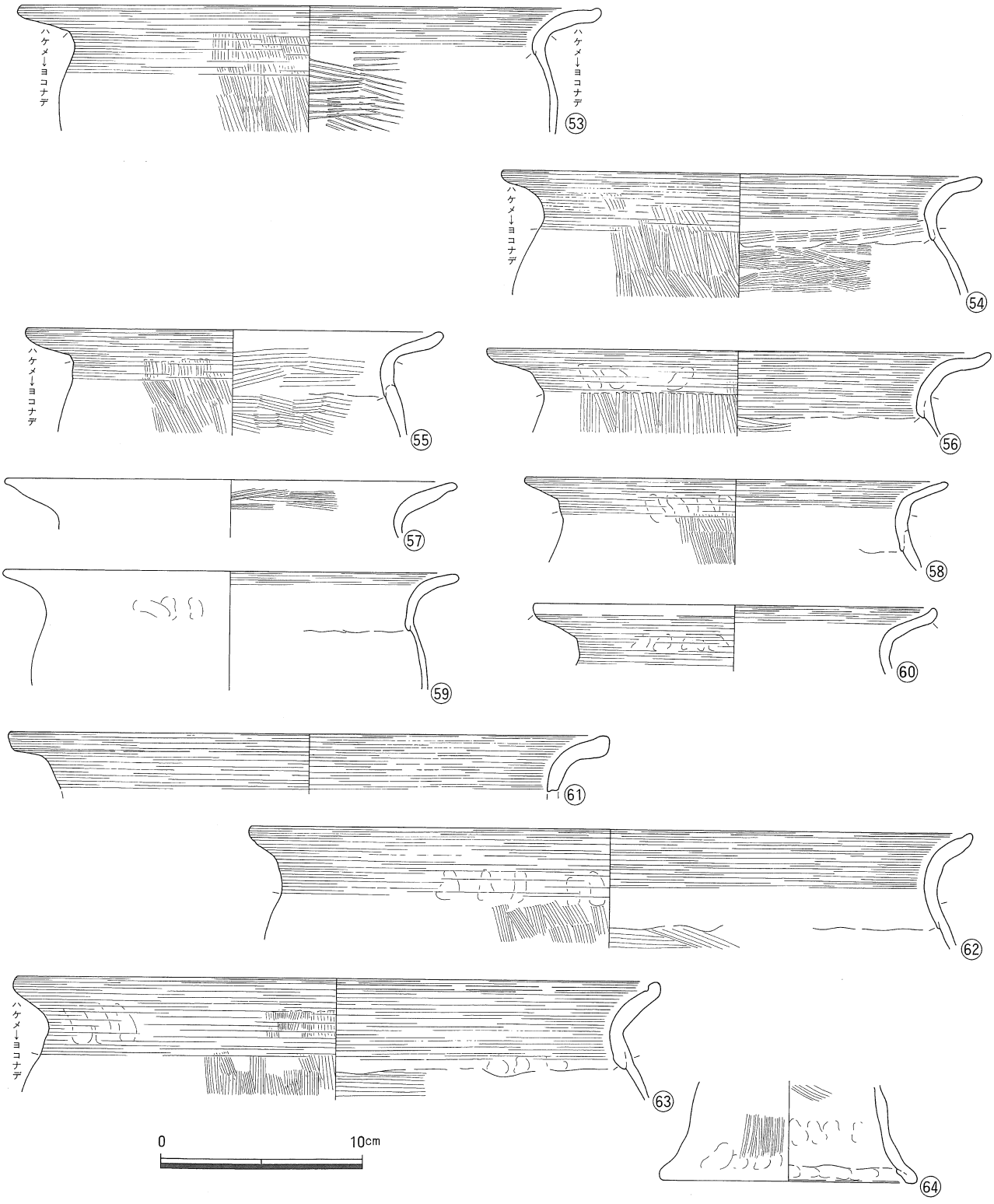
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	17.4		2.7	杯蓋A3	9	(15.5)			杯蓋A3	17	14.6		3.6	有台杯身A3	25	(15.5)		(3.6)	有台杯身C1
2	17.2		4.3	杯蓋A3	10	(15.4)			杯蓋A2	18				有台杯身A3	26	(14.8)		(3.5)	有台杯身C1
3	(17.0)			杯蓋A2	11	15.1		4.0	杯蓋A2	19	15.1		4.0	有台杯身A3	27	14.4		3.9	有台杯身A3
4	(16.4)			杯蓋A2	12	(15.5)			杯蓋A2	20	(15.0)		(4.2)	有台杯身B	28	(13.8)		(3.6)	有台杯身B
5	16.3		3.0	杯蓋A2	13				杯蓋A2	21	(14.7)		(4.2)	有台杯身A3	29				有台杯身C1
6	(16.1)			杯蓋A3	14				杯蓋A2	22	(14.3)		(3.9)	有台杯身A3	30	14.6		4.8	無台杯身A1
7	(15.8)			杯蓋A2	15				杯蓋A2	23	(15.5)		(3.9)	有台杯身B	31	(14.4)		(4.2)	無台杯身A1
8	15.6		3.0	杯蓋A2	16	14.9		4.1	有台杯身A2	24	15.5		3.8	有台杯身C1	32	15.1		4.7	無台杯身B1

第47図　ＮＳＤ16出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
33	(15.2)			無台杯身A1	38	12.9	13.2	4.2	壺蓋A1	43				壺C1	㊽	(17.0)			無台皿A
34	15.4		5.1	無台杯身B1	39	9.5	17.9	12.1	壺A	㊹				有台杯身A2	㊾	(16.0)			無台皿A
35	14.4		4.6	無台杯身A1	40	11.1	16.8	14.5	壺C1	㊺				有台皿B2	㊿	(15.5)		(2.3)	無台皿A
36				無台杯身A1	41				長頸壺A1	㊻				有台皿B2	(51)				
37	(14.1)			無台杯身B2	42	(20.9)			鉢B	㊼	(17.1)		(3.5)	有台皿A1	(52)	(10.9)	(12.1)		甕B

第48図　ＮＳＤ16出土土器実測図（２）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
㊸	(28.8)			甕D3	㊻	(24.9)			甕D3	㊾	(22.5)			甕D3	㊷	(35.8)			鍋B1
㊹	(23.7)			甕D3	㊼	(22.3)			甕C	㊿	(19.9)			甕D3	㊸	(32.1)			鍋B1
㊺	(20.6)			甕C	㊽	(20.9)			甕D3	(61)	(29.7)			鍋A	㊹				台

第49図　ＮＳＤ16出土土器実測図（３）



第50図　３Ｃ－ｅ・ｇ・ｈ　３Ｄ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ　２Ｅ－ｃ　３Ｅ－ａ・ｂ区奈良時代遺構分布図

込まれていた。覆土（暗灰色粘土・灰褐色粘土）は炭化物の多少（上層多）により上下２層に区分できる。下層中にはこぶし大礫がめだつ。

出土土器はきわめて少量・細片であったが、杯身、皿類は当溝が奈良時代に属することを示している。

ＮＳＤ15

ＮＳＤ14・16に挟まれ２Ｄ－ｇ・ｈ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＩ８を切断している。確認長約5.50m、幅1.05～1.15m、深さ0.25～0.35mを測る。底面の海抜高（15.50m前後）は一定しており流れの方向は推定できない。北北西～南南東へのびる小溝である。北端はわずかに東方へ曲がり始めている。底面に丸味を持ち、ＮＳＤ14と類似した断面形（扁平なＶ字状）をなす。３層に区分される覆土中に、炭化物・礫は顕著でなかった。形成時期は明らかでない。

ＮＳＤ16

２Ｄ－ｇ・ｈ区のⅢ層上面（１面）で、溝内に集積する多量の土器片を検出した。ＮＳＤ15に西接し、ほぼ平行して北北西～南南東へ伸びている。確認長約6.00m、幅2.25～3.25m、深さ0.30～0.35mを測る。

西壁の一部が内方へ張り出し蛇行しているようにも見える。幅の広い底面（海抜高14.45m前後）の東壁寄りに一段深い流路を有していた。後述するＮＳＤ17（底面海抜高15.80～1.95m）と覆土・断面形・出土土器型式（器種組成）等が類似し、両溝が接続（同一）している可能性は大きい。北北西へ向い流れていたと思われる。

多量の土器片が東壁に沿って帯状に（長さ５m）集積していた。土器群は４層に区分される覆土の最上層（炭化物混り暗灰色粘土）に含まれ（底面から約20～25㎝浮いている）、確認できた溝両岸の堀り込み面より上位に位置していた。径５～15㎝の大小自然礫が混在し土製支脚を含んでいた。隣接する破片を接合すると完形となる器種も比較的多い。

器形を復元しえた土器は63点を数え、須恵器（食器類主）が約70％を占める。須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ３、無台杯身Ａ１、土師器甕Ｄ３を主体とし、須恵器杯蓋Ａ３、有台杯身Ｂ・Ｃ１、土師器無台皿Ａを伴出している（他に須恵器有台杯身Ａ２、無台杯身Ｂ１・Ｂ２、鉢Ｂ、壷蓋Ａ１、壷Ａ・Ｃ１、長頸壷Ａ１、土師器有台杯身Ａ２、有台皿Ａ１・Ｂ２、甕Ｂ・Ｃ、鍋Ａ・Ｂ１、台がある）。

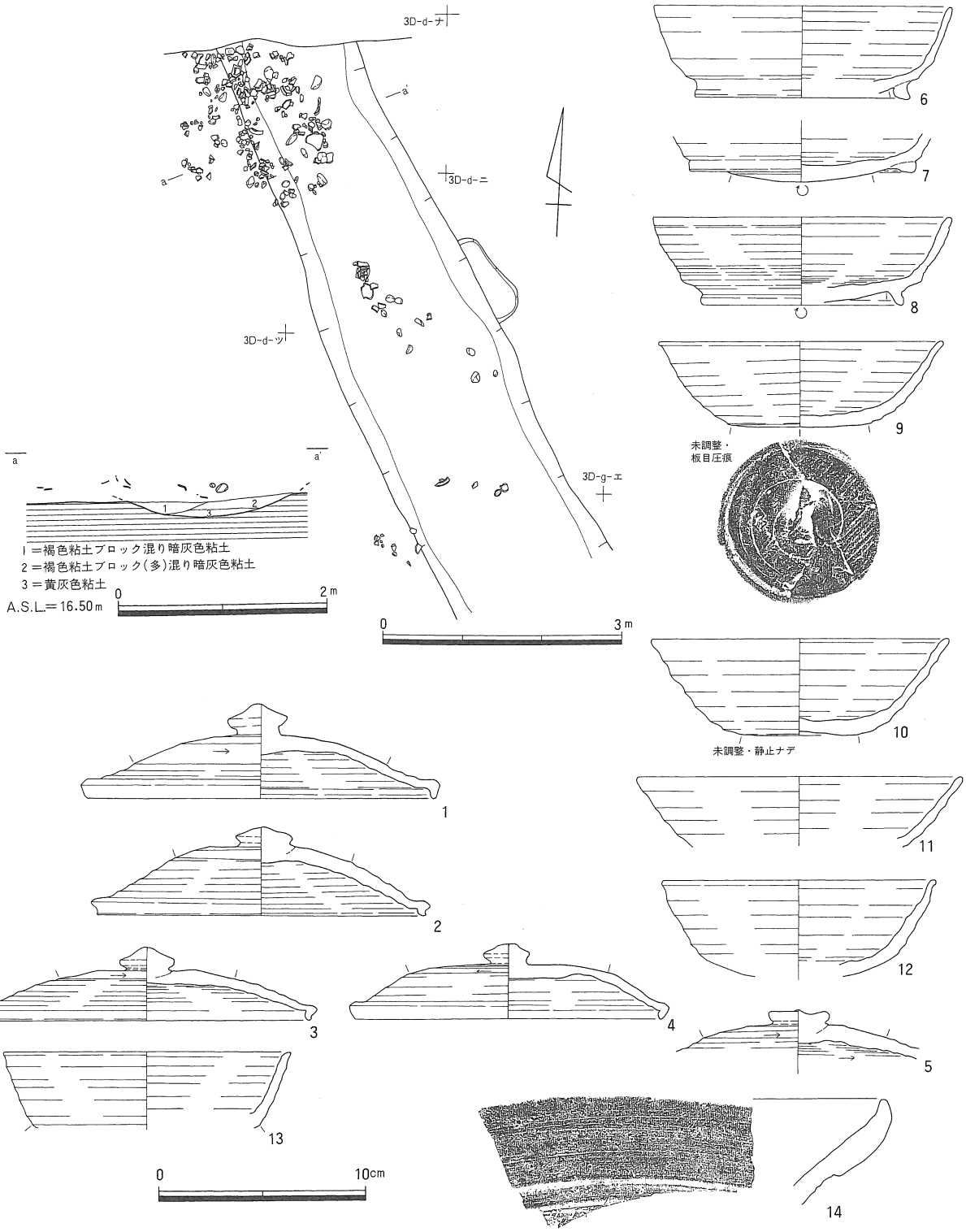
奈良時代前葉～中葉にかけて存続し、後葉にはすでに埋没していたと考えられる。

ＮＳＤ17

３Ｄ－ｄ・ｇ・ｈ区のⅢ層上面（１画）で確認できた。確認長約12.50m、幅1.65～2.35m、深さ0.15～0.30mを測り、南南東から北北西へ向い（底面海抜高15.80～15.95m）、わずかに蛇行しつつ伸びている。ＮＳＢ18、ＮＳＡ２、ＮＳＨ６に切断されていた。

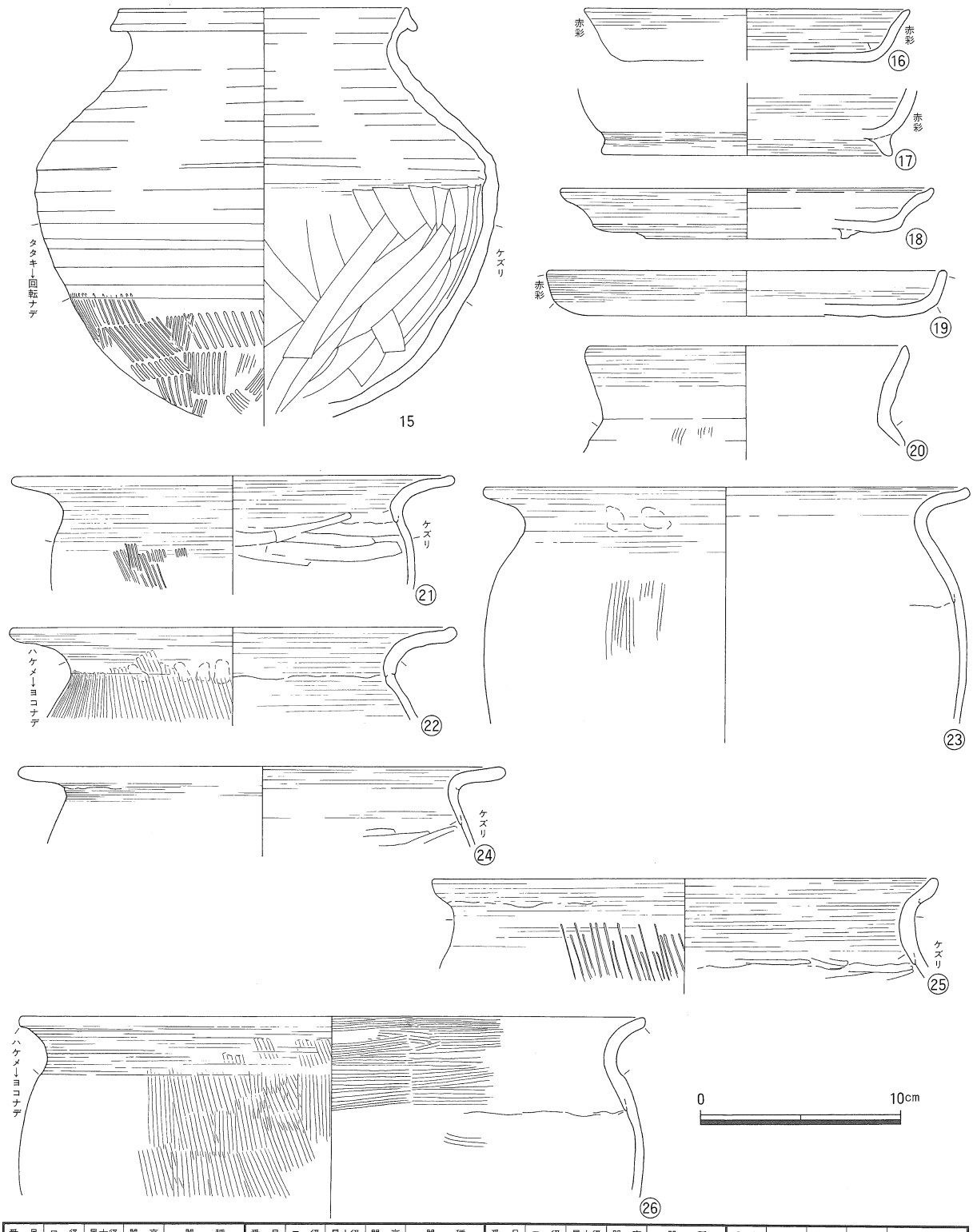
北方へ進むにしたがって徐々に幅を減じ、断面形は基本的に浅いＵ字状をなす。底面には凹凸がめだち一段深い流路を有するところもある。土器片と礫（径６～22㎝）の集中部（1.95×5.20×0.15m）東側の壁は一部外側へ張り出していた。土器集中部は西壁を覆うようにして分布し、溝底面から20～30㎝浮いていた。完形に復元できた器種はなし土器を細片化した後、溝内に投棄した跡と考えている。

土器集中部には多様な器種がほぼ均一に含まれていたが（須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、有台杯身Ａ１・Ｂ、無台杯身Ａ１・Ｂ１・Ｄ３、壺Ｃ１、土師器有台身Ａ１、有台皿Ａ２、無台皿Ａ・Ｂ１、壺Ａ、甕Ｃ・Ｄ３、鍋Ｂ１）、杯類は比較的編年時期の遡る器種が主体をなす。転用硯・銙帯具（巡方）を含んでいた。覆土（３層に区分可能）最下層（黄灰色粘土）から鉄鏃が出土している。主に奈良時代



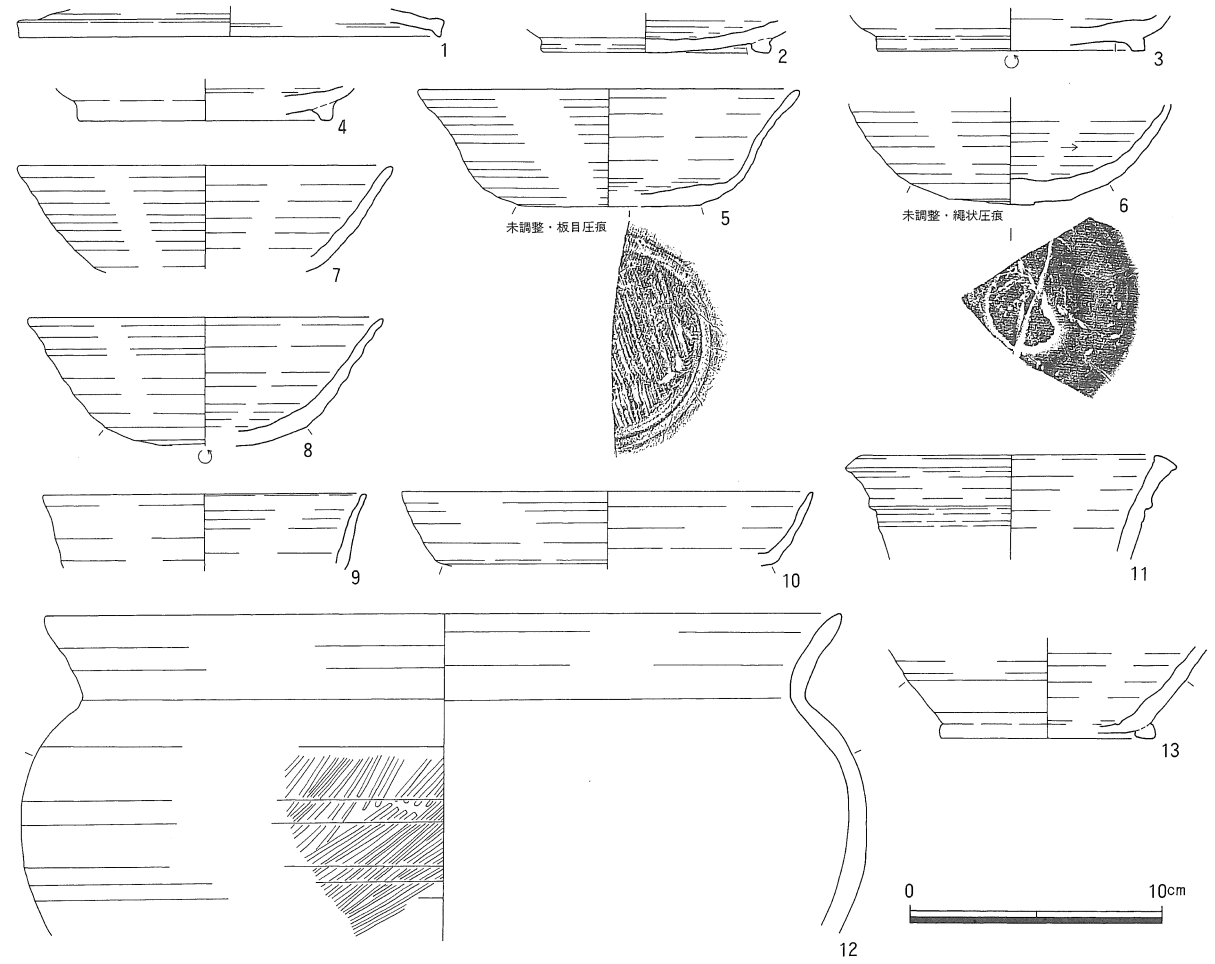
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	17.3		4.5	杯蓋A2	5				杯蓋A3	9	13.7		4.1	無台杯身A1	13	(13.9)			無台杯身D3
2	16.3		4.3	杯蓋A3	6	(14.4)		(4.4)	有台杯身A1	10	14.4		4.6	無台杯身B1	14				
3	16.3		3.5	杯蓋A3	7					11	(15.7)								
4	15.4		3.6	杯蓋A3	8	(14.4)		(4.2)	有台杯身B	12	(13.2)			無台杯身A1					

第51図　ＮＳＤ17土器集中部実測図・出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
15	(15.2)	(23.1)	(20.5)	壺C1	⑱	(18.5)		(2.5)	有台皿A2	㉑	(22.0)			甕D3	㉔	(24.2)			壺C
⑯	(16.2)		(2.6)	無台皿A	⑲	(19.9)		(2.3)	無台皿B1	㉒	(22.2)			甕D3	㉕	(25.1)			鍋B1
⑰				有台杯身A1	⑳	(16.2)			壺A	㉓	(24.1)			甕D3	㉖	(31.2)			鍋B1

第52図　ＮＳＤ17土器集中部出土土器実測図（２）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.9)			杯蓋A1	5	(15.2)		(4.6)	無台杯身B1	9	(12.8)			無台杯身D1	13				長頸壺A1
2					6				無台杯身A1	10	(16.3)			無台皿A2					
3				有台杯身C2	7	(14.9)			無台杯身A1	11	(13.1)			甕B1					
4					8	(14.1)		(5.1)	無台杯身B1	12	(31.6)	(33.6)		甕C					

第53図　ＮＳＤ19出土土器実測図

前葉～中葉に機能していた溝と思われる。下層覆土はＮＳＤ17と類似し両溝が接続している可能性が高い。

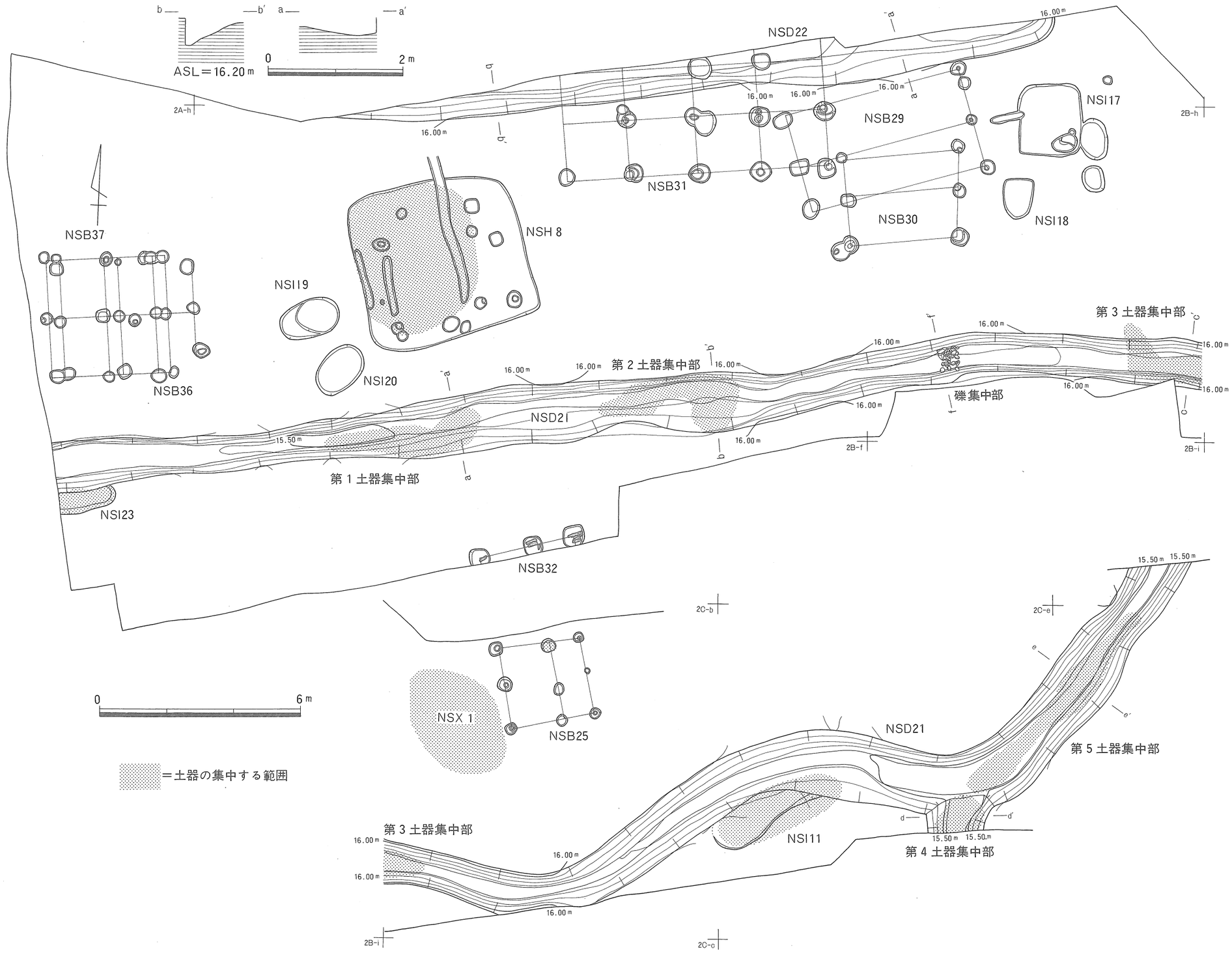
ＮＳＤ18

Ⅲ層を約15㎝掘り下げたところで（２面）すべての輪郭を確認した。３Ｄ－ｂ区～３Ｄ－ｄ区にかけてわずかに曲がりながら伸びる小溝で、東端は浅くなり途切れている。確認長約9.50m、幅0.20～0.40m、深さ0.10～0.15mを測り断面Ｕ字状を呈する。底面の海抜高（15.80～15.85m）は東半が高い。ＮＳＢ22の柱穴を切断しＮＳＤ19、ＮＳＢ20と重複していたが、その前後関係は明確でなかった。

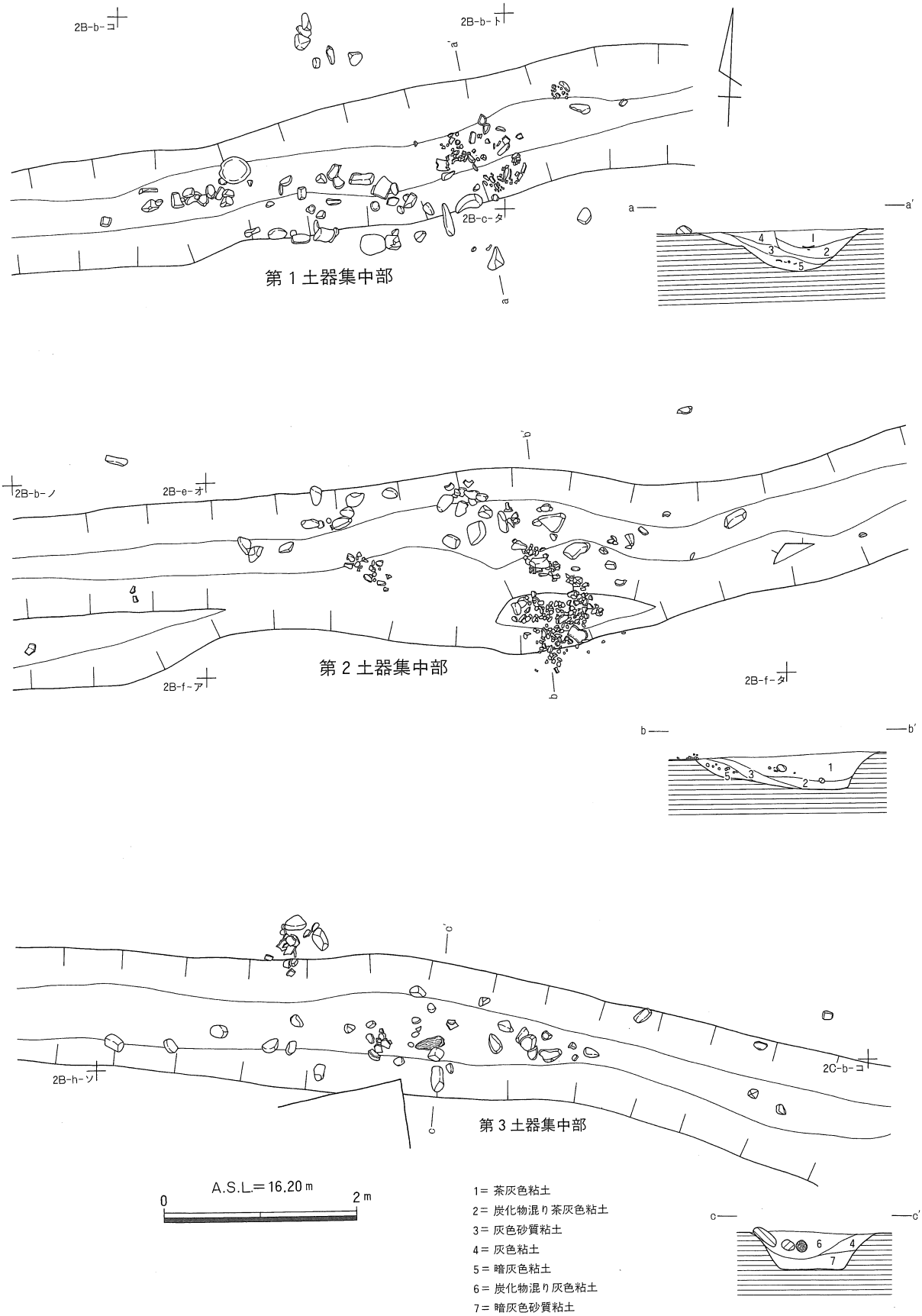
土師器細片が数点出土している。奈良時代の溝と判断した。

ＮＳＤ19

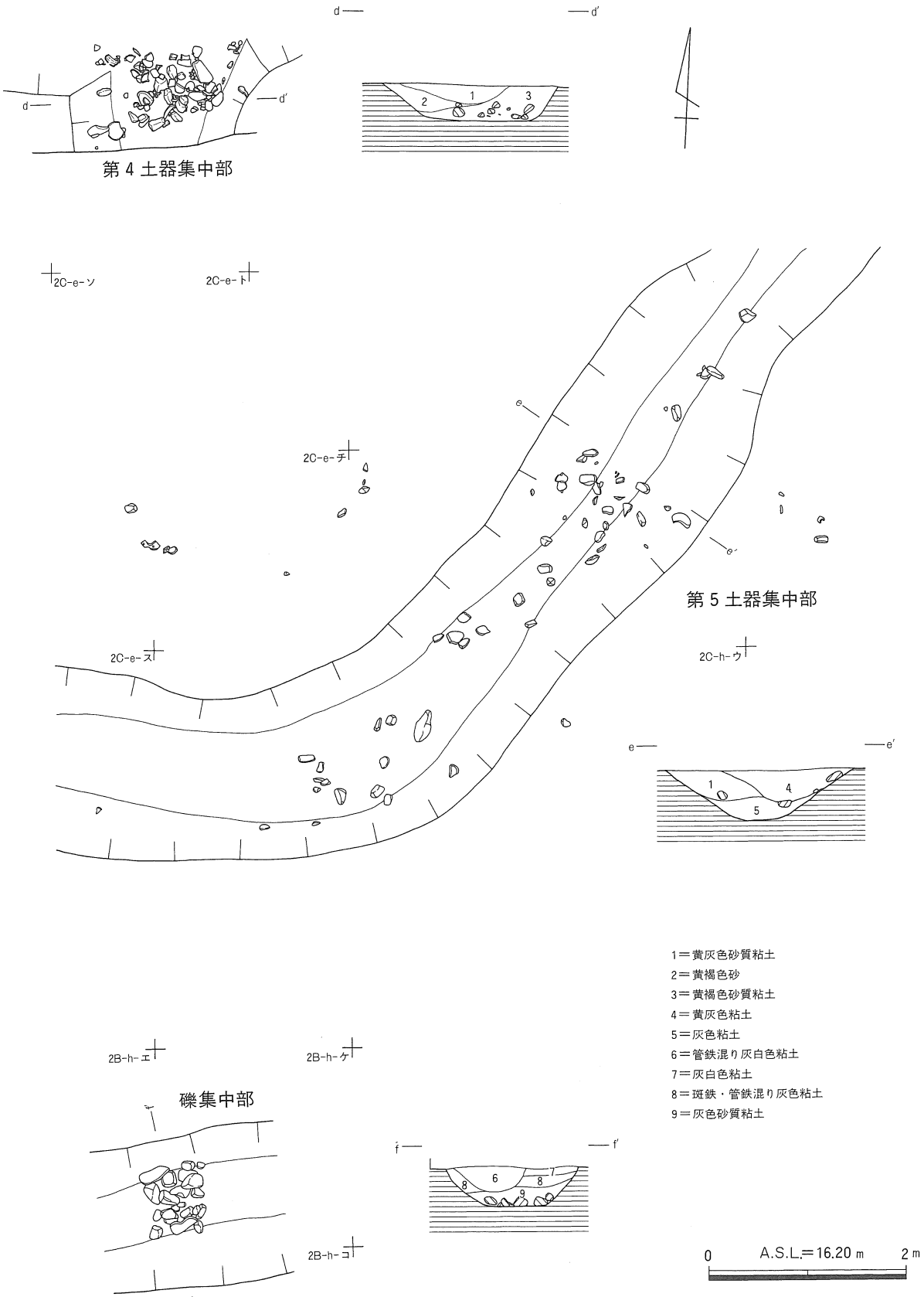
ＮＳＤ18と同一面（２面）で確認できた。西側を一部調査していないが、ＮＳＢ21・22を方形に取り囲む小溝である（３Ｄ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ区）。南東隅で二俣に分かれ、北端は途切れていた。確認長約20.50m、幅0.40～0.80m、深さ0.10～0.20mを測り、底面の海抜高は15.80m前後で一定してい



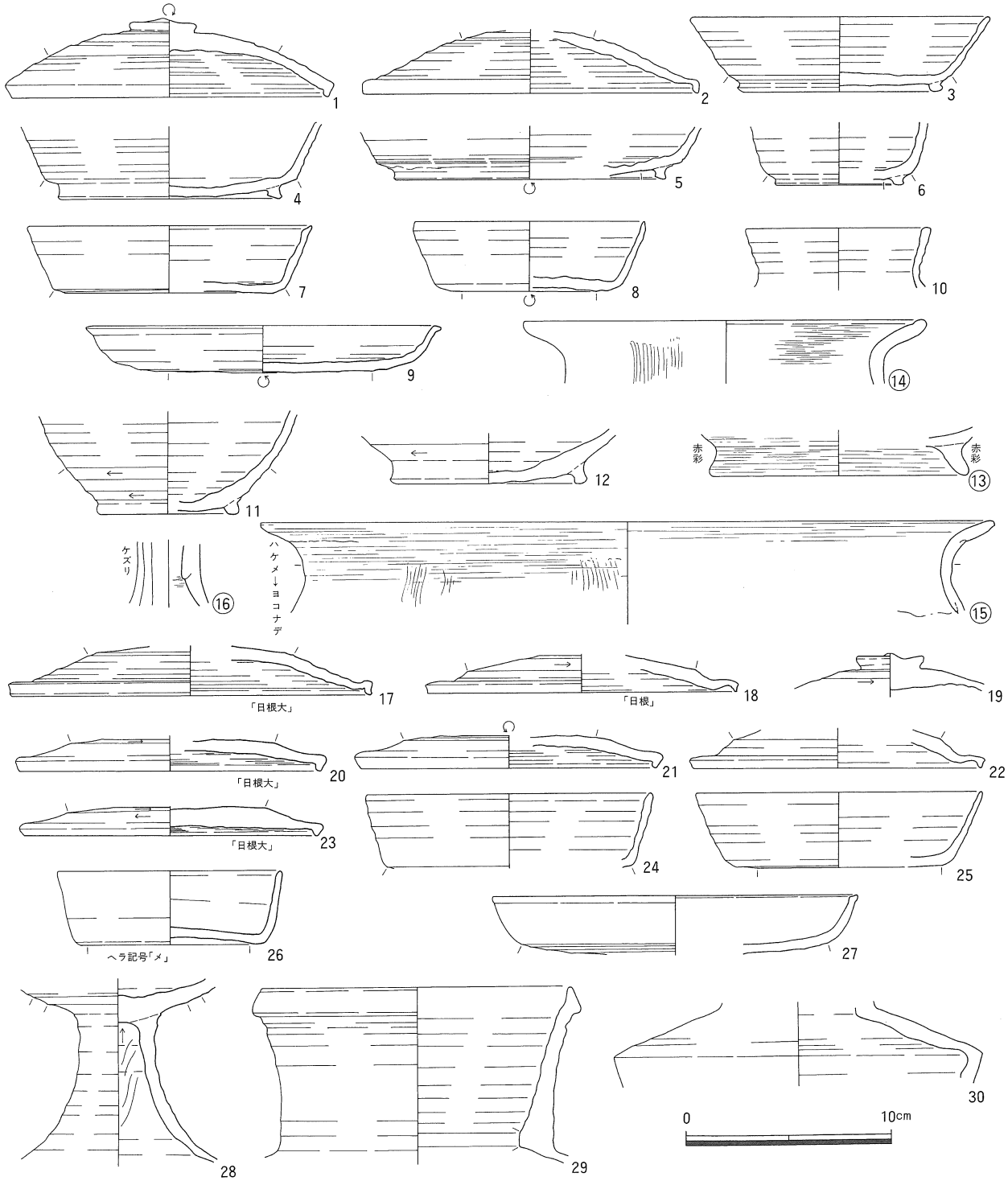
第54図　２Ａ－ｇ・ｈ・ｉ　２Ｂ　２Ｃ－ａ・ｂ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ区奈良時代遺構分布図



第55図　ＮＳＤ21第１・２・３土器集中部実測図

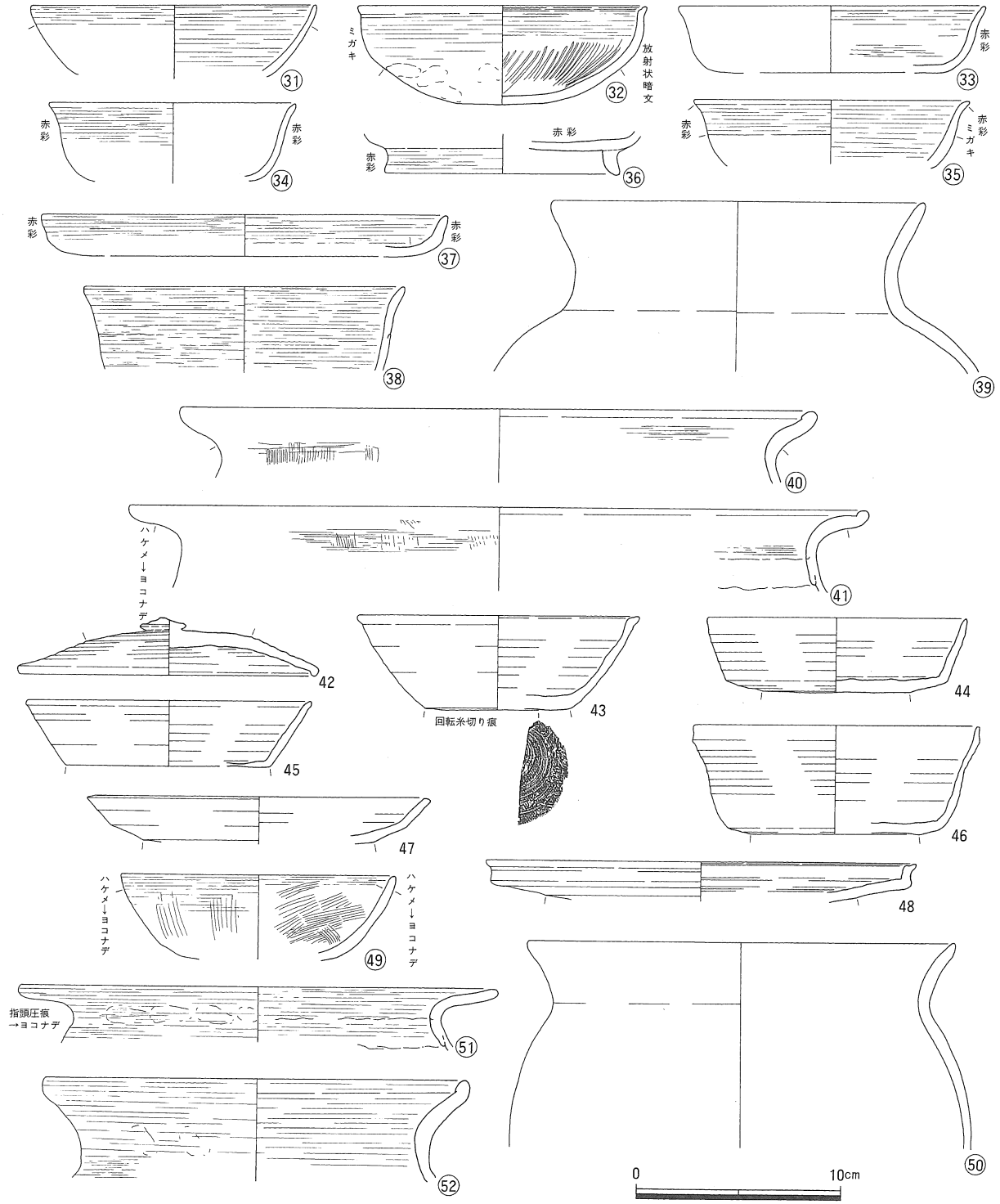


第56図　ＮＳＤ21第４・５土器集中部・礫集中部実測図



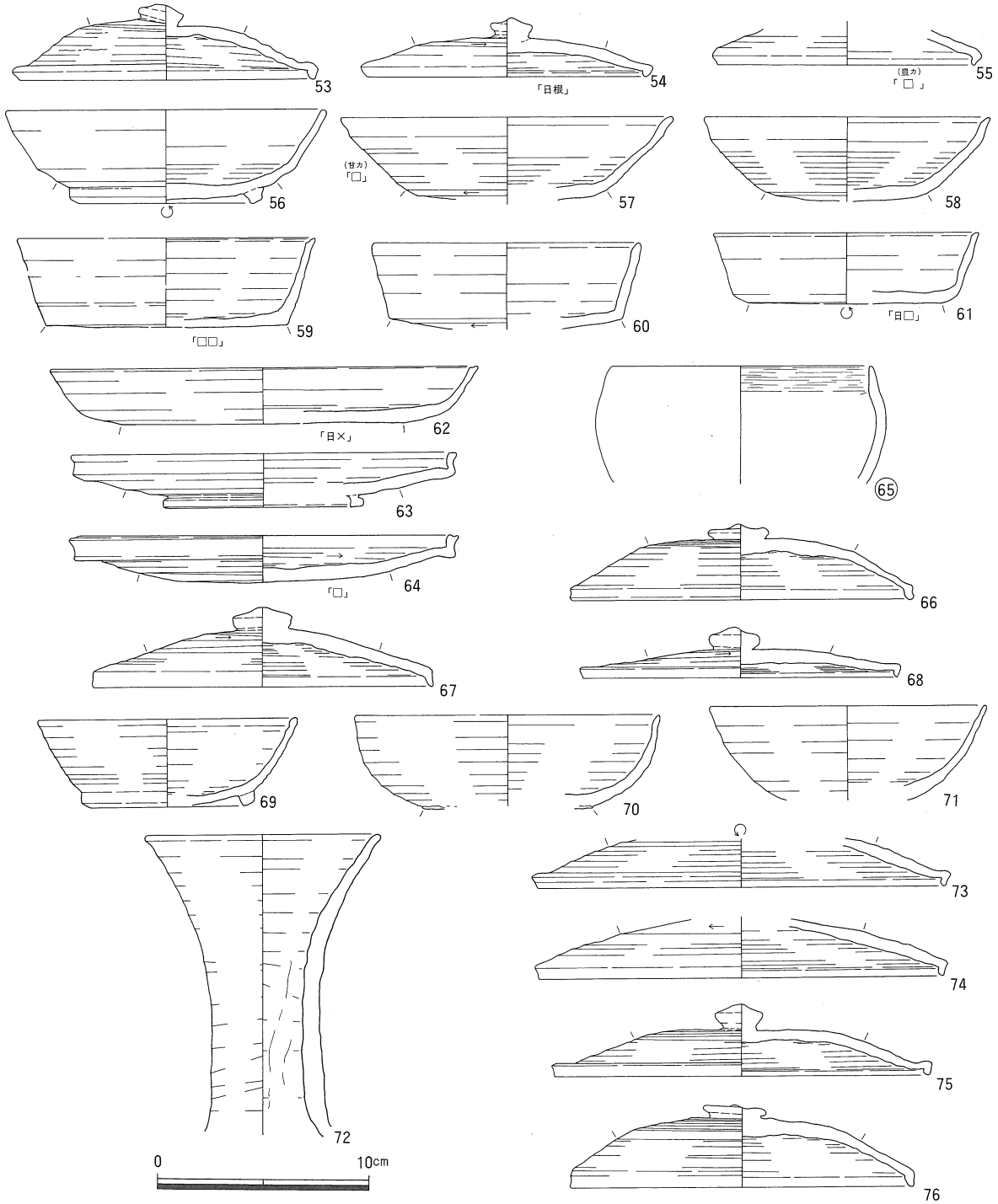
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	15.9		3.8	杯蓋A2	9	17.2		2.3	無台皿D1	17	(17.6)			杯蓋A3	25	(13.9)		(3.6)	無台杯身D4
2	(16.3)			杯蓋A3	10	(9.0)				18	(15.2)			杯蓋A2	26	(10.9)		(3.6)	無台杯身D4
3	14.5		3.7	有台杯身C1	11				長頸壺A	19				杯蓋A2	27	(17.7)		(2.8)	無台皿D2
4				有台杯身C3	12				長頸壺A	20	(15.1)			杯蓋A3	28				高盤A
5				有台皿A1	⑬				有台皿A1	21	(14.9)			杯蓋A3	29	(15.9)			壺B1
6				小型杯身A1	⑭	(19.5)			壺D1	22	(14.3)			杯蓋A2	30		(17.8)		長頸壺B1
7	(13.7)		(3.2)	無台杯身D3	⑮	(35.5)			鍋B1	23	(14.7)			杯蓋A2					
8	(11.3)		(3.4)	無台杯身D4	⑯				高盤B	24	(14.0)			無台杯身D2					

第57図　ＮＳＤ21第１・２土器集中部出土土器実測図（１）



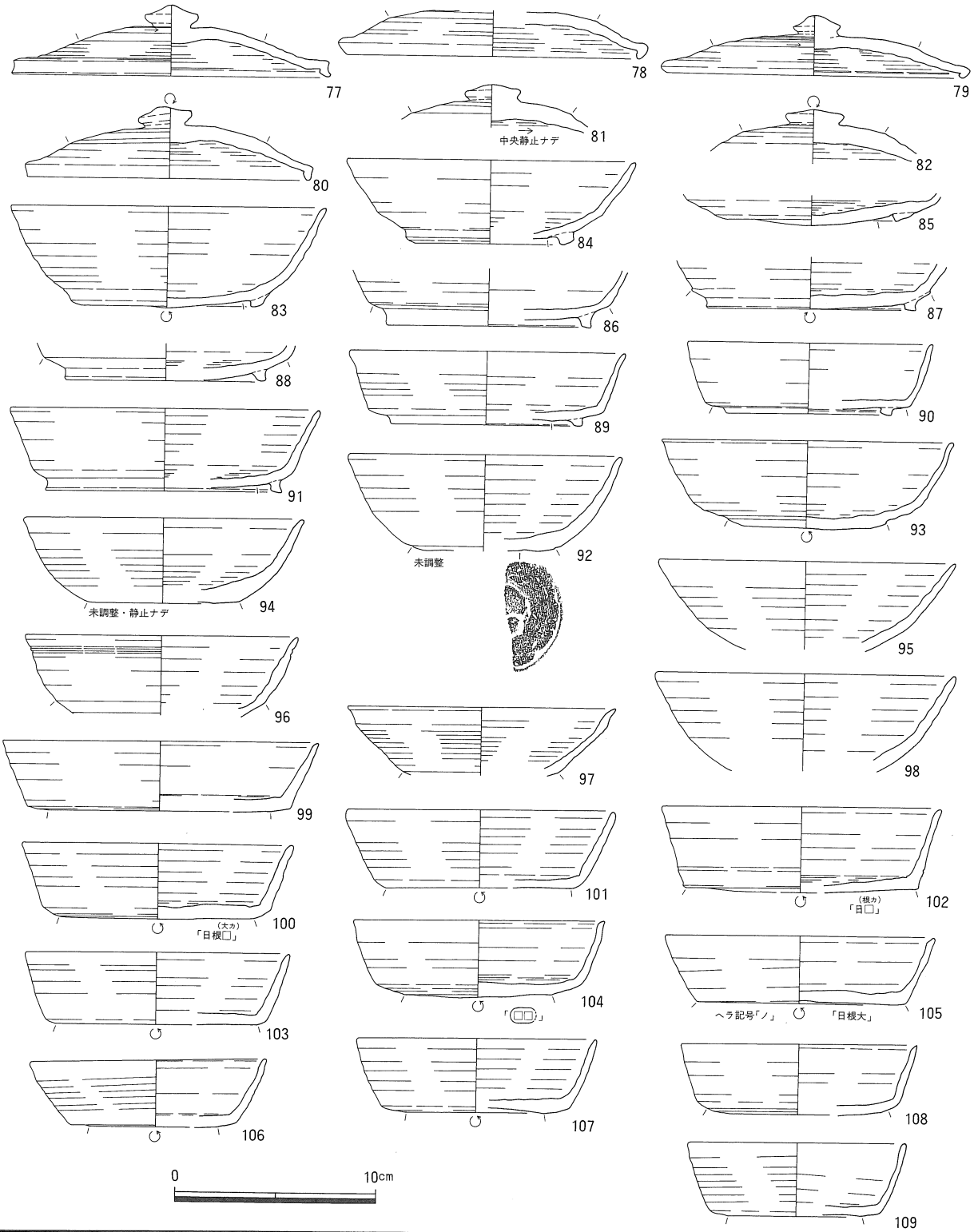
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
㉛	(13.9)			無台杯身D	㊲	(19.7)		(2.0)	無台皿B2	43	(13.7)		(4.5)	無台杯身A2	㊾	(13.4)		(4.1)	無台杯身B1
㉜	14.1		4.7	無台杯身A	㊳	(15.6)			有台杯身B	44	12.6		3.6	無台杯身D4	㊿	(20.8)	(22.4)		壺A
㉝	(14.9)		(3.1)	無台杯身C3	㊴	(18.2)			壺A	45	(13.9)		(3.2)	無台杯身D2	(51)	(23.3)			甕C
㉞	(12.0)		(3.8)	無台杯身C3	㊵	(31.0)			鍋B2	46	(13.9)	(14.0)	(5.2)	無台杯身D4	(52)	(20.8)			甕D1
㉟	(13.4)			無台杯身C3	㊶	(36.0)			鍋B2	47	(16.7)			無台皿D2					
㊱				有台皿A1	42	14.6		2.8	杯蓋A2	48	(20.9)			無台皿B1					

第58図　ＮＳＤ21第２・３土器集中部出土土器実測図（２）



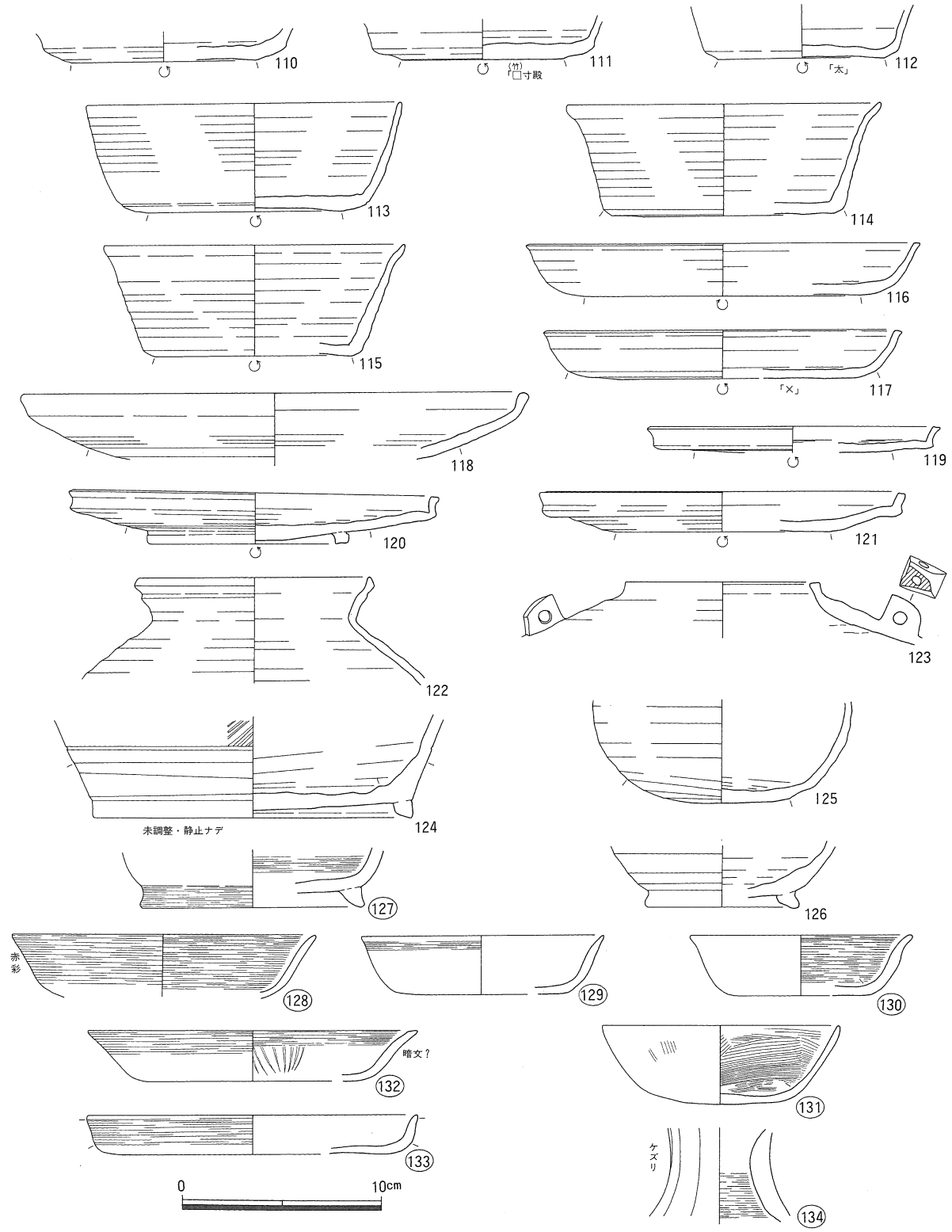
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
53	14.3		3.6	杯蓋A3	59	(14.0)		(4.1)	無台杯身D2	⑥5	(12.3)	(13.7)		鉢	71	(13.0)			無台杯身A1
54	13.7		2.8	杯蓋A3	60	(12.7)			無台杯身D1	66	16.1		3.6	杯蓋A2	72	(11.1)			長頸壺A1
55	(12.6)			杯蓋A3	61	(12.4)		(2.3)	無台杯身D3	67	16.0		3.7	杯蓋A2	73	(19.7)			杯蓋A3
56	15.1		4.4	有台杯身A1	62	(20.1)		(2.6)	無台皿D1	68	15.1		2.4	杯蓋A3	74	(19.4)			杯蓋A3
57	(15.6)		(3.8)	無台杯身A2	63	(18.1)		(2.5)	有台皿B1	69	(12.2)		(4.1)	有台杯身A1	75	17.9		3.4	杯蓋A3
58	(13.4)		(3.9)	無台杯身A1	64	18.3		2.2	無台皿B1	70	(14.4)		(4.4)	無台杯身C	76	16.1		3.9	杯蓋A2

第59図　ＮＳＤ21第４・５土器集中部・ＮＳＤ21出土土器実測図（３）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
77	15.8		3.5	杯蓋A3	86				有台杯身A3	95	(14.8)			無台杯身A1	104	12.5		3.9	無台杯身C
78	(15.4)			杯蓋A3	87				有台杯身A	96	(13.5)			無台杯身A1	105	13.4		3.4	無台杯身D2
79	15.3		3.0	杯蓋A3	88				有台杯身A3	97	(13.4)			無台杯身A1	106	11.7		(大)(3.5)	無台杯身D4
80	14.2		3.5	杯蓋A2	89	(13.8)		(3.6)	有台杯身C3	98	(14.9)			無台杯身A1				(小)(3.2)	
81				杯蓋A2	90	(12.2)		(3.5)	有台杯身C3	99	(15.7)		(3.4)	無台杯身D3	107	(12.0)		(3.7)	無台杯身D4
82				杯蓋A2	91	(15.4)		(4.1)	有台杯身A3	100	13.5		3.8	無台杯身D3	108	(11.8)		(3.5)	無台杯身D3
83	15.6		5.0	有台杯身A1	92	(13.6)		(4.7)	無台杯身A1	101	(13.4)		(3.8)	無台杯身D3	109	(10.9)		(3.6)	無台杯身D4
84	14.4		4.1	有台杯身A1	93	14.5		4.3	無台杯身A1	102	(13.9)		(4.3)	無台杯身D2					
85					94	(13.9)		(4.2)	無台杯身A1	103	(13.1)		(3.6)	無台杯身D3					

第60図　ＮＳＤ21出土土器実測図（４）

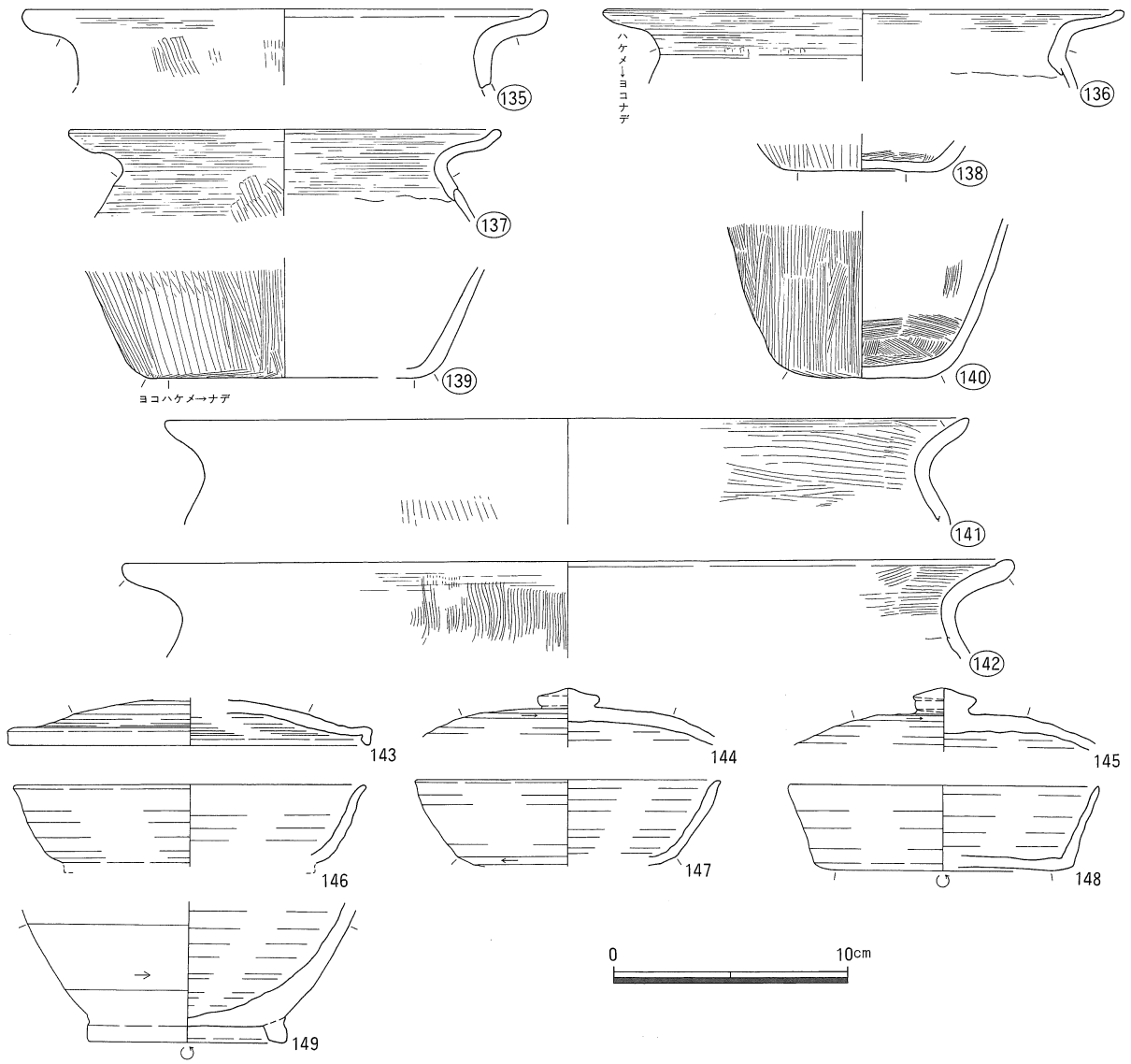


番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
110				無台杯身D3	117	(17.9)		(2.4)	無台皿D1
111				無台杯身D4	118	(25.4)			無台皿C
112				無台杯身D3	119	(14.7)			無台皿B1
113	15.8		5.4	無台杯身D3	120	18.5		(大)2.7	有台皿B1
114	(15.7)		(5.5)	無台杯身D3				(小)2.4	
115	(15.1)		(5.5)	無台杯身D3	121	(18.3)			無台皿B1
116	(19.7)		(2.6)	無台皿D1	122	(12.0)			壺D2

番号	口径	最大径	器高	器種
123	(9.8)			四耳壺
124				長頸壺B1
125				壺C1
126				長頸壺A
(127)				有台杯身A1
(128)	(15.2)			無台杯身D
(129)	(12.1)		(3.0)	無台杯身C3

番号	口径	最大径	器高	器種
(130)	(11.2)		(3.0)	無台杯身C3
(131)	11.9		3.9	無台杯身B1
(132)	(16.5)		(2.5)	無台皿A
(133)	(16.5)		(2.0)	無台皿B1
(134)				高盤B

第61図　ＮＳＤ21出土土器実測図（５）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
⑬⑤	(22.2)			甕D3	⑬⑨					143	(15.4)			杯蓋A3	147	(13.0)		(3.6)	無台杯身D3
⑬⑥	(22.0)			甕D3	⑭⓪					144				杯蓋A3	148	(13.2)		(3.6)	無台杯身D3
⑬⑦	(18.3)			甕C	⑭①	(34.0)			鍋B1	145				杯蓋A3	149				長頸壺A
⑬⑧					⑭②	(37.8)			鍋B2	146	(14.9)			有台杯身A2					

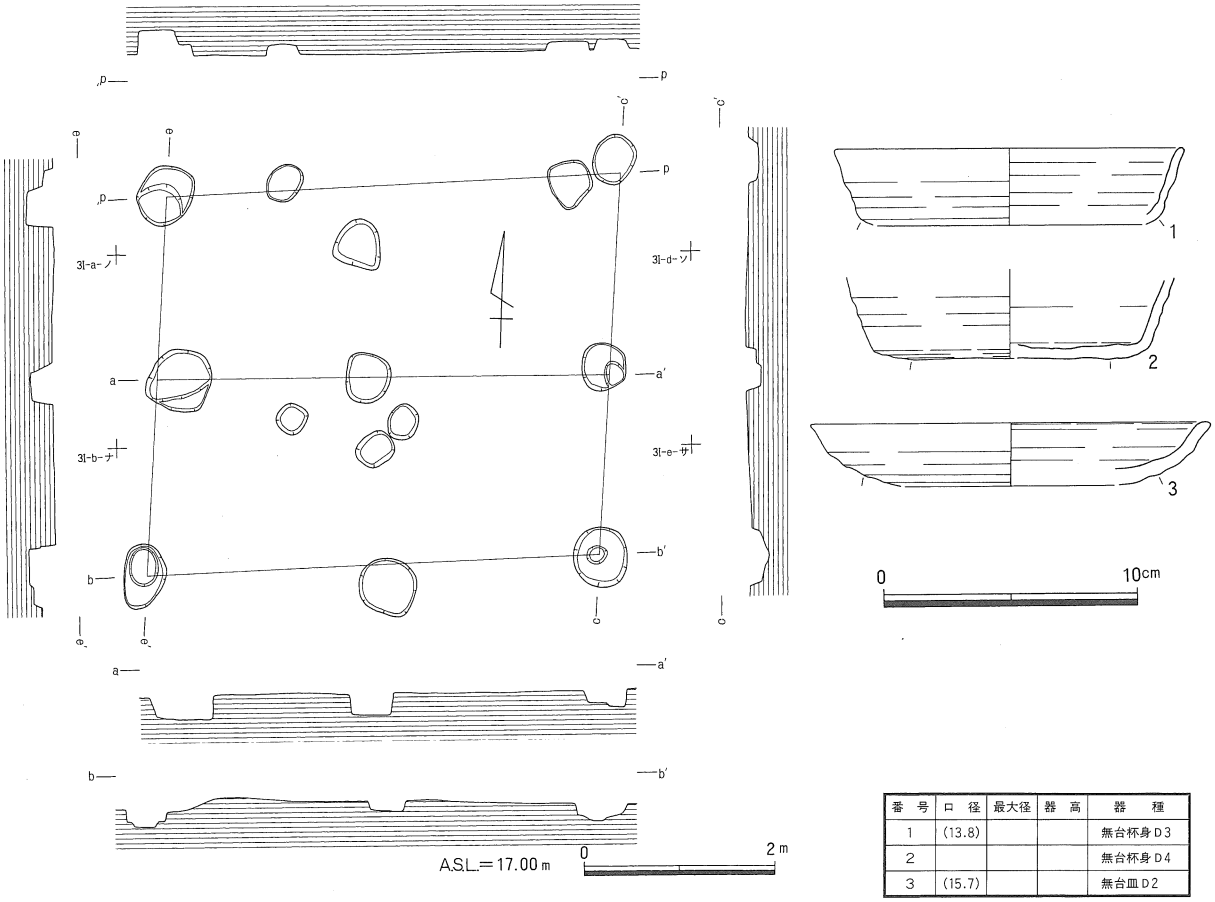
第62図　ＮＳＤ21（６）・22出土土器実測図

る。ＮＳＢ20・ＮＳＨ７に切断されＮＳＤ18と交差していた。

南壁に平坦面を持ち段をなすところが見られたが、底面は総じて平坦で整ったU字状断面を呈する。小溝ながら覆土は複数のレンズ状堆積に区分され、埋没に比較的期間を要したことを示している。底面に深着して数個のこぶし大礫が認められた。

南側の溝の延長線上を西方へほぼ直線的にのびる溝がある（ＮＳＢ24の柱穴に切断されていた）。現地で確認していないが、覆土・断面形は類似し連続する溝と考えられる。

出土土器は須恵器のみであり、その器種組成は杯蓋Ａ１、有台杯身Ｃ２、無台杯身Ａ１・Ｂ１・Ｄ１、無台皿Ａ２、長頸壺Ａ１、甕Ｂ１・Ｃからなる。奈良時代前葉の溝であろう。



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(13.8)			無台杯身D3
2				無台杯身D4
3	(15.7)			無台皿D2

第63図　ＮＳＢ１実測図・柱穴出土土器実測図

ＮＳＤ20

３Ｄ－ａ区のⅣ層（緑灰色粘土）より約10㎝高いところ（３面）で確認できた。ＮＳＢ23の東側柱に並行し、約0.6m離れて南北方向に伸びている。南端はＮＳＤ19と交差する直前で東西に分かれ、西方は鉤状を呈して途切れていた。確認長約6.70m、幅0.25～0.75m、深さ0.20～0.30mを測る。

平面楕円形様に溝幅を増し深くなる箇所が認められたが、重複する柱穴を誤認したのかもしれない。平坦な底面（海抜高15.80m前後）をなし断面Ｕ字状を呈する。覆土はＮＳＤ19に比べ炭化物（粒）を含まないが、３～４層に区分できその堆積状態はよく似ていた（暗灰色粘土）。南端の状況（鉤状の屈曲）はＮＳＤ19を意識したものとも思われ、両溝は併存していた可能性が高い。

ＮＳＤ21

２Ａ－ｈ・ｉ～２Ｃ－ｇ区にかけて東西方向にのびている。Ⅲ層上面（１面）においてほぼすべての輪郭を確認した。確認長約61.50m、幅1.00～2.00m、深さ0.25～0.55mを測る。西半は直線状をなすが、東半では蛇行し溝幅をわずかに増す。２Ｃ－ｅ区で合流（ないしは分岐）する同規模の枝溝１条を有する。奈良時代の遺構との重複関係は認められなかった（ＮＳＩ11・23は当溝に伴う土器廃棄跡と考えられる）。底面の海抜高（15.50～15.65m）は西半ほど高く、現地形と逆の傾斜を示している。南壁の中位に膨らみを持ち不明瞭な段差のある箇所（２Ｂ－ｅ区）や、底面が凹み浅いＵ字状断面を呈する箇所（２Ｂ－ｂ・ｃ区、２Ｃ－ｃ・ｈ区）も認められたが、総じて壁の傾斜は均一で平

坦な底面をなしていた（断面U字状）。覆土は３～５層に区分され、溝全域にわたって最上位に茶灰色（西半）ないしは黄灰色（東半－蛇行部分）（砂質）粘土がすり鉢状に堆積していた。この最上層は２Ｂ－ｈ区付近で明らかに下位の覆土を切断（掘り込み）しており、最上層の底面近くには礫・土器片等が平面的に分布していた。溝の埋没がかなり進んだ段階で少なくとも１度以上改修が行われ、その後ある期間、幅を減じた（0.74～1.60m）流路が生きた溝として存続していたと考えられる。

２Ｂ－ｈ区の底面に密着して大小自然礫（径18～30㎝、７～13㎝）が帯状（幅0.6m前後）に敷きつめられていた。溝を横断し集積状態は平面的である。大礫の隙間を小礫で埋め高さを整えていた。

ＮＳＩ11・23を除き５箇所（第１～５）土器集中部が検出された。すべて大小の自然礫を多く含み土器は細片化している。土器等の廃棄跡と考えられ、第１・２土器集中部は南岸寄りに第３～５土器集中部は溝のほぼ中央に形成されていた。第３・５土器集中部が改修後の廃棄跡と推定できるのに対し、第４土器集中部は底面に接しより形成時期は遡るものと思われる。第１・２土器集中部ではさらに小さな土器集合ごとに若干時期が異なる可能性もある。

第２土器集中部は主に須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、土師器無台杯身Ｃ３からなる（他に須恵器無台杯身Ｄ２・Ｄ４、無台皿Ｄ２、高盤Ａ、長頸壺Ｂ１、甕Ｂ１、土師器有台杯身Ｂ、無台杯身Ａ・Ｄ、有台皿Ａ１、無台皿Ｂ２、壺Ａ、鍋Ｂ２がある）。第４土器集中部では須恵器杯蓋Ａ３等食器類がめだった（他に須恵器有台杯身Ａ１、無台杯身Ａ１・Ａ２・Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３、有台皿Ｂ１、無台皿Ｂ１・Ｄ１、土師器鉢がある）。第１・３・５土器集中部は複数の器種を少量ずつ含んでいた（第１土器集中部＝須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、有台杯身Ｃ１・Ｃ３、無台杯身Ｄ３・Ｄ４、小型杯身Ａ１、有台皿Ａ１、無台皿Ｄ１、土師器有台皿Ａ１、高盤Ｂ、甕Ｄ１、鍋Ｂ１、第３土器集中部＝須恵器杯蓋Ａ２、無台杯身Ａ２・Ｄ２・Ｄ４、無台皿Ｂ１・Ｄ２、土師器無台杯身Ｂ１、壺Ａ、甕Ｃ・Ｄ１、第５土器集中部＝須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、有台杯身Ａ１、無台杯身Ａ１・Ｃ、長頸壺Ａ１）。土器集中部に伴わなかった土器には須恵器有台杯身Ａ３、無台皿Ｃ、壺Ｃ１・Ｄ２、皿耳壺、土師器有台杯身Ａ１、無台皿Ａ・Ｂ１、甕Ｄ３がある。23点の墨書土器、ミニチュア土器、土馬、土錘等の土製品砥石を出土している。

若干時期差を有するものの、土器集中部（ＮＳＩ11を含む）は１度以上の改修を挟んですべて奈良時代中葉までに形成されたと考えられる。墨書土器には編年時期の降る土器（須恵器無台杯身Ｄ３等）も比較的多く見られ、管理は不充分ながらＮＳＤ21は後葉まで存続していた可能性が高い。

ＮＳＤ22

２Ｂ－ａ・ｂ・ｄ・ｇ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。北岸を調査していないため溝幅は不明であるが（確認幅約1.40m）、確認長約21.50m、深さ0.20～0.40mを測る。底面の海抜高（15.65～15.80m）は東半が高い。ＮＳＢ31と重複し東西方向に直線的にのびる。東端は北方へ曲がり始めている。南岸の傾斜は緩く均一であった。

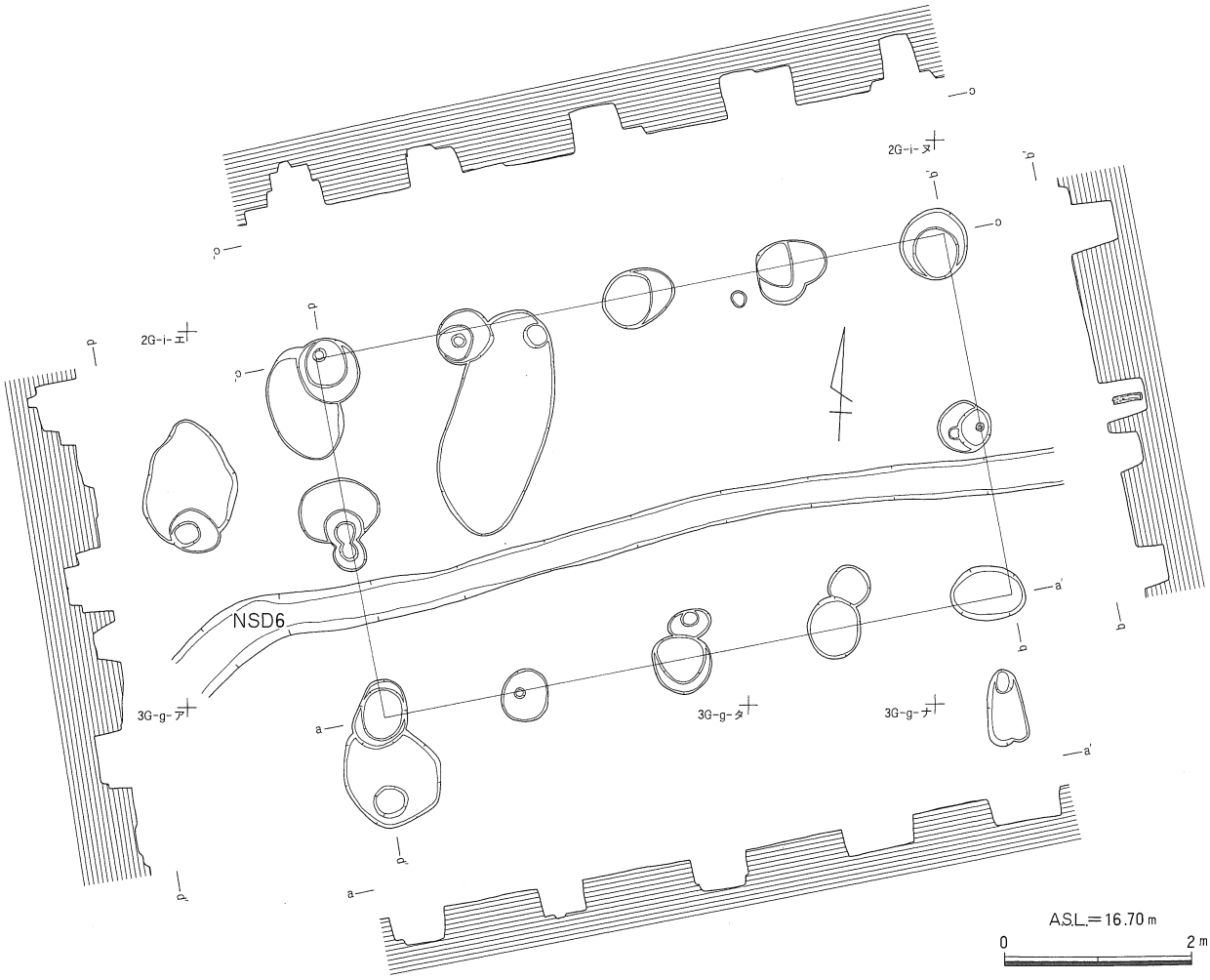
出土土器には須恵器杯蓋Ａ３、有台杯身Ａ２、無台杯身Ｄ３があるが、少量・細片であり形成時期は明確でない。

第２節　掘立柱建物（ＮＳＢ）

ＮＳＢ１

３Ｉ－ｄ・ｅ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＤ２の西方から約15m離れ、間口２柱間（4.75m）×奥行２柱間（3.95m）、棟方位Ｎ－２°00′－Ｗをなす総柱の建物である。

北面中央の間柱を欠き平面形はわずかに東方へ歪んでいた。堀方は平面円形ないし楕円形を呈し



第64図　ＮＳＢ２実測図

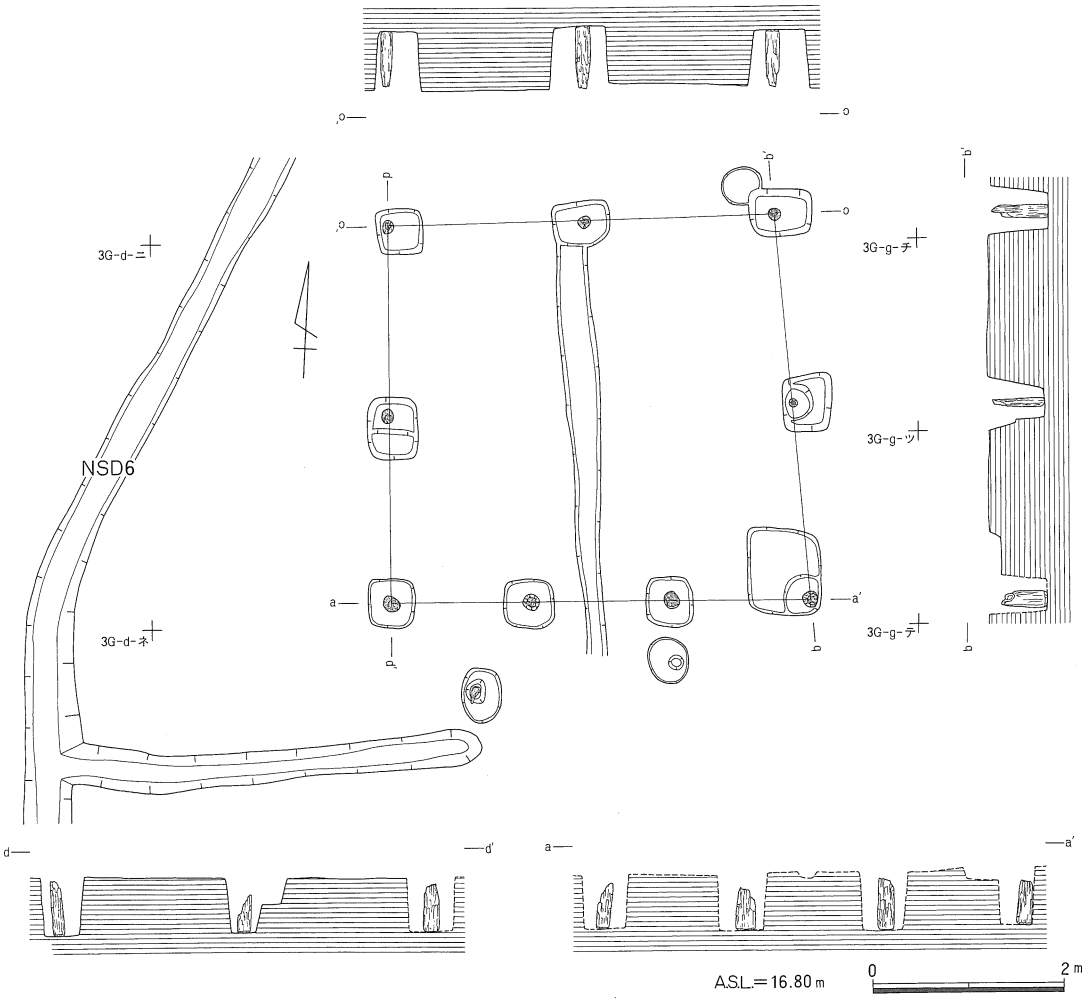
（長径50～70cm、短径45～55cm、深さ10～30cm）、西・南面の柱穴規模が大きい。掘方底面にはさらに一段深い掘り込みや柱の重みによると思われる円形（径13～20cm）の凹みも認められた。北側柱の柱筋上に２箇所、東柱周辺に３箇所、小規模な柱穴状の落ち込みがある。柱根・礎板等は残存していなかった。

堀方内より須恵器片が３点（無台杯身Ｄ２・Ｄ４、無台皿Ｄ２－内１点墨書土器－）出土している。

ＮＳＢ２

２Ｇ－１・２Ｈ－ｃ区で検出された。北側柱はⅢ層上面（１面）で確認できたが、全形を知りえたのはⅢ層を約15cm掘り下げた後（２面）である。間口４柱間（6.85m）×奥行２柱間（3.90m）、棟方位Ｎ－14°00′－Ｗを測る。ＮＳＤ４の西方約５ｍに位置し、ＮＳＡ１・ＮＳＢ３に隣接している。ＮＳＤ６が桁行と併行し床面内を縦断していた。

堀方は平面円形ないし楕円形をなし（長径55～85cm、短径50～70cm、深さ30～55cm）、平坦な底面に一段深い掘り込みや柱痕状の凹み（径８～10cm）を残すものが多い。北面の間柱と重複して平面楕円形様（2.40×1.05×0.10m）を呈する浅い落ち込みが認められた。南北面の内側に小規模な柱穴（16～46cm）が４箇所（南面では側柱と重複していた）、西面中央柱の西方に柱穴状の落ち込みが１



第65図　ＮＳＢ３実測図

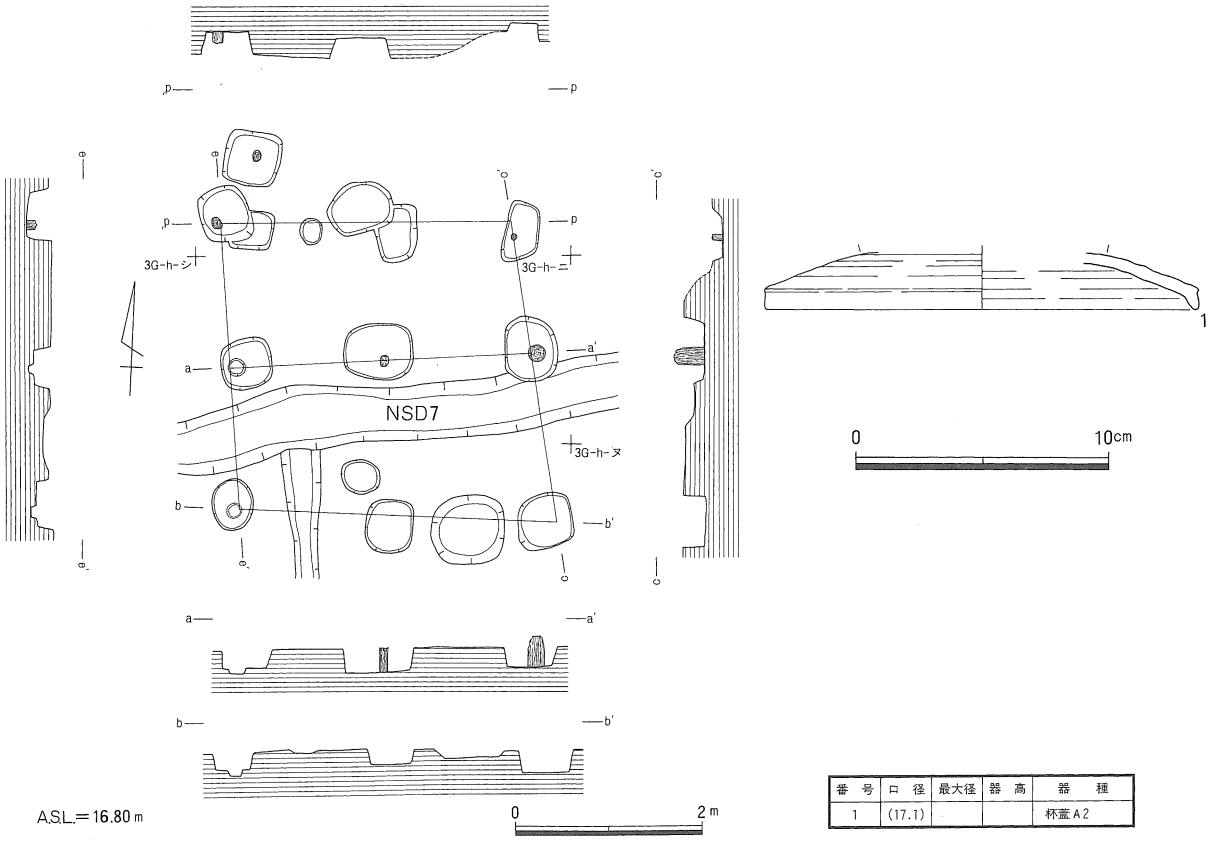
箇所ある。また東西側柱の延長線上、南方へ約0.90mに２箇所小柱穴（径18～36cm）が確認でき、あるいは庇付の建物だったのかもしれない。東面中央柱には柱根が残っていた。礎板・根固め礫等は検出されなかった。柱根（丸柱－径８～10cm－）は斧状の工具による切断痕（周辺部から斜めに加えられる）を残し、二次調整を加えていない。掘方内を主に灰白色粘土（Ｖ層）で埋め、固定していた。東西面中央柱それぞれに柱痕は２箇所認められ、建て替えあるいは部分的な補修が行われたと考えられる。

なお、２柱間×２柱間の建物では桁行・梁行の区分が難しいため、以下すべての掘立柱建物について、東西方向（南北面）を間口、南北方向（東西面）を奥行として記述する。また棟方位とは奥行の方向である。よってＮＳＢ２のように南北面４間、東西面２間の建物では、棟方位は桁方位と一致せず、梁行方向を示していることになる。

ＮＳＢ３

３Ｇ－ｇ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＩ３に西接し、ＮＳＢ２・４と共にＮＳＤ４、ＮＳＡ１西側の掘立柱建物群を構成している。間口２柱間（南面4.40m北面4.05m）×奥行２柱間（3.95m）、棟方位Ｎ－３°00′－Ｗを測る。

南面は３柱間を数え入口が付されていたと推定できる。堀方は平面隅丸方形ないし長方形様をなし



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(17.1)			杯蓋A2

第66図　ＮＳＢ４実測図・柱穴出土土器実測図

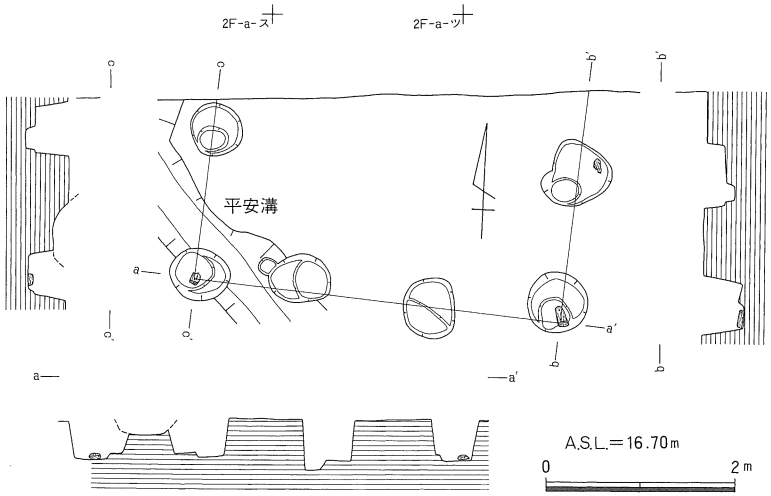
（長辺50～90cm、短辺50～75cm、深さ55～65cm）、南東端の脇柱を除き他はほぼ等しい規模を有していた。一段深い掘り込みが３箇所見られ、北面中央柱の掘方から南方へ浅い小溝（幅19～38cm、深さ約10cm）がのびていた。小溝の南端は建物外におよび徐々に浅くなり途切れていた。すべての掘方から柱痕が検出された。柱痕は丸柱で（径10～15cm）、底面に斧状の工具による切断痕を残している。礎板・根固め礫等は認められなかった。掘方の底面には木葉と炭化した樹枝が集積し、覆土は灰白色粘土（Ｖ層）と褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）の細互層である。覆土はよく締まり木葉の付いたままの樹枝を底面に敷き重ね、柱を設置した後、その周囲を微細質な灰白色粘土と掘方排土により順次ていねいに突き固めていったものと考えている。南面の外側と北東脇柱に重複して、楕円形平面をなす柱穴（長径42～57cm、短径42～52cm、深さ15～20cm）が３箇所認められた。内１箇所の柱穴内には柱根を思わせる風化した木片が残存していた。

ＮＳＤ６（奈良時代後葉）の流路は明らかにＮＳＢ３を意識しており、両遺構は併存していた可能性が高い。

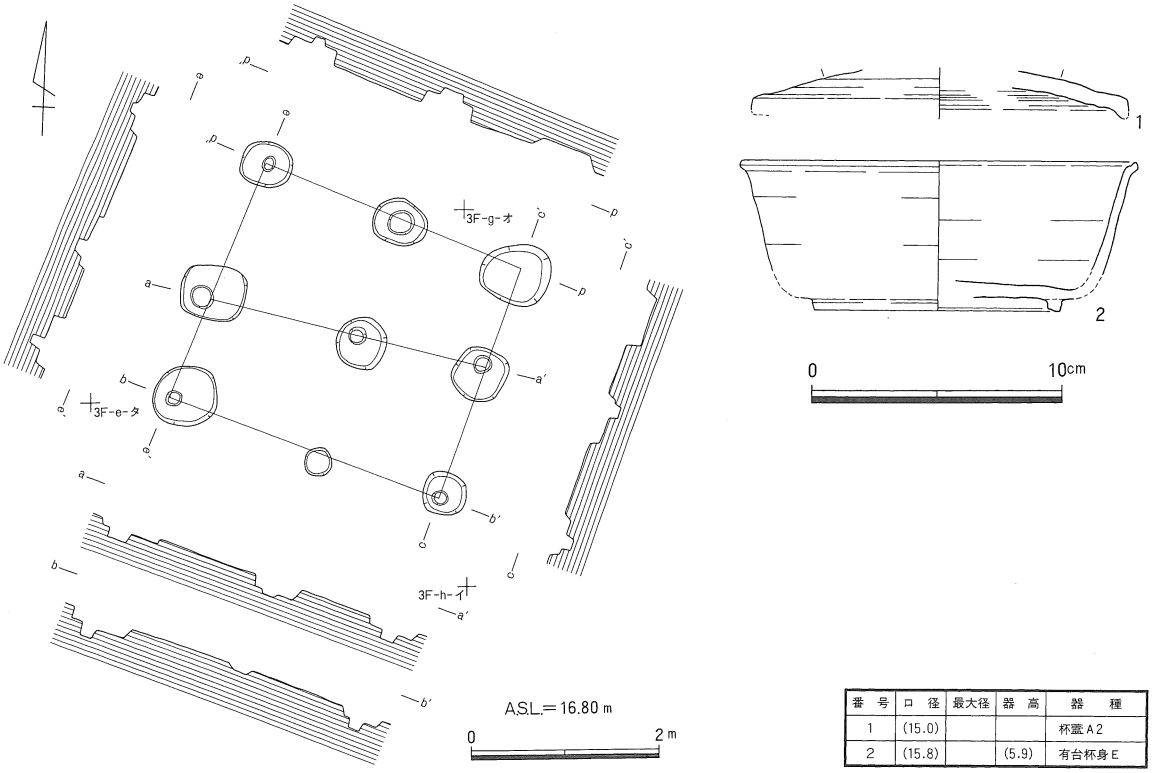
ＮＳＢ４

３Ｇ－ｈ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところで（２面）、すべての柱穴を確認した。ＮＳＢ３の南方約５ｍに位置し、ＮＳＤ７が建物内を横切っている（東面中央柱と重複していたが、その前後関係は明確でなかった）。間口２柱間（3.20m）×奥行２柱間（3.15m）からなる総柱の建物で、平面形はほぼ正方形をなしわずかに西方へ歪んでいた。棟方位Ｎ－５°00′－Ｗを測る。

掘方平面形には楕円形と隅丸方形様（長径55～75cm、短径35～60cm、深さ20～25cm）を呈するものがあり、前者は総じて小規模である。平坦な底面に柱の重量によると思われる円形の凹み（径12～14



第67図　ＮＳＢ５実測図



番　号	口　径	最大径	器　高	器　種
1	(15.0)			杯蓋Ａ2
2	(15.8)		(5.9)	有台杯身Ｅ

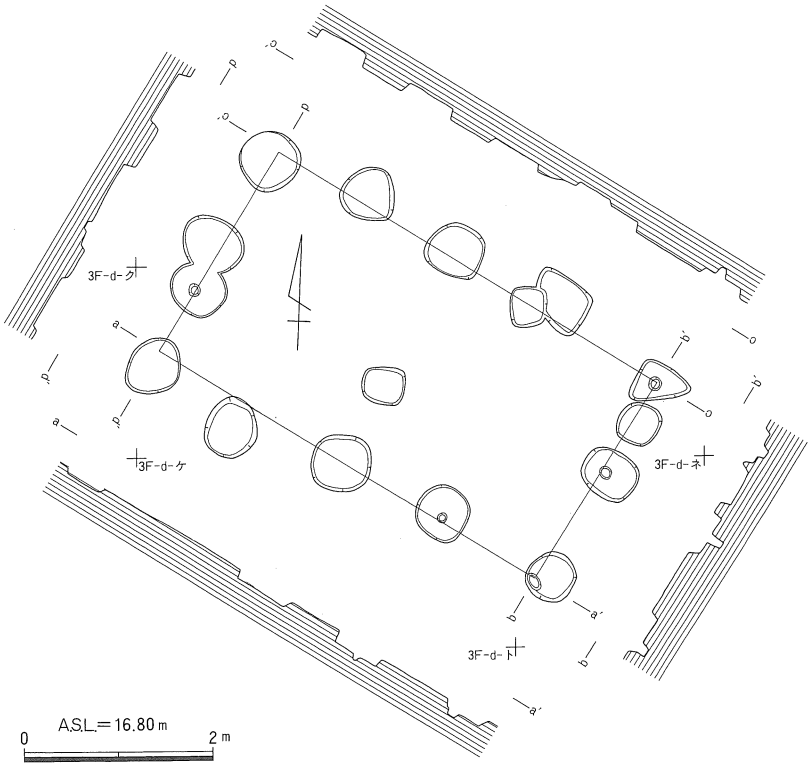
第68図　ＮＳＢ６実測図・柱穴出土土器実測図

cm）や柱根（丸柱－径６～18cm－）が計６箇所認められた。東面中央の柱根は他に比べて太く、斧状工具による切断痕を残していた。礎板等はなく掘方内には灰白色粘土（Ｖ層？）塊を含んだ暗灰色粘土が堆積していた。建物内外および南北側柱の柱筋に大小４箇所の柱穴がある。重複する柱穴が見られ建て替えが行われたと考えられる。

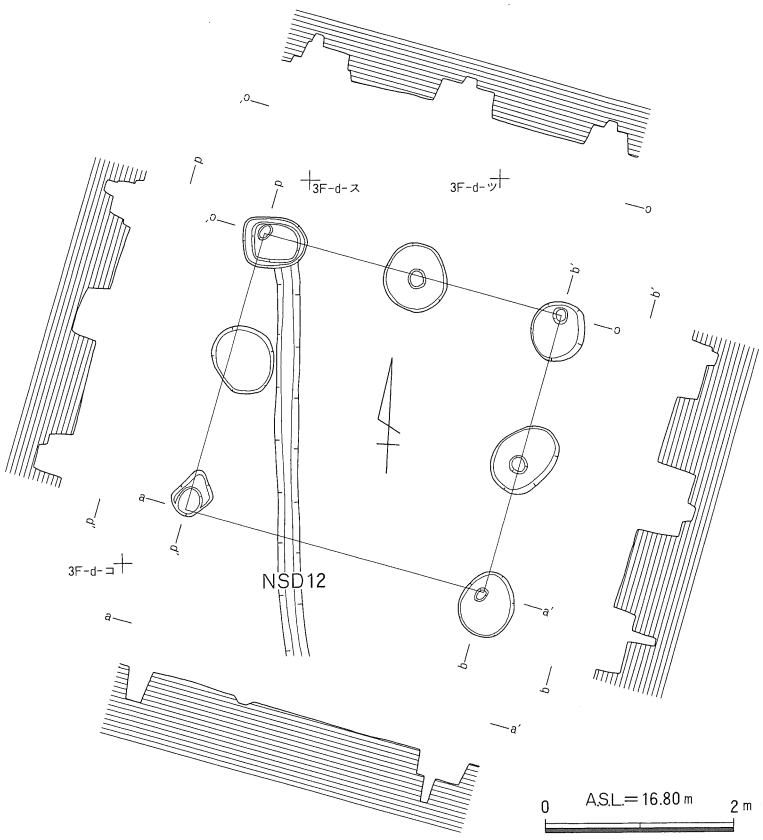
束柱の掘方内から須恵器杯蓋Ａ２が１点出土している。

ＮＳＢ５

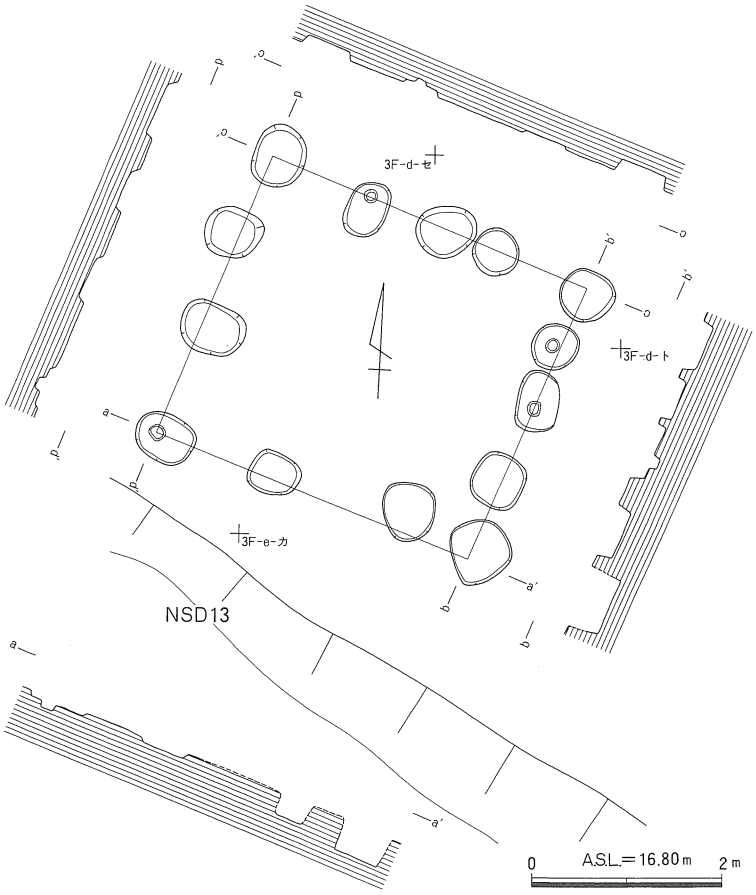
２Ｆ－ａ区のⅢ層２面およびＮＳＨ４の床面において確認できた。ＮＳＨ４に先行する建物である。ＮＳＤ10・ＮＳＩ４に隣接し、平安時代以降の溝により柱穴２箇所が壊されていた。北半が調査区



第69図　ＮＳＢ７実測図



第70図　ＮＳＢ８実測図



第71図　ＮＳＢ９実測図

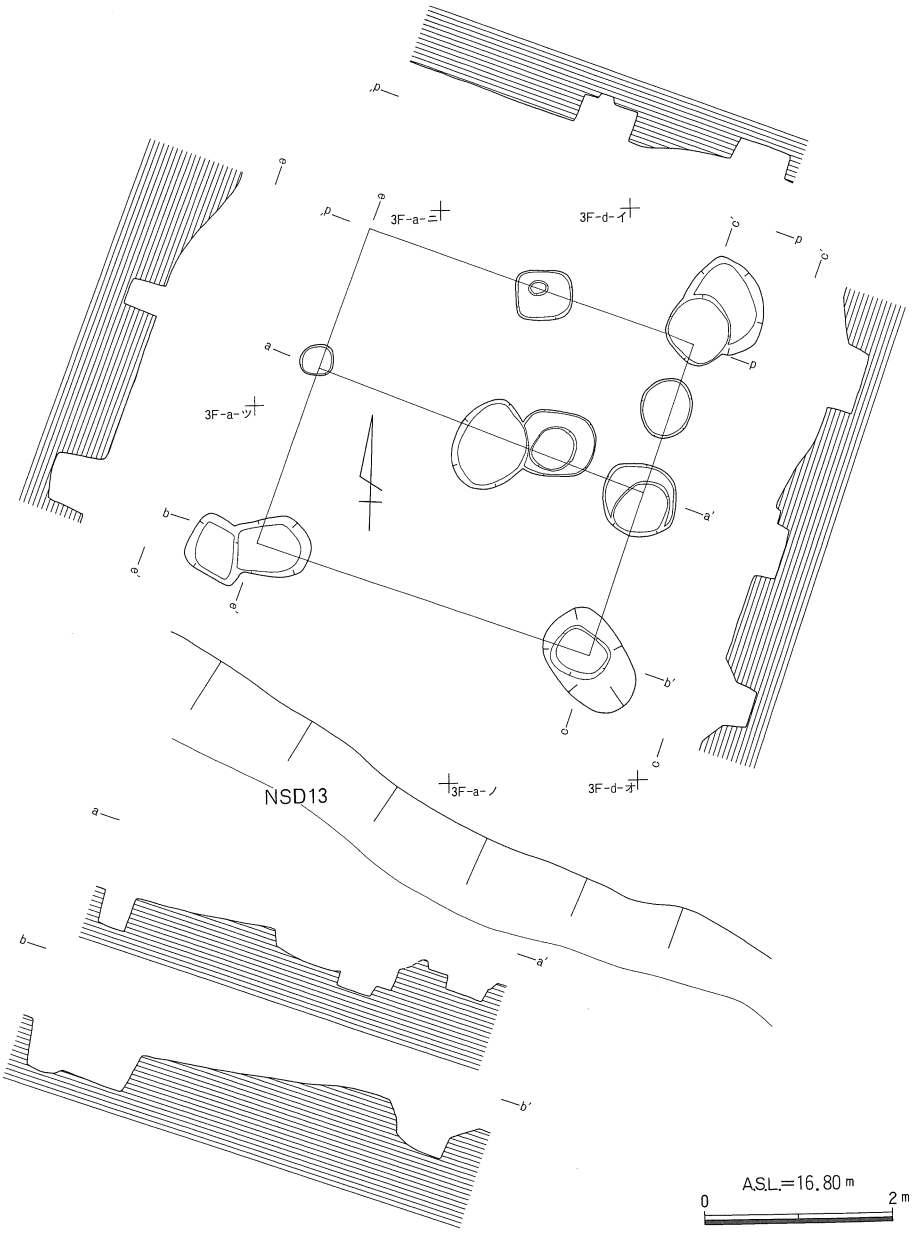
外におよぶため奥行は明らかでないが、間口は３柱間（3.85m）を数える棟方位Ｎ－４°00′－Ｅをなす。側柱のみからなり掘方は平面円形ないし楕円形（長径55～70cm、短径50～65cm、深さ30～55cm）を呈していた。すべての掘方底面にさらに一段深い掘り込みを有し、最下面および中段の平坦面に礎板を思わせる木片が３箇所残存していた。木片は著しく風化していたが丸太面を残す。柱等をミカン割りし再利用したものと考えられる。南面の間柱に重複する小柱穴（径18cm）が１箇所ある。掘方内から墨書土器が１点出土している。

ＮＳＢ６

３Ｆ－ｄ・ｅ・ｇ・ｈ区に跨がり、Ⅲ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＤ11・13に挟まれて重複・分布する５棟の掘立柱建物群（ＮＳＢ６～10）のなかで東端に位置している。間口２柱間（3.00m）×奥行２柱間（2.65m）、棟方位Ｎ－11°00′－Ｅをなす総柱の建物である。

掘方の平面形は隅丸方形様に近く、（長径30～75cm、短径30～65cm、深さ５～25cm）南面中央の柱穴は浅く小さい。平坦な底面に７箇所、柱の重みによると思われる円形（径16～36cm）の凹みが認められた。東西中央と束柱の凹みとを結ぶ柱筋は南北側柱と並行していない。覆土は基本的に褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）と灰白色粘土（Ⅴ層）からなり、一部細互層を形成していた。また北西隅の掘方断面には、明瞭な柱の抜取痕が観察できた。柱痕・礎板等は一切検出されなかった。

北面中央及び南東隅の掘方内から須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｅ、無台皿Ｄ２（墨書土器）の比較的



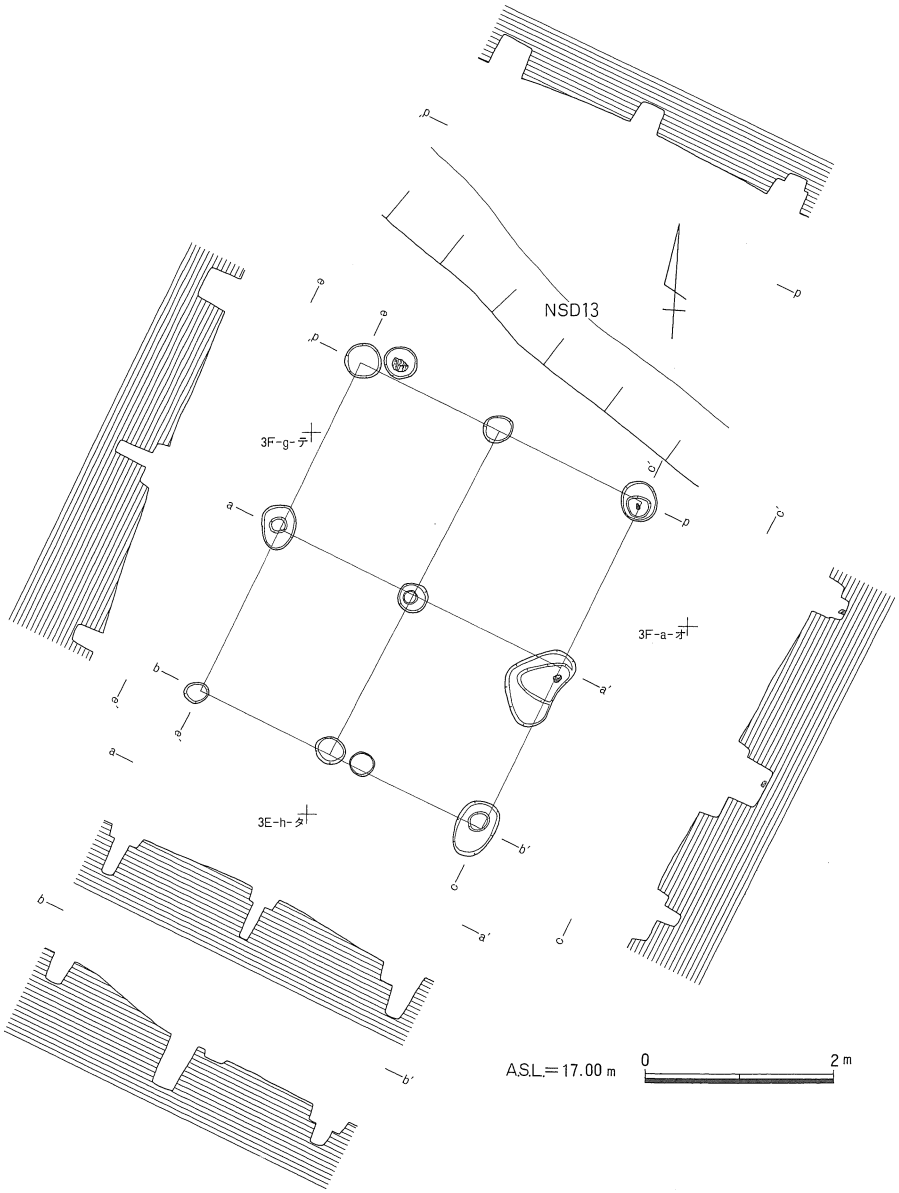
第72図　ＮＳＢ10実測図

大きな破片が出土している。

ＮＳＢ７

３Ｆ－ｄ区のⅢ層上面（１面）においてすべての柱穴を確認した。ＮＳＢ６の北西側に隣接する。ＮＳＢ８の柱穴と北東隅の柱穴および北面間柱が重複していたが、その前後関係は明確でない。間口４柱間（4.65m）×奥行２柱間（2.40m）、棟方位Ｎ－29°30′－Ｅを測る。

掘方の平面形は隅丸方形様を含むが、多くは楕円形（長径50～70cm、短径50～65cm、深さ５～25cm）を呈している。覆土は灰白色粘土（Ⅴ層）を主体とし、わずかに褐灰色粘土塊（Ⅲ層）が混入していた。平坦な底面に柱痕を思わせる円形の浅い凹み（径12～24cm）が５箇所認められたが、覆土断面における柱の抜き取り痕（土層の攪乱）は明確でなかった。南北側柱中央の柱穴を結ぶ柱筋に平面隅丸方形（１辺48～56cm）をなす柱穴が１箇所ある。これと対になる位置にも西面の中央柱と重複す



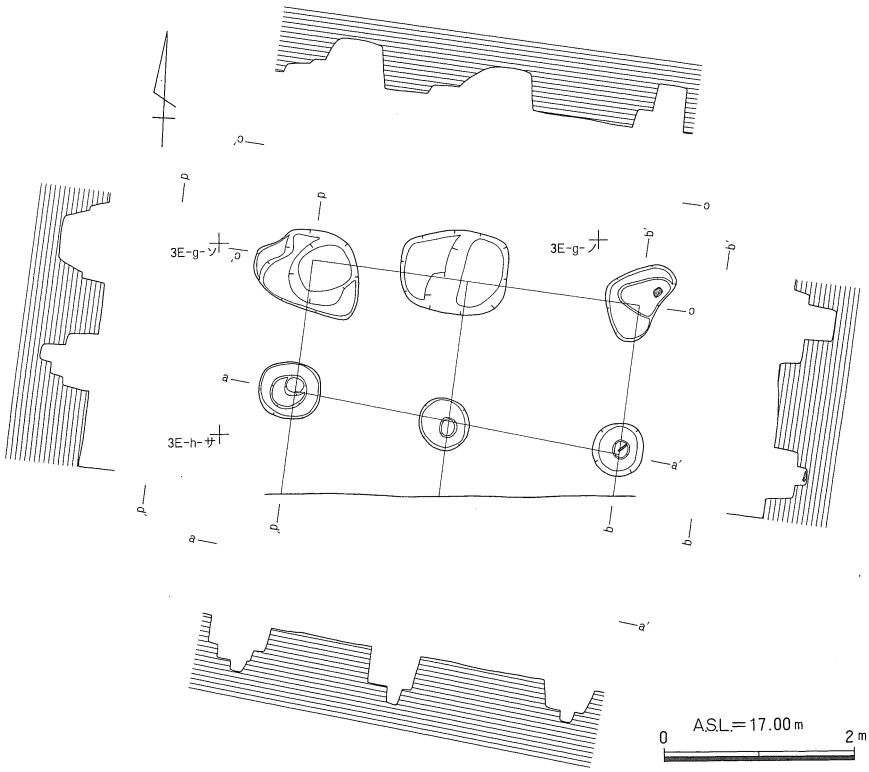
第73図　ＮＳＢ11実測図

る掘方が見られ、あるいは間仕切りを有していたものかもしれない。他にも重複する柱穴があり建て替えが行われた可能性もある。礎板・根石等は一切検出されなかった。

ＮＳＢ８

３Ｆ－ｄ区のⅢ層上面（１面）で建物の存在を知りえたが、南面の側柱を確認したのはⅤ層直上（３面）に至ってからである。ＮＳＢ６・10に挟まれ、ＮＳＢ７・９と重複していた。南面中央の柱穴は試掘杭（昭和55年度調査）により破壊され、束柱周辺もすでに攪乱されていた。側柱のみからなる建物と考えている。

間口２柱間（3.25m）×奥行２柱間（3.00m）、棟方位Ｎ－13°00′－Ｅを測り、掘方は平面円形ないし楕円形（長径45～80cm、短径35～65cm、深さ25～55cm）を呈していた。西面の脇柱にさらに一段深い掘り込みがある。柱痕を思わせる円形の凹み（径12～20cm）は５箇所認められた。内１箇所（南



第74図　ＮＳＢ12実測図

東隅）は底面からの深さ26cmを測り、単なる柱の重みによる陥没としては深すぎる。覆土は褐灰色粘土（Ⅲ層）と灰白色粘土（Ⅴ層）からなり、一部細互層を形成していた。西北隅の掘方から南方へ、小溝がほぼ直線的にのびＮＳＤ13に達していた。

礎石・根固め礫等は一切検出されず建て替え等を推定させる柱の重複は見られなかった。

ＮＳＢ９

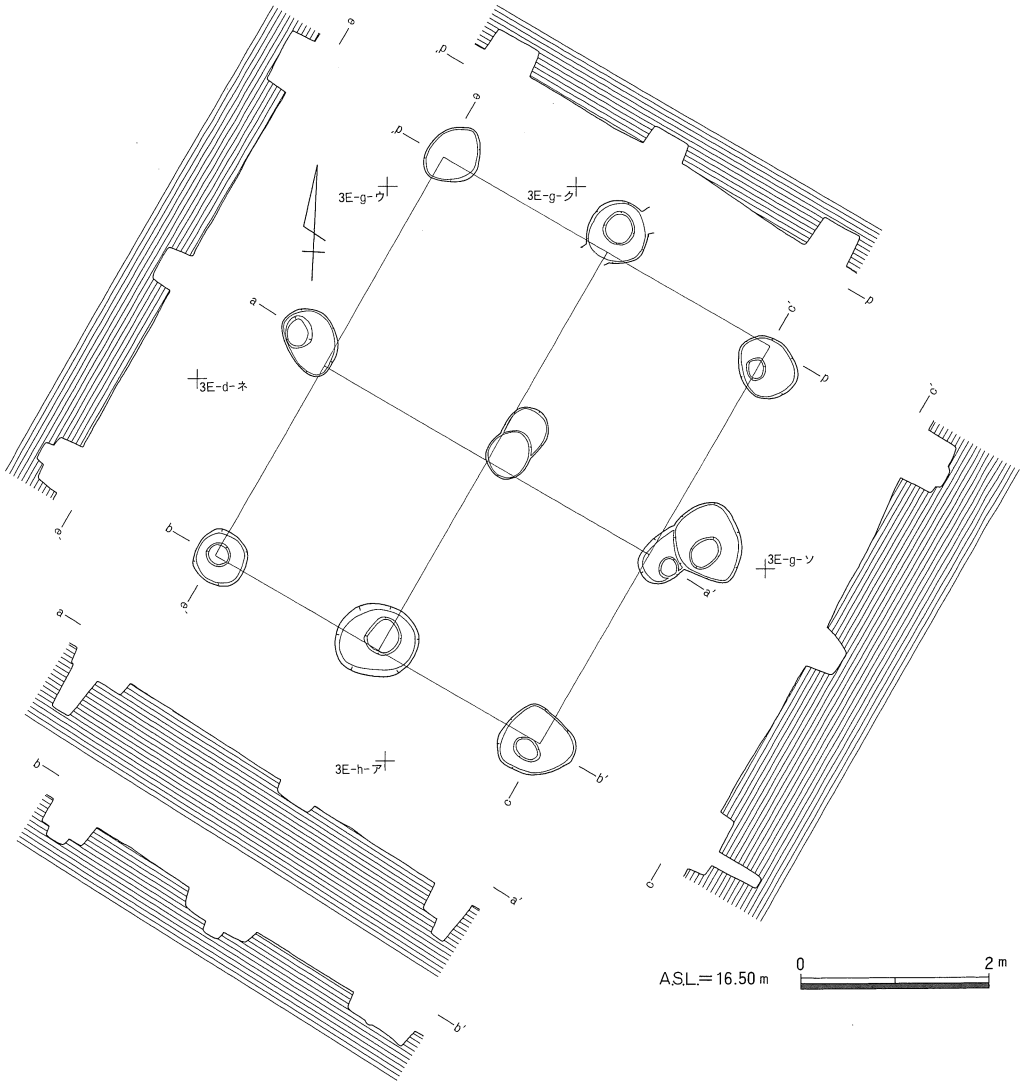
３Ｆ－ｄ・ｅ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＢ７に南接、ＮＳＢ８と重複している。ＮＳＤ13からわずかに１ｍしか離れていない。ＮＳＢ７同様、床面部に試掘抗が掘られていたため断言できないが、間口３柱間（3.60m）×奥行３柱間（3.15m）、梁行方位Ｎ－19°30′－Ｅをなし、北・東面の側柱を密に配した建物と思われる。

掘方の平面形は円形ないし楕円形（長径50～70cm、短径45～65cm、深さ５～30cm）を呈し、南東隅の掘方を除き総じて浅い。柱間尺にはばらつきがある。掘方底面に柱痕状の丸い凹み（14～16cm）が４箇所認められたが、礎板・根固め礫は残っていなかった。灰白色粘土（Ⅴ層）を主体的な覆土とする。密に配置された側柱は建て替え等によるものかもしれない。

ＮＳＢ８と直接重複する柱穴はなかったが、南方へのびる小溝が南面の間柱を切断していた。この小溝がＮＳＢ８に伴う遺構であるとすれば、ＮＳＢ９はＮＳＢ８に先行する建物となる。

ＮＳＢ10

３Ｆ－ａ・ｄ区に跨がり５棟の掘立柱建物群（ＮＳＢ６～10）のなかでもっとも西寄りに位置している。北・東面の側柱はⅢ層上面（１面）で検出できたが、西・南面の柱穴はⅢ層をほぼ除去する（３面）までその輪郭を掴むことができなかった。北西隅および南面の中央柱を欠くが、間口２柱間（3.65m）×奥行２柱間（3.45m）、梁行方位Ｎ－17°00′－Ｅをなす総柱の建物と考えられる。



第75図　ＮＳＢ13実測図

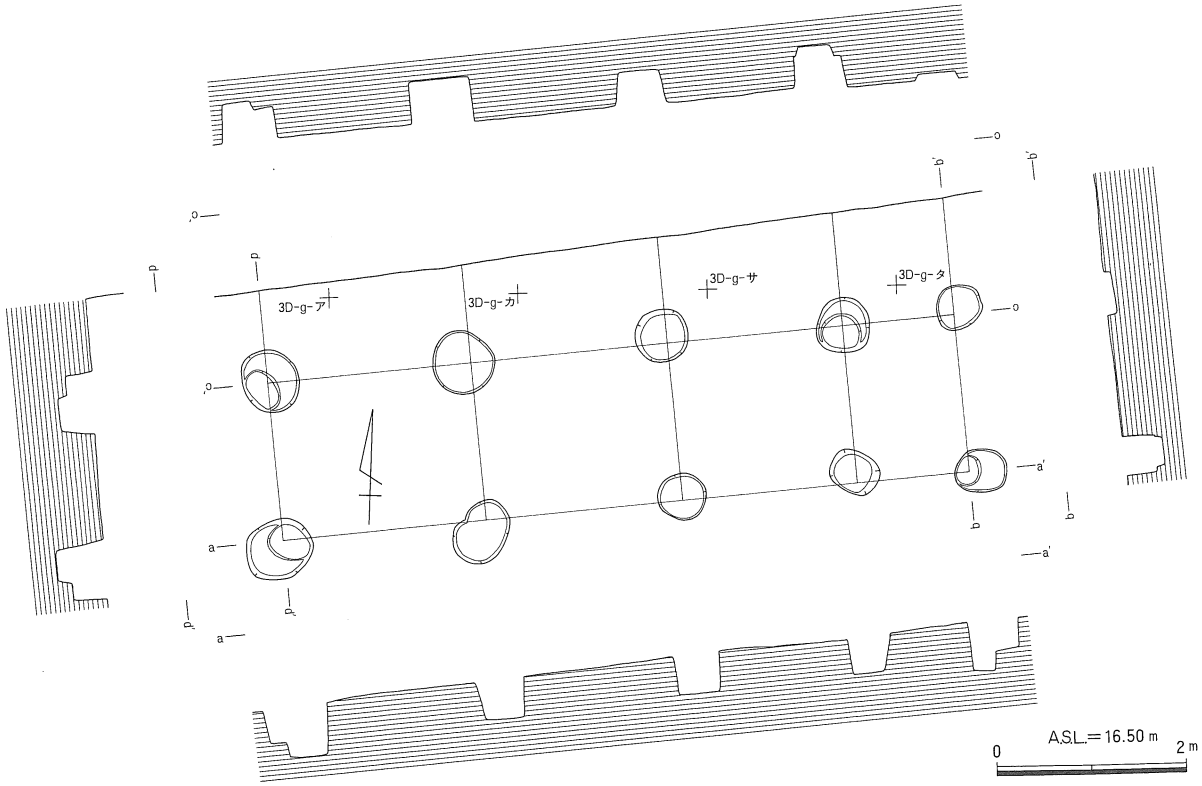
掘方には大小差が見られ基本的に平面楕円形（長径35～115㎝、短径35～80㎝、深さ25～55㎝）を呈する。総じて隅柱は深い。底面に一段深い掘り込みが４箇所、柱痕状の丸い凹み（径15～20㎝）が１箇所認められ、柱の抜き取りによるものか掘方上位の壁が緩やかな傾斜をなすものを含んでいた。束柱の底面は丸みを帯びていた。東面側柱の柱筋に柱穴状の浅い落ち込みが１箇所ある。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・灰白色粘土（５層）を覆土とする。

掘方の重複は顕著で建て直しが行われた可能性が高い。

ＮＳＢ11

３Ｅ－ｇ・３Ｆ－ａ区のⅢ層をほぼ除去した後（３面）、初めて建物の所在に気づいた。ＮＳＢ12・13と共にＮＳＤ13西側の掘立柱建物群を構成している。ＮＳＤ13と北東隅柱との距離はわずかに0.6mである。間口２柱間（3.30m）×奥行２柱間（3.85m）、棟方位Ｎ－23°00′－Ｅを測り総柱からなる。

平面形は北東－南西方向にわずかに長い。総じて掘方は小さく、平面円形ないし楕円形（長径25～



第76図　ＮＳＢ14実測図

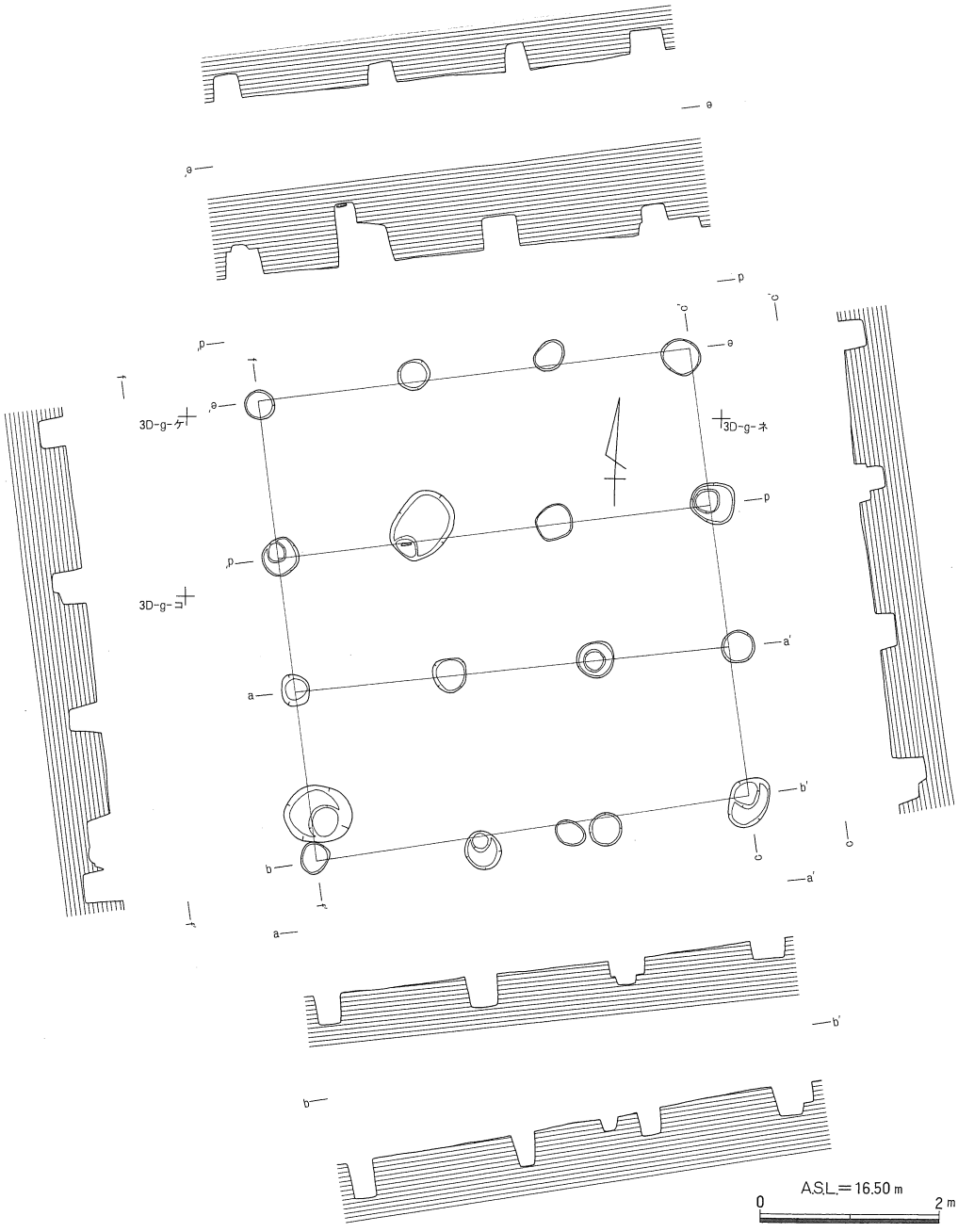
60cm、短径20～40cm、深さ25～55cm）を呈している。底面にさらに一段深い掘込みや柱痕状の丸い凹み（径14～23cm）が５箇所あり、特に西面の中央柱および東柱の凹みは深かった。また南面中央の掘方も深く、底面（丸みを帯びるものがある）の高さは一定していない。東面の中央柱はＮＳＢ12の柱穴と同一位置にあり、その検出面・形態・規模からみてＮＳＢ12に壊されてしまったと解するのが妥当なように思われる。風化して原形をとどめていないが、柱根・礎板を思わせる木片が２箇所残っていた。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体的覆土とし、底面近くに黒灰色粘土塊が集中していた。浅いが南面の中央柱と北西隅柱に隣接する同規模の柱穴が２箇所認められ、建て直しが行われた可能性もある。

ＮＳＢ12

３Ｅ－ｇ・ｈ区、３Ｆ－ａ・ｂ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ11と重複し、ＮＳＢ13から南西方へ約５ｍ離れている。南半は未調査であるが間口２柱間（3.45m）を測り、棟方位Ｎ－５°00′－Ｅを呈する総柱の建物と思われる。

掘方の平面形には円形・不定形・隅丸方形があり、隅丸方形様をなす北面の側柱の規模（長径90～115cm、短径60～90cm、深さ40～50cm）は他の掘方（長径55～65cm、短径50～60cm、深さ40～55cm）に比べ大きい。前者は平坦な底面にさらに１段深い掘り込み（３段に掘られたものもある）を有し、後者にはやや深いが柱痕状の丸い凹み（径18～22cm）が認められた。覆土は両者とも褐灰色土（Ⅲ層？）を主体とする。底面に木片礎板（？）が２箇所残っていた。東面間柱の木片は皮面の残る樹枝（径２～３cm）である。

ＮＳＢ11で述べたように北東隅の掘方が検出面の高いＮＳＢ12に伴うものであるとすれば、ＮＳＢ12はＮＳＢ11に比べ後出する建物となる。

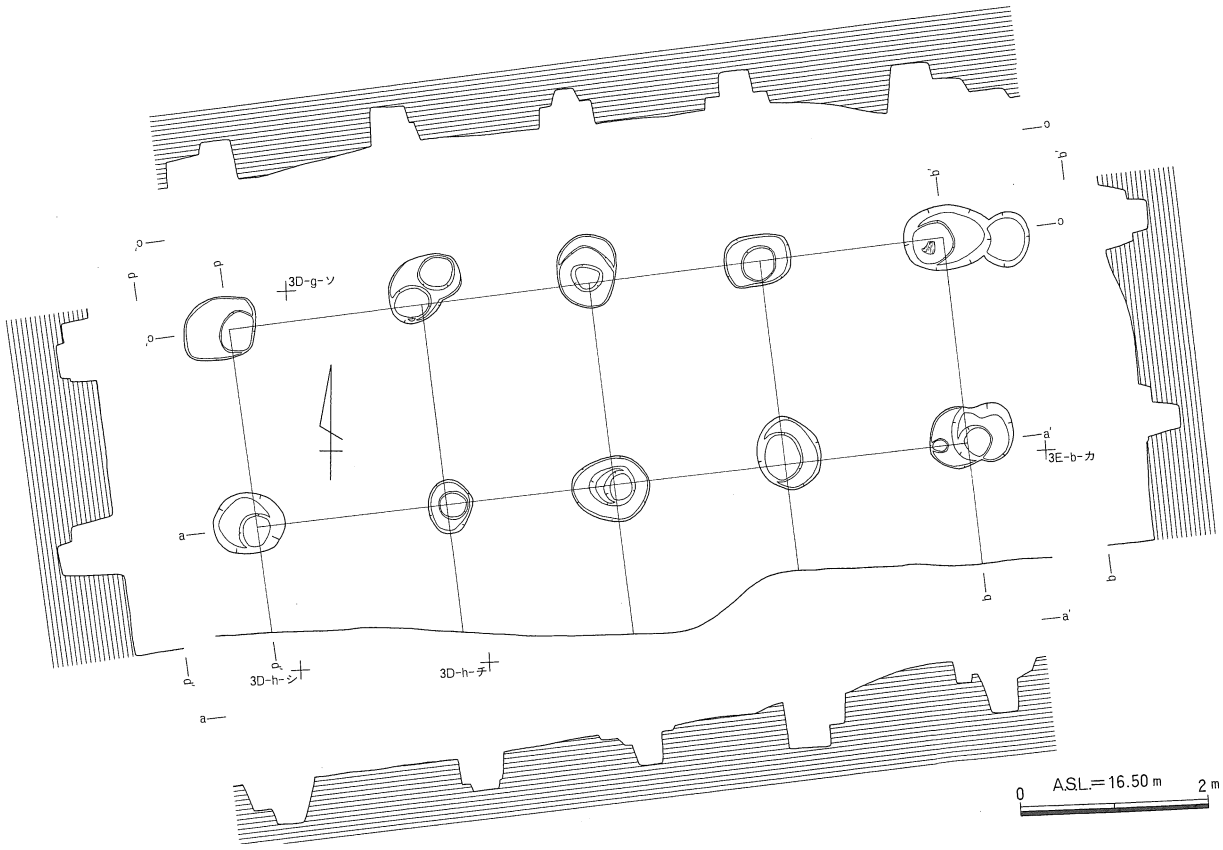


第77図　ＮＳＢ15実測図

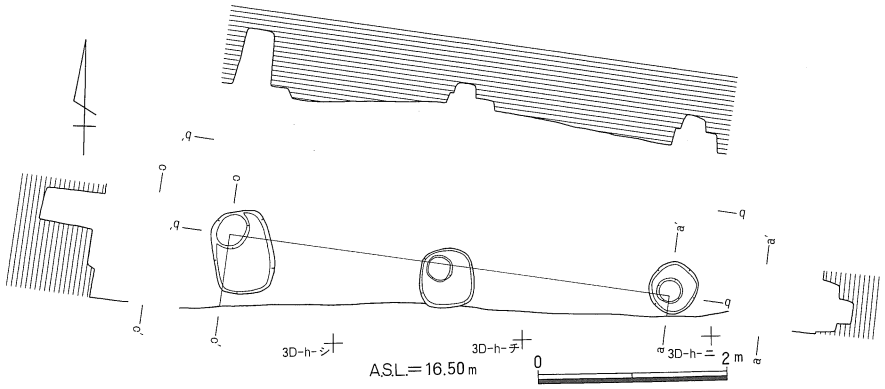
ＮＳＢ13

３Ｅ－ｇ区のⅣ層上面近くに至り（３面）、ＮＳＢ11と共に検出された。ＮＳＢ13西側の掘立柱建物群（ＮＳＢ11～13－３棟－）のなかで西端に位置している。間口２柱間（3.95m）×奥行２柱間（4.80m）、棟方位Ｎ－27°00′－Ｅを測り総柱からなる。

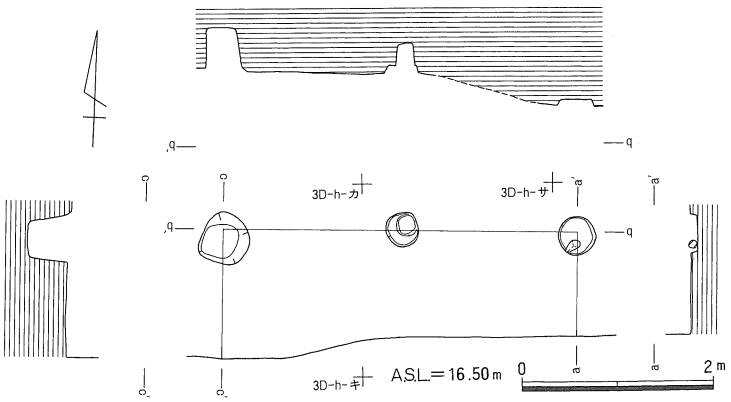
ＮＳＢ11とほぼ平行し相類似（相似）した平面形（北東－南西方へ長い）を呈している。掘方は平面円形ないし楕円形（長径55～90㎝、短径45～75㎝、深さ15～75㎝）をなし、平坦な底面に７箇所、柱痕を思わせる丸い凹み（径19～39㎝）が認められた。東西面の中央柱および南東隅柱に残る凹みは著しく深い。また束柱は浅く小規模である。覆土は主に褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）からなり、凹み内に



第78図　ＮＳＢ16実測図



第79図　ＮＳＢ17実測図



第80図　ＮＳＢ18実測図

は黒灰色粘土塊が顕著であった。東西面の中央は側柱筋から外側に外れている。重複する柱穴が見られ、建て直しが行われたと考えられる。

NSB14

2D－i区と3D－g区に跨がりⅢ層をほぼ除去した後（3面）確認された。NSD17の東側に位置し、NSA2を挟んでNSB15・16に隣接している。北半が調査地外に及ぶため奥行は明らかでないが、間口4柱間（7.25m）、棟方位N－7°30′－Wを測り、本調査において検出された最大規模の総柱建物である。

掘方の平面形は円形ないし楕円形（長径50～75cm、短径45～65cm、深さ10～55cm）をなし、底面に4箇所、さらに一段深い掘り込みを有していた。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）と黒灰色粘土を主体的な覆土とする。西面の側柱（2箇所）では細互層を形成する上記の覆土断面に明確な土壌の攪乱が見られ、柱は南西方向へ引き抜かれたことを示していた。東端の柱間尺は狭く、東面の間柱は著しく浅い。東面の柱列を庇と考えるべきかもしれない。重複する柱穴はない。柱痕・礎板等は一切検出されなかった。

NSB15

3D－g・h区で、NSB14と同様、Ⅲ層をほぼ除去した後（3面）に検出された。NSA2に囲まれ、複雑に重複する4棟の掘立柱建物群（NSD15～18）に属する。NSD17の東岸に接している。間口3柱間（4.90m）×奥行3柱間（5.10m）を測り、平面形は正方形に近い。総柱の建物であるが、東柱は東西方向に直線的に並ぶものの南北方向には通らない。棟方位N－12°00′－Wを呈する。

掘方は総じて小さく平面円形ないし楕円形（長径35～80cm、短径30～60cm、深さ20～70cm）をなす。平坦な底面に柱痕状の丸い凹み（径20～30cm）が5箇所認められ、掘方が大きい北から2列目の東柱では深い凹みの底面に礎板（板材）が残っていた。他の掘方から柱根・礎板等はまったく検出されず、覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体としていた。覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭でなかった。

他に側柱の柱筋にのる柱穴が2箇所ある。

NSB16

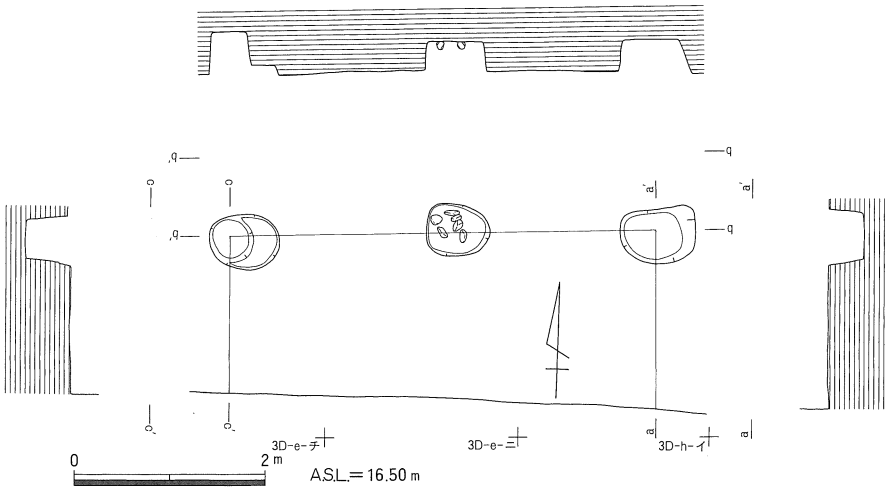
3D－g・h区と3E－a・b区に跨がり、Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSA2に囲まれた建物群（NSB15～18－4棟－）のなかで、もっとも上位において検出された総柱建物である。NSB15・17・18とそれぞれ重複していたが、柱穴の切りあいは見られない。NSD17の東岸に接している。南半を調査していないが、間口4柱間（7.60m）、棟方位N－7°30′－Wを測り、並行するNSB14と共に本調査中、最大規模を有する。

掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形（長径55～90cm、短径50～70cm、深さ40～65cm）をなし（隅丸方形様のものもある）。Ⅳ・Ⅴ層（遺跡基盤層）を深くまで掘り込んでいた。すべての掘方が平坦な底面に一段深い掘り込みを持つ。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）・黒灰色粘土等を覆土とし、一部細互層を形成していた。北東の隅柱には底面に密着して柱根を思わせる木片が残り、他の掘方断面における柱の抜き取り痕は総じて明瞭であった。東面の側柱は東方へ、西面では西方へ、その他は主に北方向へ引き抜かれたものと推定できる。礎板・根石等は一切検出されなかった。

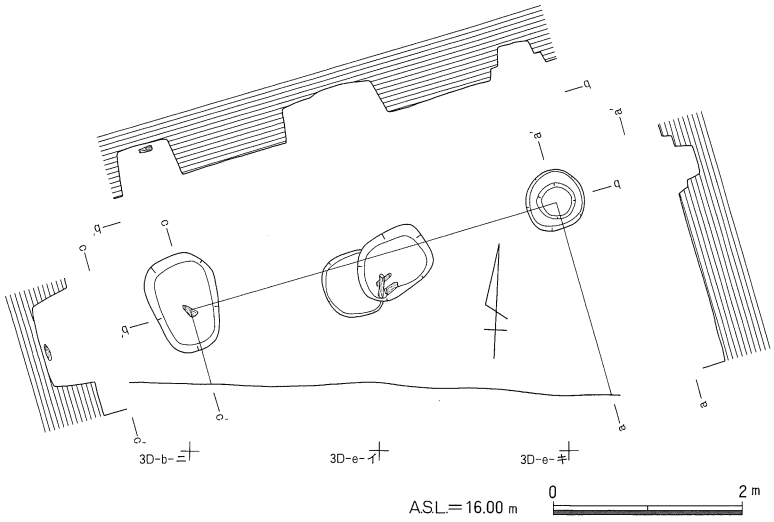
東面の側柱と重複する柱穴や、掘り方底面に複数の掘り込みが見られることから、建て替えが行われたと考えられる。

NSB17

北面の側柱のみ検出され大半は調査区外にある。脇柱は3D－h区の3層を約15cm掘り下げたとこ



第81図　ＮＳＢ19実測図



第82図　ＮＳＢ20実測図

ろ（２面）で確認できたが、側柱すべてを知りえたのはⅣ層直上近く（３面）に至ってからである。ＮＳＢ16・18と重複し、西の脇の柱はＮＳＤ17を切断していた。間口２柱間（4.70m）、梁行方位Ｎ－６°30′－Ｅを測る。

掘方の平面形は東脇柱が円形に近く、他は隅丸方形様（長径55～85cm、短径50～65cm、深さ22～65cm）を呈する。すべての底面に柱痕状の丸い凹み（径26～40cm）が認められ、最下面はわずかに丸みを帯びていた。凹みの深さに高低差が見られる。主に褐灰色粘土（Ⅲ層？）を覆土としていた。

ＮＳＢ18

ＮＳＢ17と同様に３Ｄ－ｈ区において北面の側柱のみ確認した。ＮＳＤ17、ＮＳＢ15～17、ＮＳＨ６と重複している。東の脇柱はⅢ層上面（１面）で検出できたが、他の掘方の輪郭を捉えたのはそれぞれＮＳＤ17、ＮＳＨ６を完掘し終えた後である。間口２柱間（3.70m）を測り、棟方位はＮ－２°00′－Ｗをなす。

掘方の規模は比較的小さく、平面円形ないし楕円形（長径35～50cm、短径35～50cm、深さ10～45cm）を呈していた。東脇柱は著しく浅く底面には壁に接してこぶし大礫（根固め礫？）が1個残存していた。中央柱の底面には柱痕状の丸い凹み（径20～22cm）が見られる。西寄りの掘方ほど深くなっている。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的覆土とするが、東脇柱では茶褐色砂質粘土が目立った。

ＮＳＤ17との前後関係は明確でないが、ＮＳＢ17とＮＳＨ６に先行して建てられていたと思われる。

ＮＳＢ19

３Ｄ－ｄ・ｅ・ｇ・ｈ区の境界付近でⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）確認できた。ＮＳＡ２の外側にありＮＳＢ20に東接している。ＮＳＨ６に切断され東脇柱はＮＳＤ17と重複していたが、その前後関係は明確でなかった。南半が調査区外に及ぶため全形を知りえていない。間口２柱間（4.40m）、棟方位Ｎ－３°00′－Ｗを測る。

掘方の平面形は円形ないし楕円形（長径65～80cm、短径55～60cm、深さ30～45cm）を呈する。西脇柱には一段深い掘り込みが見られ、覆土断面における柱の抜き取り痕（土壌の攪乱）は明瞭であった。また中央の柱からは底面（西寄り）に密着して、環状（径24～26cm）に配置されたこぶし大礫（根固め礫－６個－）が検出された。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）・黒灰色粘土を覆土とする。

ＮＳＨ６に比べ明らかに先行する掘立柱建物である。

ＮＳＢ20

３Ｄ－ｄ・ｅ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ19・21・22に隣接し、中央柱はＮＳＨ７に切断されていた。北面の側柱のみ検出され大半は調査区外にある。間口２柱間（4.00m）、棟方位Ｎ－19°00′－Ｗを呈する。

２段に掘られた東脇柱の掘方は平面円形、他は隅丸方形様（長径65～105cm、短径65～75cm、深さ30～45cm）をなし、丸太材をミカン割りした板材（礎板）が２箇所残っていた。褐灰色土（Ⅲ層？）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的覆土とし、東脇柱の断面には明瞭な柱の抜き取り痕（北方向へ引き抜く）が観察できた。

中央柱と重複する柱穴があり、あるいは建て直しが行われたものかもしれない。

ＮＳＢ21

３Ｄ－ａ・ｄ区のⅣ層上面近く（３面）で確認された。ＮＳＤ17から西方へ約10m離れ、ＮＳＤ19・20に囲まれた４棟の掘立柱建物群（ＮＳＢ21～24）に属している。東面は２柱間、他は間口３柱間（3.70m）×奥行３柱間（3.50m）を数え、棟方位Ｎ－５°00′－Ｗを測る。密に配された側柱からなる建物である。

掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形を呈する。規模に大小差がみられ（長径60～85cm・45～60cm、短径55～80cm・40～55cm、深さ40～90cm・20～60cm）、隅柱大きく深い。柱間尺は均一でない。多くの底面に複数の段差や柱痕状の丸い凹み（径16～27cm）が認められた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体する。覆土断面に細互層は見られず、掘方の内部全体が攪乱をうけたような状態（柱の抜き取り痕？）を呈していた。最下面近くに炭化粒や黒灰色粘土塊を集中させるものがある。柱根・礎板等は一切検出されなかった。

北西寄りにほぼ垂直に落ちる壁と平坦な底面を持つ平面隅丸長方形様（1.60×1.30×0.28m）の落ち込みが検出された。レンズ状に堆積した覆土は柱穴のそれと類似している。出土遺物はなく同一検出面には古墳時代中・後期の遺構も分布しているので、この落ち込みが確実に本建物に伴うとは断言

できない。

柱穴は複雑に重複しあい、数次にわたり建て替えが行われたと思われる。0.4～0.6m外側をＮＳＢ22とした柱列がめぐる。ＮＳＢ21・22を１棟と考え、四面庇付の建物や側柱と入側柱を２重に配列した建物を想定すべきかもしれない。

ＮＳＢ22

ＮＳＢ21を方形に取り囲む柱列を一応ＮＳＢ22として区別した。３Ｄ－ａ・ｄ区のⅣ層上面（３面）で確認されたが、検出面はＮＳＢ21に比べわずかに深い。南面は３柱間（5.25m）、西面は４柱間（4.90m）、東・北面は２柱間（4.70m・4.60m）を数え柱間尺にばらつきが見られる。棟方位Ｎ－６°00′－W前後を測る。

西側柱を除き掘方は総じて小規模であり、平面円形ないし楕円形（長径70～80cm・35～55cm、短径65～70cm・30～40cm、深さ40cm・25～40cm）を呈していた。底面に柱痕状の丸い凹み（径15～24cm）を持つものが多く、北面の中央・脇柱、西面の間柱２箇所には礎板が残っていた。礎板は丸太材を縦にミカン割りした板材（丸みのある樹皮面を残す）、２つ割りにした板材（丸味のある樹皮面を残す）で２つ割りしただけのものも見られる。ＮＳＢ21と同様に褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的な覆土としていた。

東側柱の外側0.70～1.00mに平行して並ぶ柱穴が３箇所ある。

ＮＳＢ23

３Ｃ－ｇ区と３Ｄ－ａ区のⅢ層をほぼ除去した後（３面）確認された。東・南側をＮＳＤ19・20に区画され、ＮＳＢ21・22・24と共に４棟の掘立柱建物群を構成している。ＮＳＢ24と重複しＮＳＢ21・22からは約10cm離れている。間口３柱間（3.05m）×奥行３柱間（東面２柱間3.40m）、棟方位Ｎ－２°30′－Wを測り側柱のみからなる。南面中央の柱間尺は広く出入口が施けられていたものかもしれない。

掘方の平面形は隅丸方形様を呈し、大規模な柱穴を２箇所含んでいる（長径80～90cm・40～60cm、短径55～85cm・35～45cm、深さ10～60cm・15～50cm）。底面に残る柱痕状の丸い凹み（７箇所）は深く、東面中央には礎板（？）が残っていた。著しく腐食していたが礎板は丸太材を縦に割った角材である。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的覆土とし、西面間柱における柱の抜き取り痕は明瞭であった。北方へ引き抜かれたものと推定される。掘方底面に密着して、数個、こぶし大礫が検出された。

ＮＳＢ24と直接重複する柱穴はなく、その前後関係は明らかでない。西面側柱の柱筋と北面間柱に重なって、浅く小規模（径25～34cm）な柱穴が２箇所ある。

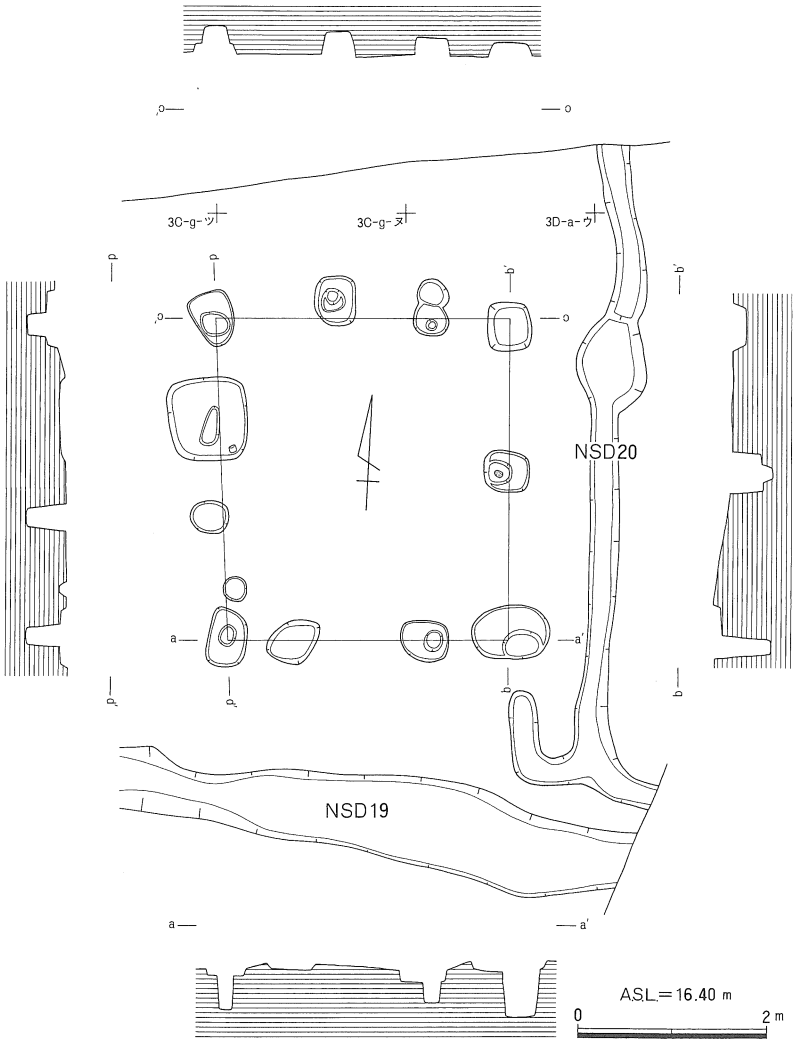
ＮＳＢ24

３Ｃ－ｇ区のⅣ層上面近くに至り（３面）確認できたが、ＮＳＢ23に比べ遺構検出面はわずかに高い。ＮＳＤ20の西側に位置する。南側柱はすべてＮＳＤ19により壊されていた。南面４柱間（4.00m）西面３柱間（3.90m）を数え、側柱を密に配した建物である。平面形は正方形に近い。北・東面では間柱を欠く。棟方位Ｎ－３°30′－Wを測る。

隅柱の掘方は平面隅丸方形様を呈し、間柱（平面円形ないし楕円形－長径35～40cm、短径30～35cm、深さ20～40cm－）に比べ大きい（長径　35～80cm、短径50～75cm、深さ25～45cm）。底面に柱痕状の丸い凹みを持つもの（４箇所）があり、北東隅柱には礎板を思わせる木片が残存していた。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的な覆土とする。南東の隅柱と重複して平面楕円形様（1.70×0.95×0.15m）をなす浅い落ち込みが認められた。



第83図　ＮＳＢ21・22実測図



第84図　ＮＳＢ23実測図

密に配された柱穴はあるいは建て替えの結果によるものかもしれない。

ＮＳＢ25

２Ｃ－ｂ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところで（２面）すべての柱穴を確認した。流路を転じ始めたＮＳＤ21の北方約５ｍに位置し、西側には土器溜め（ＮＳＸ１）がある。間口２柱間（2.50m）×奥行２柱間（2.35m）、棟方位Ｎ－12°00′－Ｗを測る。

小規模な総柱の建物と考えているが、東柱は中央になく東西の柱筋は通らない。また、東柱を通る南北の柱筋は東方に片寄っている。東西の中央柱はきわめて小さく間口が１柱間（1.60m）の建物と考え、東側柱を庇等の支柱と捉えるべきかもしれない。掘方の平面形は基本的に楕円形（長径20～45cm、短径15～40cm、深さ10～30cm）を呈し総じて小規模である。多くの側柱に（５箇所）、柱痕状の丸い凹み（径10～20cm）が認められた。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体とし、小礫をわずかに含んでいる。柱根・礎板等は一切検出されなかった。北面中央柱の掘方底面には須恵器、土師器細片が層をなして堆積していた。

柱穴に伴った須恵器杯蓋の受部形態は杯蓋Ａ３に比定されるものであったが、ＮＳＸ１は須恵器杯

蓋Ａ１・Ａ２、有台杯身Ａ１・Ｃ１等、主に編年時期の遡る器種により構成されている。ＮＳＸ１がＮＳＢ25に伴う土器溜めであるとすれば、当建物の存続時期は奈良時代前葉を大きく降らないことになる。

建て替えの痕跡は認められなかった。

ＮＳＢ26

３Ｃ－ｈ区のⅣ層上面（３面）において北面の側柱のみ検出できた。ＮＳＤ19の南側に位置し、建物の大半は発掘区外にある。柱穴はＮＳＩ12・13に覆われていた。間口３柱間（5.60m）を数え棟方位Ｎ－９°00′－W前後を測る。

掘方の平面形には楕円形（東より２箇所）と隅丸方形様（西寄り２箇所）があり、後者は深く平坦な底面に礎板を残していた。礎板は比較的厚手の板材で樹皮面を残すものを含んでいる。丸柱を縦割りにした転用材であろう。西脇から２番目の間柱では３点の礎板が十字状に組み重ねられていた。３番目の間柱は２段に掘られ柱痕状の深い凹み（径30～40cm）を有していた。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を覆土とし、覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭である。

重複する柱穴が見られ建て替えが行われた可能性もある。柱穴を覆うＮＳＩ13の出土土器には、奈良時代後葉の資料は少なかった。

ＮＳＢ27

３Ｃ－ｅ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）、発掘区の限界に沿う３箇所の柱穴（北側柱）を確認した。全形は明らかでない。ＮＳＥ２・ＮＳＩ13に挟まれＮＳＢ26から西方へ約９m離れている。間口２柱間（2.55m）、棟方位Ｎ－８°30′－W前後を測る。平面円形ないし楕円形（長径45～55cm、短径45～55cm、深さ10～15cm）をなす掘方は総じて小さく浅い。平坦な底面に柱痕状の凹み・柱根・礎板等は一切認められなかった。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする。

ＮＳＢ28

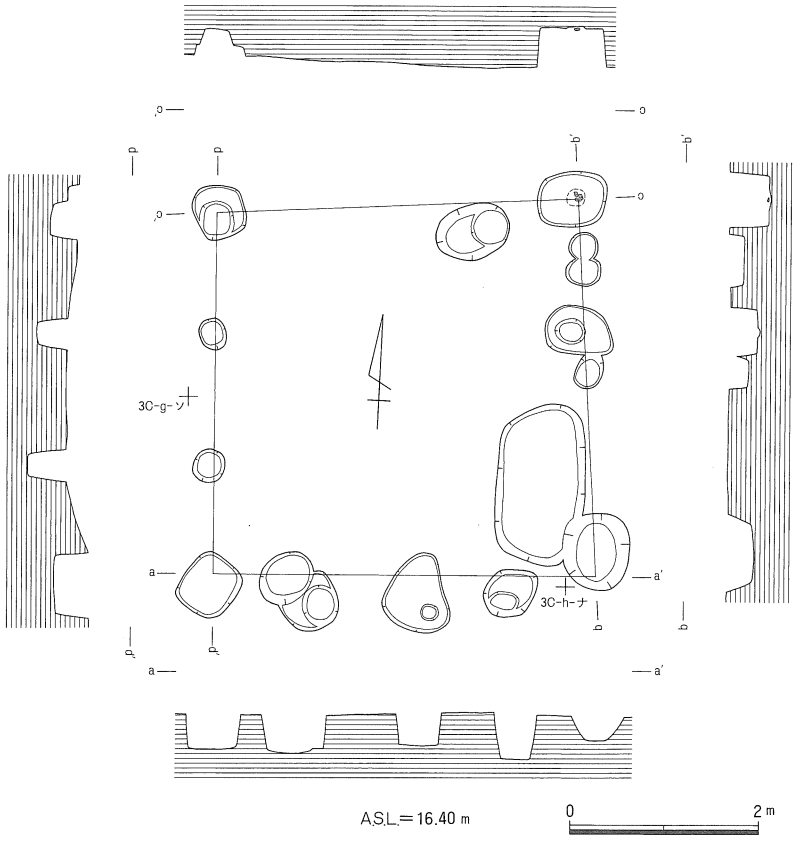
３Ｃ－ａ・ｂ区のⅢ層２面において西側柱は確認できたが、他の柱穴の所在を知りえたのはⅤ層（礫層）上面（３面）に至ってからである。東柱にあたる柱穴とＮＳＩ14が重複し（新旧関係は明確でない）、南側にＮＳＩ15・16が隣接している。北側柱が発掘区外に位置するため奥行は明らかでないが、間口２柱間（3.70m）、棟方位Ｎ－10°00′－Wを測る総柱の建物である。

掘方の平面形には隅丸方形様のものもあるが、円形ないし楕円形（長径45～55cm、短径40～50cm、深さ10～30cm）を基本とし、側柱を除き他は総じて浅い。底面に２箇所、柱痕状の丸い凹み（径12～18cm）が認められた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）からなり、凹み内には黒灰色粘土塊が堆積していた。西側柱の柱間尺は均一でない。重複しあう柱穴は見られなかった。

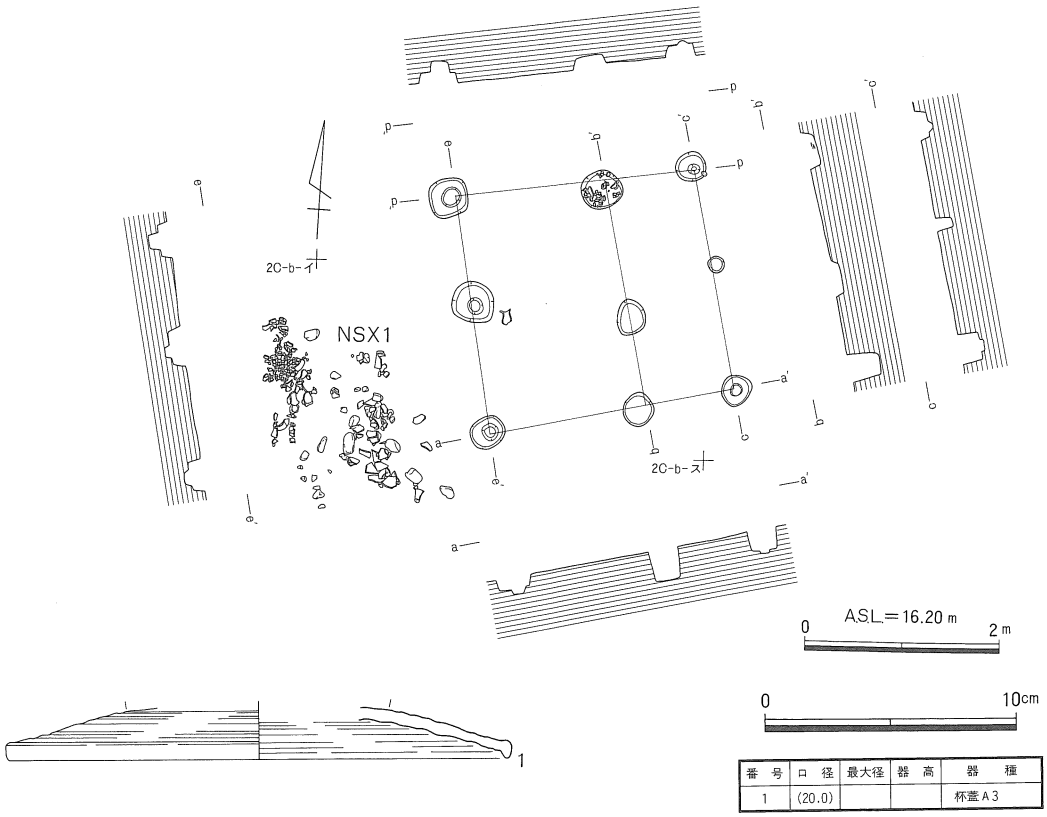
ＮＳＢ29

２Ｂ－ｅ・ｇ・ｈ区に跨がり、Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＤ22の南岸に接している。ＮＳＢ30・31と重複し、東側にはＮＳＩ17・18がある。ＮＳＤ21・22に挟まれた５棟の掘立柱建物群（ＮＳＢ29～31・36・37）に属している。間口１柱間（5.80m）×奥行２柱間（3.00m）、棟行方位Ｎ－18°30′－Wを測る。

精査したものの南・北面に間柱は認められなかった。桁行の長い特異な柱穴配置を持つ建物である。掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形（長径30～60cm、短径30～50cm、深さ15～40cm）を呈し、東西側柱の柱穴規模に大小差が見られた。東側柱は総じて小さく底面には柱痕状の丸い凹み（径10～16cm）を有していた。間柱に比べ脇柱の掘方・柱痕状の凹みは深い。一方、西面の側柱は浅く平坦な底面をなしていた。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体的な覆土とし、東側柱では凹み内に黒灰色

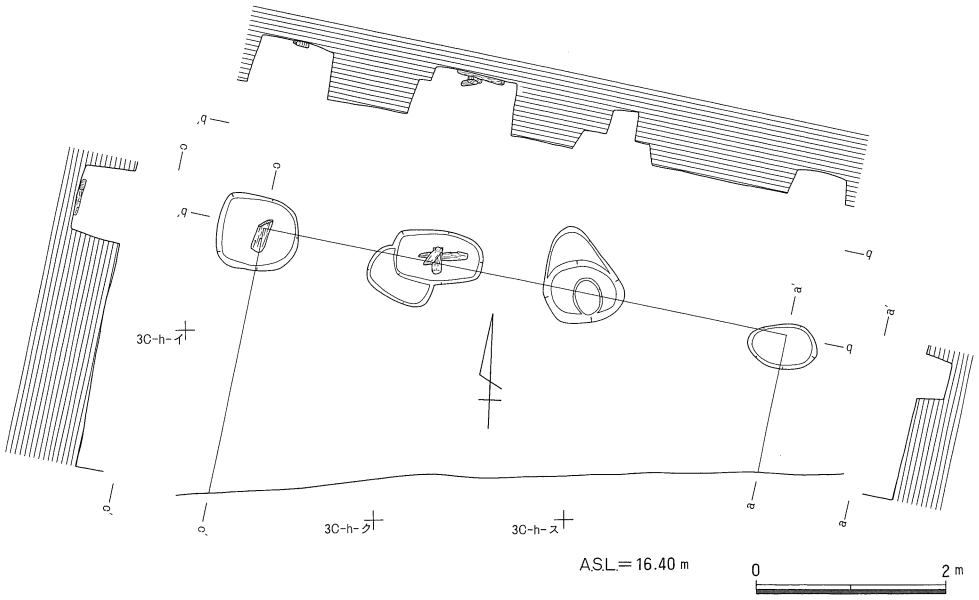


第85図　ＮＳＢ24実測図

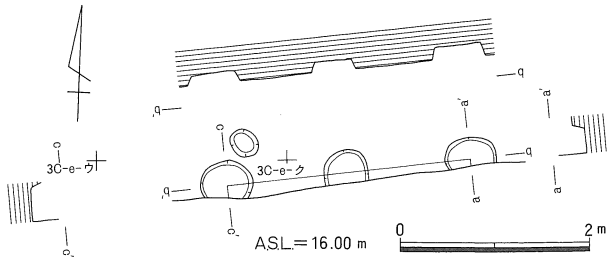


番　号	口　径	最大径	器　高	器　種
1	(20.0)			杯蓋Ａ3

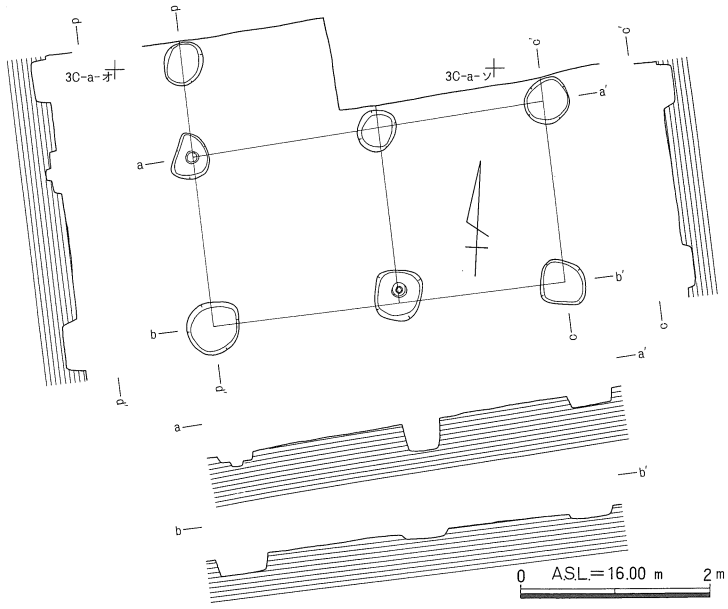
第86図　ＮＳＢ25実測図・柱穴出土土器実測図



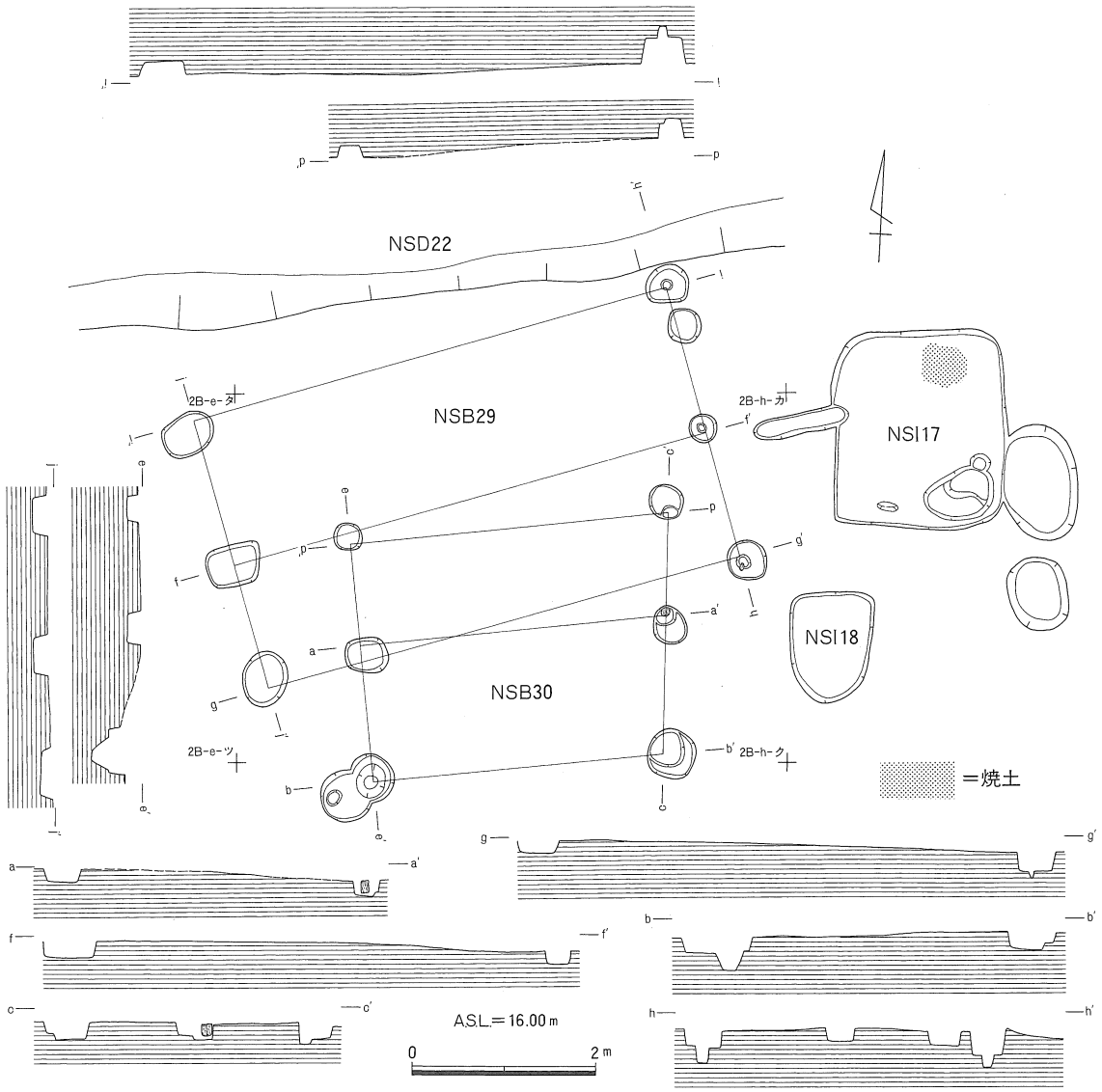
第87図　ＮＳＢ26実測図



第88図　ＮＳＢ27実測図



第89図　ＮＳＢ28実測図



第90図　ＮＳＢ29・30実測図

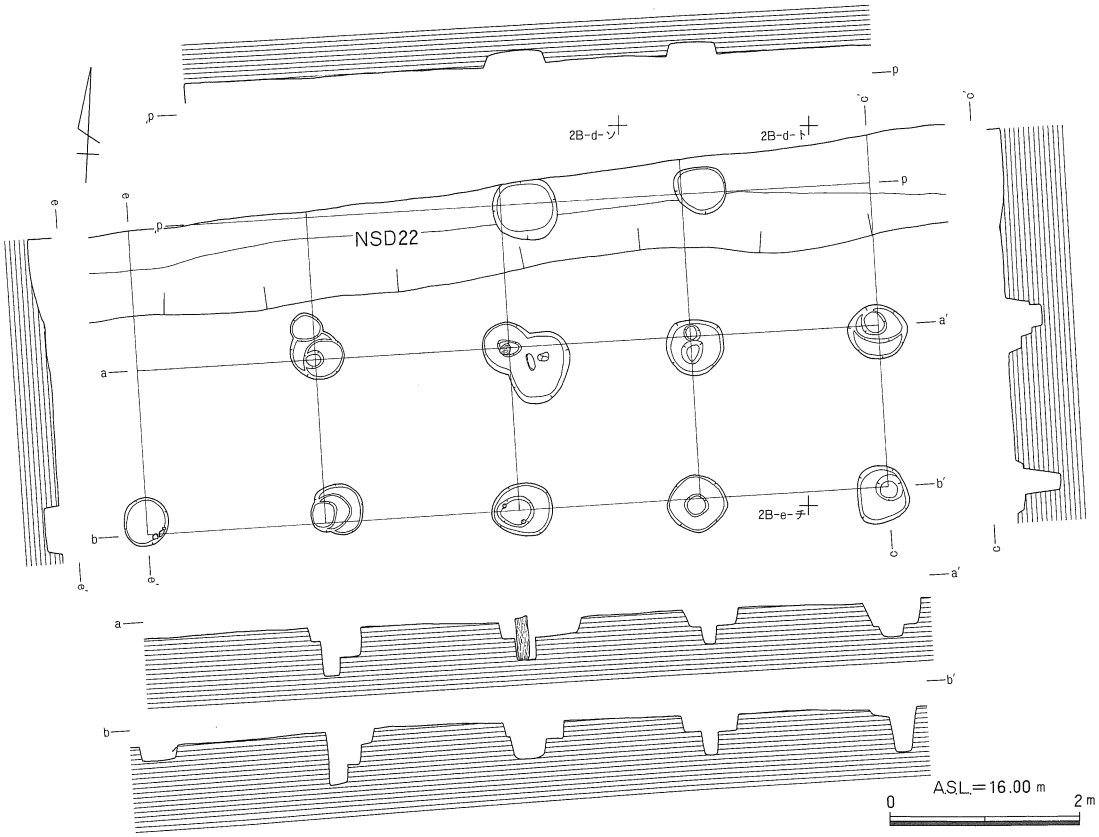
粘土塊と小礫が集中していた。柱根・礎板等は検出されなかった。

ＮＳＢ30・31と直接重複する柱穴はない。検出面はＮＳＢ30に比べわずかに高い。

ＮＳＢ30

２Ｂ－ｅ・ｈ区のⅢ層をほぼ除去した後（３面)、すべての柱穴を確認した。ＮＳＢ29・ＮＳＩ17・18と重複・隣接し、ＮＳＤ21・22のほぼ中間に位置している。間口１柱間（北面3.45m、南面3.15m）×奥行２柱間（2.60m）を数え、ＮＳＢ29と類似した柱穴配置を持つ。棟行方位Ｎ－８°30′－W前後を測る。

東西の側柱は平行せず北面に比べ南面が狭い。掘方は平面楕円形（長径30～55㎝、短径30～50㎝、深さ15～35㎝）を呈し、北面の側柱はわずかに小さかった。南東の隅柱は２段に掘られ他の掘方底面に３箇所柱痕状の丸い凹み（径14～37㎝）が認められた。東西隅柱の凹みは壁にゆるやかな傾斜を持ち、深くまで掘り込まれていた。ＮＳＢ29Ｓ同様、砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体的な覆土とする。東面の中央柱には、腐食した柱根が残っていた。重複する柱穴が１箇所ある。



第91図　ＮＳＢ31実測図

共通する柱穴配置と検出面の高低差を評価すれば、ＮＳＢ30からＮＳＢ29へ建て直しが行われた可能性も指摘できる。

ＮＳＢ31

２Ｂ－ｄ・ｅ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ29と重複しＮＳＤ22により一部の柱穴が壊されている。北半が発掘区外におよぶため全形は明らかでない。間口４柱間（7.80m）を数え、ＮＳＤ21の北側に分布する掘立柱建物群（ＮＳＢ25・29～31・36・37－６棟－）のなかで最大規模を有する総柱の建物である。棟行方位Ｎ－６°30′－Ｗを測る。

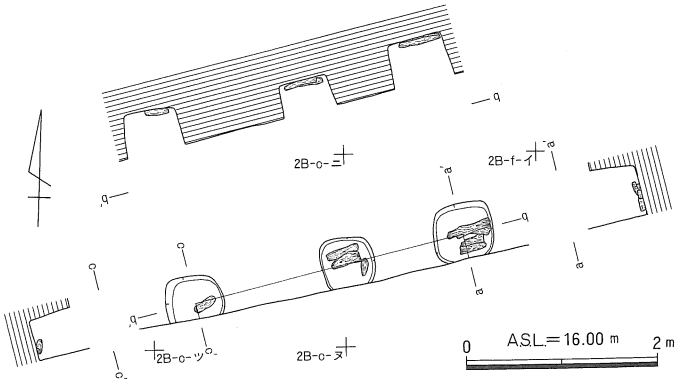
掘方は平面円形ないし楕円形（長径50～65cm、短径50～60cm、深さ15～55cm）をなし、底面に８箇所柱痕状の丸い凹み（径17～39cm）を有していた。南西の隅柱は著しく浅い。西面の間柱を欠いていた。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とし凹み内には黒灰色粘土塊が集中していた。覆土中に土器細片、こぶし大礫を若干含む。束柱にあたる掘方の凹み内から柱根が出土し、それと重複する柱穴底面には根固め礫を思わせる楕円形の礫が２箇所残存していた。柱根は底端部近くで細くくびれている。掘方断面（覆土）に見られる柱の抜き取り痕は明瞭で、南側柱の抜き取り方向は西方ないし東方と推定できる。

重複しあう柱穴や同じ掘方内に複数の凹みが認められ、建て直しが行われたと考えている。

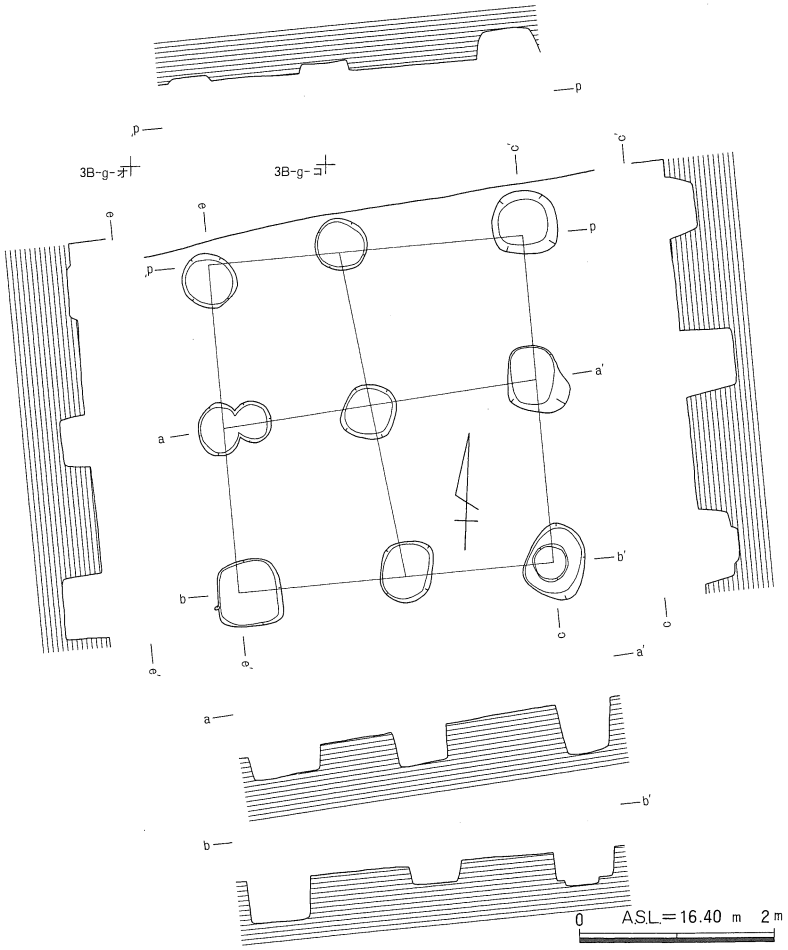
ＮＳＢ32

Ⅲ層をほぼ除去した後（３面）、２Ｂ－ｃ・ｆ区の発掘区限界近くで北面の側柱のみ確認できた。ＮＳＤ21から南方へ約４ｍ離れている。間口２柱間（2.85m）、棟行方位Ｎ－16°00′－Ｗ前後を測る。

掘方は平面隅丸方形様（長径55～65cm、短径55～60cm、深さ35～45cm）をなし、平面規模は比較的



第92図　ＮＳＢ32実測図



第93図　ＮＳＢ33実測図

均一であった。脇柱はわずかに深い。

すべての掘方から礎板が検出された。礎板の多くは丸柱を縦割りにした板（角）材（長20.0～48.0cm、7.0～17.0cm、厚2.0～6.5cm）で、面取りされた柱の表面を残しているものがある。また壁材を長方形に切断し、転用したと思われる幅広の（25.0×36.0×5.5cm）礎板を１点含んでいた。東脇柱

および中央柱では平坦な底面に、これら板（角）材を３～４点、長辺を接するように敷き並べていた（一部２段に積み重ねる）。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）・黒灰色粘土からなり、覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭である。

ＮＳＢ33

３Ｂ－ｇ・ｈ区のⅢ層上面（１面）ですべての柱穴を確認した。ＮＳＢ28・34のほぼ中間に位置し、南西方約６ｍにはＮＳＨ９がある。間口２柱間（3.20m）×奥行２柱間（3.40m）、棟方位Ｎ－７°30′－Ｗを測る。総柱からなり、平面形は正方形に近い。束柱を通る柱筋は逆時計回りの方向へ若干ねじれていた。

掘方は平面形ないし楕円形（長径55～70cm、短径45～65cm、深さ10～55cm）を基本とする。底面の高さにはばらつきが見られた。平坦な底面が一般的であるが、南東の隅柱には丸く浅い落ち込み（径36～39cm）が認められた。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体的な覆土としわずかに小礫を含む。柱根・礎板等は一切検出されなかった。

建て直しの痕跡は顕著でない。

ＮＳＢ34

３Ｂ－ｅ区のＶ層（礫層）上面近く（３面）に至り初めてその所在に気づいた。ＮＳＨ９、ＮＳＢ35に挟まれＮＳＢ33からは西方へ約12m離れている。３箇所の柱穴が平安時代後期に掘られた井戸状遺構（ＨＳＥ３）に破壊されていた。ＫＳＢ１と重複している。間口２柱間（2.45m）×奥行２柱間（3.00m）を数え、南北方向に長い総柱の建物と考えている。東側から隣接・分布する複数の柱穴が検出でき、間口はさらに広がる可能性もある。棟行方位Ｎ－２°00′－Ｗを呈する。

掘方は平面円形ないし楕円形（長径55～70cm、短径45～60cm、深さ10～55cm）をなし、平坦な底面の高さは一定していない。特に西面の側柱は著しく浅かった。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とし、深くまで掘り込まれた掘方の覆土断面には明瞭な柱の抜き取り痕が観察できる。西面の南脇柱と中央柱の底面に根固め礫を思わせるこぶし大礫が残っていた。

西面の中央柱にあたる掘方から、須恵器高盤Ｂ（完形）が１点出土している。

ＮＳＢ35

３Ｂ－ｂ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ34の西方約６ｍに位置している。

間口２柱間（3.35m）×奥行２柱間（2.90m）、棟行方位Ｎ－５°30′－Ｗを測り、間口がわずかに広い総柱の建物である。

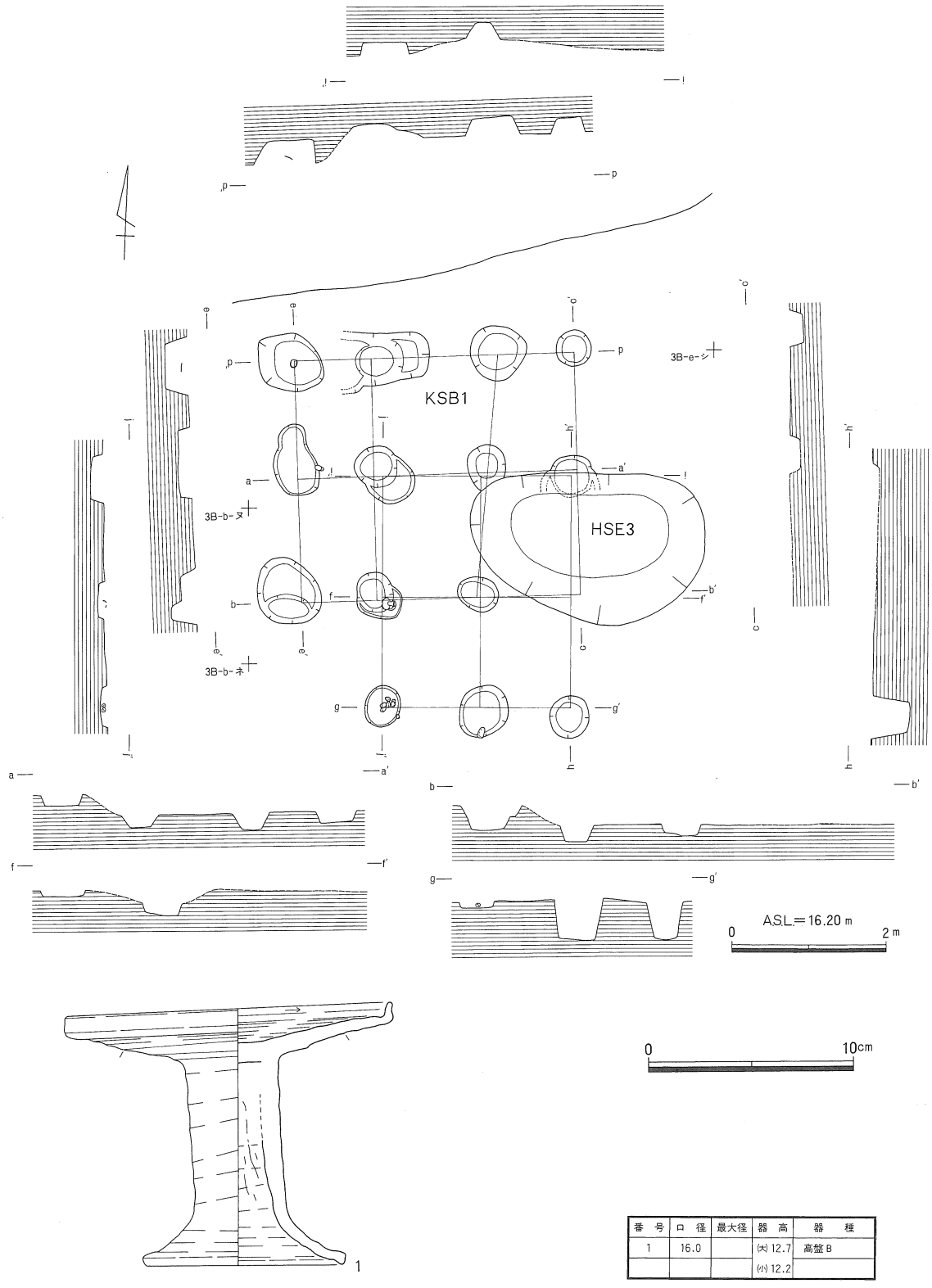
掘方は平面円形ないし楕円形（長径60～85cm、短径50～70cm、深さ10～20cm）をなし総じて浅い。底面はすべて平坦に掘られていた。西面の中央柱はやや大きく外方に張り出している。柱根・礎板等は一切検出されなかった。覆土となる褐灰色粘土（Ⅲ層）と黒灰色粘土は整った細互層を形成しており、柱の抜き取り痕（土壌の攪乱）は明瞭でない。

建て直し等の痕跡は認められなかった。南東の隅柱から砥石が１点出土している。

ＮＳＢ36

２Ａ－ｈ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で数箇所の柱穴を検出したが、全形を知りえたのはＶ層（礫層）上面近く（３面）に至ってからである。ＮＳＨ８、ＮＳＩ19・20の西方約10mに位置し、ＮＳＢ37と重複している。ＮＳＤ21の北岸までは約２ｍしかない。間口２柱間（3.15m）×奥行２柱間（3.50m）、棟方位Ｎ－５°00′－Ｗを測り総柱からなる。

掘方は総じて小規模で平面円形ないし楕円形（長径30～45cm、短径25～40cm、深さ５～20cm）をな



番　号	口　径	最大径	器　高	器　種
1	16.0		(大) 12.7	高盤B
			(小) 12.2	

第94図　ＮＳＢ34実測図・柱穴出土土器実測図

す。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体とし、柱穴により数個のこぶし大礫を含んでいた。底面に凹凸はなくすべて平坦に掘られている。検出面を異にするが（１面）、東側柱に並行する柱穴列（３箇所）が確認できる（ＮＳＢ37に伴う可能性もある）。

３箇所の柱穴がＮＳＢ37と直接重複していたが、覆土はきわめて類似しており新旧関係を捉えることはできなかった。重複しあう柱穴の検出面の高低差を評価すれば、ＮＳＢ37が後出的な建物となる。両建物の規模、柱穴配置は類似し、ＮＳＢ36を若干西方へずらしＮＳＢ37へ建て直しが行われたと解することもできよう。

ＮＳＢ37

２Ａ－ｈ区のⅢ層を約15㎝掘り下げたところ（２面）で西面中央柱・南面脇柱を除き、その所在を確認した。ＮＳＢ36と重複している。間口２柱間（3.15m）×奥行２柱間（3.50m）、棟方位Ｎ－５°00′－Ｗを測る。建物の規模・柱穴配置はＮＳＢ36となんら変わるところがない。

掘方は平面円形ないし楕円形（長径35～45㎝、短径30～40㎝、深さ15～30㎝）をなし、ＮＳＢ36に比べわずかに大きく深くなる。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする覆土も大変よく似ていた。平坦な底面に２箇所柱痕状の丸い凹み（径14～22㎝）が認められ、南西隅柱および西面の中央柱には小礫・こぶし大礫（根固め礫）が集中していた。東側柱に平行する３箇所の柱穴（列）がある。

検出面の高低差を根拠にし、ＮＳＢ36に比べ後出的な建物と判断している。

第３節　柵　列（ＮＳＡ）

ＮＳＡ１

２Ｈ－ｃ区～３Ｈ－ｂ区にかけて直線的に並ぶ（Ｎ－23°30′－Ｗ）総数11箇所の柱穴がある。多くがⅢ層上面（１面）で確認できた。確認長24.65ｍを測りさらに南北方へのびていると思われる。ＮＳＤ４にほぼ平行し、ＮＳＢ２・３・４の東側を区画している。

すべて平面円形ないし楕円形（長径30～60㎝、短径30～60㎝、深さ10～35㎝）の掘方を持つ。その規模は一定していない。平坦な底面に２箇所、柱痕状の丸い凹み（径６～14㎝）が認められた。南半の柱間尺は比較的均一であるが北半ではばらつきが目立ち、底面の高さにも顕著な高低差が見られた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする。

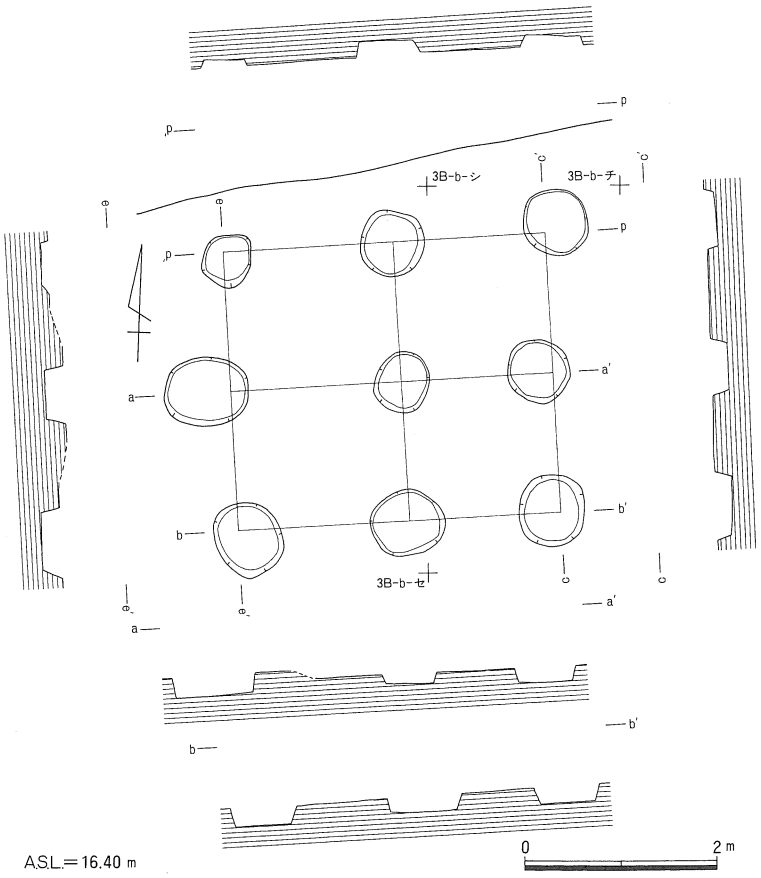
断定できないが一応掘立柱塀を想定している。

ＮＳＡ２

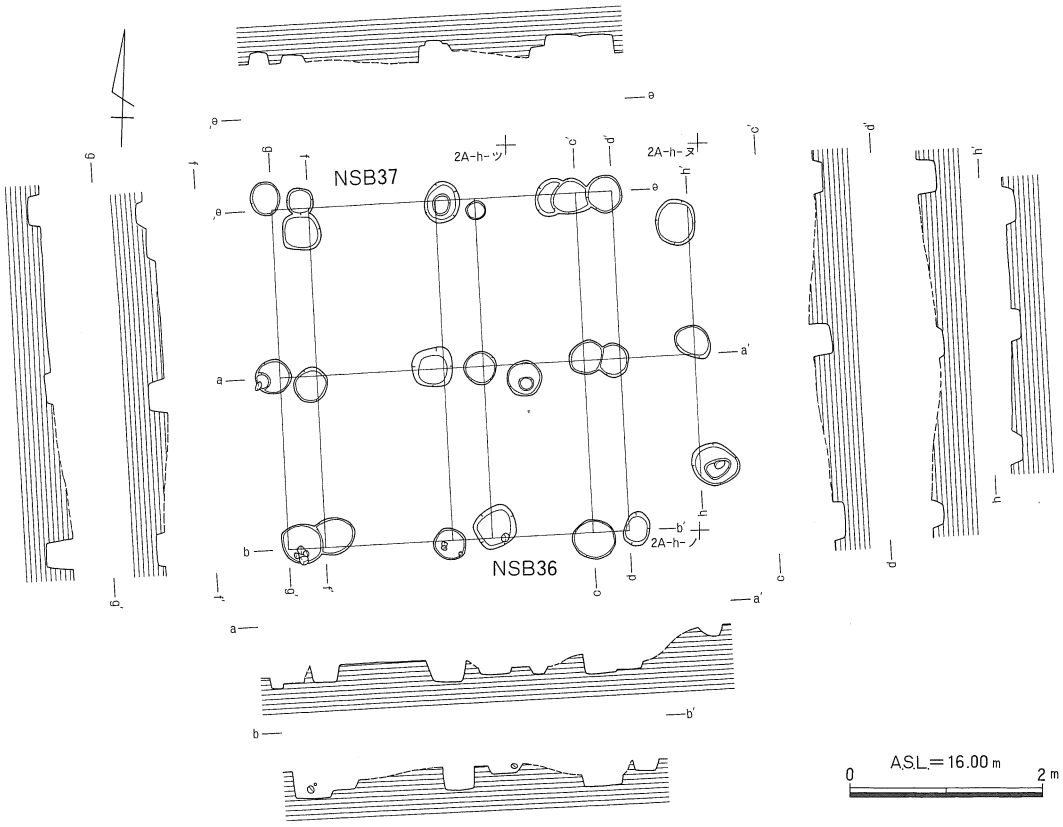
３Ｄ－ｇ・ｈ・３Ｅ－ａ・ｂ区に跨がり、４棟（ＮＳＢ15～18）の掘立柱建物群をコ状に取り囲む柱穴列である。Ⅲ層をほぼ除去した後（３面）検出された。東西面はさらに南へのび発掘区外におよんでいる。北面の柱穴列はＮＳＢ14とほぼ平行し、ＮＳＢ15・16との間を通り抜けている。西面３箇所の柱穴はＮＳＤ17、ＮＳＨ６と重複していた。その新旧関係は明確でない。西側に近接してＮＳＢ19、ＮＳＥ２、ＮＳＩ９が分布している。

掘方を持ち平面形には隅方形様と円・楕円形（長径40～80㎝、短径45～90㎝、深さ10～60㎝）をなすものがある。規模、深さは一定していない。特に北面西半の掘方（４箇所）は深く、底面にこぶし大礫（根固め礫？）を数個残していた。平坦な底面を基本とするが、小規模な掘方には柱痕状の丸い凹み（径16～32㎝）が認められる。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的な覆土とし、小礫・黒灰色粘土塊を混入していた。

柱穴列の位置・形状から見て、ＮＳＢ14・16・19等の建物群に伴う掘立柱塀と考えるのが妥当であろう。北面東半の柱間尺が広い箇所は、あるいは門かもしれない。重複する柱穴が４箇所見られる。



第95図　ＮＳＢ35実測図



第96図　ＮＳＢ36・37実測図

第４節　竪穴住居（ＮＳＨ）

ＮＳＨ１

３Ｇ－ａ・ｄ区のⅢ層をほぼ除去した後（３面）検出された。西半は調査区外にあり、ＮＳＤ８および複数の平安時代以降の溝（ＨＳＤ12・19等）に切断されているため全形は明らかでない。直線状をなす壁は南半で屈曲し、平面隅丸長方形様をなすと思われる。確認部分の長径5.10m、短径4.50m、深さ0.25～0.30mを測り、棟方位はＮ－50°30′－W前後を呈する。

平坦な底面の西寄りがわずかに高く規則的に並ばないが、床面に４箇所柱穴が認められた。柱穴の平面形は基本的に円形ないし楕円形（長径30～50cm、短径30～45cm、深さ15～25cm）をなし、平面隅丸方形様の南西端の柱穴には礎板を思わせる木片が残っていた。当竪穴住居とは無関係なのかもしれない。灰褐色粘土・暗茶褐色粘土・青灰色粘土がレンズ状に堆積し、その上面を有機質が強く炭化粒を多量に含んだ暗灰色粘土と炭化物の薄層が被っていた。柱穴内には灰褐色粘土が落ち込んでいた。焼土・壁溝は検出されなかった。

炭化物層より下位から出土した土器片には須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ａ２・Ａ３・Ｄ３、小型杯身Ｂ２、有台皿Ａ３、無台皿Ｂ１・Ｄ２、壺Ｅ、土師器甕Ｄ３・Ｄ４がある。墨書土器を３点含み、内１点（須恵器無台杯身Ｄ３）はＮＳＤ９の出土破片と接合した。器種組成は近時期にまとまらないが、奈良時代後葉まで降る須恵器杯類は比較的少ない。

ＮＳＨ２

２Ｆ－ｇ区の調査区外に位置している。発掘終了後、調査区周辺に張りめぐらされた土止め用の板をはずしたところ、初めて土層断面（Ⅲ層下位）に突き刺さった土器群の所在に気づいた。遺構のほぼすべてがバイパス予定地外にありそこにはすでに厚さ２m程の客土がなされていたため、平面調査が実施できずいわゆるタヌキ掘りを行った。土器群は60×85cmの範囲内から重複・密集した状態で出土し、その一括性（同時性）は高いと思われる。周辺の土層断面にはⅣ層内へ落ち込むⅢ層が観察でき立ちあがりが壁状を呈することから、竪穴住居に伴う土器群と判断した。住居の構造等は一切不明である。

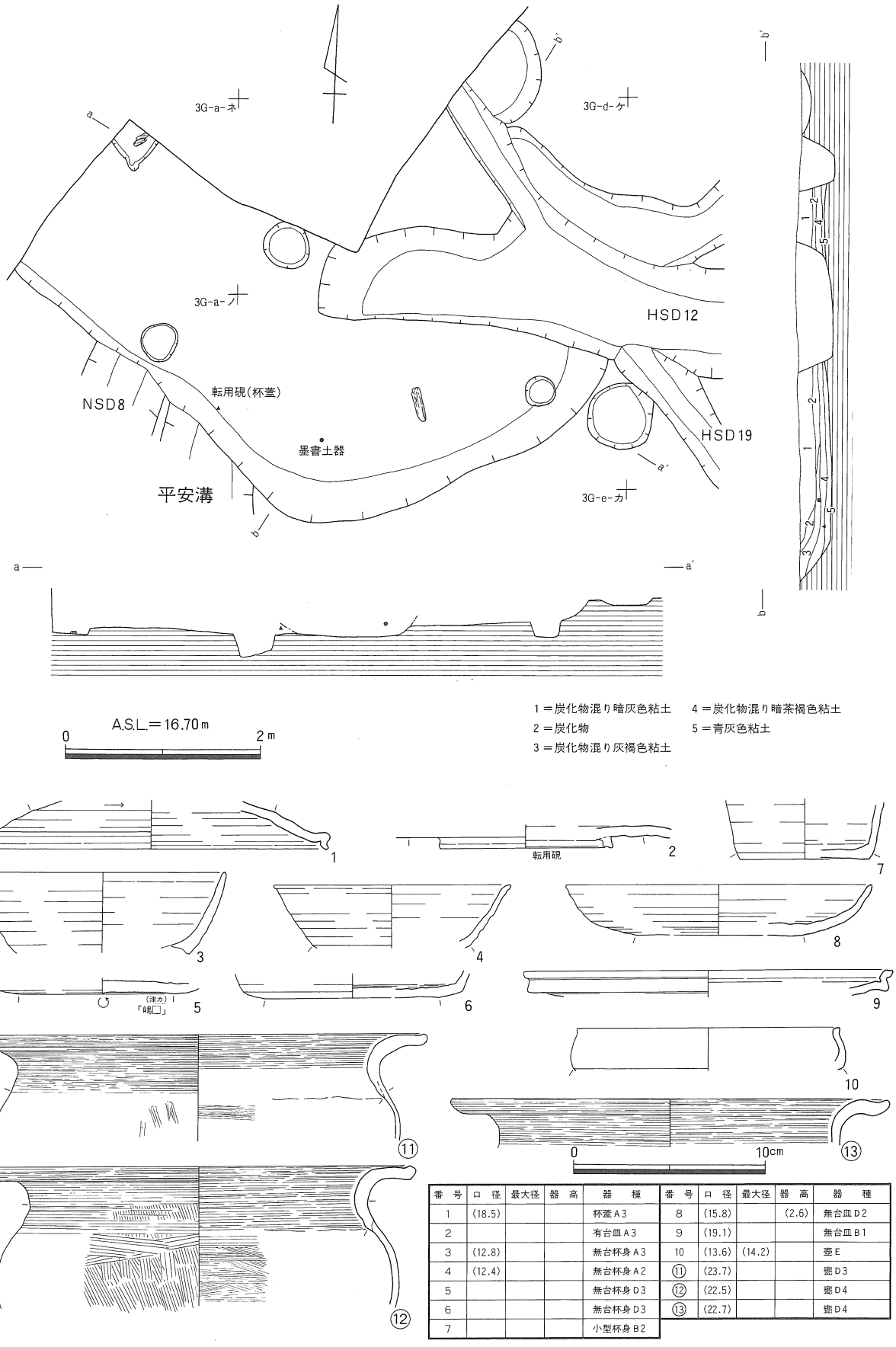
器種組成は須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ｄ３、土師器無台杯身Ｃ２、甕Ｄ３を主体とし（他に須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｅ、無台杯身Ｃ・Ｄ１・Ｄ２・Ｄ４、小型杯身Ａ２、有台皿Ｃ、無台皿Ｂ１、高盤Ａ・Ｂ、陶臼、甕Ｂ２土師器無台杯身Ｃ３・Ｄ・Ｅ・Ｆ、無台皿Ｂ１・Ｂ２、甕Ａ・Ｄ４、鍋Ａ・Ｂ２がある）、５点の墨書土器、ミニチュア土器、砥石を含んでいた。形成時期は奈良時代後葉と考えられる。

ＮＳＨ３

２Ｆ－ｄ・ｇ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＨ２から西方へ約10m離れ、ＮＳＨ２・４のほぼ中間に位置している。大半が調査区外にあり未調査のため断定できないが、平面形は隅丸方形様をなすと思われる。東西幅2.65m、棟方位Ｎ－13°00′－W前後を測る。壁の立ちあがりが明瞭な小竪穴住居である。

南壁の中央がわずかにくぼむ。住居内から４箇所、住居外から２箇所、また壁と重なる柱穴が１箇所検出された。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差（長径50～60cm・35cm、短径40～55cm・30～35cm、深さ10～20cm）を有している。総じて浅く住居外の柱穴には平坦な底面に柱痕状の丸い凹み（径18～24cm）が認められた。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とし、柱穴の底面近くには炭化粒が集中していた。焼土等は認められなかった。

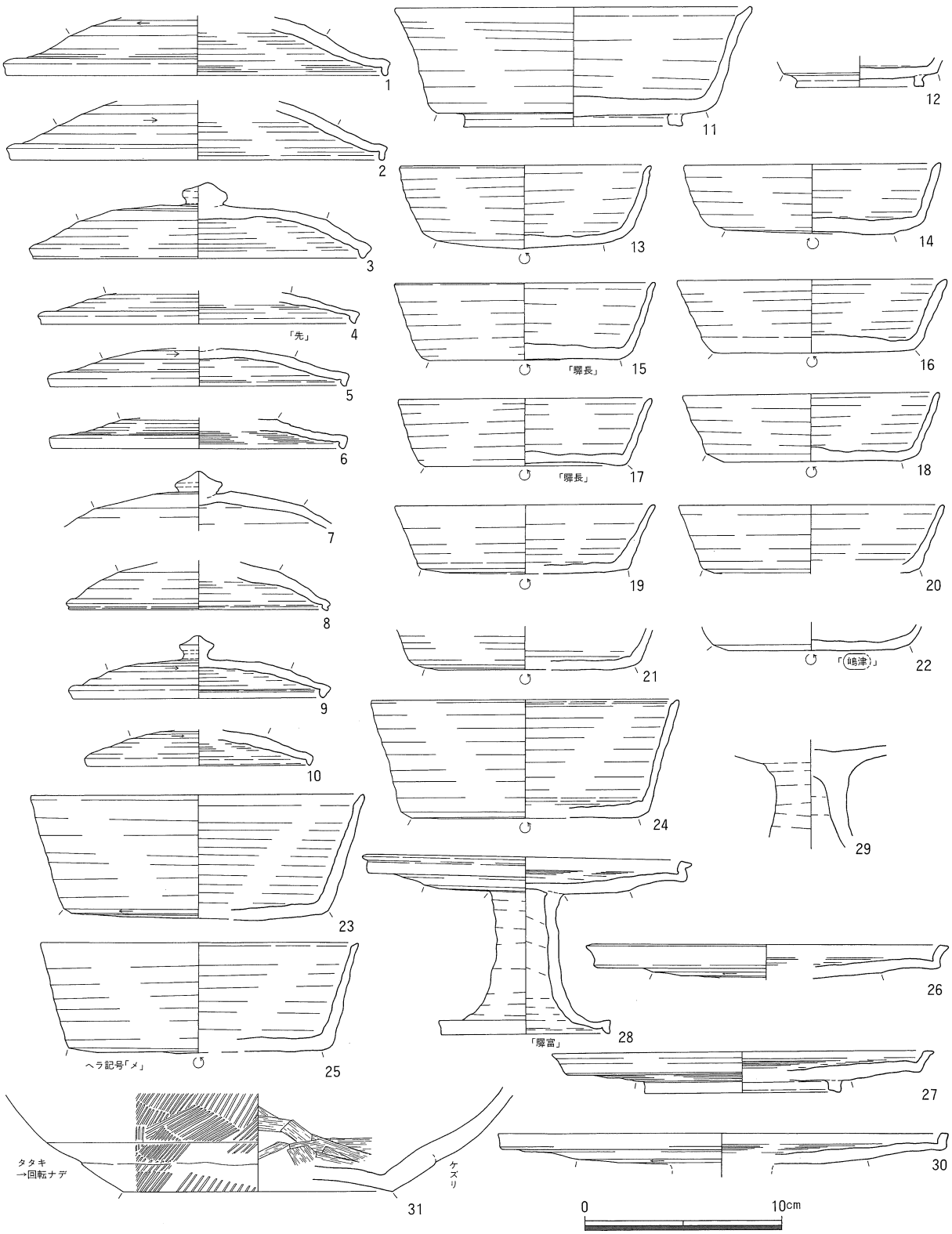
出土土器は須恵器杯蓋Ａ３を主体とし、次いで須恵器杯蓋Ａ２が多い（他に須恵器有台杯身Ａ３・



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(18.5)			杯蓋A3
2				有台皿A3
3	(12.8)			無台杯身A3
4	(12.4)			無台杯身A2
5				無台杯身D3
6				無台杯身D3
7				小型杯身B2

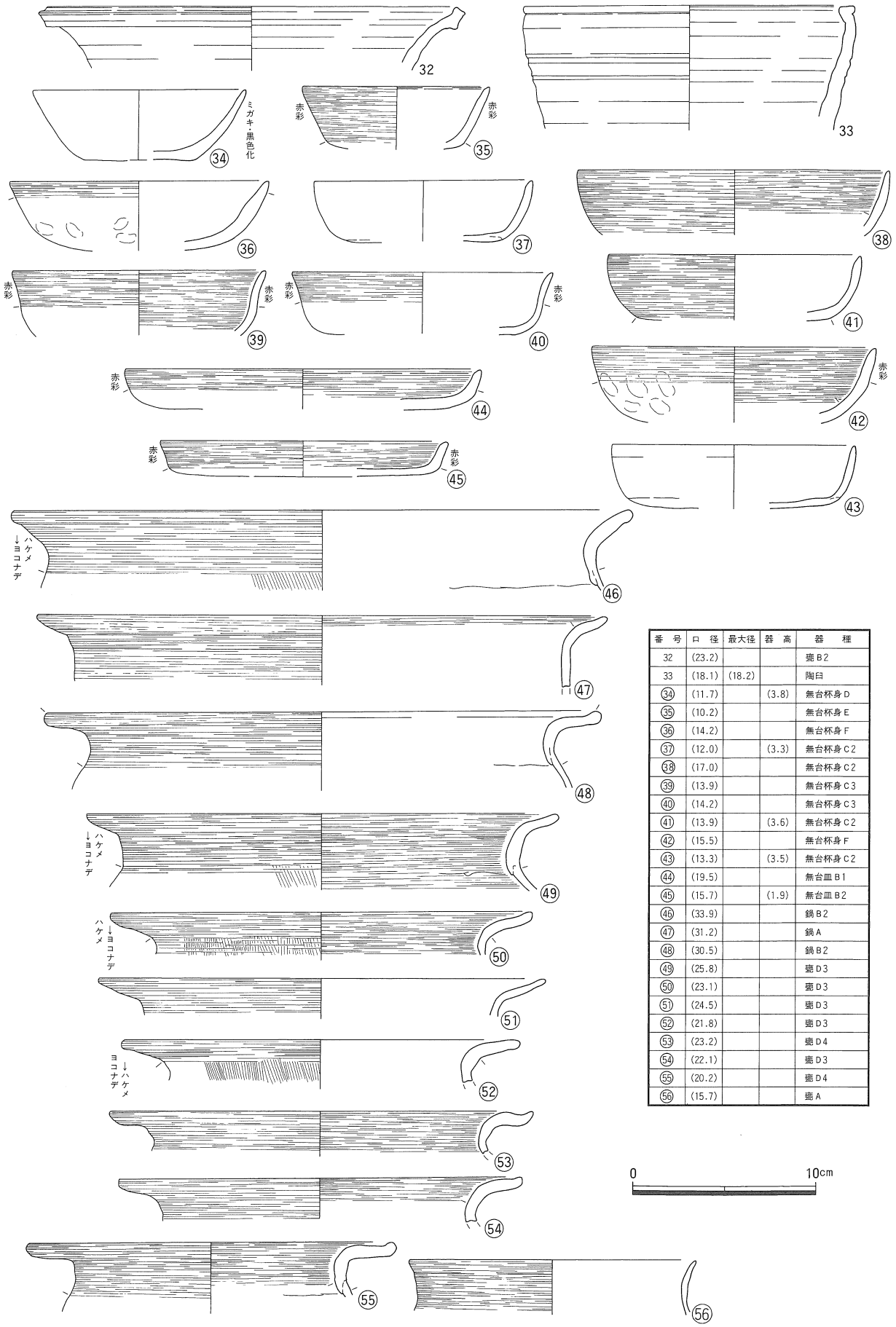
番号	口径	最大径	器高	器種
8	(15.8)		(2.6)	無台皿D2
9	(19.1)			無台皿B1
10	(13.6)	(14.2)		壺E
⑪	(23.7)			甕D3
⑫	(22.5)			甕D4
⑬	(22.7)			甕D4

第97図　ＮＳＨ１実測図・出土土器実測図



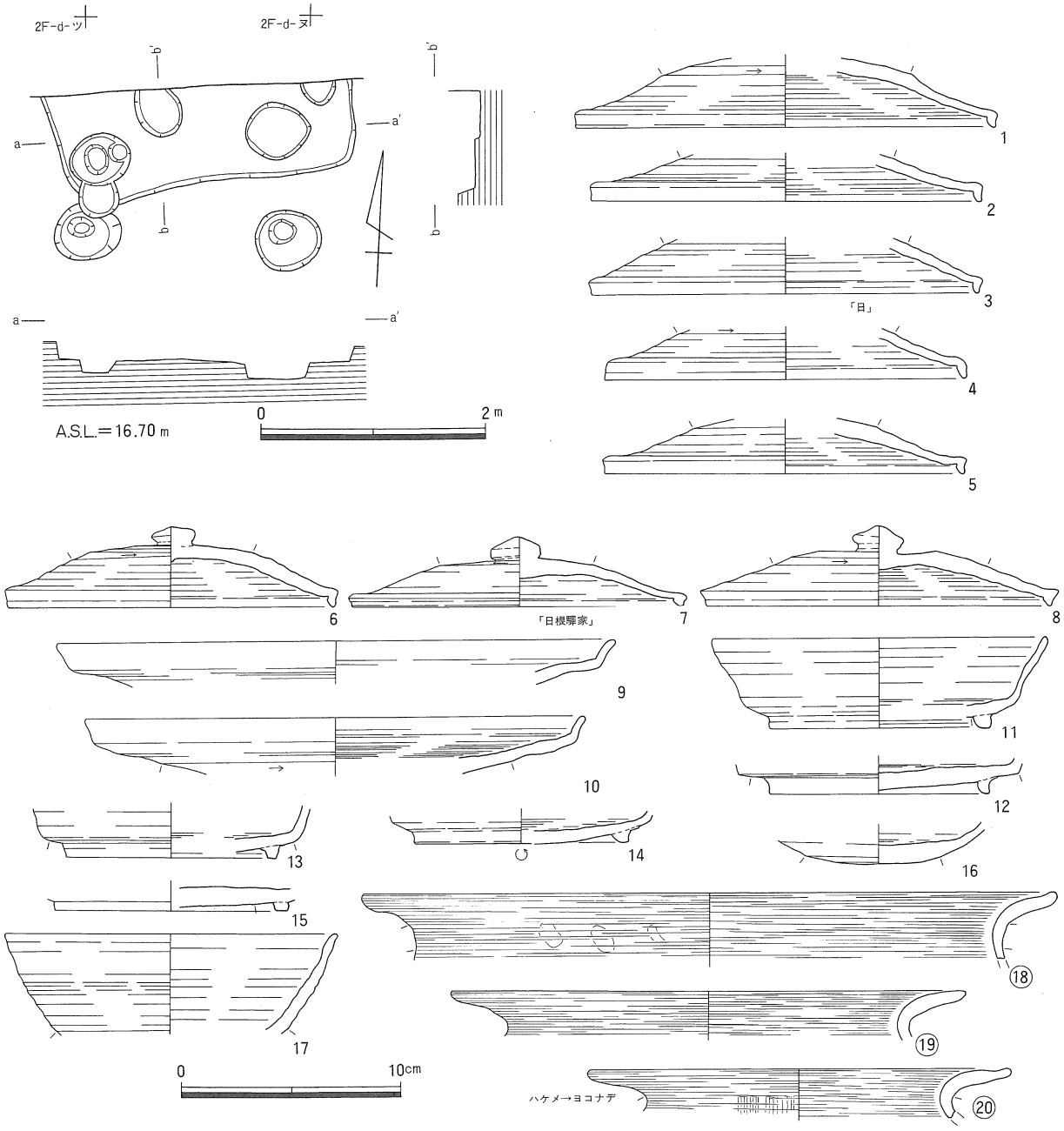
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(19.5)			杯蓋A3	9	13.2		3.2	杯蓋A3	17	12.8		3.4	無台杯身D2	25	(16.0)		(5.6)	無台杯身D3
2	(19.2)			杯蓋A3	10	(11.6)			杯蓋A3	18	12.9		3.4	無台杯身D3	26	(18.3)			無台皿B1
3	17.3		3.8	杯蓋A2	11	18.1		6.0	有台杯身E	19	(13.1)		(3.5)	無台杯身D1	27	(19.3)		(2.1)	有台皿C
4	(16.2)			杯蓋A3	12				小型杯身A2	20	(13.4)			無台杯身D3	28	16.7		9.0	高盤B
5	(15.3)			杯蓋A3	13	(12.7)		4.2	無台杯身C	21				無台杯身D3	29				高盤A
6	(15.1)			杯蓋A3	14	13.0		3.5	無台杯身D4	22				無台杯身D3	30	(22.7)			高盤B
7				杯蓋A3	15	13.1		3.9	無台杯身D3	23	(16.8)		(6.2)	無台杯身D3	31				甕B2
8	(13.3)			杯蓋A3	16	13.6		3.7	無台杯身D3	24	(15.2)		(6.0)	無台杯身D3					

第98図　ＮＳＨ２出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種
32	(23.2)			壺B2
33	(18.1)	(18.2)		陶臼
㉞	(11.7)		(3.8)	無台杯身D
㉟	(10.2)			無台杯身E
㊱	(14.2)			無台杯身F
㊲	(12.0)		(3.3)	無台杯身C2
㊳	(17.0)			無台杯身C2
㊴	(13.9)			無台杯身C3
㊵	(14.2)			無台杯身C3
㊶	(13.9)		(3.6)	無台杯身C2
㊷	(15.5)			無台杯身F
㊸	(13.3)		(3.5)	無台杯身C2
㊹	(19.5)			無台皿B1
㊺	(15.7)		(1.9)	無台皿B2
㊻	(33.9)			鍋B2
㊼	(31.2)			鍋A
㊽	(30.5)			鍋B2
㊾	(25.8)			甕D3
㊿	(23.1)			甕D3
(51)	(24.5)			甕D3
(52)	(21.8)			甕D3
(53)	(23.2)			甕D4
(54)	(22.1)			甕D3
(55)	(20.2)			甕D4
(56)	(15.7)			甕A

第99図　ＮＳＨ２出土土器実測図（２）



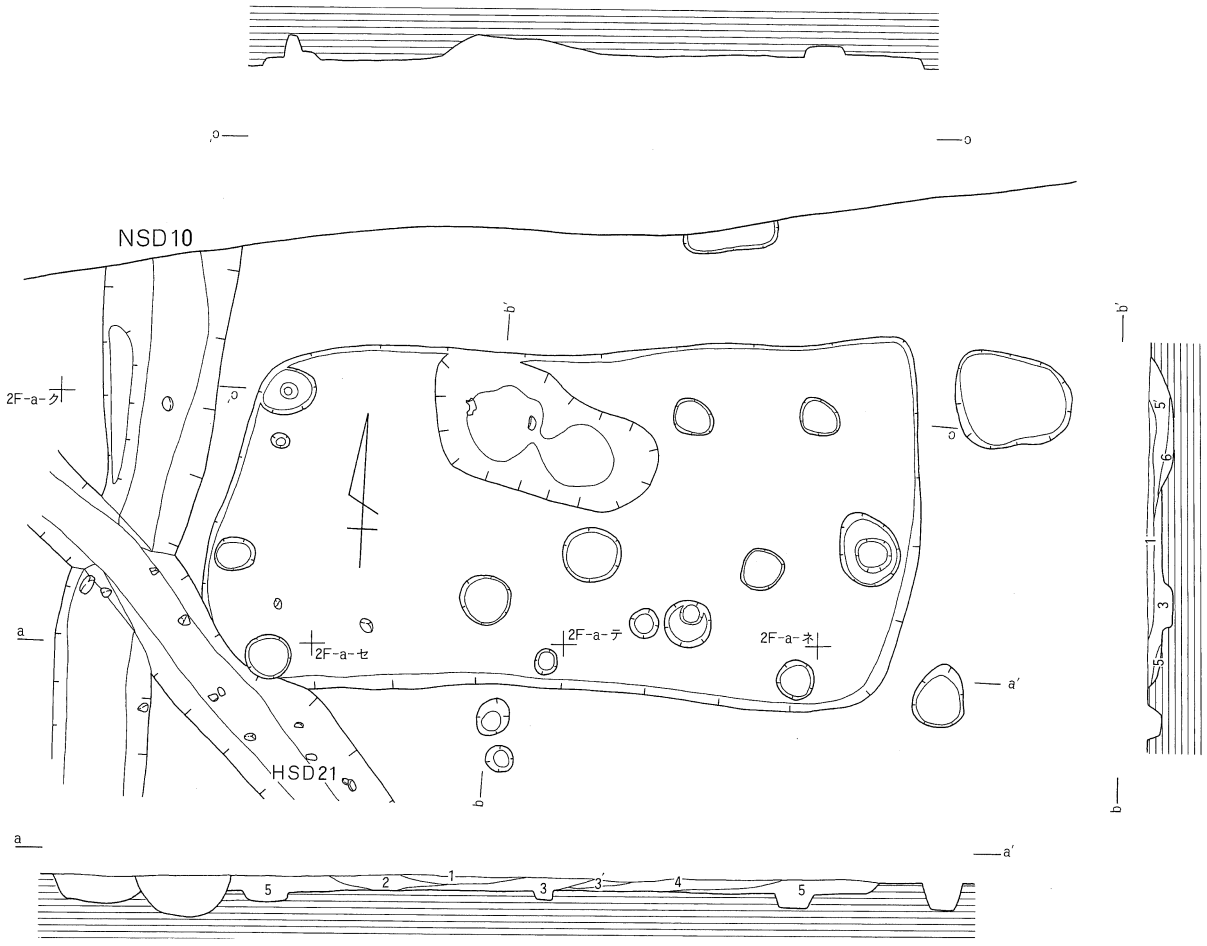
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(19.2)			杯蓋A3	6	15.1		3.7	杯蓋A3	11	(15.3)			有台杯身A3	16				無台杯身A1
2	(17.8)			杯蓋A3	7	15.3		3.2	杯蓋A2	12				有台杯身C3	17	(15.1)			無台杯身A1
3	(17.9)			杯蓋A3	8	16.3		3.7	杯蓋A2	13				有台杯身C3	⑱	(31.6)			甕D3
4	(16.4)			杯蓋A2	9	(25.5)			無台皿C	14				有台杯身A3	⑲	(23.4)			甕D2
5	(16.5)			杯蓋A3	10	(22.8)			無台皿C	15				有台杯身E	⑳	(19.2)			甕D2

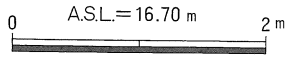
第100図　ＮＳＨ３実測図・出土土器実測図

Ｃ３・Ｅ、無台杯身Ａ１、無台皿Ｃ、土師器甕Ｄ２・Ｄ３がある。墨書土器２点を含んでいた。）。奈良時代中葉以前に遡る可能性が大きい。

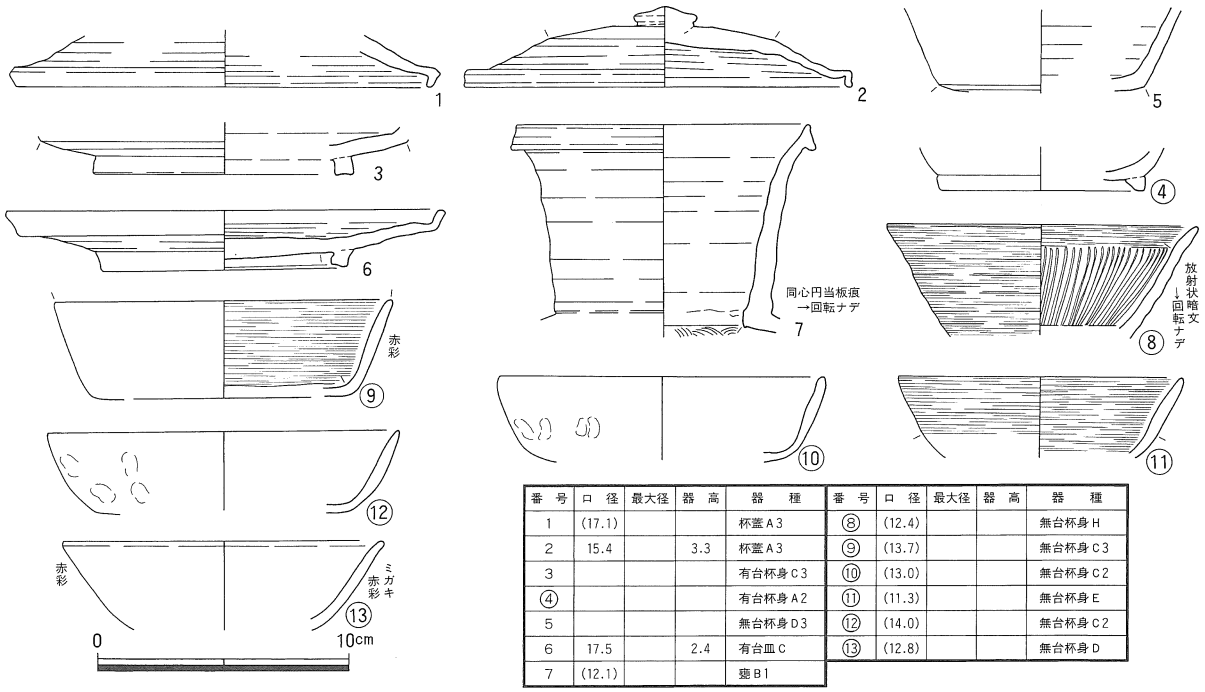
ＮＳＨ４

２Ｆ－ａ・ｄ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＢ５の柱穴を切断し、平安時代以降の溝





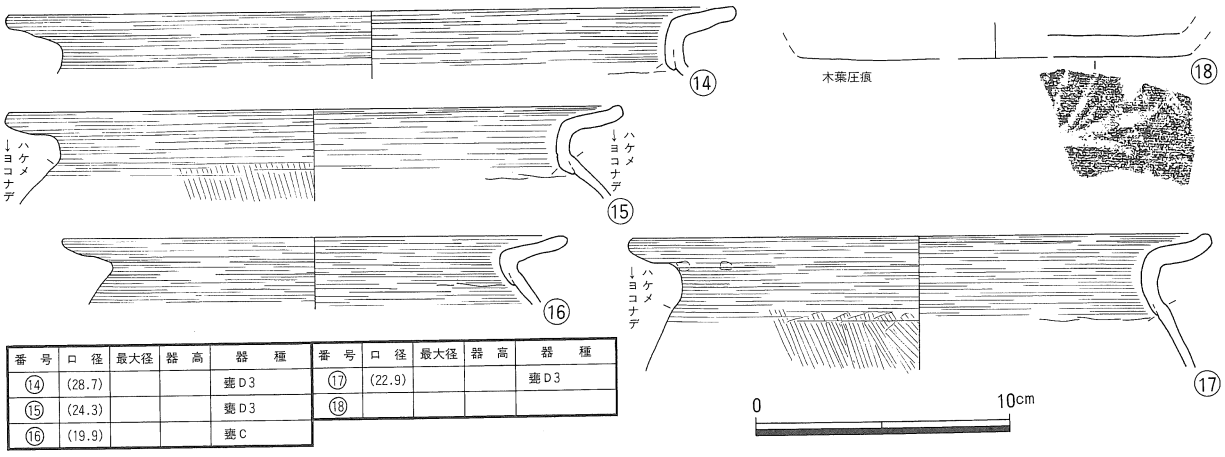
1＝炭化物混り灰色粘土
2＝炭化物(多)混り青灰色粘土
3＝炭化物混り青灰色粘土
4＝炭化物(少)混り青灰色粘土
5＝炭化物(少)混り黒色有機質粘土
6＝青灰色粘土



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(17.1)			杯蓋A3
2	15.4		3.3	杯蓋A3
3				有台杯身C3
④				有台杯身A2
5				無台杯身D3
6	17.5		2.4	有台皿C
7	(12.1)			甕B1

番号	口径	最大径	器高	器種
⑧	(12.4)			無台杯身H
⑨	(13.7)			無台杯身C3
⑩	(13.0)			無台杯身C2
⑪	(11.3)			無台杯身E
⑫	(14.0)			無台杯身C2
⑬	(12.8)			無台杯身D

第101図　ＮＳＨ４実測図・出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種
⑭	(28.7)			甕D3
⑮	(24.3)			甕D3
⑯	(19.9)			甕C

番号	口径	最大径	器高	器種
⑰	(22.9)			甕D3
⑱				

第102図　ＮＳＨ４出土土器実測図（２）

（ＨＳＤ21）により西南隅が壊されている。ＮＳＨ３から西方へ約10m離れＮＳＤ10を挟んでＮＳＨ５と隣接していた。東西壁に丸みを持つが平面形は隅丸長方形に近い。東西長5.10～5.60m、南北幅2.60～2.90m、深さ0.10m、棟方位Ｎ－88°00′－Ｅを測る。

壁は比較的緩やかに傾斜し平坦な床面に移行していた。住居内に14箇所、東・南壁の外側に４箇所、計18箇所の柱穴が認められた。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差（長径30～60cm・15～30cm、短径30～50cm・10～25cm、深さ10～20cm）がある。これらの柱穴は一見不規則に分布しているが、東西壁に沿って各３箇所柱穴が並び南壁のほぼ中央に小柱穴が見られる。東側中央柱の底面にはさらに一段深い掘り込みが認められた。他に柱痕状の丸い凹み（径12～18cm）を有する柱穴が２箇所ある。東西壁の中央柱は外方へ張り出し直接棟木を受ける棟持柱と推定できる。長方形穴主柱形式をなし切妻屋根の構造であろう。北寄りほぼ中央の床面が平面楕円形様（長径1.90m、短径0.95m、深さ0.15m）をなして落ち込んでいた。焼土等は一切検出されなかった。

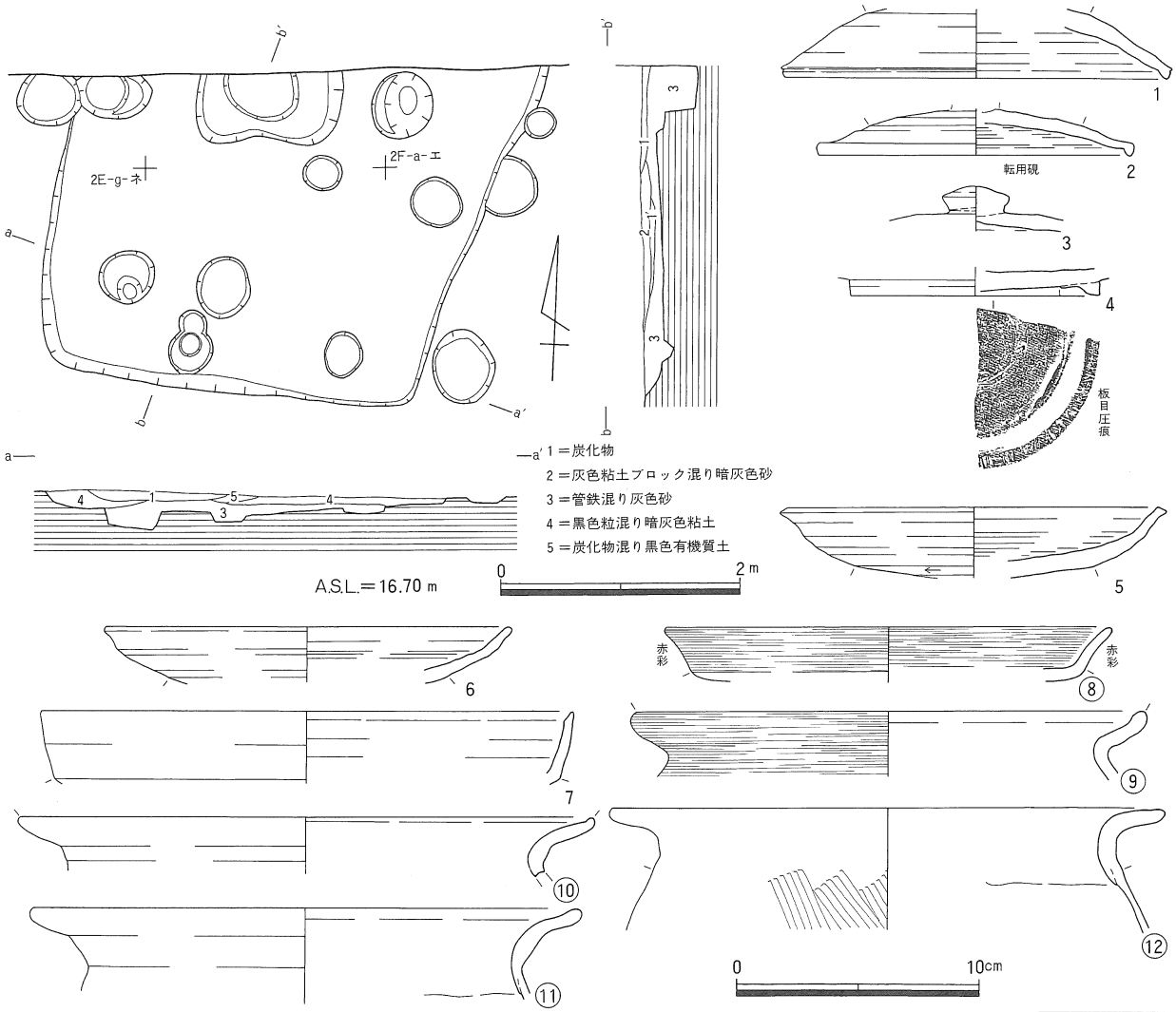
覆土はレンズ状に堆積した青灰色粘土・灰色粘土・黒色有機質粘土からなり、上層ほど多量の炭化物（粒）を混入している。若干こぶし大礫を含んでいた。

出土遺物には土器、転用硯（杯蓋）、ミニチュア土器、碁石状石製品がある。土器は土師器甕Ｄ３の破片が目立つ他、主体となる器種は明確でない（須恵器杯蓋Ａ３、有台杯身Ｃ３、無台杯身Ｄ３、有台皿Ｃ、甕Ｂ１、土師器有台杯身Ａ２、無台杯身Ｃ２・Ｃ３・Ｄ・Ｅ・Ｈ、甕Ｃがある）。覆土の状況はＮＳＨ５と類似している。

ＮＳＨ５

２Ｅ－ｇ・２Ｆ－ａ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＤ10を挟んでＮＳＨ４の西側にあり、２Ｅ区～２Ｇ区にかけてほぼ直線状に並ぶ４棟の竪穴住居群（ＮＳＨ２～５）のなかでもっとも西寄りに位置している。ＮＳＤ11までの距離は約６ｍである。北端を調査していないが、東西幅3.20～3.50m、深さ0.05～0.15m、棟方位Ｎ－12°30′－Ｅ前後を測り、平面形は隅丸方形様を呈すると思われる。

北側に向うほど幅は広く、西側床面がわずかに低くなっていた。明瞭な屈曲部を持たず壁は緩やかに立ちあがっていた。住居内に９箇所、住居外東西側に４箇所、計13箇所の柱穴が検出された。平面円形ないし楕円形をなす柱穴は、大小差（長径40～65cm・25～40cm、短径35～40cm・20～30cm、深さ５～20cm）を有している。壁からわずかに離れ住居内を方形様にめぐる４箇所の柱穴が抽出できる。



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.0)			杯蓋A1	4					7	(21.9)			無台皿A2	⑩	(23.8)			甕D3
2	(13.1)			杯蓋A2	5	(15.9)			無台皿D2	⑧	(18.4)			無台皿A	⑪	(22.8)			甕D3
3				杯蓋A2	6	(16.8)			無台皿D2	⑨	(21.3)			甕C	⑫	(22.9)			甕C

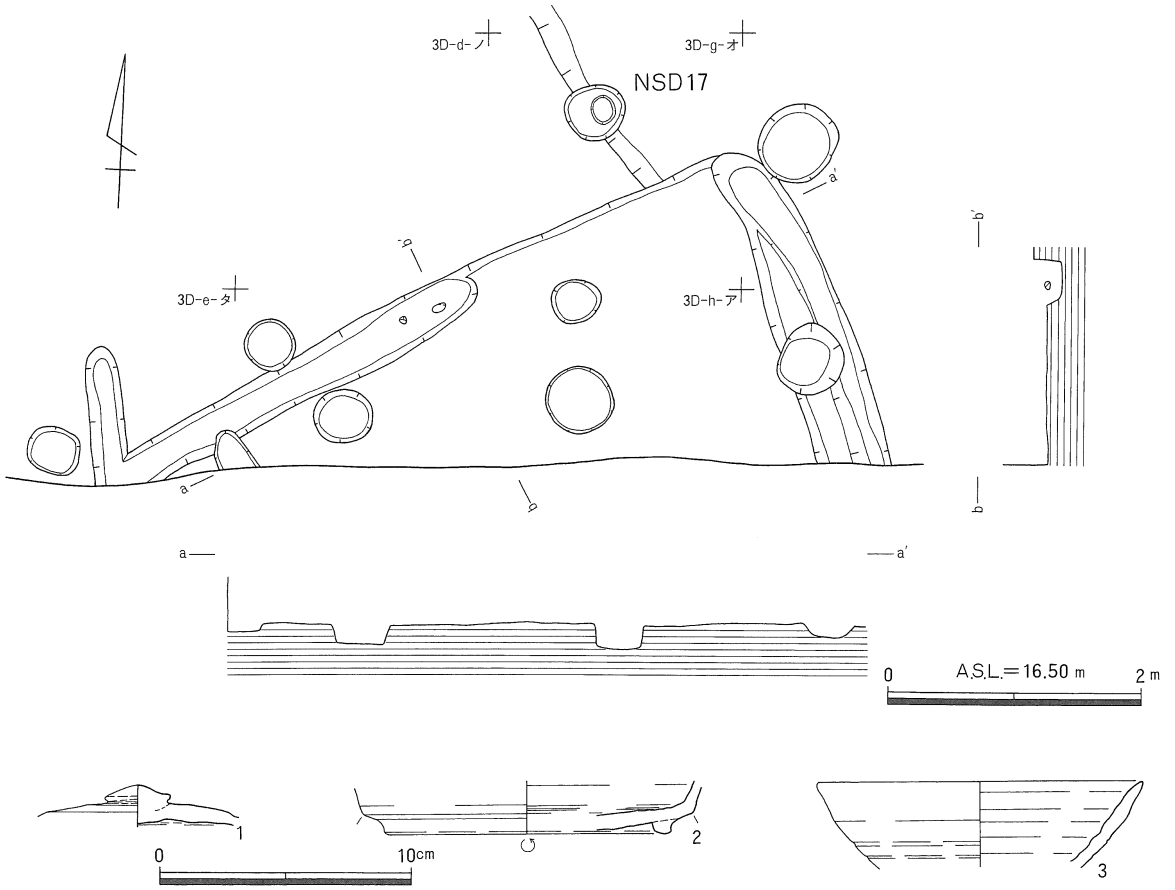
第103図　ＮＳＨ５実測図・出土土器実測図

方形４主柱形式と考えているが、未調査部分を含め東西側（長辺）に本来３箇所の柱穴が並んでいたとすれば、南壁のほぼ中央に外方へ張り出す柱穴が見られる点、ＮＳＨ４ときわめて類似した上屋の構造を推定することも可能であろう。南壁の中央柱には柱痕状の丸い凹み（径19㎝）が認められた。北寄り中央の床面には２段に掘られた落ち込み（東西幅1.20m、深さ0.25m）がある。レンズ状に堆積した灰色砂・暗灰色粘土・黒色有機質土を覆土とし、上層ほど多量の炭化物（粒）を混入していた。最上位を炭化物のみの薄層が被い、柱穴内にも多量の炭化物が集中していた。焼土等は一切検出されなかった。

出土遺物は土器のみであるが転用硯（杯蓋）２点を含んでいる。比較的編年時期の遡る器種が多く（須恵器杯蓋Ａ１・Ａ２、無台皿Ａ２・Ｄ２、土師器無台皿Ａ、甕Ｃ・Ｄ３）、形成時期は奈良時代前葉～中葉にあると考えている。

ＮＳＨ６

３Ｄ－ｅ・ｇ・ｈ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＤ17を切断しＮＳＡ２と重複していた。



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1				杯蓋A2	2				有台杯身B	3	(12.9)			無台杯身A1

第104図　ＮＳＨ６実測図・出土土器実測図

西接するＮＳＨ７と共に２棟の竪穴住居群を構成しているが大半は調査区外にある。確認された北・東壁（確認東西幅5.80m）は直線状をなし、平面形は隅丸方形様を呈すると思われる。棟方位Ｎ－29°30′－W前後を測る。

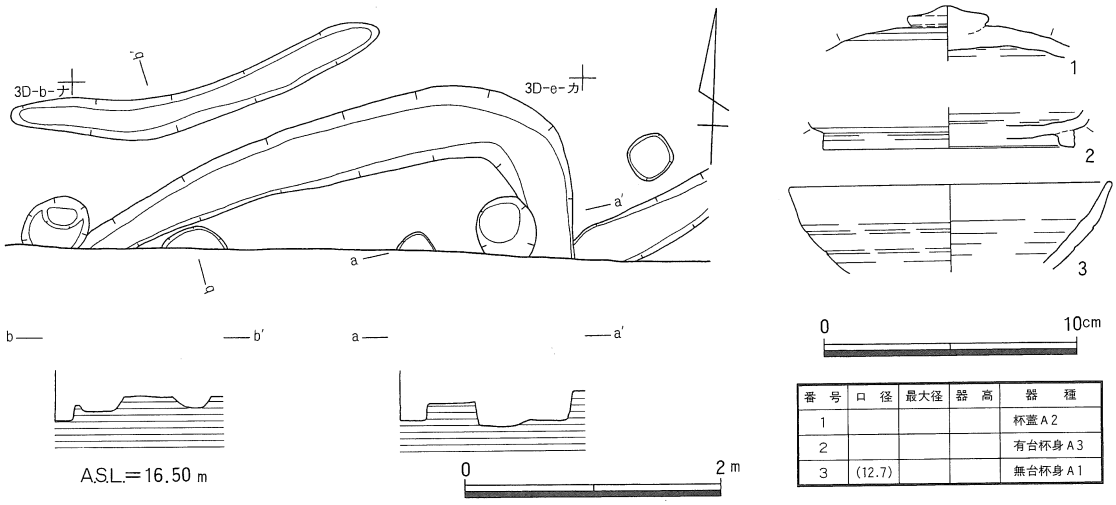
住居内外に平面円形ないし楕円形（長径40～65cm、短径35～60cm、深さ10～20cm）の柱穴が８箇所認められ北壁東半で途切れるものの、明瞭な壁溝（幅30～60cm、深さ10～15cm）を有していた。壁溝から枝分かれし北方へ突出する小溝がある。東壁の壁溝は２段に掘られていた。壁の傾斜は比較的急峻であった。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とし、壁溝内には数個のこぶし大礫が落ち込んでいた。焼土等は検出されなかった。

出土土器には細片が多く器形を知りえたのはわずか３点（須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｂ、無台杯身Ａ１）である。

ＮＳＨ７

３Ｄ－ｂ・ｅ区のⅢ層上面（１面）で北・東壁の一部を確認した。大半は調査区外にある。ＮＳＨ６の西側に位置し、ＮＳＤ19とＮＳＢ20を切断していた。北壁に若干丸みを持ち東壁間ではほぼ直角に折れる。確認長東西幅3.80m、深さ0.10m、棟方位Ｎ－17°30′－W前後を測る。

壁溝がめぐり壁の傾斜は急峻であった。柱穴は住居内に３箇所、住居外に２箇所、計５箇所認められ、平面円形ないし楕円形（長径35～55cm、短径35～45cm、深さ10～20cm）をなす。柱穴内に１箇所



番号	口径	最大径	器高	器種
1				杯蓋A2
2				有台杯身A3
3	(12.7)			無台杯身A1

第105図　ＮＳＨ７実測図・出土土器実測図

柱痕状の丸い凹み（径25～32㎝）が認められた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とし、小礫と炭化粒をわずかに含んでいる。焼土等は検出されなかった。北壁と並行する小溝（長さ2.95m、幅0.25～0.30m、深さ0.10m）が１条ある。

出土土器はきわめて少量であるが、壁溝内に須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ３、無台杯身Ａ１の破片が落ち込んでいた。

ＮＳＨ８

２Ｂ－ｂ区のⅢ層上面（１面）において土器群の所在に気づいたが、竪穴住居の輪郭を捉えたのはⅢ層を約10㎝掘り下げた後（２面）である。ＮＳＢ29～31およびＮＳＢ36・37からなる二つの掘立柱建物群のほぼ中間に位置し、南側を流れるＮＳＤ21からは北方へ約２m離れている。ＮＳＩ20・21に隣接する。北壁に丸みを持ち平面形は東西幅がわずかに長い隅丸長方形を呈する。東西幅4.60～5.10m、南北幅4.10～4.85m、深さ約0.05m、棟方位Ｎ－73°00′－Ｅを測る。

柱穴は４隅および南壁中央に配され、住居内に計12箇所検出された。平面円形ないし楕円形をなし大小差（長径40～55㎝・30～40㎝、短径35～45㎝・30～35㎝、深さ５～30㎝）を有している。長方形４主柱形式の竪穴住居であろう。柱穴底面に５箇所、柱痕状の丸い凹み（径13～20㎝）が認められ、南西隅には重複しあう柱穴がある。凹みを持つ小柱穴も方形の分布を示し、あるいは建て直しが行われたのかもしれない。３条の小溝（長さ1.85～4.50m以上、幅0.15～0.30m、深さ0.05～0.10m）が平坦な底面を南北方向に走っている。１条は北方竪穴外にまでのびていた。西壁に接した小溝は壁溝の一部とも考えられる。焼土は認められなかった。覆土は炭化物の混じる暗灰色粘土からなり、砂質の強弱により上下２層に区分される。柱穴内とレンズ状に堆積した上層（砂質強）には多量の小礫が含まれていた。

竪穴北西寄りの上層（炭化物・礫混じり暗灰色砂質粘土）内に多量の土器片が集中していた（3.00m×1.90m×0.05m）。土器片はさらにいくつかの小さなまとまりを形成し、著しい細片で接合し完形に復元しうる破片は見られない。床面から約５㎝浮いており竪穴住居がある程度埋没した後、細片化され廃棄された土器群と考えている。土器群と竪穴を炭化物・木炭の混入した薄い灰層が広く（4.80m×2.30m）被っていた。

下層からの出土遺物は少ない。土器群に混じってミニチュア土器（皮袋型）が１点出土している。



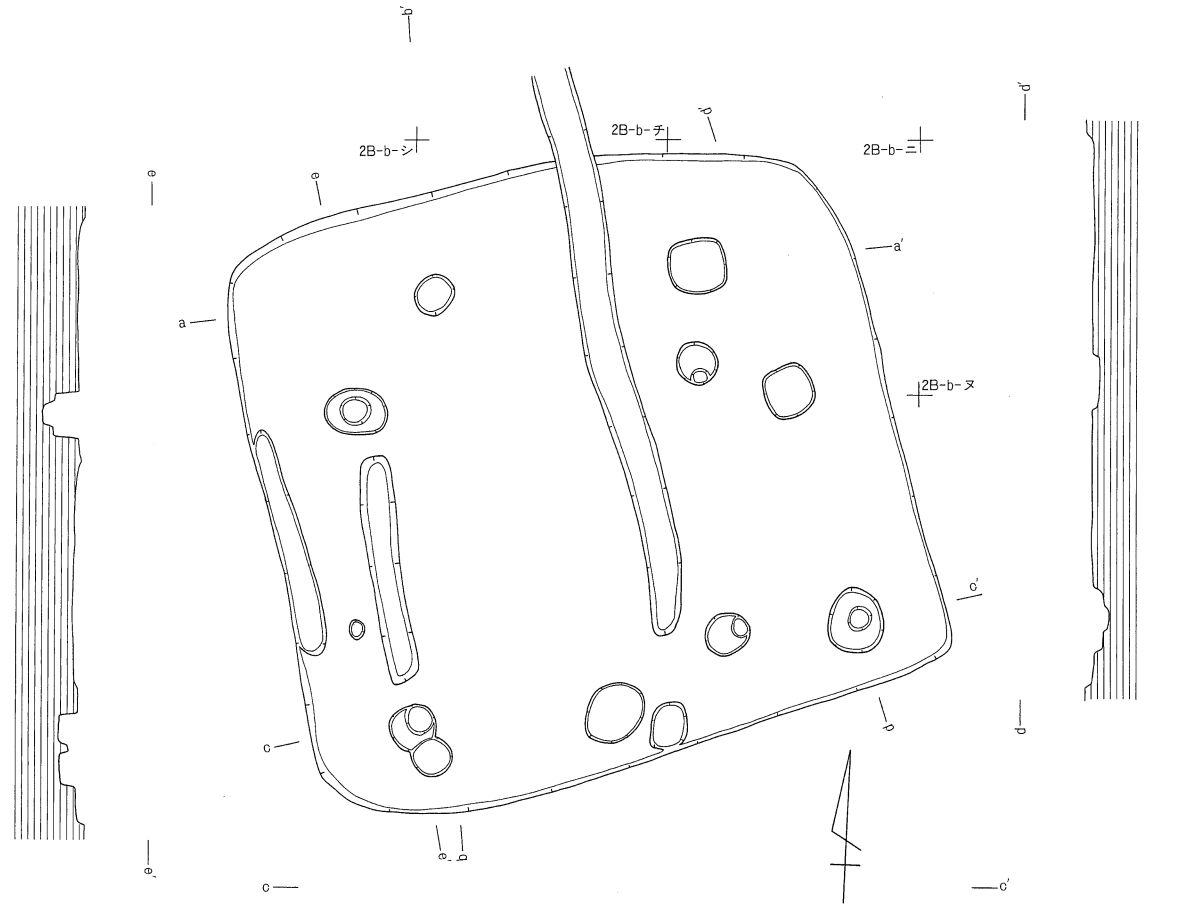
番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.0)			杯蓋A2
2	(14.2)			杯蓋A2
3				杯蓋A2

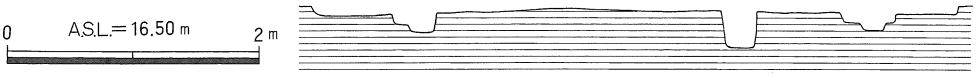
番号	口径	最大径	器高	器種
4				杯蓋A2
5	(15.1)		(4.3)	有台杯身A1
6	13.9		4.7	有台杯身A1

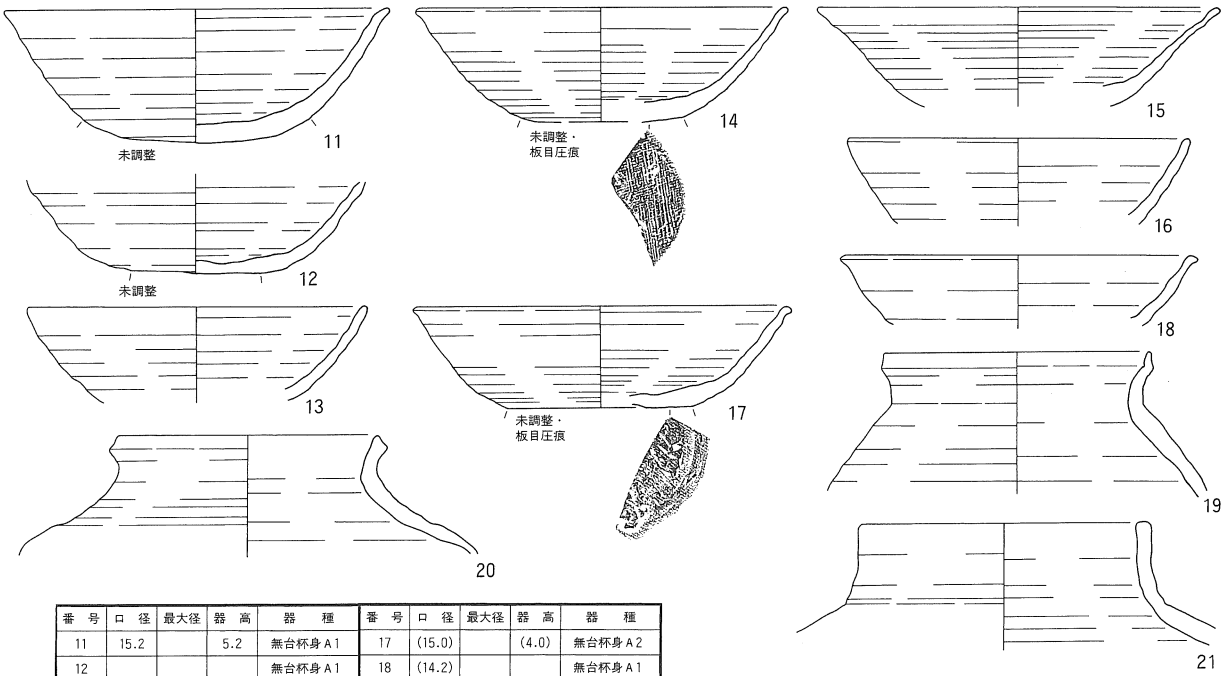
番号	口径	最大径	器高	器種
7				有台杯身A1
8				有台杯身A1
9				有台杯身A1

番号	口径	最大径	器高	器種
10	8.1		4.9	小型杯身A1

第106図　ＮＳＨ８実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）

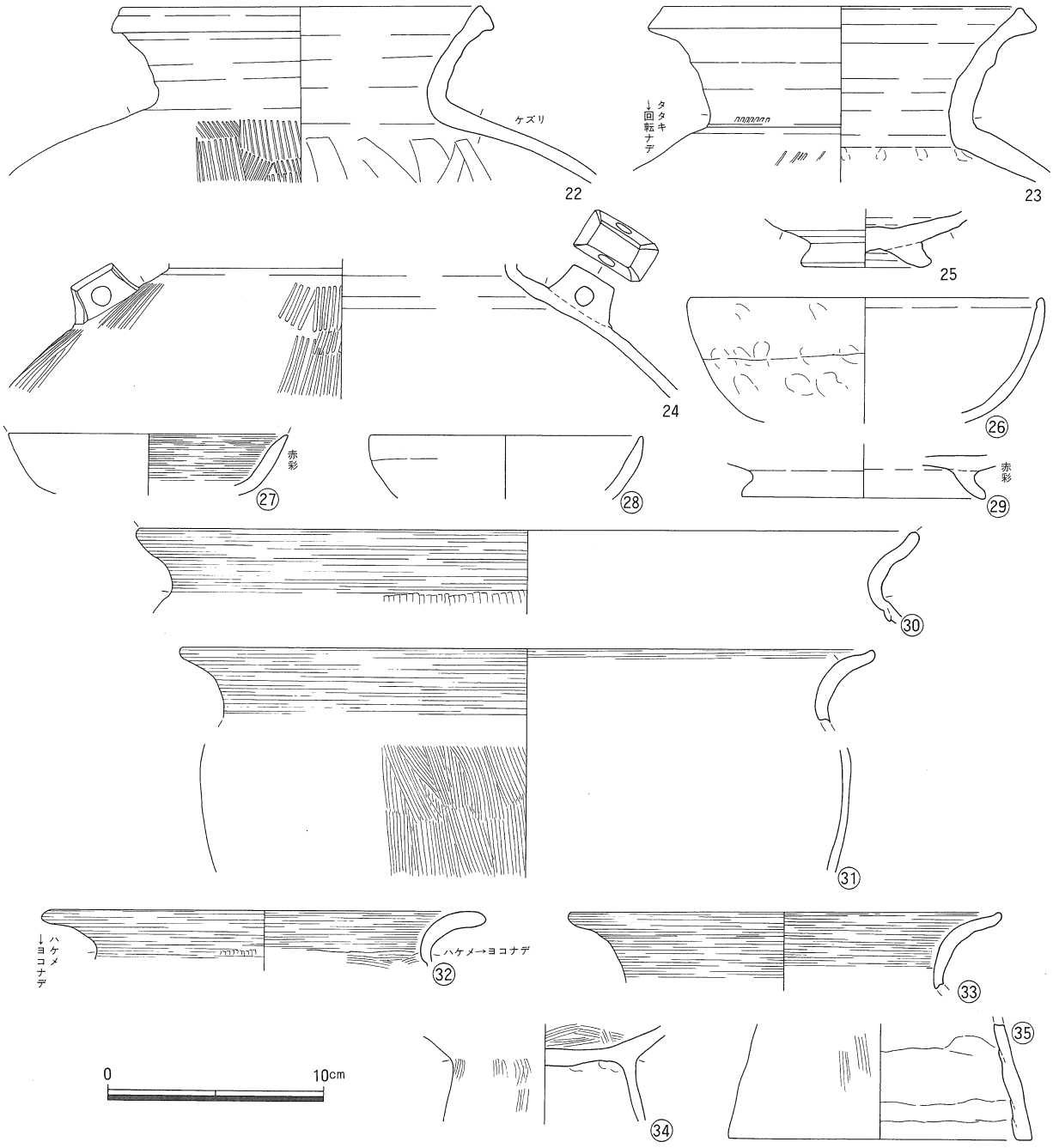






番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
11	15.2		5.2	無台杯身A1	17	(15.0)		(4.0)	無台杯身A2
12				無台杯身A1	18	(14.2)			無台杯身A1
13	(13.1)			無台杯身A1	19	(10.8)			壺D1
14	(14.7)		(4.5)	無台杯身A1	20	(11.0)			壺C1
15	(15.9)			無台杯身B1	21	(11.6)			壺B
16	(13.6)			無台杯身A1					

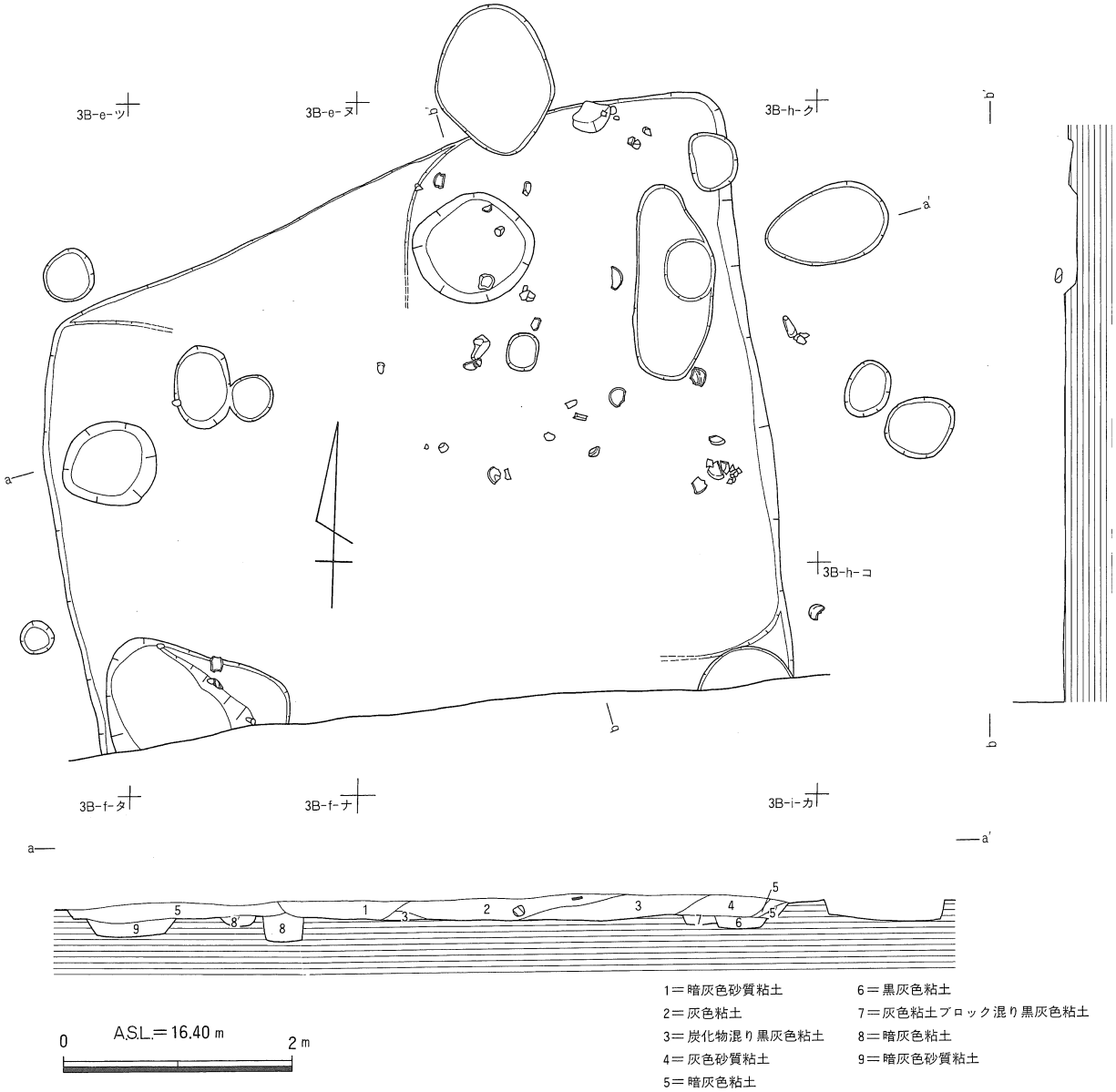
第107図　ＮＳＨ８実測図・出土土器実測図（２）



番号	口径	最大径	器高	器種
22	(17.5)			甕A2
23	(17.9)			甕B2
24				四耳壺
25				
㉖	(16.3)			無台杯身F
㉗	(12.8)			無台杯身C1
㉘	(12.6)			無台杯身A
㉙				有台皿B1
㉚	(36.0)			鍋B2
㉛	(32.0)			鍋B2
㉜	(20.4)			甕D3
㉝	(20.0)			甕D3
㉞				台
㉟				台

第108図　ＮＳＨ８出土土器実測図（３）

土器群の器種組成は器形を知りえた破片で見るかぎり、主に須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ａ１、無台杯身Ａ１からなる（他に須恵器無台杯身Ａ２・Ｂ１、小型杯身Ａ１、壺Ｂ・Ｃ１・Ｄ１、皿耳壺、甕Ａ２・Ｂ２、土師器無台杯身Ａ・Ｃ１・Ｆ、有台皿Ｂ１、甕Ｄ３、鍋Ｂ２、台がある）。奈良時代中葉にはすでに埋没していた可能性が高い。

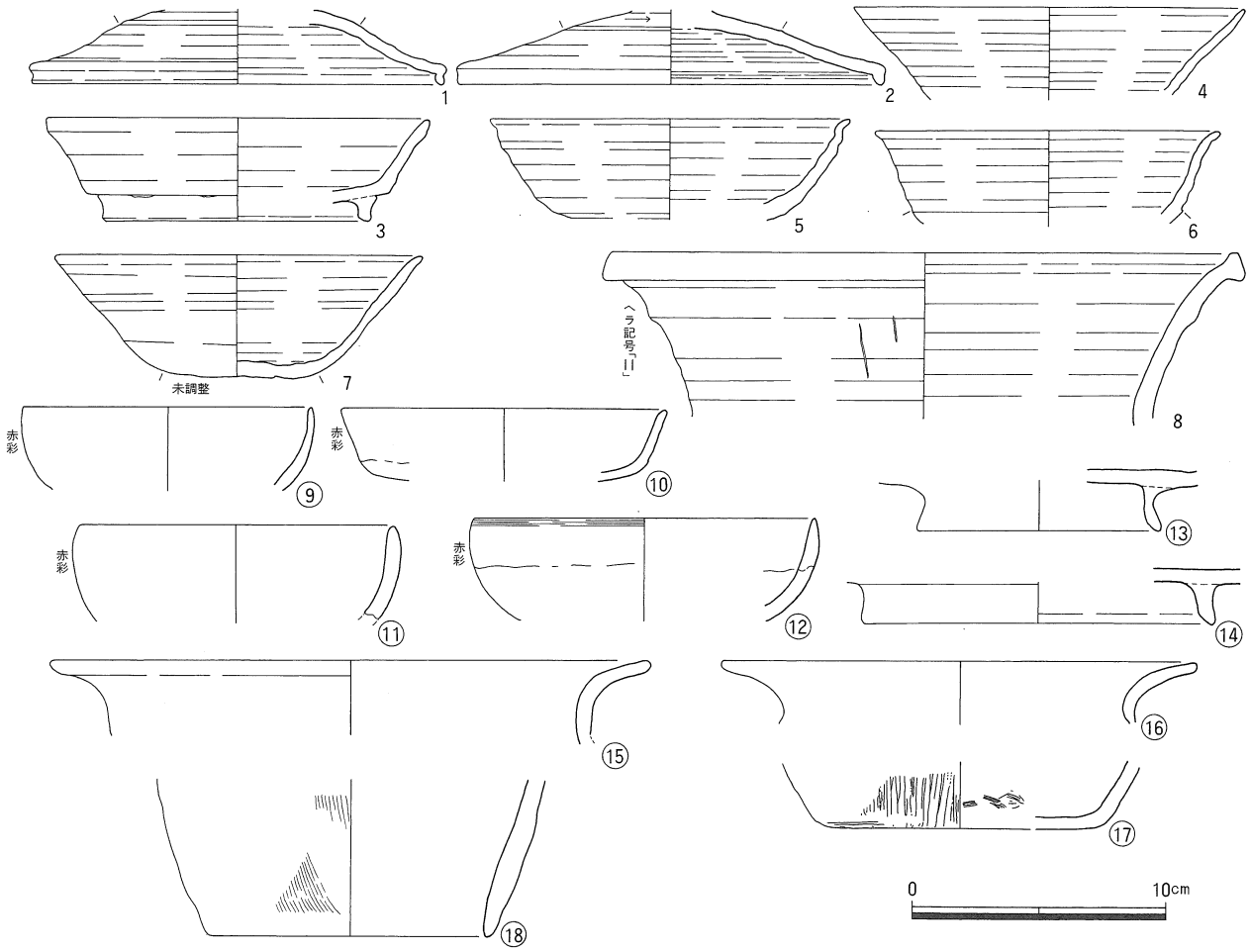


第109図　ＮＳＨ９実測図

ＮＳＨ９

３Ｂ－ｅ・ｈ区のⅢ層を約20㎝掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ33・34に隣接する。南端は調査区外におよび未調査である。西壁の幅が狭まり平面形は台形様をなすと思われる。東西幅5.95～6.05m、棟方位Ｎ－９°00′－Ｗを測る。

壁は急峻に立ちあがり、住居内に６箇所、住居外に４箇所、計10箇所の柱穴が認められた。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差（長径45～80㎝・30～40㎝、短径40～75㎝・25～40㎝、深さ10～25㎝）を有している。配置に規則性は見られない。北壁および東壁に接した床面の一部が高まり低い段差を呈していた。発掘区限界近くの床面と北東隅の竪穴内外に平面不定形・楕円形の落ち込み（４箇所－長径1.05～1.65m、短径0.70～1.00m、深さ0.15～0.40m－）が検出された。落ち込みには浅いものと２段に掘られたものがあり、覆土（暗灰色砂質粘土）中に多量の大小礫を含んでいた。



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.3)			杯蓋A2	6	(13.5)			無台杯身B2	⑪	(12.9)			無台杯身A	⑯	(18.7)			甕D2
2	(16.8)			杯蓋A2	7	14.4		4.8	無台杯身B2	⑫	(13.7)			無台杯身A	⑰				
3	(15.0)		(4.1)	有台杯身B	8	(25.2)			甕B2	⑬				有台皿B1	⑱				甑
4	(15.3)			無台杯身B1	⑨	(11.5)			無台杯身A	⑭				有台皿A1					
5	(14.1)			無台杯身A1	⑩	(12.8)			無台杯身C3	⑮	(23.6)			鍋A					

第110図　ＮＳＨ９出土土器実測図

覆土は暗灰色粘土・灰色粘土・黒灰色（砂質）粘土からなる。北東寄りに散在していた土器片・大小礫は上位の炭化物（粒）混じり灰色・黒灰色粘土中に含まれ、床面から５～10cm浮いていた。

出土土器には土師器無台杯身Ａの他、須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｂ、無台杯身Ａ１・Ｂ１・Ｂ２、甕Ｂ２、土師器無台杯身Ｃ３、有台皿Ａ１・Ｂ１、甕Ｄ２、鍋Ａ、甑がある。形成時期は奈良時代前葉～中葉に位置づけられると思われる。

第５節　井戸状遺構（ＮＳＥ）

ＮＳＥ１

３Ｄ－ｄ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）検出された。ＮＳＤ17の西岸に位置しＮＳＢ14～22の掘立柱建物群に囲まれている。ＮＳＩ９に切断される。

上端の平面形はほぼ円形（1.55m×1.50m）をなす。壁の傾斜は上半で約45度、下半では垂直に落ち平面隅丸方形様となる。Ⅳ層上面からの深さ約0.85mを測り、平坦な底面はⅣ層下の砂礫層にまで

達していた。覆土は主に下層が粘性の強い暗灰色粘土、上層は管鉄・炭化物の混じる暗灰色粘土からなり、レンズ状に堆積した各層が互層を形成していた。上層には炭化物（材）がわずかにふくまれていたが、井戸枠等は残っていなかった。底面に密着して数個のこぶし大礫が認められた。

ＮＳＥ１から0.35～1.80m離れて方形にめぐる５箇所の柱穴が検出できた。柱穴は暗灰色砂質粘土（Ⅲ層）を覆土とし、平面円形ないし楕円形（長径38～54㎝、短径36～44㎝、深さ30～60㎝）をなす。底面に２箇所柱痕状の丸い凹み（径18～21㎝）が認められた。若干幅の広い南面は２柱間（4.00m）他は１柱間（東面2.70m、北面3.10m、西面3.10m）を数え台形様の配置を示す。ＮＳＥ１はこの台形様平面の西南側に大きく片寄っているが、井戸はあるいは被屋を伴っていたのかもしれない。

出土土器（須恵器無台杯身Ａ１・Ｄ２）は少量である。奈良時代後葉にはすでに使用されていなかったものと推定している。

ＮＳＥ２

３Ｃ－ｅ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＢ28の南東側に隣接し、平安時代以降の竪穴状遺構により北側の一部が壊されている。

平面形は南北方向に長い（主軸方位Ｎ－８°00′－Ｗ）楕円形をなす。長径2.10m、短径1.40m、深さ1.00mを測り、壁の傾斜は急峻であった。古名栗川の流路（自然科学編加藤論文参照）にあたる礫層を掘り込んでいたが、湧水量はさして多くない。覆土はレンズ状に堆積した暗青灰色粘土・暗灰色粘土・黒灰色粘土からなり、底面近くに炭化物（粒）を少量含んでいた。底面から40～50㎝浮いた高さ（灰色粘土・炭化物混じり暗灰色粘土）に土器片・木材と大小礫の集積が認められた。木材の多くは縦割りにされただけの角（棒）材（長さ20～32㎝）で、突起を持つ板材（壁・扉材？）が１点ある。井戸枠の残存ではなく、おそらく土器片・大小礫と共に井戸内へ投げ込まれたものであろう。また８点のミニチュア土器（杯身６点、壺１点、甑１点）を伴出している。

集積した土器の器種組成は須恵器杯蓋Ａ３を主体とし、須恵器杯蓋Ａ２、有台杯身Ｂ・Ｃ１、無台杯身Ａ１・Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３、土師器有台杯身Ａ１、無台杯身Ａ・Ｂ１・Ｃ１・Ｃ２、鍋Ｂ２、甑からなる。墨書土器を４点含む。奈良時代中葉に廃棄された井戸と考えられる。

第６節　竪穴状遺構（ＮＳＩ）

ＮＳＩ１

３Ｉ－ｅ区のⅢ層を約15㎝掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ１の南隣りに位置し、平安時代以降の溝により切断されている。

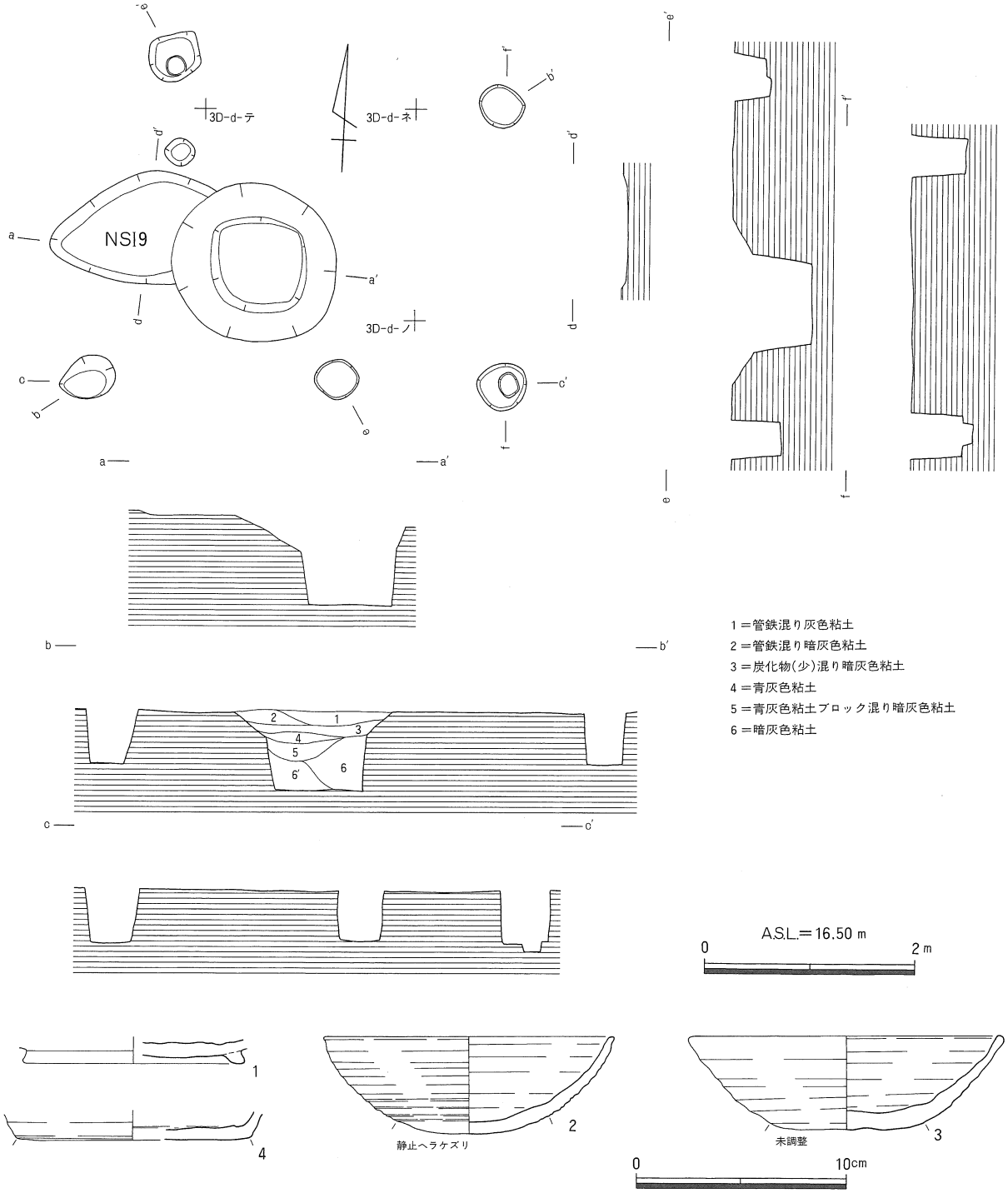
平面楕円形（長径2.05m、短径1.20m、深さ0.15～0.20m）、主軸方位Ｎ－31°00′－Ｅをなす。平坦な底面の中央がわずかに高まる。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。

出土土器は奈良時代に属するものであったが、細片・少量であり器形を復元しえた破片はない。

ＮＳＩ２

２Ｈ－ｃ区のⅢ層上面（１面）で浅い凹みと密集する多量の土器片を検出した。ＮＳＤ４の西岸に位置し、ＮＳＤ６を被っている。

凹みは平面不定形（長径3.30m、短径2.00m、深さ0.05～0.15m）をなし、東端はＮＳＤ４の西斜面へと移行していく。底面に若干凹凸を持つが、中央部はへこみ断面すり鉢状を呈していた。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）・灰色粘土を覆土とする。土器片は凹みの南半、底面より５～15㎝浮いた高さに集中し、凹みの外側にまで達していた。大半が須恵器の細片で完形に復元しえた破片はない。南北両端に離れて出土した破片や高低差のある破片どうしが接合し、密集する土器片は事前に細かく砕

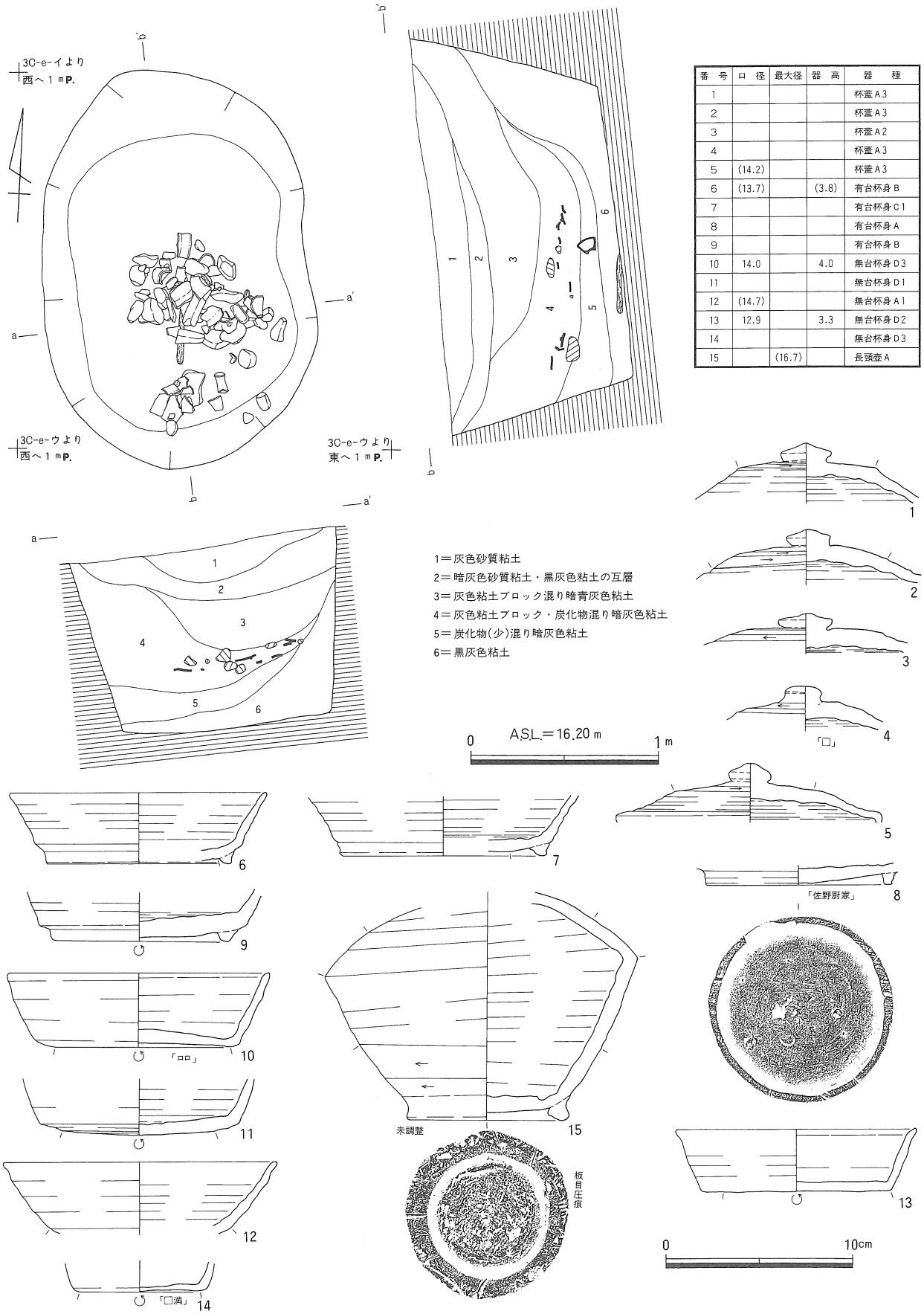


番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1					2	13.8		4.6	無台杯身A1	3	15.0		4.5	無台杯身A1	4				無台杯身D2

第111図　ＮＳＥ１実測図・出土土器実測図

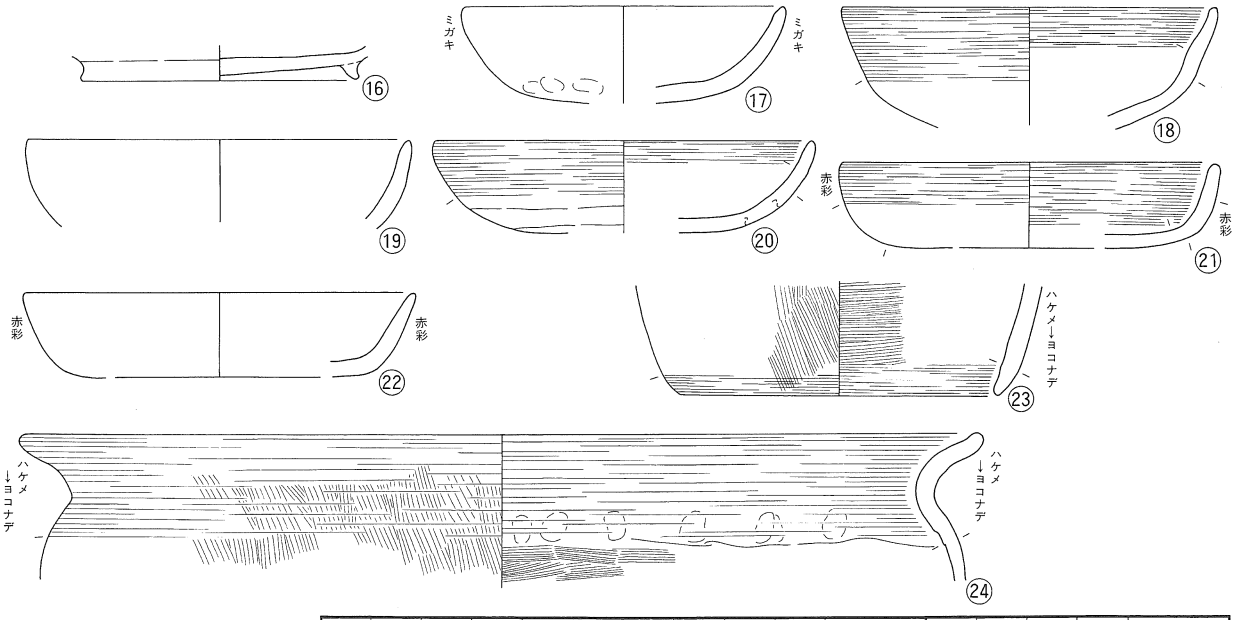
かれ一時期に廃棄させたものと思われる。

須恵器壺の獣足を３点含み（同一個体？）、大中型の須恵器甕Ｂ２の破片が目立つ。器種組成は須恵器杯蓋Ａ３を主体とし、須恵器有台杯身Ｅ、無台皿Ｂ１・Ｂ２・Ｄ１も比較的多い（他に須恵器無台杯身Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３・Ｄ４、小型杯身Ｂ１・Ｂ２、皿蓋、有台皿Ａ３、無台皿Ｄ２、高盤Ａ・Ｂ、



番号	口径	最大径	器高	器種
1				杯蓋A3
2				杯蓋A3
3				杯蓋A2
4				杯蓋A3
5	(14.2)			杯蓋A3
6	(13.7)		(3.8)	有台杯身B
7				有台杯身C1
8				有台杯身A
9				有台杯身B
10	14.0		4.0	無台杯身D3
11				無台杯身D1
12	(14.7)			無台杯身A1
13	12.9		3.3	無台杯身D2
14				無台杯身D3
15		(16.7)		長頸壺A

第112図　ＮＳＥ２実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
⑯				有台杯身A1	⑲	(15.3)			無台杯身A	㉒	(15.6)		(3.4)	無台杯身C2
⑰	(12.8)			無台杯身C1	⑳	(15.1)			無台杯身C1	㉓				甑
⑱	(14.9)			無台杯身B1	㉑	(15.1)		(3.4)	無台杯身C2	㉔	(38.1)			鍋B2

第113図　ＮＳＥ２出土土器実測図（２）

壺蓋Ａ３、壺Ｃ１、小型壺Ｂ、平瓶、甕Ａ１、土師器無台杯身Ｃ１、甕Ｄ１・Ｄ４がある)。奈良時代後葉に形成されたＮＳＤ４に伴う土器廃棄跡（土器溜め）と推定している。

ＮＳＩ３

３Ｇ－ｇ・３Ｈ－ａ区のⅢ層上面（１面）で確認され、ＮＳＢ３の南東側に隣接している。

平面形は南北方向に長い隅丸長方形（南北幅2.85～3.05m、東西幅2.60～2.75m、深さ0.10～0.15m）をなし、主軸方位Ｎ－11°30′－Ｅを測る。平坦な底面は北に向かいわずかに傾斜していた。南北壁の立ちあがりは比較的緩やかであったが、東西壁は急峻に傾斜し底面との境に明瞭な屈曲部を有していた。底面には柱痕状の凹み（径８～27㎝）が５箇所あり、竪穴外を東－北－西側にかけて浅い柱穴（径18～57㎝－９箇所－）がめぐる。柱穴は平面円形ないし楕円形を呈し、底面に３箇所柱痕状の丸い凹み（径10～20㎝）を残していた。底面の南東隅に平面楕円形（長径1.35m、深さ0.05m）の浅い落ち込みがある。落ち込み内には炭化物・こぶし大礫・鉄滓・土器片が集中していた。

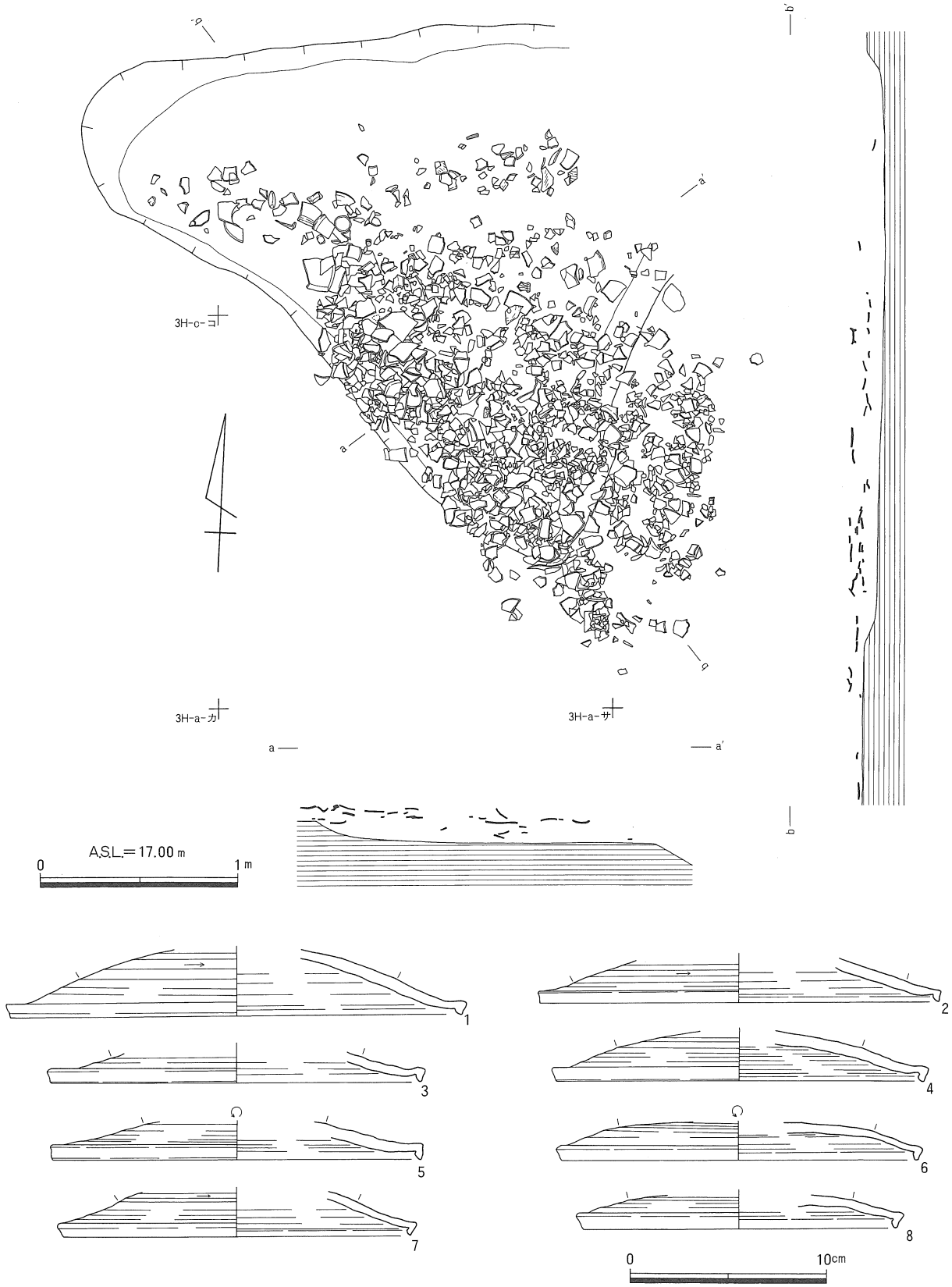
覆土は均一で小礫の混る褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする。焼土は一切見られなかった。

落ち込み内に集中していた土器片群は須恵器杯蓋Ａ３、有台杯身Ａ３、無台杯身Ａ１・Ｃ・Ｄ３、土師器甕Ｃ・Ｄ３からなる。

ＮＳＩ４

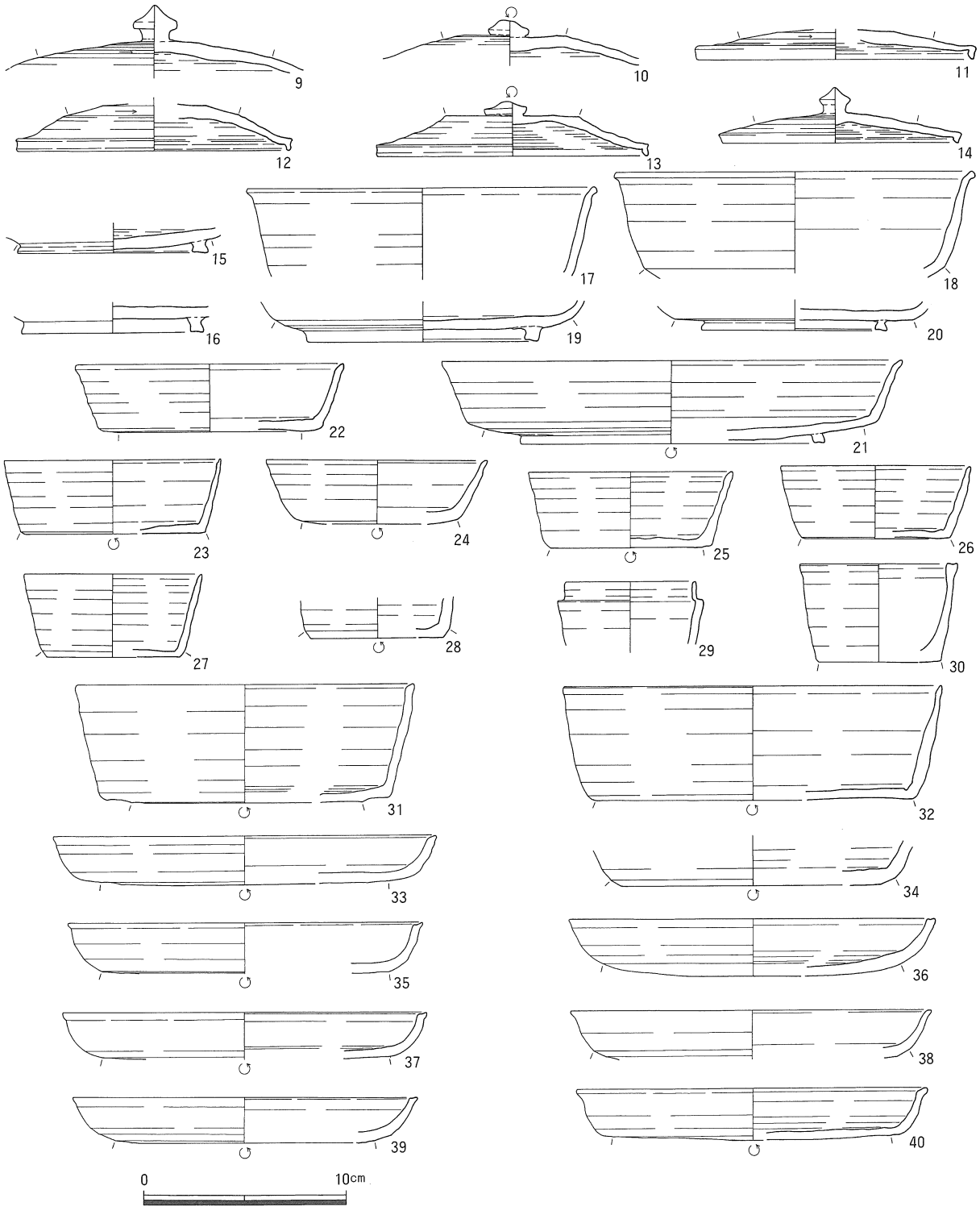
２Ｆ－ｄ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＢ５、ＮＳＨ４の南東側に隣接し、３箇所の柱穴に切断されている。

平面楕円形様（長径2.10m、短径0.90m、深さ0.10～0.15m）をなすが、東北西側の輪郭は直線的である。主軸方位Ｎ－16°00′－Ｗを測る。中央が若干凹み断面すり鉢状を呈する。覆土は砂質の強い



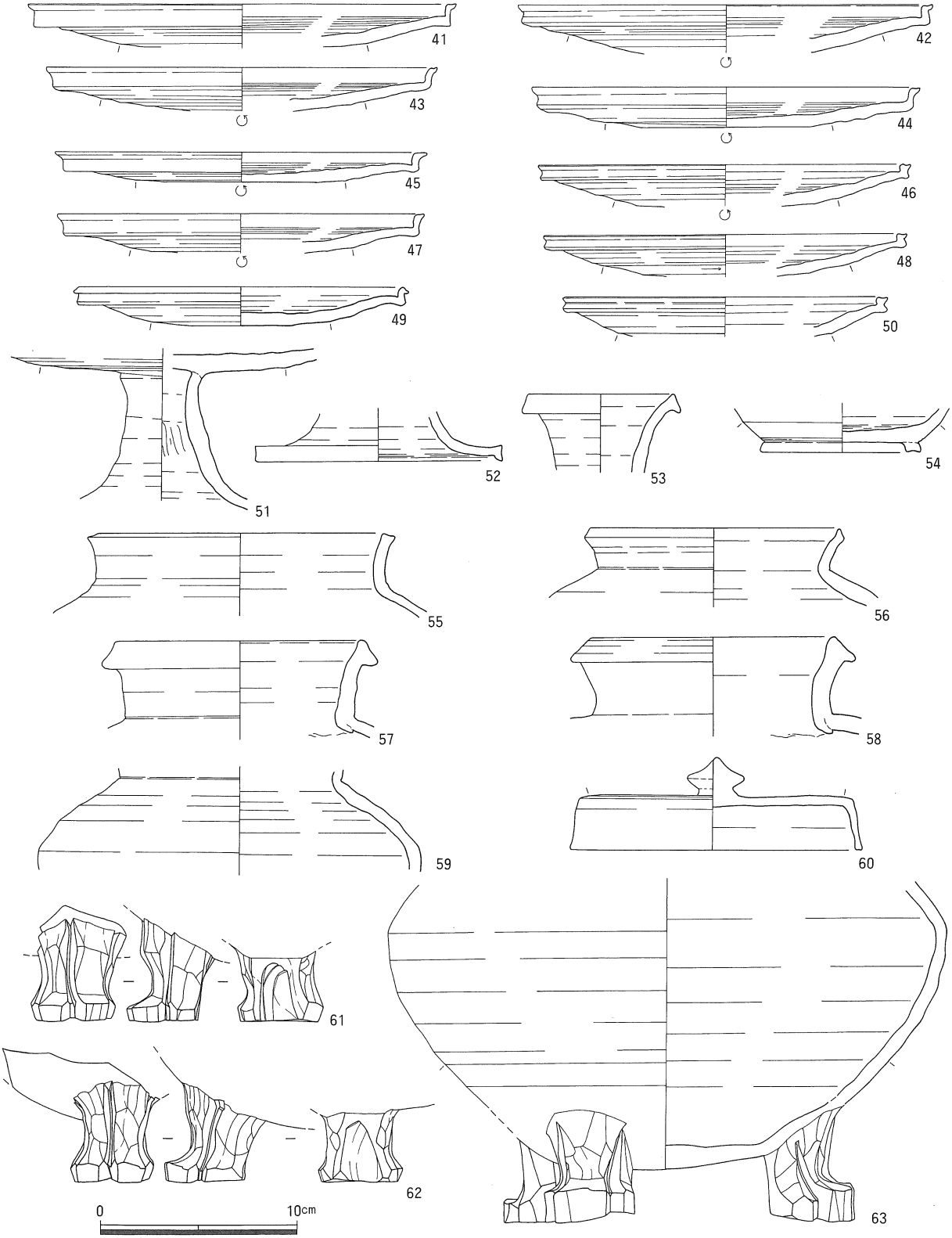
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(23.3)			皿蓋	3	(19.2)			杯蓋A3	5	(18.9)			杯蓋A3	7	(18.3)			杯蓋A3
2	(20.4)			杯蓋A3	4	(19.1)			杯蓋A3	6	(18.6)			杯蓋A3	8	(16.6)			杯蓋A3

第114図　ＮＳＩ２実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
9				杯蓋A3	17	17.2			有台杯身E	25	10.0		3.7	無台杯身D4	33	(18.9)		(2.4)	無台皿D1
10				杯蓋A3	18	17.7			有台杯身E	26	(9.4)		(3.6)	無台杯身D2	34				無台杯身D3
11	(13.8)			杯蓋A3	19				有台杯身E	27	(8.8)		(4.1)	無台杯身D3	35	(17.5)			無台皿D1
12	(13.6)			杯蓋A3	20				有台杯身E	28				小型杯身B2	36	(18.0)		(2.8)	無台皿D2
13	13.4		2.7	杯蓋A3	21	22.6		4.1	有台皿A3	29	(6.5)	(7.2)		小型壺B	37	(17.9)			無台皿D1
14	11.9		2.7	杯蓋A3	22	13.2		3.3	無台杯身D4	30	(7.8)		(4.9)	小型杯身B1	38	(17.7)			無台皿D2
15					23	(10.7)		(3.6)	無台杯身D2	31	(16.7)		(5.8)	無台杯身D4	39	(16.9)			無台皿D1
16				有台杯身E	24	(10.9)		(3.1)	無台杯身D1	32	(18.6)		(5.6)	無台杯身D2	40	(17.3)		(2.6)	無台皿D1

第115図　ＮＳＩ２出土土器実測図（２）



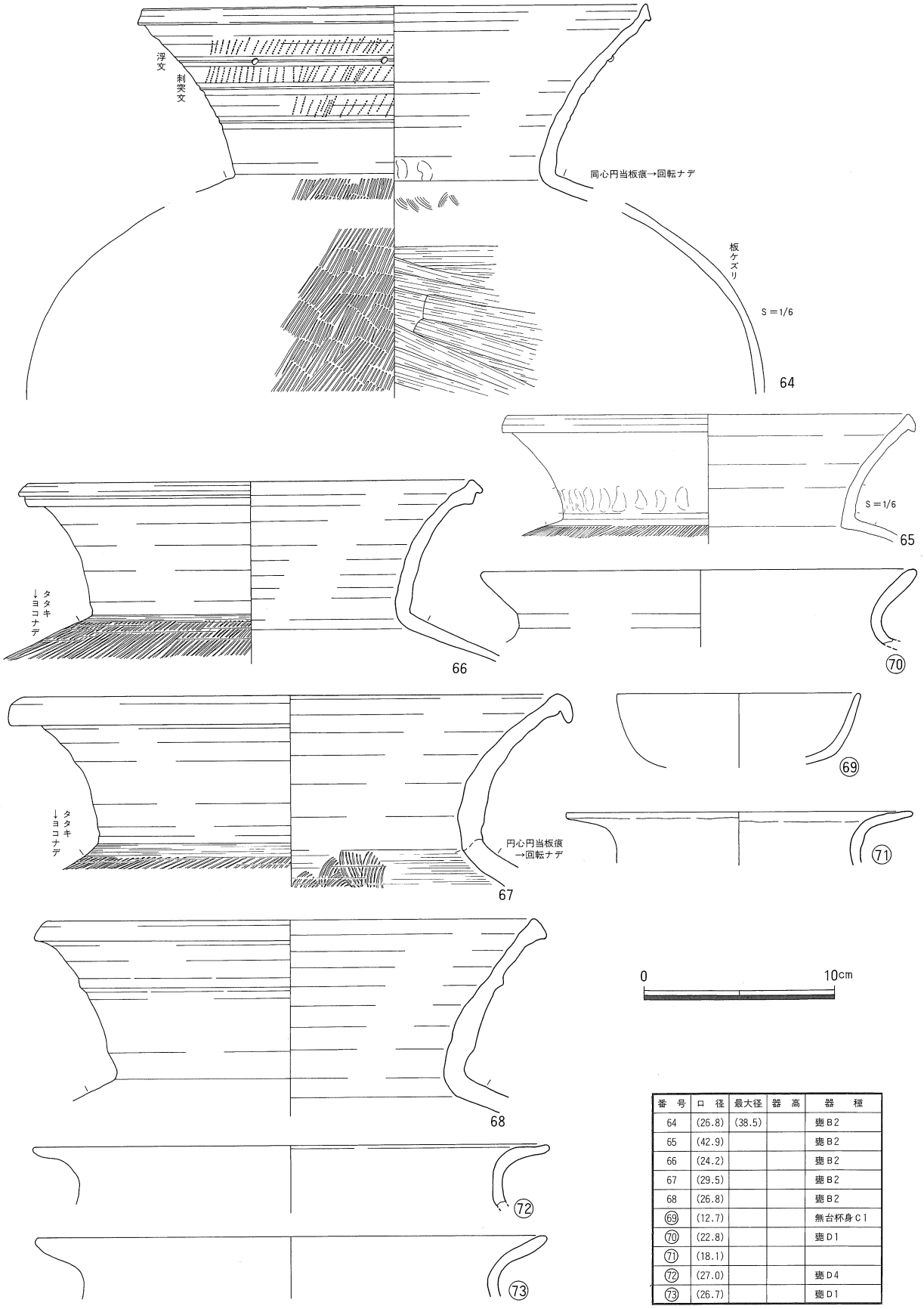
番号	口径	最大径	器高	器種
41	(21.6)			無台皿B1
42	(20.9)			無台皿B1
43	(19.8)			無台皿B1
44	(19.6)			無台皿B1
45	18.8		1.5	無台皿B1
46	(18.8)			無台皿B2

番号	口径	最大径	器高	器種
47	(18.5)			無台皿B1
48	(18.3)			無台皿B2
49	16.9		2.0	無台皿B2
50	(16.4)			無台皿B2
51				高盤A
52				高盤B

番号	口径	最大径	器高	器種
53	(8.0)			平瓶
54				長頸壺A
55	(15.6)			壺C
56	(13.1)			壺C
57	(14.0)			甕A1
58	(14.4)			甕A1

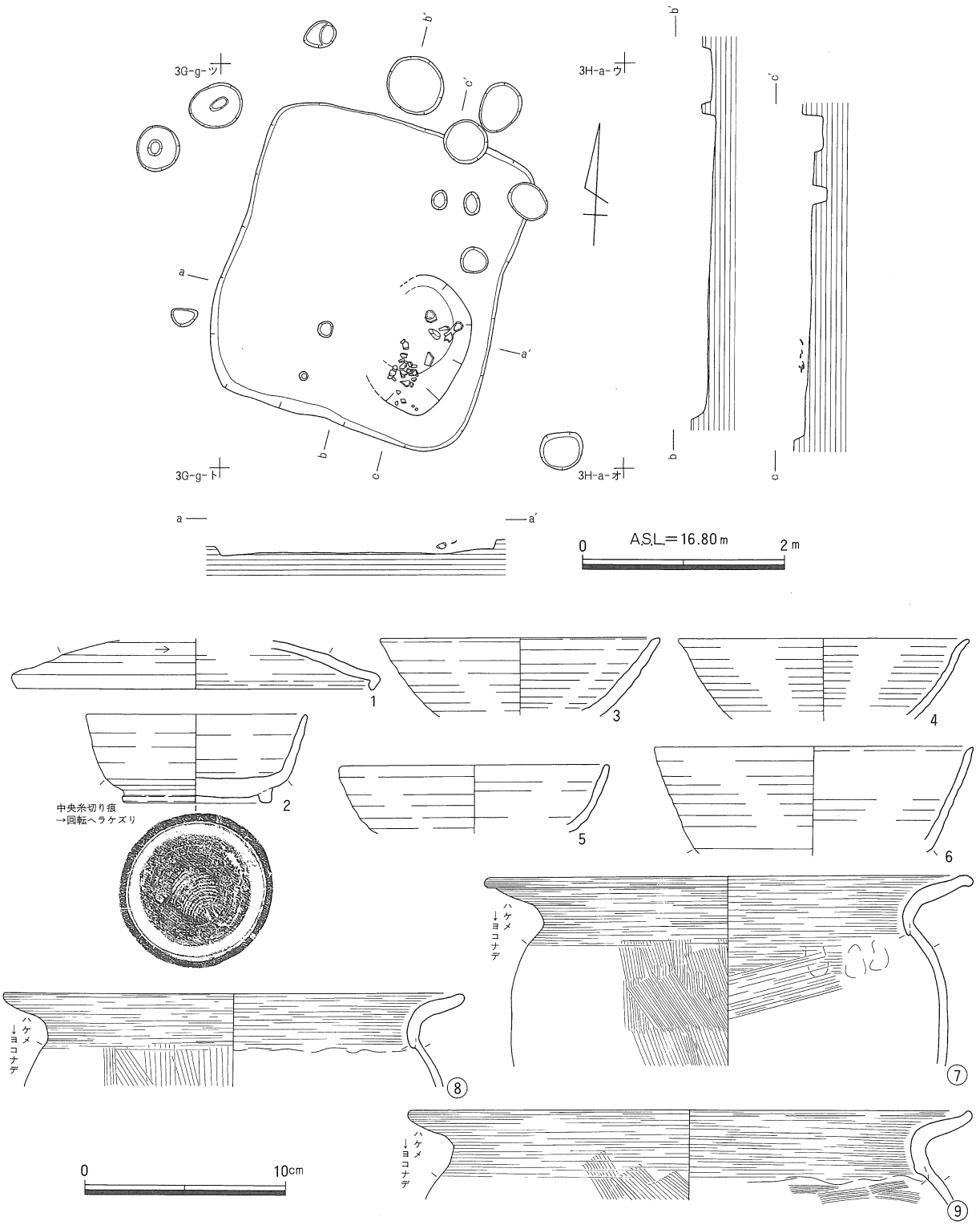
番号	口径	最大径	器高	器種
59		(19.4)		壺C1
60	14.8		4.7	壺蓋A3
61				獣足壺
62				獣足壺
63		(28.3)		獣足壺

第116図　ＮＳＩ２出土土器実測図（３）



番　号	口　径	最大径	器　高	器　種
64	(26.8)	(38.5)		甕B2
65	(42.9)			甕B2
66	(24.2)			甕B2
67	(29.5)			甕B2
68	(26.8)			甕B2
⑥⑨	(12.7)			無台杯身C1
⑦⓪	(22.8)			甕D1
⑦①	(18.1)			
⑦②	(27.0)			甕D4
⑦③	(26.7)			甕D1

第117図　ＮＳＩ２出土土器実測図（４）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(18.2)			杯蓋A3	4	(14.3)			無台杯身A1	⑦	(24.1)			甕D3
2	11.0		4.4	有台杯身A3	5	(13.4)			無台杯身C	⑧	(22.7)			甕D3
3	(13.8)			無台杯身A1	6	(15.7)			無台杯身D3	⑨	(27.8)			甕C

第118図　ＮＳＩ３実測図・出土土器実測図

暗灰色粘土からなり、上層には多量の炭化物が混入していた。

出土土器は細片・少量であり器形を復元しえた破片はない。

NSI5

3F－d区のIII層上面（1面）で確認できた。NSD11の南岸直上に位置し、一部現代の溝により壊されている。

平面円形（径1.05m、深さ0.70～0.80m）をなし、壁は彎曲しながらほぼ垂直に落ちる。壁・底面の境で屈曲し底面には丸みを帯びていた。白色粘土塊・炭化物を含む暗灰色粘土を覆土とする。底面にレンズ状をなす炭化物層（最厚5cm）が堆積していた。こぶし大礫が数個落ち込み、底面から約30cm浮いた高さに机1点（内方へ傾斜する）が埋まっていた。

暗灰色粘土中から出土した墨書土器（須恵器杯蓋A3）1点を除き出土土器は皆無である。NSD11に伴う井戸とも考えたが、底面は灰白色粘土層（IV層）下の砂礫層にまで達しておらず、粘土層（不透水層）中にあるため一応竪穴状遺構として扱った。

NSI6

3F－g区のIII層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSB6～10.5棟からなる掘立柱建物群の北東隣にある。柱穴状の落ち込みと重複していた。

平面隅丸方形様（南北幅1.05～1.20m、東西幅0.85～1.00m、深さ0.05～0.10m）、主軸方位N－33°00′－Wを呈する。浅いが急傾斜で落ちる壁を持ち、底面中央がわずかに高くなっていた。覆土は上下2層（上層＝灰白色粘土－IV層－、下層＝灰色粘土）に区分される。

出土土器には摩耗した土師器細片が目立つ。

NSI7

3E－g区のIII層上面（1層）で確認できた。NSD13の西岸から約3m離れ、NSB13の北方に位置している。

両端が尖った平面楕円形様（長径2.10m、短径0.85m、深さ0.10～0.15m）をなす。主軸方位N－42°00′－Eを測る。平坦な底面から壁が急峻に立ちあがり、断面はロ字状を呈していた。覆土となる灰色粘土の有機質は底面に近づくに従って漸移的に増える。

器形を復元しえた出土土器はわずか1点（須恵器杯蓋A2）である。

NSI8

2D－g区のIV層上面近くに至り（3面）検出できた。南西隅をNSD15に底面中央を柱穴状の落ち込みにより壊されている。北端は調査区外におよび全形は明らかでない。

平面形は隅丸方形様（東西幅2.45～2.60m、深さ0.10m）をなすと思われる。東壁は若干丸味を持ち、主軸方位N－11°00′－E前後を測る。緩やかに傾斜する壁が明瞭な屈曲部を介して平坦な底面に移行していた。南西隅に柱痕を思わせる木片を残した柱穴状の丸い落ち込み（径45～50cm）が1箇所ある。

覆土はレンズ状をなす灰白色砂質粘土（IV層）を主体とし、周縁部および柱穴状の落ち込み内には黒灰色粘土・暗灰色（砂質）粘土が堆積していた。

若干の須恵器細片を除き出土遺物は皆無である。焼土等は一切認められなかった。無主柱形式の小規模な竪穴住居跡の可能性もある。

NSI9

3D－d区のIII層上面（1面）で確認できた。NSD17の西岸に位置しNSE1を切断している。平面楕円形様（長径1.65m、短径1.10m、深さ0.05m）を呈し、主軸方位N－79°00′－Eを測る。底

面に若干凹凸が見られるが、断面形はすり鉢状に近い。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。

出土遺物は摩耗した土師器細片のみである。奈良時代中葉以前の井戸（ＮＳＥ１）を切断しており、掘削時期が奈良時代後葉を大きく遡ることはないと考えている。

ＮＳＩ10

３Ｄ－ｄ区のⅢ層上面（１面）で、ＮＳＩ９に隣接（西接）して検出された。柱穴状の落ち込み（２箇所）に切断されている。

西端が尖り平面不定形（長径1.85m、短径0.85m、深さ0.05～0.10m）をなす。主軸方位Ｎ－77°00′－Wを測る。断面すり鉢状を呈し、砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。器形を推定しうる出土土器はない。瓦片を１点出土している。

ＮＳＩ11

２Ｃ－ｂ・ｅ区に跨がり、Ⅲ層上面（１面）で確認できた。蛇行するＮＳＤ21の南岸に形成された土器廃棄跡（土器溜め）である。

平面不定形（東西幅3.60m、南北幅1.20m、深さ0.05～0.10m）をなす浅い凹み（断面すり鉢状）内に、土器片が大きく東西２つのまとまりをつくり集積していた。西側の集積は底面に密着していたが、東側の集積は約５㎝浮いていた。かなり離れて出土した破片どうしに接合関係が見られ、土器は廃棄前にすでに破砕されていたと考えられ、多量のこぶし大礫が混入していた。凹み内に堆積した覆土は、ＮＳＤ21の上層（黄灰色砂質粘土）に類似している。

出土土器の器種組成は須恵器有台杯身Ａ２を主体し、バラエティーに富む（須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３－墨書土器－、有台杯身Ａ１・Ｂ、無台杯身Ａ１、高盤Ｂ、鉢Ａ、土師器壺Ａ・Ｂ、甕Ｄ１、鍋Ｂ１がある）。形成時期は奈良時代前葉～中葉と考えられる。

ＮＳＩ12

３Ｃ－ｈ区のⅢ層を約15㎝掘り下げたところ（２面）で確認された。ＮＳＩ13に東接しＮＳＢ26の柱穴を切断している。

南半は調査区外におよび北端がＮＳＤ19と重複しているため全形は明らかでない。東壁に丸味を持ち、西壁は直線的にのびている（東西幅3.15m、深さ0.05m）。壁は緩やかに傾斜し、浅いが平坦な底面との境に明瞭な屈曲部を有しており、北西隅が一部外方へ開く。砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を覆土する。

出土土器には奈良時代の須恵器片が目立つが、きわめて細片であり器形を復元しえた破片はない。大刀・刀子と思われる鉄片を２点出土している。

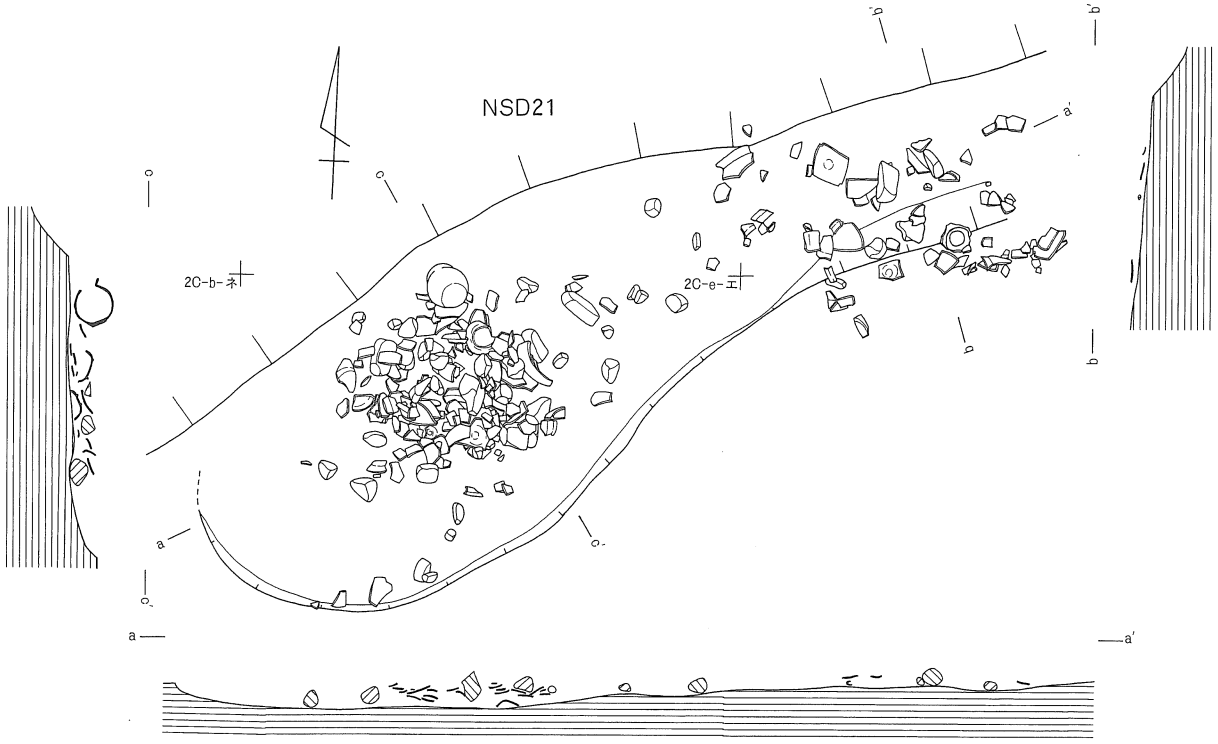
ＮＳＩ13

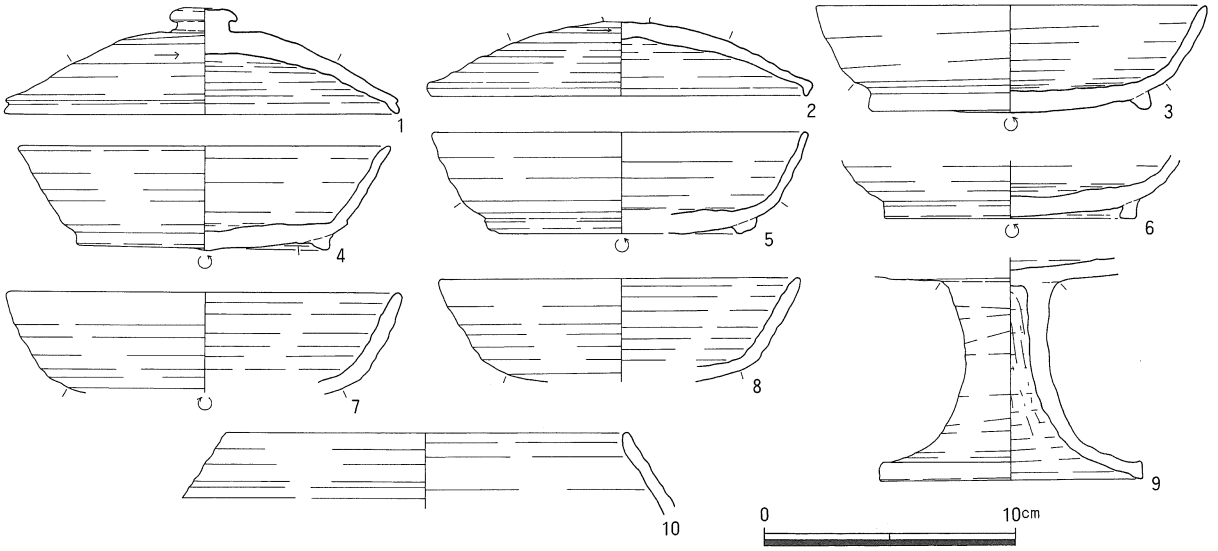
３Ｃ－ｅ・ｈ区に跨がり、Ⅲ層上面（１面）で検出できた。ＮＳＩ12の西側に位置し、ＮＳＢ39の柱穴を切断している。

南半は調査区外にある。北東壁が一部凹んでいたが輪郭は総じて円弧をなす（東西幅8.85m、深さ0.05～0.10m）。

直線的に傾斜する壁から屈曲部を介して底面へ移行していた。底面には若干凹凸が見られる。底面西寄りと竪穴外に２箇所、小規模な土器片の集積が認められた。竪穴内の土器片は大小礫と共に散在的に分布し、底面からわずかに浮いていた。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）からなり、多量のこぶし大礫を含んでいた。

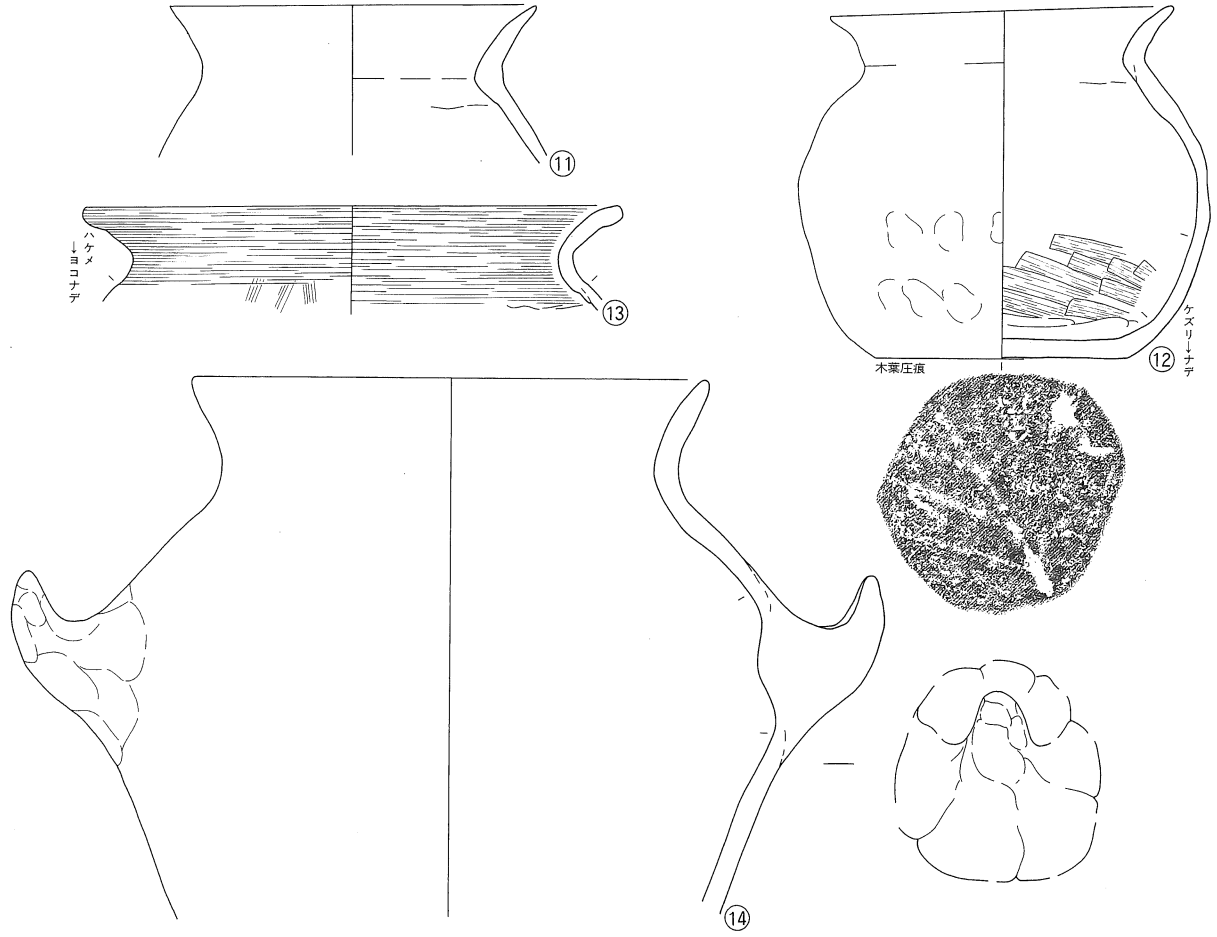
竪穴内の土器片の大半は須恵器食器類である（須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３、有台杯身Ａ３・Ｂ・Ｃ１、無台杯身Ｃ、高盤Ｂ、碗、土師器甕Ｄ３がある）。他に土錘が１点出土している。奈良時代中葉に形





番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	15.7		4.2	杯蓋A2	4	14.8		4.2	有台杯身B	7	(15.7)			有台杯身A2	10	(16.0)			鉢A
2	15.3			杯蓋A2	5	(15.0)			有台杯身A2	8	(14.3)			無台杯身A1					
3	15.5		4.3	有台杯身A2	6				有台杯身A1	9				高盤B					

第119図　ＮＳＩ11実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（1）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
⑪	(14.6)			壺B				(小) 13.5		⑭	(20.6)	(28.5)		壺A
⑫	13.7	16.5	(大) 14.0	壺B	⑬	(21.5)			甕D1	⑮	(32.8)			鍋B1

第120図　ＮＳＩ11出土土器実測図（２）

成された土器廃棄跡（土器溜め）と考えている。

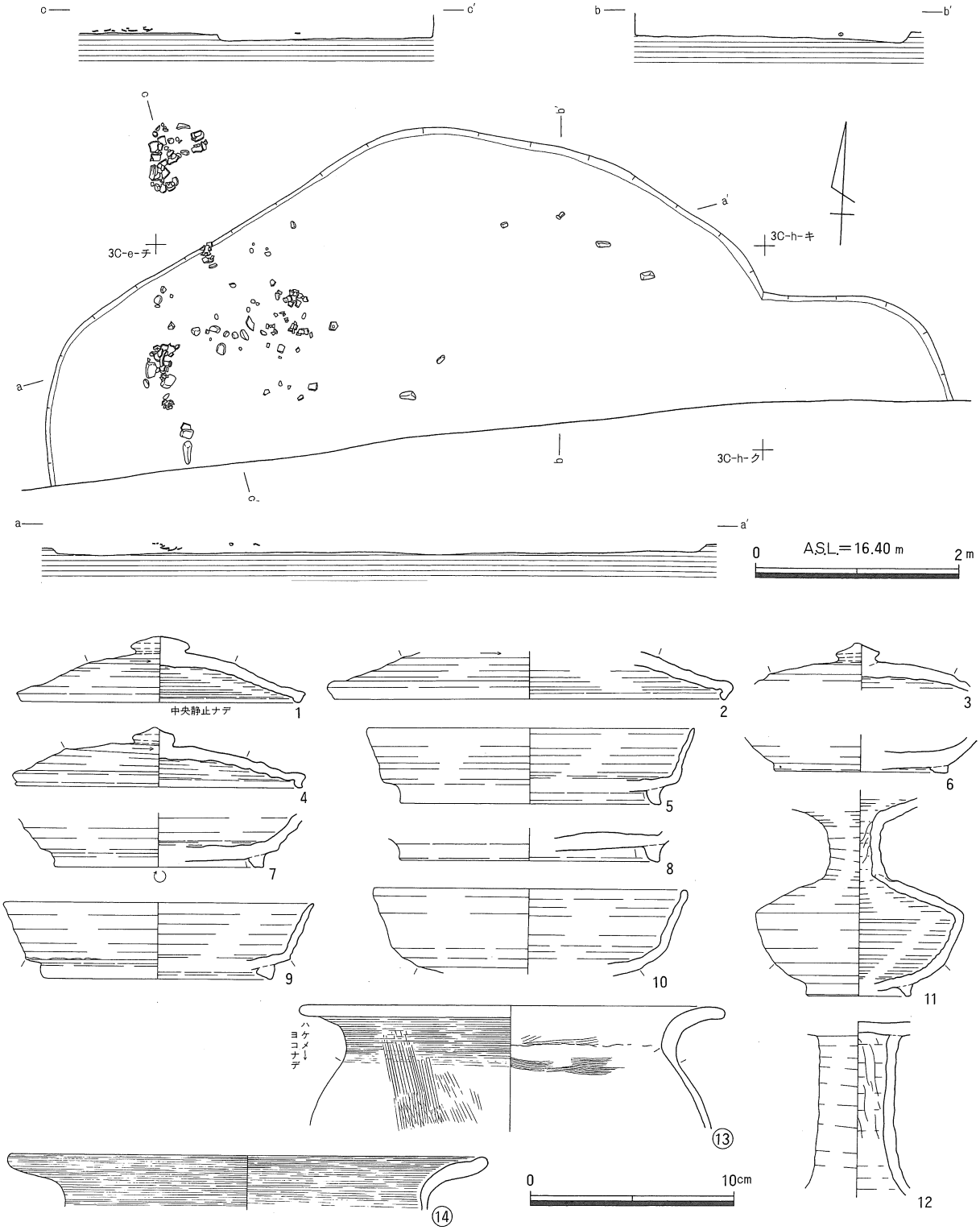
ＮＳＩ14

３Ｃ－ａ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＢ28と重複し、南側に隣接してＮＳＩ15・16が分布している。

平面楕円形様（長径2.85m、短径1.30m、深さ0.10～0.15m）、主軸方位Ｎ－86°30′－Ｅを呈する。

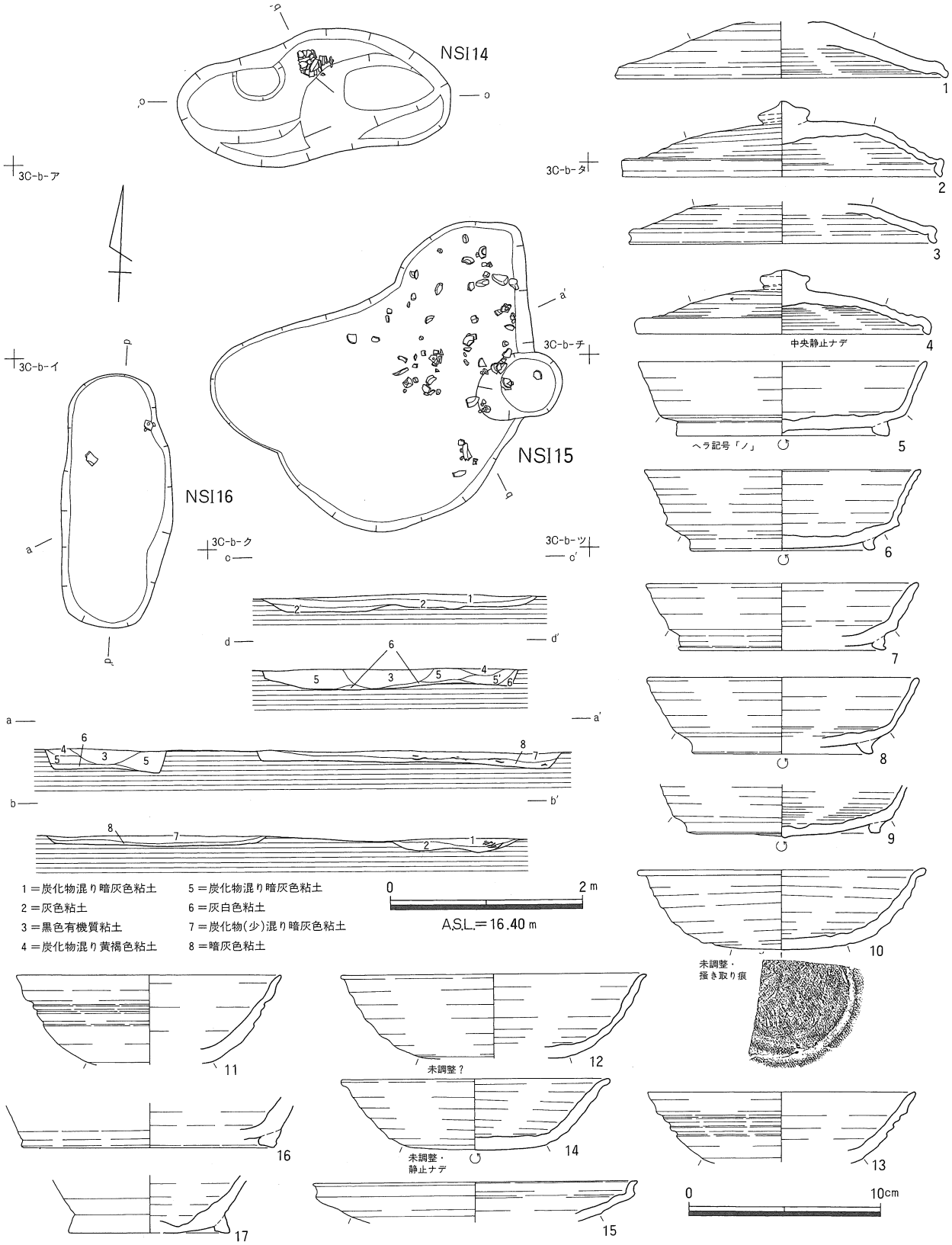
底面に顕著な凹凸が見られ（断面すり鉢状）、東寄りが深くなっていた。北壁に接して丸い凹み（径35～55㎝）がある。その東側に土器片の集積が認められた。覆土は灰色粘土を主体とし、上層ほど多くの炭化物を混入している。

集積していた土器片は摩耗の著しい土師器甕片である。



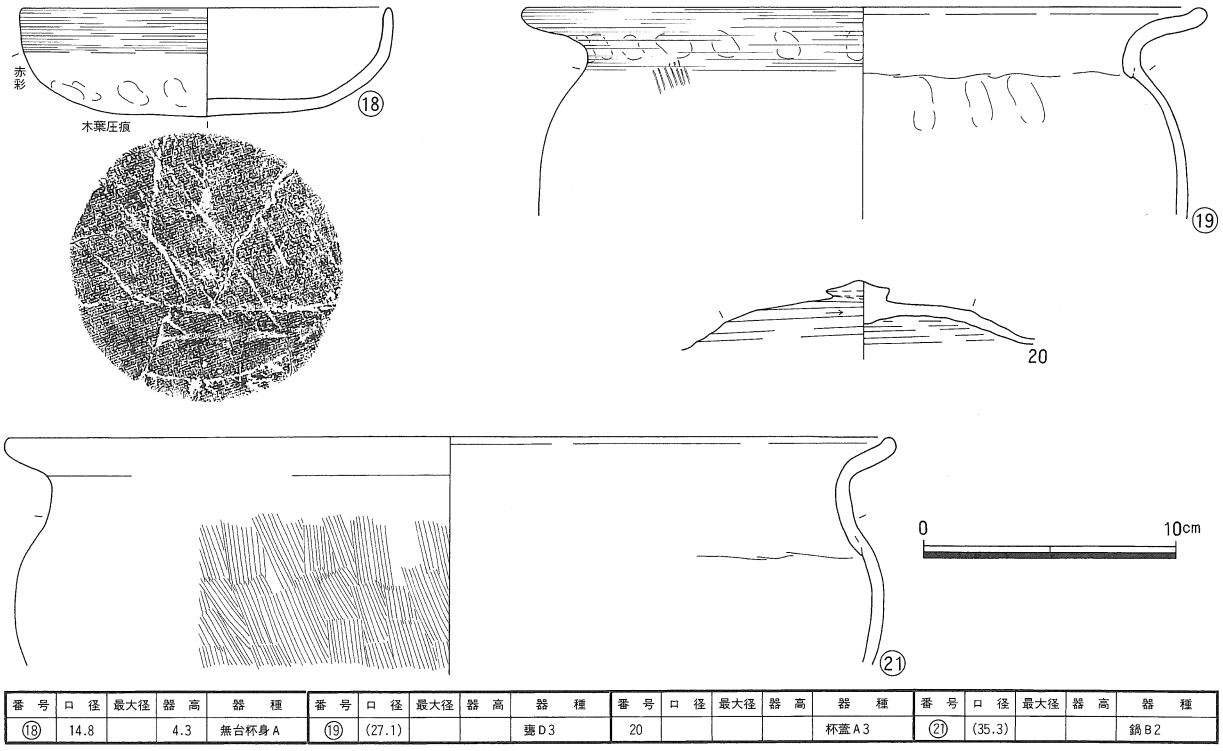
番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	14.2		3.2	杯蓋A2	5	(16.1)		(3.7)	有台杯身C1	9	(15.3)		(3.8)	有台杯身C1	⑬	(20.9)			甕D3
2	(19.9)			杯蓋A3	6					10	(15.4)			無台杯身C	⑭	(23.6)			甕D3
3				杯蓋A3	7				有台杯身B	11		(10.2)		甑					
4	14.3		2.9	杯蓋A3	8				有台杯身A3	12				高盤B					

第121図　ＮＳＩ13実測図・遺物出土状態・出土土器実測図



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(17.3)			杯蓋A1	6	14.4		4.2	有台杯身B	11	(13.8)			無台杯身A1	16				長頸壺B
2	16.7		3.9	杯蓋A3	7	(14.1)		(3.5)	有台杯身B	12	(15.9)			無台杯身A1	17				長頸壺A
3	(16.0)			杯蓋A3	8	(14.2)		(4.0)	有台杯身A3	13	(13.9)			無台杯身A1					
4	15.4		3.4	杯蓋A3	9				有台杯身A3	14	14.0		3.7	無台杯身B2					
5	15.0		3.9	有台杯身C3	10	15.0		4.2	無台杯身A1	15	(16.9)			無台皿B1					

第122図　ＮＳＩ14・15・16実測図　ＮＳＩ15出土土器実測図（1）



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
⑱	14.8		4.3	無台杯身A	⑲	(27.1)			甕D3	20				杯蓋A3	㉑	(35.3)			鍋B2

第123図　ＮＳＩ15出土土器実測図（２）　ＮＳＩ16出土土器実測図

ＮＳＩ15

３Ｃ－ｂ区のⅢ層上面（１面）で確認された。ＮＳＢ28の南隣りに位置している。柱穴状の落ち込みを１箇所切断する。

平面不定形（東西幅3.55m、南北幅2.95m、深さ0.05～0.15m）をなし、急峻な壁と底面との境に明瞭な屈曲部を有していた。底面は総じて平坦であるが、東寄りがわずかに凹む。覆土（暗灰色粘土）は含まれる炭化物（粒）の量の多少により上下２層に区分できた。炭化物を多く含む上層内に大小礫と土器片が混入していた。

出土土器の大半は須恵器食器類である（須恵器杯蓋Ａ１・Ａ３、有台杯身Ａ３・Ｂ・Ｃ３、無台杯身Ａ１・Ｂ２、無台皿Ｂ１、土師器無台杯身Ａ、甕Ｄ３がある）。奈良時代前葉～中葉に形成された土器廃棄跡（土器溜め）であろう。

ＮＳＩ16

３Ｃ－ｂ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＩ15の西隣りに位置している。

平面形は整った楕円形（長径2.65m、短径1.15m、深さ0.10～0.25m）をなし、主軸方位Ｎ－１°00′－Ｅを測る。壁の傾斜は急峻で底面には凹凸が認められた。覆土断面に炭化物の混じる黄褐色粘土と暗灰色粘土を切断する黒色有機質粘土が観察でき、ほぼ竪穴が埋没した後、再び掘削が行われたことを示している。黒色有機質粘土にはこぶし大礫が混入していた。

出土土器は細片・少量であり、器形を知りえた破片は２点（須恵器杯蓋Ａ３、土師器鍋Ｂ２）しかない。

ＮＳＩ17

２Ｂ－ｇ・ｈ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＢ29の東側に隣接し

ている。

平面形は隅丸長方形（東西幅1.65～1.85m、南北幅2.00～2.15m、深さ0.05～0.10m）をなし、主軸方位Ｎ－０°30′－Ｗを測る。浅いが明瞭に立ちあがる壁と底面・壁間に屈曲部を有していた。南西隅はほぼ直角に折れ、西壁から外方へ断面ロ字状の小溝（長さ1.05m、幅0.22m、深さ0.05m）がのびている。平坦な床面の南東隅から２段に掘られた平面楕円形様（長径80cm、短径75cm、深さ25cm）の落ち込みが検出された。北寄りには焼土（50×45cm、厚さ６cm）が分布していた。竪穴外に２箇所、小規模な竪穴状遺構（平面楕円形、長径125cm・80cm、短径82cm・65cm、深さ16cm・18cm）を伴う。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体とし、小礫がわずかに混入していた。底面の落ち込み内には炭化物（粒）が目立ち鉄滓を含んでいた。断面すり鉢状をなす南側の竪穴状遺構内にも炭化物（粒）が集中していた。

砥石が１点出土している。出土土器には須恵器無台杯身Ｄ３、土師器無台杯身Ｃ１、無台皿Ｂ１、鍋Ｂ２がある。ＮＳＩ３と同様に鉄滓を出土する点示唆的であるが、小鍛冶に関連する遺構と断定するには焼土があまりにも少ないように思う。形成時期は奈良時代後葉と考えられる。

ＮＳＩ18

２Ｂ－ｈ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）で確認できた。ＮＳＩ17の南西側に位置している。

平面形は楕円形様（長径1.20m、短径0.85m、深さ0.05m）をなすが、北壁の輪郭は直線的である。主軸方位Ｎ－２°00′－Ｅを測る。断面はすり鉢状を呈し、炭化物（粒）を含む褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を覆土としていた。

数点の摩耗した土師器細片を除き出土遺物は皆無である。ＮＳＩ17に伴う遺構とも考えられる。

ＮＳＩ19

２Ｂ－ｂ区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（２面）確認できた。ＮＳＩ20と共にＮＳＨ８の西隣りに位置している。

平面楕円形（長径1.80m、短径1.10m、深さ0.15～0.30m）、主軸方位Ｎ－65°00′－Ｅを呈する。壁はほぼ垂直に落ち、平坦な底面にさらに１段深い落ち込みが認められた。灰色粘土からなる覆土は３層に区分できる。最上層には多量の炭化物（粒）が混入していた。

出土土器はきわめて細片・少量である。１点（須恵器杯蓋Ａ３）のみ器形を復元しえた。

ＮＳＩ20

２Ｂ－ｂ区において隣接するＮＳＩ19と同一面（２面）で検出された。

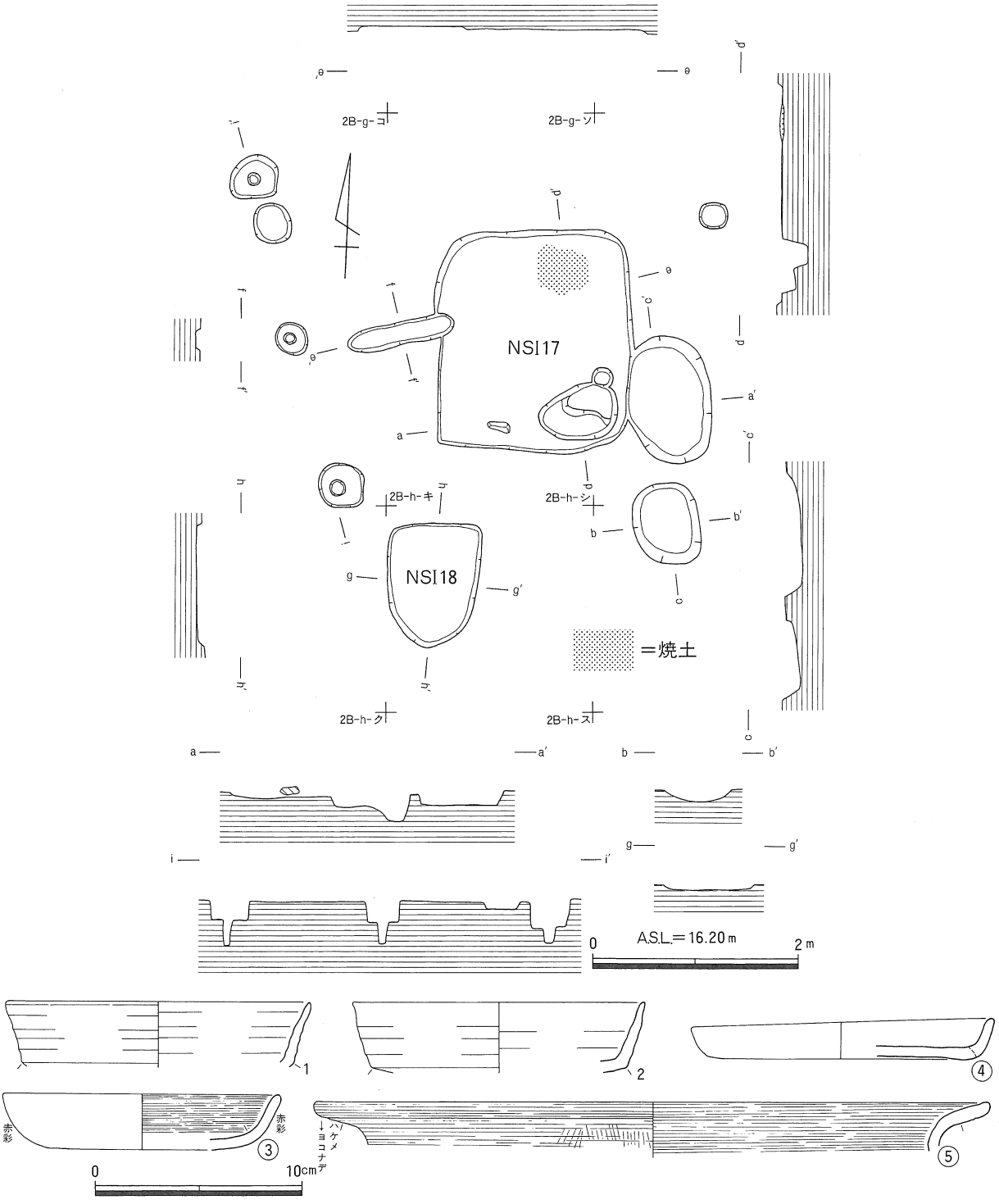
平面楕円形（長径1.65m、短径1.10m、深さ0.10～0.15m）をなし、主軸方位Ｎ－38°30′－Ｅを測る。壁は内彎しつつ傾斜し底面の中央がわずかに深くなっていた。覆土は２層に区分され（上層＝暗灰色粘土、下層＝灰色粘土）、上層には炭化物（粒）が若干含まれていた。

出土土器はすべて奈良時代に属する須恵器であるが、細片のため器形を知ることができない。ＮＳＩ19と共にＮＳＨ８に伴う遺構であろう。

ＮＳＩ21

３Ｂ－ｈ区のⅢ層を約20cm掘り下げたところで（２面）、確認できた。ＮＳＩ22と隣接しＮＳＨ９の東側に位置している。

南端がわずかに尖り平面楕円形様（長径2.55m、短径1.20m、深さ0.05～0.15m）をなす。浅いが明瞭な壁を有し、わずかに凹凸のある底面は北に向かい徐々に深くなっていた。主軸方位は南北（Ｎ－０°00′－Ｅ・Ｗ）を指す。砂質の強い灰色粘土・暗灰色粘土・灰褐色粘土が複雑に混じり合い覆土

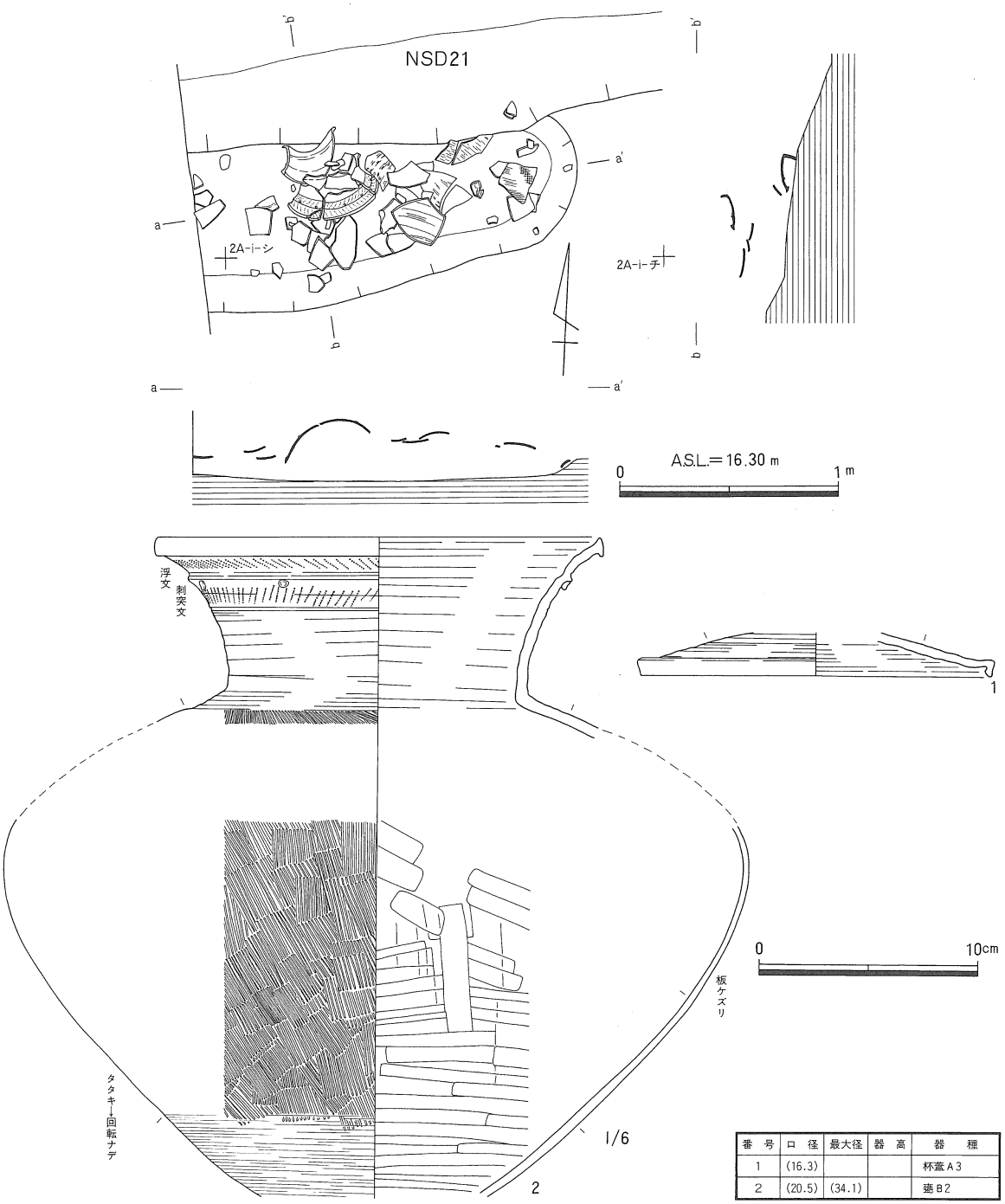


番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(14.8)			無台杯身D3	③	(13.5)			無台杯身C1				小(1.5)	
2	(14.1)			無台杯身D3	④	(14.7)		大(2.0)	無台皿B1	⑤	(32.7)			鍋B2

第124図　ＮＳＩ17・18実測図　ＮＳＩ17出土土器実測図

を形成していた。

出土土器はすべて破片である。須恵器無台杯身Ａ１が主体をなし、他に須恵器杯蓋Ａ１、有台杯身Ｃ３、土師器有台皿Ａ１・Ａ２、無台皿Ａ、甕Ｄ３が見られる。奈良時代前葉に位置づけられる土器



番号	口径	最大径	器高	器種
1	(16.3)			杯蓋A3
2	(20.5)	(34.1)		甕B2

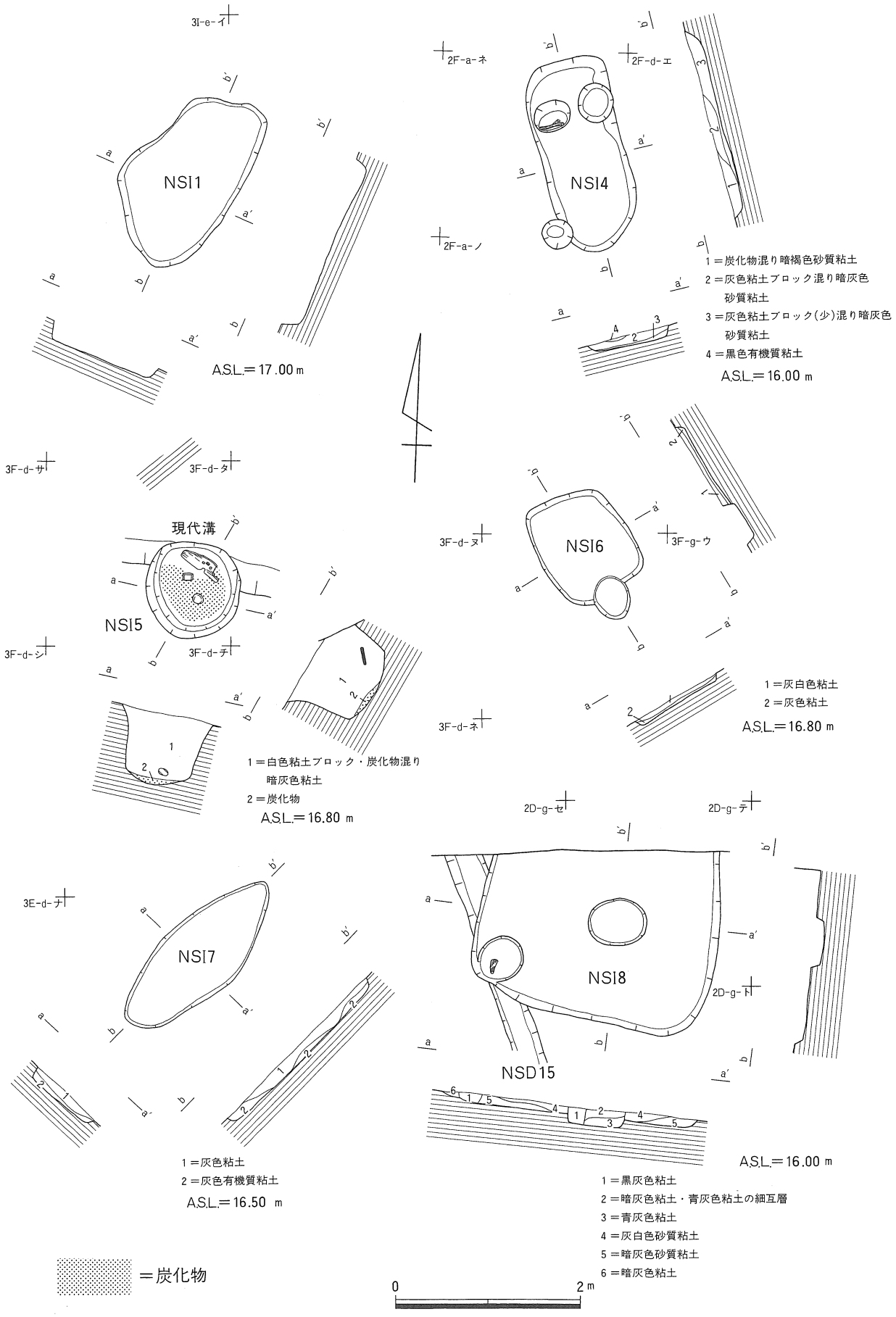
第125図　ＮＳＩ23実測図・遺物出土状態・出土土器実測図

廃棄跡（土器溜め）と考えている。

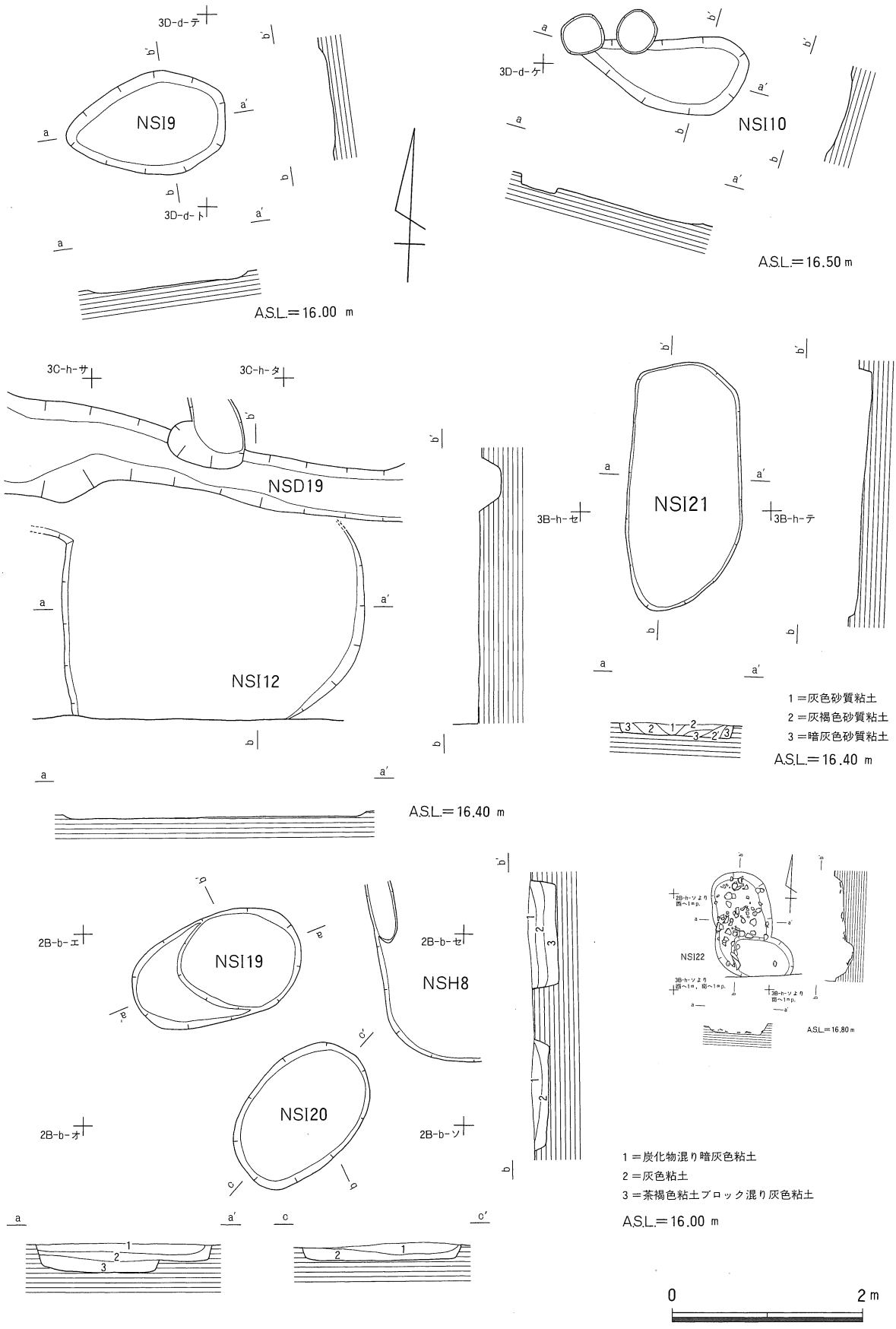
ＮＳＩ22

３Ｂ－ｈ区のⅢ層上面（１面）で確認できた。ＮＳＩ21の南隣りに位置している。

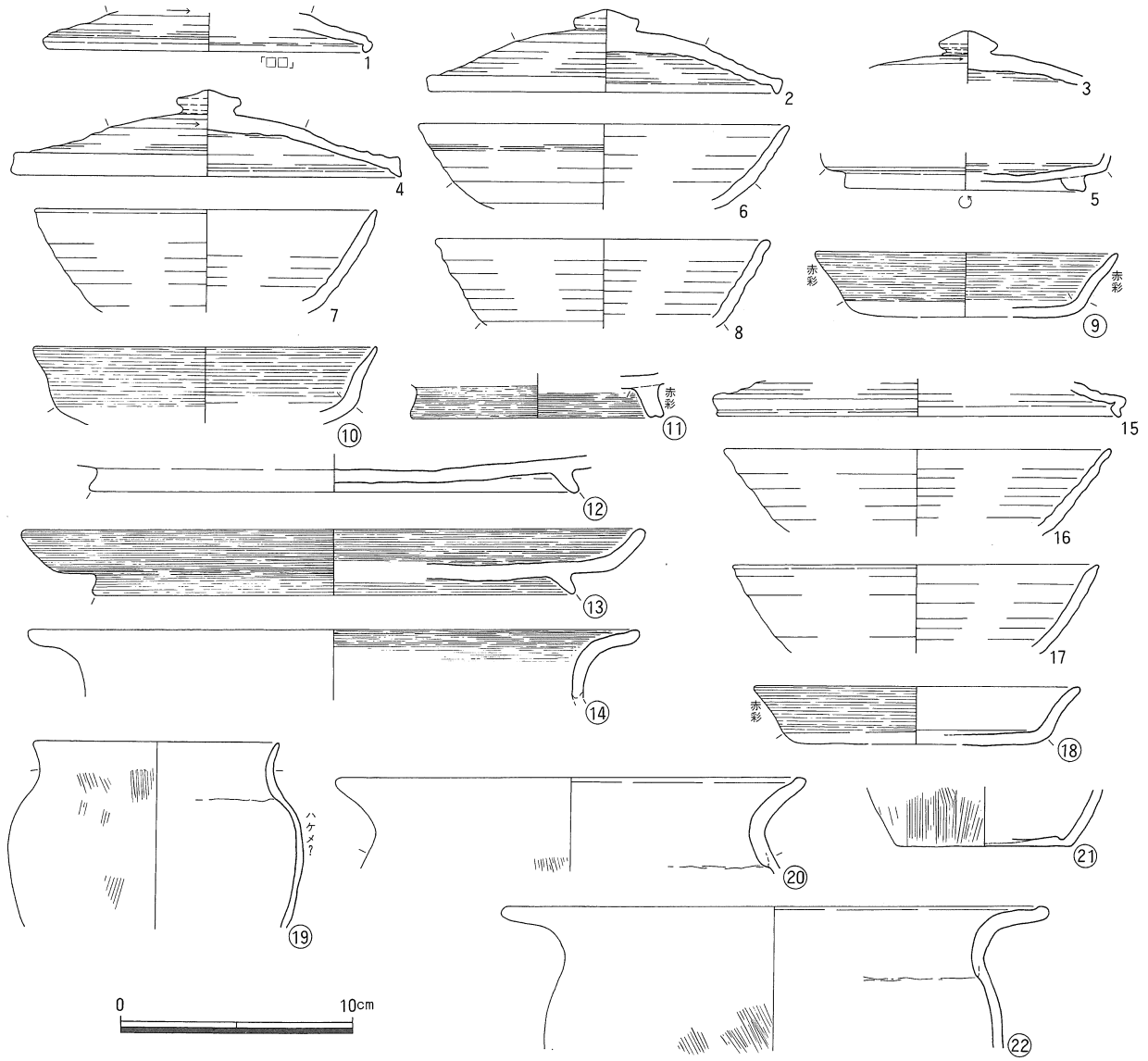
平面楕円形様の竪穴状遺構が、２箇所重複したような平面形を示し（東西幅0.80m、南北幅1.10m、深さ0.05～0.20m）、主軸方位－Ｎ－６°00′－Ｗ前後を測る。壁は直線的に傾斜し底面との境に屈曲部を持つ。南に向かい深くなる底面の南端はすり鉢状に落ち込んでいた。覆土（褐灰色砂質粘土－Ⅲ層－）はレンズ状に堆積せず、比較的短期間に埋没したと考えられる。一段浅い底面から層をなす多



第126図　ＮＳＩ１・４・５・６・７・８実測図



第127図　ＮＳＩ９・10・12・19・20・21・22実測図



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	(14.1)			杯蓋A3	7	(14.7)			無台杯身A1	⑬	(26.7)		(2.8)	有台皿A2	⑲	(10.5)	(12.6)		甕B
2	15.3		3.6	杯蓋A2	8	(14.4)			無台杯身A1	⑭	(26.2)			甕D3	⑳	(20.1)			甕D1
3				杯蓋A3	⑨	(13.0)		(2.8)	無台皿A	15	(17.7)			杯蓋A3	㉑				
4	16.7		3.6	杯蓋A1	⑩	(14.7)			無台皿A	16	(16.6)			無台杯身A2	㉒	(23.5)			甕D3
5				有台杯身C3	⑪				有台皿A1	17	(15.7)			無台杯身A1					
6	(15.9)			無台杯身A1	⑫				有台皿A2	⑱	(14.0)		(2.5)	無台皿A					

第128図　ＮＳＩ５・７・19・21・22出土土器実測図

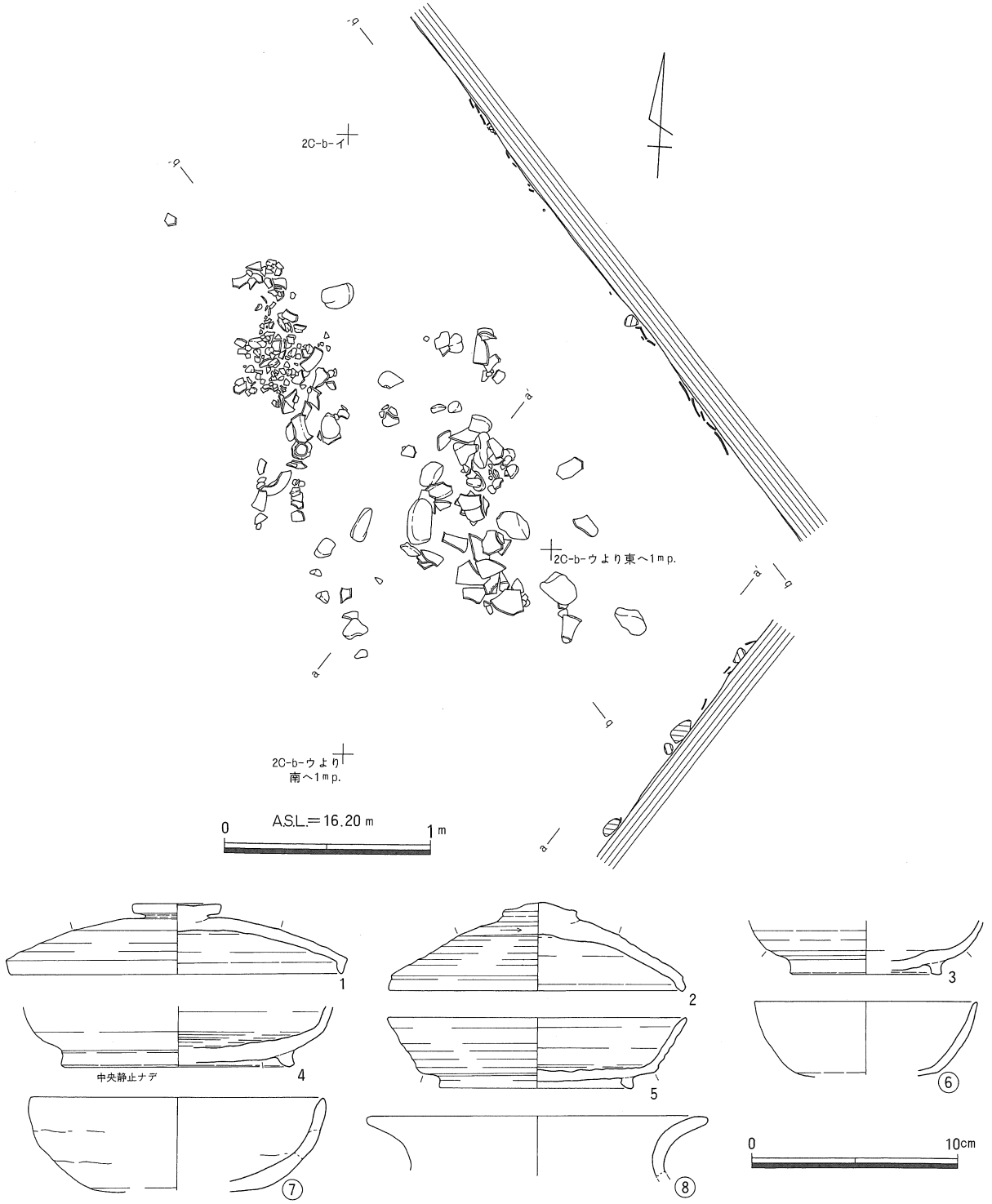
量の土器片とこぶし大礫が検出された。

土器片は土師器を主体とする。器形を復元しえた破片には、須恵器杯蓋Ａ３、無台杯身Ａ１・Ａ２土師器無台皿A、甕Ｂ・Ｄ１・Ｄ３がある。形成時期は奈良時代中葉以前まで遡るものと思われる。土器廃棄跡（土器溜め）であろう。

ＮＳＩ23

２Ａ－ｉ区の耕作土（Ｉ層）除去中に土器群の所在に気づいたが、その分布範囲を明確に捉えたのはⅢ層上面（１面）においてである。ＮＳＤ21の南岸に形成された土器廃棄跡（土器溜め）と考えている。

西端が調査区外におよぶため平面形は明らかでない。断面すり鉢状をなす落ち込み（深さ0.05～

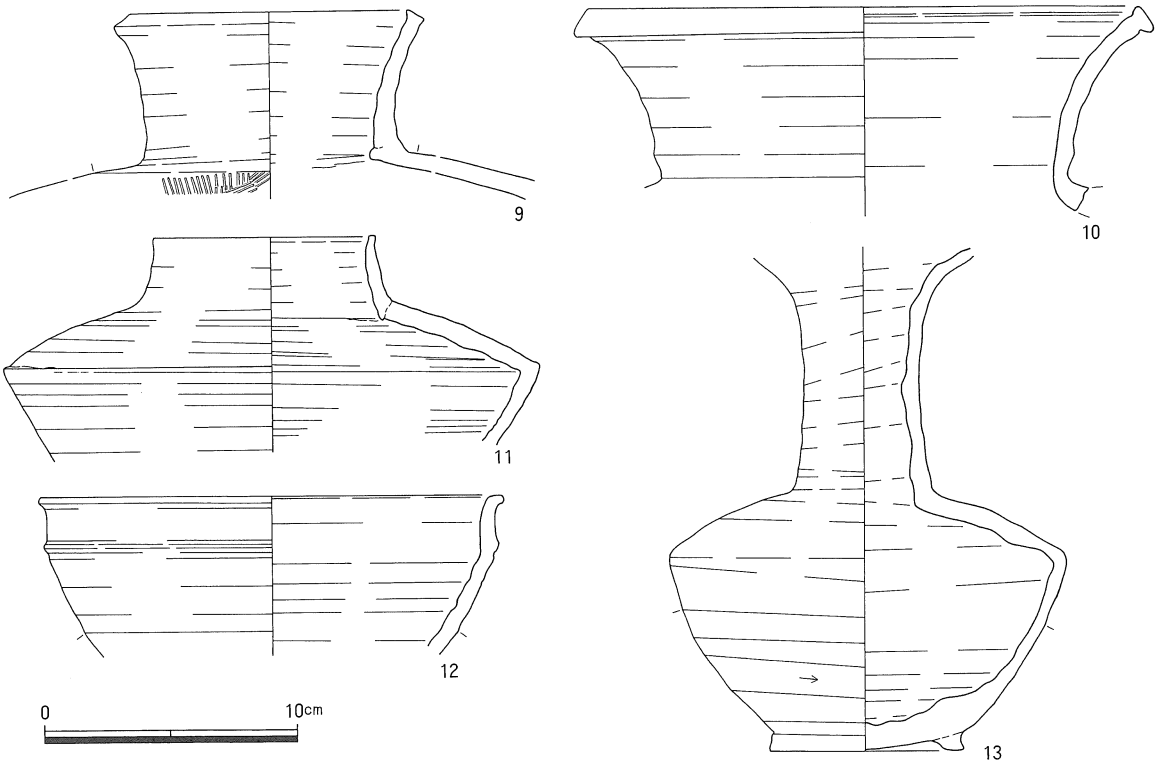


番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	16.6		3.4	杯蓋A2	3				有台杯身A1	5	14.6		3.4	有台杯身C1	⑦	(14.5)			無台杯身A
2	14.4		4.3	杯蓋A1	4				有台杯身A3	⑥	(10.8)			無台杯身B1	⑧	(16.6)			甕D1

第129図　ＮＳＸ１実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（１）

0.15m）内に、１箇体文の須恵器甕Ｂ２片が集積していた。口縁部片は西寄りから胴部・底部片は東寄りから出土し、ＮＳＤ21内の最上層と同じ茶灰色粘土を覆土としていた。

形成時期は奈良時代後葉と考えられる。須恵器杯蓋Ａ３の破片を１点伴出している。



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
9	(12.3)			甕B1	11	(8.8)	(21.2)		壺B	13		15.6		長頸壺A2
10	(22.9)			甕B2	12	(18.4)			鉢B					

第130図　ＮＳＸ１出土土器実測図（２）

第７節　その他の遺構（ＮＳＸ）

ＮＳＸ１

２Ｃ－ｂ区のⅢ層を約10cm掘り下げたところで（２面）、集中する土器片・大小礫に気づいた。ＮＳＢ25の東隣りに分布し、ＮＳＤ21の北岸から約３ｍ離れている。

分布範囲は東西3.10m、南北1.60mにわたり重なりあう破片は少ない（厚さ５～10cm）。東西２つのまとまりに区分でき、東側では大形の須恵器片とこぶし大礫が目立った。西側に密集する土器片は総じて細片化していた。落ち込み等に伴った土器群ではないが、その一括性は高いと考えられる。出土土器のバラエティー（須恵器杯蓋Ａ１・Ａ２、有台杯身Ａ１・Ａ３・Ｃ１、鉢Ｂ、壺Ｂ、長頸壺Ａ２、甕Ｂ１・Ｂ２、土師器無台杯身Ａ・Ｂ１、甕Ｄ１）は、奈良時代前葉の器種組成の一端を物語っていると思われる。

第Ⅲ章　遺　　物

奈良時代に比定しうる出土遺物には、土器・木簡・土製品・瓦・塼・部材・木製品・金属製品・銭貨・石製品等がある。土器・石製品は包含層（Ⅲ層）中にも密度高く含まれていたが、木製品・金属製品・銭貨等は主に溝状遺構（ＮＳＤ）内に堆積していた砂質粘土層より出土した。特にＮＳＤ３・４・11・13からの出土量が多かった。

以下、遺構に伴った遺物を中心に記述する。

第１節　土　器（第168図～第171図）

出土土器量は44×60×15cmのポリコンテナーに約200箱である。内約３分の２は遺構内から出土し、須恵器が約75％、土師器が約25％を占める。明らかに奈良時代にまで遡る施釉陶器は発見されなかった。用途・形態・製作技法・生産地等を基準として、須恵器は21器種76類に、土師器は13器種47類に分類できる。

本節では各器種の分類基準・特徴についてのみ述べ、その伴出関係・編年的位置等の整理は第Ⅴ章にゆずる。

ｉ）須恵器

須恵器には、杯蓋・有台杯身・無台杯身・小型杯身・皿蓋・有台皿・無台皿・高盤・鉢・陶臼・壷蓋・壷・小型壷・長頸壷・獣足壷・四耳壷・瓶・平瓶・水瓶・瑯・甕等がある。

食器類

杯蓋Ａ１　天井部に丸味を持つ。口縁端部は断面三角形様をなして、下方に若干肥厚する程度で、明瞭な身受け部を作らない。天井部の約３分の２を回転ヘラケズリし、断面逆台形ないしは側面に幅の広い稜を持った大型・扁平なつまみを接合する。一般的に右回転のロクロを使い調整を加えるが、回転方向の異なるものも含まれる。

口径14.3～17.3cm、器高2.7～4.3cmを測り、法量の分化は明確でない。

杯蓋Ａ２　天井部は総じて扁平化し、端部近くで外反する。口縁端部は屈曲し、外下方にのびる身受け部を形成する。受け部の形態には明瞭な稜を持ち断面三角形を呈するものと、丸く仕上げたものがある。杯蓋Ａ１に比べ、回転ヘラケズリの範囲は狭く（天井部の約２分の１）、確認しえたロクロの回転方向はすべて右方向を示す。つまみはやや小型化し、中・上位に稜のある擬宝珠型のものが増える。

器高2.1～4.7cmを測り、口径は３大別できそうである（16.0～17.0cm＝Ⅰ、15.0～15.5cm＝Ⅱ、14.0cm前後＝Ⅲ）。口径11.0cmの小型品が含まれる。

杯蓋Ａ３　杯蓋の約70％が本類に属する。天井部の形態は杯蓋Ａ２に類似するが身受け部を内方まで屈曲させ、天井頂部のみを２～３回転、平坦にヘラケズリ（ロクロ右回転）したものが多い。回転ヘラケズリの範囲はさらに狭まる傾向にある。背の高い擬宝珠型つまみの出現等、つまみの形態・規模、身受け部の深さ・形態（断面稜のある三角形・丸味・端部外反等）にはバラエティーが見られる。

口径11.6～20.8cm・器高1.9～5.1cmを測り、口径が大きくなるに従って、器高も高くなる。法量的に４大別でき（口径18.5～19.5cm・器高4.3～5.1cm＝Ⅰ、口径17.0～18.0cm・器高2.7～4.6cm＝Ⅱ、口径16.0～16.5cm・器高3.5～4.3cm＝Ⅲ、口径14.0～15.5cm・器高1.9～4.0cm＝Ⅳ）、小型品（Ⅳ）が主体をなす。

杯蓋Ｂ　つまみを付さない杯蓋である。天井部の形態・調整手法は杯蓋Ａ３とかわらない。法量を知りえた資料わずか１点であるが（口径14.5cm・器高2.5cm)、天井頂部を欠失した杯蓋Ａ３の一部は杯蓋Ｂに属する可能性がある。

有台杯身Ａ１　半球形をなす杯部に、断面逆台形様の扁平な高台を接合する。高台両側に幅広く接合時の回転ナデ痕を残し、底部の回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）は粗雑なものが多い。口縁端部を丸く仕上げる。底部は丸底を呈し、高台より下方に張り出す。

小型品１点（口径12.2cm・器高4.1cm）を除き、法量的に２大別できる（口径15.0～15.6cm・器高3.8～5.0cm＝Ⅰ、口径13.8～14.4cm・器高4.1～4.7cm＝Ⅱ)。底部にヘラ記号「メ」を記した資料が１点ある。

有台杯身Ａ２　器高に対する口径の比は１：3.5前後を示し、有台杯身Ａ１に比べ扁平な器形となる。口縁部は内彎し、回転ナデ調整により端部をわずかに外反させて内側に内傾面をつくる。底部から体部下半にかけ２回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加える。底・体部の境に外に張った小規模な高台を接合する。底部は丸底をなし多くが高台より下方に張り出す。

口径14.4～15.9cm、器高3.6～4.3cmを測る。出土量は少ない。

有台杯身Ａ３　器高対口径の比は有台杯身Ａ２と同様であるが、底・体部間で屈曲し、口縁部は直線的ないしは外反しつつ外上方へのびる。口縁端部は内傾するか丸く仕上げられる。高台は有台杯身Ａ２に比べ高く、内側に接合時の強い回転ナデ痕（凹面）を残す。端部は丸味を持つ。回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）された底部が丸底をなし高台より下方へ張り出すものと、高台下端とほぼ同じ高さにおさまるものがある。

口径11.0～17.2cmを測り、口径は３大別できそうであるが（17.0cm前後＝Ⅰ、14.0～14.5cm＝Ⅱ、11.0～12.5cm＝Ⅲ)、器高はほぼ一定（4.0cm前後）している。

有台杯身Ｂ　底・体部間に断面三角形様の凸帯を有し口縁部は外反する。高台の接合箇所は有台杯身Ａに比べやや内方にある。高台は総じて扁平（断面逆台形様）で、端部に幅の広い水平・外傾面を持つ。底部中央から凸帯下半にかけて主に右回転のロクロを使いヘラケズリ調整を加えるが、回転方向の異なるものも含まれる。丸底様をなし、約半数が底部を高台下まで突出させる。杯身類のなかできわめて特徴的な胎土（白色粒めだつ)・色調（灰白色）を示す。ヘラ記号（底部＝「ノ」）を記したものがある。

口径13.4～15.9cm、器高3.5～4.2cmを測る。

有台杯身Ｃ１　平底をなす底部から口縁部は屈曲して立ちあがり大きく開く。屈曲部に明瞭な稜を持ち、口縁部のノタメが顕著である。口縁端部を丸く仕上げ、底部外縁近くに断面方形ないしは内側に顕著な回転ナデ痕（凹面）のある内彎した高台を接合する。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）が施される。

口径10.5～16.1cm、器高3.4～3.8cmを測る。

有台杯身Ｃ２　調整手法は有台杯身Ｃ１に類似するが、底・体部間に稜はなく丸味を帯びる。口縁部は若干内彎する。高台は内彎しつつ外に張り、端部に回転ナデ調整による水平面を持つ。細片が多く法量を知りえた資料は少ない。

口径15.5cm、器高4.0cm前後に集中する。

有台杯身Ｃ３　平底をなす底部から口縁部は屈曲し、外上方へ直線的にのびる。口縁端部に丸味を持つ。有台杯身Ｃ１・Ｃ２に比べ、高台は内方へ移行し断面方形を呈する。端部は外傾する。底部を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、高台接合時の回転ナデ痕を幅広く残す。

口径12.2～15.0cm、器高3.5～4.3cmを測るが、口径14.0cm前後の資料が主体を占める。

有台杯身D　法量を知りえた資料はわずか1点である（口径16.1cm・器高5.5cm）。平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ち、杯部の断面形は箱形（長方形）に近い。底部外周の傾斜面に、背が高く内彎しつつ外に張った高台を接合する。高台端部を水平に仕上げる。

有台杯身E　平底の底部から口縁部へ丸味を持ってなめらかに移行し、端部近くで急激に外反する。いわゆる金属器（佐波理器等）を模倣した有台杯身である。底部外縁から離れて接合された高台は扁平・小規模で断面方形をなす。端部の水平面に沈線状の回転ナデ痕を残す。口縁端部の形態には2種あり（a＝外反率が小さく丸くおさめたもの、b＝屈曲外反した端部をさらに上方へつまみあげ外側に垂直な平坦面を作り出したもの）、後者の回転ヘラケズリ調整範囲（ロクロ右回転）は、底部から体部下半にまでおよび前者に比べ広い。口縁部内外面をノタメが残らないようていねいに回転ナデ調整する。

法量的に2大別できるが（口径17.0～18.1cm・器高5.6～6.2cm＝Ⅰ、口径15.6～15.9cm・器高5.9～6.9cm＝Ⅱ）、規格外の大型品（口径19.1cm）が1点ある。

無台杯身A1　丸底をなし器形は半球状を呈する。口縁端部は短く外反するか、単純に丸く仕上げられる。口縁部のノタメが顕著で、底部にはヘラで切り離した後何ら調整を加えない。一部または全面に板目状の圧痕・擦痕を残したものがある。

口径11.4～16.3cm、器高3.3～5.2cmを測り、口径が大きくなるに従って器高も高くなる傾向を指摘できるが、法量の分化は明確でない。約75%が口径13.0～15.0cm、器高4.0～5.0cmの範囲内におさまる。底部を粗くヘラケズリし、高台を付せば有台杯身A1とかわるところはない。

無台杯身A2　無台杯身A1に比べ扁平化する。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）され、平底様を呈する。口径に比して底径が大きくなり（底径：口径＝1：2）、口縁部は若干内彎する。口縁端部を先細く丸く仕上げるものと、幅広い1条の回転ナデ調整を施すことにより外反させたものがある。口径12.4cm・16.6cmの小・大型品を除き、法量的に3大別できる（口径15.5cm前後・器高3.6～3.8cm＝Ⅰ、口径14.5～15.0cm・器高3.9～4.0cm＝Ⅱ、口径13.6～13.8cm・器高4.0～4.5cm＝Ⅲ）、口径が大きくなると器高は逆に低くなる。

無台杯身A3　無台杯身A1・A2と同様に器形は半球状を呈する。口縁端部に水平面を持つ。底部に回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）を加える他、静止糸切り痕を残したものがある。

口径12.7～14.0cm、器高3.7～4.0cmを測る。出土量は少ない。

無台杯身B1　丸底をなし口縁部は直線的あるいは外反しつつ外上方へのびる。ノタメは顕著で間隔が広い。口縁端部は肥厚し、さらに外反して先細く仕上げられる。底部はヘラ切り離しの後未調整か、口縁部下半にかけて同心円状の回転ヘラケズリを加える。右回転のロクロが主体をなすが、回転方向の異なるものも含まれる。

口径12.7cmの小型品を除き法量的に2大別できる（口径15.1～15.4cm・器高4.5～5.2cm＝Ⅰ、口径14.1～14.4cm、器高4.6～5.1cm＝Ⅱ）

無台杯身B2　無台杯身B1同様に底部に調整を加えないものが主体をなす。平底に近くなる。口縁部上半は外反し、端部を回転ナデにより外方につまみ出して玉縁状に仕上げる。底部に回転ナデ、不整方向のナデを加えたものがある。

口径12.9～14.4cm、器高3.7～4.5cmを測る。

無台杯身B3　器形は無台杯身B1・B2に類似するが、体部下半で若干屈曲し、底部に静止・回転糸切り痕を残す。法量を測りえた資料はわずか1点しかない（口径13.9cm・器高3.8cm）。

無台杯身C　口径に対する器高の比は１：0.2～0.4を示し、総じて扁平な器形を呈する。平底の底部から丸味を持ってほぼ直立する口縁部へ移行する。口縁端部の形態はバラエティーに富み（凹面屈・内傾・水平・丸味等）、底部の回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）の範囲にも広狭差が見られる。

口径14.6・16.3cm、器高4.4・3.5cmの大型品を除き、法量は口径12.5～13.0cm、器高3.0～4.5cmの範囲内に集中する。口径の均一性に比べ器高の差が大きい。

無台杯身D１　底部と体部との境に明瞭な稜を有し、口縁部は外上方へ直線的にのびる。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、中央部がやや下方へ張り出して丸底様をなす。口縁端部は若干肥厚し、先細く仕上げられるか内傾面を持つ。

大型品（口径14.4～17.2cm・器高5.7～6.3cm＝Ⅰ）と小型品があり、小型品はさらに３大別できる（口径13.1～13.6cm・器高3.5～4.1cm＝Ⅱ、口径12.2～12.4cm・器高3.3cm前後＝Ⅲ、口径10.9～11.3cm・器高3.1～4.3cm＝Ⅳ）。小型品は口径が大きくなるに従って器高も高くなる。

無台杯身D２　無台杯身Ｄ１同様、底・体部間に明瞭な稜（屈曲部）を持つが、底部はラセン状、２～３回転のヘラケズリ（ロクロ右回転）により平底を呈する。口縁端部に内傾面を作り出したものが圧倒的に多い。

大型品と小型品があり、さらに大型品は２大別、小型品は４大別できる（口径18.6～19.2cm・器高5.3～5.6cm＝Ⅰ、口径17.3～17.8cm・器高5.5～5.7cm＝Ⅱ、口径13.9～14.4cm・器高3.2～4.8cm＝Ⅲ、口径12.4～13.4cm・器高3.2～4.1cm＝Ⅳ、口径10.7～11.2cm・器高3.6～3.7cm＝Ⅴ、口径9.4cm・器高3.6cm＝Ⅵ）。

無台杯身D３　底・体部間で屈曲し口縁部は外上方へのびる。底部は右回転のロクロを使いラセン状に２回転ヘラケズリされ、平底ないしは上げ底様を呈する。底部にヘラ記号「メ」を記したものがある。底部外周に１条の回転ヘラケズリを加えるか、回転ナデ調整痕を残すことにより傾斜面を作り出す。口縁部は若干内彎するものが多い。ほぼすべての口縁端部に内傾面が見られ、底部・口縁部の調整手法は均一化している。底部の回転ヘラケズリが徹底せず、中央部に丸く静止糸切り痕を残したものがある。

大型品（口径14.8～17.0cm・器高3.4～6.2cm＝Ⅰ）と小型品（口径11.5～14.0cm・器高3.1～4.1cm＝Ⅱ）に２大別できるが、口径は13.0cm前後に集中し法量の分化は明確でない。大型品には器高の高いものと低いものがある。（5.0～6.2cm、3.4～4.0cm）。出土した無台杯身の主体をなす。

無台杯身D４　基本的な器形・調整手法は無台杯身Ｄ３とかわらない。底部の回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）の範囲が狭いため、外周に幅の広い水平な回転ナデ痕を残す。この回転ナデ調整痕が傾斜している場合、無台杯身Ｄ３との区別は難しい。

大型品は２点（口径15.9・16.7cm・器高5.5・5.8cm）しかなく、小型品（口径10.0～14.2cm・器高3.2～4.0cm）が主体を占める。口径の大小差に関わりなく、小型品の器高（3.5cm前後）はほぼ一定している。

小型杯身Ａ１　平底の底部から丸味を持ってほぼ直立する口縁部へ移行し、深い杯部を形作る。底部外縁に外に張った扁平な高台を接合する。高台端部に水平面を持つ。底部に回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、口縁端部を丸く仕上げる。出土量は少なく法量を知りえた資料はわずか１点しかない（口径8.1cm・器高4.9cm）。

小型杯身Ａ２　底部全面を回転ヘラケズリし、底・体部の境に明瞭な稜を持つ。小型杯身Ａ１に比べやや内方に、断面方形を呈する高台を接合する。全形を知りえた資料はないが、高台径は小型杯身Ａ１とほぼ同じである。

小型杯身Ｂ１　平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ちあがり、コップ状の器形を呈する。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、外縁に明瞭な稜をつくる。口縁端部は肥厚し、回転ナデ調整により中央がくぼんだ水平面をなす。

口径7.8～8.1cm、器高4.8～4.9cmを測る。

小型杯身Ｂ２　口縁部の形態は不明である。平底の底部外周に回転ヘラケズリされた傾斜面を持つ。底部内面に明緑色自然釉が付着している。底径は小型杯身Ｂ１と差がない。

皿蓋　口径22.0cm以上を測る大型の蓋を皿蓋とした。つまみ・天井部・口縁部の形態・調整手法は坏蓋Ａ３と変わらない。

器高5.5cm前後を測る。出土量は少ない。

有台皿Ａ１　底・体部間で屈曲し口縁部は内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部を丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）され平底をなす。外周に幅の広い傾斜面を持ち、そこに外に張った比較的大型の高台を接合する。端部の水平面には凹面をなす回転ナデ痕が見られる。細片が多く法量が計測できた資料は１点しかない（口径22.4cm・器高4.6cm）。

有台皿Ａ２　底部は平底を呈する。有台皿Ａ１同様に底部外周近くに断面丸味を帯びた三角形様の高台を接合する。底部・体部の境に明瞭な稜を持つ。口縁部の形態は明らかでない。

有台皿Ａ３　底・体部間で屈曲し口縁部は外上方へのびる。口縁端部は外反し先細く仕上げられる。内傾面を持つ。屈曲部の内側・内底面の周縁に、回転ナデ調整痕と思われる沈線が１条めぐる。高台の接合箇所は有台皿Ａ１・Ａ２に比べ内方へ移行し、断面扁平な方形を呈する。端部の平坦面はわずかに凹む。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、平底をなすものと中央が丸底気味にやや下方へ張るものがある。

口径22.6～25.2cm、器高3.2～4.2cmを測る。

有台皿Ｂ１　扁平な体部から短い口縁部が稜をなして立ちあがる浅い有台皿である。口縁部は外面の強い回転ナデ調整により外反し、端部に水平面・内傾面を作る。内底面の周縁には断面Ｖ状の沈線（接合痕）が見られる。高台は断面方形をなしわずかに内彎する。端部に凹面を持つ。高台の外側1.0～2.0cmまで回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、底部中央がやや下方へ垂れ下がったものが多い。

口径の大小差（16.5～19.3cm）にかかわらず、器高2.0～2.6cmとほぼ一定している。出土した有台皿の主体をなす。

有台皿Ｂ２　有台皿Ｂ１に比べ口縁部が短く体部はさらに扁平化する。口縁端部に外傾面を持つ。高台は基本的に外に張り内彎するものは少ない。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）範囲は有台皿Ｂ１とかわらないが、高台の内側に静止糸切り痕を残すものがある。

口径17.0～18.7cm、器高2.0cm前後を測る。

有台皿Ｃ　器形は有台皿Ｂに類似するが、底・体部間の稜は不明瞭で高台径が大きくなる。口縁部は外に開き端部を丸く仕上げる。内傾気味に接合された高台幅は広く断面扁平な方形を呈する。法量を知りえた資料は２点しかない（口径17.5～19.3cm・器高2.1～2.4cm）。あるいは蓋かもしれない。

無台皿Ａ１　丸味を帯びた底部から口縁部は屈曲して立ちあがり、内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部の外傾面には丸味がある。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）する。細片が多く法量を知りえた資料はない。

無台皿Ａ２　底部は平底をなし底部と体部の境に明瞭な稜を持つ。口縁端部は内傾する。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）により仕上げられるが、外周に幅広く回転ナデ痕を残す。各部の調整手

法は無台杯身Ｄ４と変わらない。

口径16.3～21.9cmを測る。

無台皿Ｂ１　皿部の形態・調整手法は有台皿Ｂ１と変わるところがない。底部の約２分の１を２～３回転、ラセン状にヘラケズリ（ロクロ右回転）し、中央部を平底様に仕上げる。

口径は３大別できそうである。(20.5～21.0cm＝Ⅰ、18.0～20.0cm＝Ⅱ、14.5～17.0cm＝Ⅲ)、器高（1.5～2.7cm）の高低差は著しい。口径22.5cm以上の大型品が２点ある。小型で口縁部が内方まで屈曲し、端部に丸味を持つのは、杯蓋（杯蓋Ｂ）として使用された可能性もある。

無台皿Ｂ２　皿部の形態・調整手法は有台皿Ｂ２と変わるところがない。口縁端部の水平面・外傾面は、回転ナデによりわずかにくぼむ。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）の範囲には、広狭差が見られる。

口径16.3～20.5cmを測り、大型品（口径22.9cm）が１点ある。明確な器高を知りえた資料はないが、無台皿Ｂ１に比べ総じて浅いと思われる。

無台皿Ｃ　丸底様をなす底部から短く外反する口縁部が屈曲し立ちあがる。口縁端部は若干肥厚し、丸味を帯びた外傾面を作る。底部の約３分の２に回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加えるが、底部中央の形態は明らかでない。背の高い高台・脚等が接合されていた可能性もある。

口径３大別でき（25.5cm前後＝Ⅰ、22.3～23.9cm＝Ⅱ、19.5cm前後＝Ⅲ)、小型品は見られない。

無台皿Ｄ１　平底をなす底部から口縁部へなめらかに移行する。口縁部は内彎しつつ開く。口縁端部は一般的に丸く仕上げられるが、回転ナデにより内傾面・外傾面を作り出したもの、端部を外方へ先細くつまみ出したもの等、その形態はバラエティーに富む。底部の回転ヘラケズリの範囲・回転数・ヘラの移動のし方（ラセン状・同心円状）には差があり、調整範囲が広いものほど明確な平底様を呈するようである。

小型品（口径15.1～15.4cm)・大型品（口径19.7～22.0cm）が５点ある。他はすべて口径16.6～18.9cm、器高1.7～2.9cmの範囲内に集中する。口径と器高との対応関係（規格性）は見い出せない。

無台皿Ｄ２　基本的な器形は無台皿Ｄ１に類似するが、口縁部はさらに大きく開き底部に丸味を帯びる。口縁端部を外反・肥厚させ断面三角形様に仕上げたものが多い。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）範囲は無台皿Ｄ１に比べ総じて狭くなる。

口径25.6～29.5cm、器高1.8～2.9cmを測り、法量の分化・規格性は明確でない。大型品（口径25.6cm）が１点ある。

高盤Ａ　盤部の形態は明らかでない。無台皿Ｂの他、古墳時代後期の高杯に似た椀状の盤部が接合されていた可能性もある。脚基部は太く上半から下半にかけて均一に開く。端部は上下方へ肥厚し回転ナデを施すことにより、外側に垂直な平坦面と稜を作る。断面三角形様をなし脚内外面はていねいに回転ナデ調整される。

高盤Ｂ　無台皿Ｂに脚を付して高盤である。脚は上半がほぼ垂下し下端近くで急激に開く。接合部の径は高盤Ａに比べて細い。脚端部は下方へ屈曲し（断面三角形）明瞭な稜を持つ。口縁端部を外方へつまみ出して外傾面を作り出したものや、丸く仕上げたものがある。また脚部の形態、内面の回転ナデ調整の範囲にも差が見られる。

法量を知りえた資料は少ないが、口径は２大別でき（22.7～24.3cm＝Ⅰ、16.0～16.7cm＝Ⅱ)、器高9.0～12.5cmを測る。

鉢Ａ　口縁部は内傾し端部は回転ナデ調整により先細く丸く仕上げられる。体部・底部の形態は明らかでないが、いわゆる鉄鉢型をなす器であろう。口径16.0cmを測る。

鉢B　頸部は稜をなしてくびれ、短い口縁部が外反しつつ立ちあがる。最大径は口径にあり２大別できる（33.1～35.1cm＝Ⅰ、28.4～30.9cm＝Ⅱ）。大型品は口縁端部を内外方へ突出・肥厚させ、中央の盛り上がった外傾面を作る。口縁部内外面を回転ナデにより仕上げ、体部にはタタキ整形の後回転ナデ調整を加える。体部内面の同心円当て具痕をていねいに回転ナデ消したものと、わずかに残したものがある。小型品の口縁端部は外方へつまみ出されたようにさらに短く外反し、その形態はバラエティーに富む（水平・内傾・丸味）。大型品に比べて浅く、口縁部から体部上半にかけて回転ナデ調整・体部下半・底部に回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）を施す。平底をなす底部径には大小差がある。

鉢C　器形はバケツ状をなし、口縁部が外上方へ直線的にのびる。口縁端部を先細く丸く仕上げる。平底の底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリを加え、口縁部に刺突文列と２条の横位沈線をめぐらしたものがある。

口径26.6～28.8cm、器高15.9cm前後を測る。

陶臼　わずかに内彎しつつ外上方へのびる体部・口縁部に円盤状の厚い底部を接合する。中央がくぼみ丸味のある内底面に、顕著な使用痕を残す資料は少ない。口縁端部を内外方へ肥厚させ、水平面（凹面）を作り出す。底部側面に鋭い稜を持つものと丸くおさめたものがあり、底面は一般的に手持ちナデ（不整方向）により仕上げられる。口縁部・体部の内外面に回転ナデを加える。底部の側面・外周近くにタタキメを残し、焼成前の穿孔を有する破片が１点ある。

口径16.5～18.1cmを測り器高を知りえた資料はないが、底部に丸味を持つ器種ほど深くなるようである。

貯蔵具類

壷蓋A１　丸味を持つ天井部から受け部が稜をなして直角近く折れ曲がり垂下する。天井部のほぼ全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、扁平な擬宝珠状のつまみを接合する。つまみの基部は細い。受け端部は外傾するか先細く仕上げられる。法量を知りえたのは１点である（口径12.9cm・器高4.2cm）。

壷蓋A２　天井部の形態・調整手法は壷蓋Ａ１と変わらない。回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）の範囲が狭いもの、最大径が天井部にあるものを含み、天井部・受け部間の稜は不明瞭となる。端部は一般的に丸く仕上げられる。つまみの形態は明らかでない。

最大径13.1～15.3cmを測る。

壷蓋A３　平坦な天井部と屈曲し下方へのびる受け部からなる。天井部のほぼ全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、つまみは背の高いソロバン玉状を呈する。端部に水平面（凹面）を持つ。法量を知りえたのは１点である（口径14.8cm・器高4.7cm）。最大径は口径にある。

壷蓋Ａは壷Ａ・壷Ｂの蓋と考えている。

壷A　肩が張り丸底様をなす扁平な胴部に、外反・直立する短い口縁部を接合する。いわゆる薬壷である。口縁部内外面にていねいな回転ナデ調整を加え、端部はヘラケズリにより平坦な（内傾）に仕上げられる。回転ヘラケズリは底部から胴部下半にまでおよぶ。底部外縁に外に張った厚手の高台を付す。高台端部の水平面も回転ナデにより若干くぼんでいる。口径に比べ高台径が大きい。底面に不整方向のナデ痕を残すものがある。細片が多く全形を知りえたのは１点しかない（口径9.5cm・最大径17.9cm・器高12.1cm）。

壷B　肩部に明瞭な稜を持ち短い口縁部が内傾しつつ立ちあがる。口縁端部は先細くわずかに外反する。水平面を作る。完形品がないため断言できないが、壷Ｂの底部片と思われるものは平底をなし、

底部外縁に断面丸味のある方形様の高台を付す。胴部下半に３段ラセン状の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、底面中央には不整方向のナデ痕が見られる。

口径8.8～11.6cm、最大径21.0cm前後を測る。器高は明瞭でないが、扁平な器体を呈すると思われる。

壷Ｃ１　肩部の傾斜が大きくイチヂク型をなす胴部と外反する口縁部からなる。古墳時代後期以来の伝統的な壷である。口縁端部は回転ナデにより肥厚し幅の広い外傾面を持つ。端部が外下方へ大きく垂れ、複合口縁状を呈するものも含まれる。底部には平底と丸底があり、前者は底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）、内面に回転ナデ調整を施す。後者にも同様の調整手法が見られるが、タタキ整形の後回転ナデを加え、内面を縦斜位方向に板ケズリしたものが多い。胴部下半・底部にタタキメを残す。

口径11.1～19.4cm、最大径16.8～24.2cm、器高14.5～20.5cmを測る。大型品に平底は見られない。

壷Ｃ２　壷Ｃ１に比べ長胴化し口縁部は直立気味となる。口縁端部を上方へつまみ上げるように回転ナデ調整を加える。すべて平底を呈する。底部調整は粗雑でヘラ切り離しの後、不整方向のナデを施す。胴部内外面を回転ナデ調整し、下半に回転ヘラケズリ痕を残さない。

ほぼ均一な法量（口径9.8～10.6cm、最大径13.2～14.0cm、器高14.5～15.5cm）を示し、最大径20cm以上の大型品はない。

壷Ｄ１　基本的な器形は壷Ｃ１に類似するが、肩部に明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直立し肥厚した端部に回転ナデにより凹曲した外傾面・水平面を作る。底部形態には外周のみを１条、幅広く回転ヘラケズリし丸底様に仕上げたものと、平底をなすものがある。両者ともヘラで切り離した後底面に何ら調整を加えない。口縁部・胴部内外面を回転ナデ調整する。底部の比較的大きなもの、肩部の稜直下に沈線を１条めぐらしたものがある。完形品は１点しかない（口径8.6～10.8cm、最大径13.5cm、器高13.0cm）前後。

壷Ｄ２　壷Ｄ１が長胴化した器形をなす。口縁端部は上方へつまみ上げられくの字状に内屈する。外傾面の両端に鋭い稜を持つ。底部の形態は明確でないが、調整の粗雑に平底と思われる。胴部下半を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、胴部に穿孔、ヘラ記号「メ」、肩部に２条の沈線を施したものがある。

口径9.5～12.0cm、最大径13.0～14.4cm、器高14.5～15.8cmを測る。

壷Ｅ　器形をある程度復元できる資料は１点しか出土していない。内彎する扁平な胴部と著しく短い直立口縁からなる。口縁端部に丸味を帯びた水平面を持ち、口縁部・胴部の内外面をていねいな回転ナデにより平滑化する。底部には高台が付されていたかもしれない。口径13.6cm、最大径14.2cmを測る。

小型壷Ａ　壷Ａを模した小型壷である。１点のみ出土した。口縁端部を丸く仕上げ面取りした断面方形の高台を接合する。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリを加える。肩部に明緑色自然釉が残る。口径3.2cm、最大径7.1cm、器高4.9cmを測る。

小型壷Ｂ　平底をなす底部から体部は若干内彎しつつ外上方へ立ちあがる。蓋受け様の幅の狭い肩部と短く直立する口縁部からなる。口縁端部に丸味を持つ。肩部内面に接合痕をそのまま残すものと、ていねいにナデ消した（ロクロ使用）ものがある。底部全面ないしは胴部下端にかけて回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を施し、上げ底様を呈するものも見られる。

口径5.7～7.7cm、最大径6.9～8.4cm、器高5.3～5.8cmを測る。

長頸壷Ａ１　下位から上位へ均一に開く比較的大型の口頸部を持つ。基部は細い。細片が多く胴部・

底部の形態は明確でないが、高台を付さない平底のものも含まれる。口縁端部を先細く丸く仕上げる。接合部（基部）内面の調整は徹底していない。

口径5.9～11.1cmを測り、大型品と小型品がある。

長頸壷Ａ２　肩の張った胴部に細く長い口頸部を接合する。頸部はほぼ垂直にのび口縁部にいたり急激に開く。口縁端部に丸味を持つ。胴部の形態には扁平なものとやや背の高いものがあり、肩部に明瞭な稜を作り出したものも見られる。断言できないが長胴化するに従って丸底から平底へ移行するようであり、底部から胴部下半におよぶ回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）の範囲も狭くなる。底部外縁に接合時の回転ナデにより外反した断面方形様の高台を付す。高台端部を水平に仕上げる。最大径15.6cm前後を測る。

長頸壷Ｂ１　肩が張り扁平な胴部に太くラッパ状に開く口頸部を接合する。口頸部内外面を回転ナデ調整し、口縁端部は一般的に肥厚・外傾する。肥厚した端部をさらに先細く仕上げ、頸部内面に横位の板ケズリ、外面に刺突文列（櫛状施文具）と３条沈線をめぐらしたものがある。肩部に丸味を持ち底部は中央がやや下方へ垂れて丸底様をなす。底部・胴部下半に回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、端部を水平に仕上げた大型の高台（断面方形様）を付す。最大径17.9～23.6cmを測る。

長頸壷Ｂ２　長頸壷Ｂ１に比べ肩部が直線的になり鋭い稜を持つ。平底の底部外縁にやや小型化し、丸味のある高台を接合する。胴部の調整手法は長頸壷Ｂ１とかわらないが、回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を肩部の稜直下まで幅広く加えたものがある。口縁部の形態は明らかでない。最大径13.9～20.6cmを測る。

獣足壷　口縁部の形態は不明であるが、肩の張ったイチヂク型の胴部に獣足を模した脚を３箇所接合する。胴部内外面をていねいに回転ナデ調整し、底部に回転ヘラケズリを加える。壷Ｃ１に類似した器形を呈するのであろう。出土した獣足は３個体分（５点）ある。すべてヘラを使って細かく面取りし、縦位の溝を切り入れて４指を表現している。足の裏・踵を平坦に仕上げ、踵にはさらに大小の抉りを入れる。胴部最大径を測りえた資料は１点しかない（28.3cm）。

皿耳壷　肩部に２箇所ないしは４箇所（？）の小型把手を付した短頸壷である。口頸部は肩部から屈曲し、わずかに立ちあがる程度で短い。回転ナデ調整を加え、端部にくぼんだ内傾面を持つ。肩部の傾斜する度合には差がある。把手は側面をヘラケズリし角を面取りして平面長方形を呈する。上面に丸味を持つものと平坦に仕上るものがあり円孔を穿つ。胴部・底部の形態は明らかでない。小型品（口径9.8cm）の肩部はていねいに回転ナデ調整されるのに対し、大型品にはタタキ目がそのまま残る。

瓶　平底をなす卵形の胴部にほぼ直立する小さな口頸部を接合する。口縁部は外反し端部がさらに直立して断面三角形様を呈する。外傾面の両端には鋭い稜がある。頸基部接合箇所の調整は徹底していない。肩部に１箇所、指頭圧・ナデにより形を整えた環状の把手を付す。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加える。高台は内彎しつつ外に張る（断面方形様）。

完形品の法量は口径5.8cm、最大径15.6cm、器高18.0cmを測る。

平瓶　細片が多く全形を把握できる資料はない。口縁端部をつまみあげ丸くおさめたものの他、端部を外方へ折り返し外傾面と稜を持つ（断面三角形様）口縁部片（口径8.0～10.0cm）がある。把手は扁平な逆Ｕ字状を呈し、ヘラケズリにより断面台形に仕上げる。

水瓶　平底をなす卵形の胴部と細長い口頸部からなる。口縁端部を上方へつまみ上げ断面三角形様を呈する。器面はていねいに回転ナデ調整（ロクロ右回転）される。肩が張り胴部下端に１条、幅の広い回転ヘラケズリ痕を残すものがある。底部は回転糸切り離し後何ら調整を加えない。

全形を知りえた資料は口径2.4cm、最大径5.3cm、器高8.1cmを測り、胴部最大径が8.1cmを越える大型品は見られない。

甕　肩の張った胴部と細く直立する頸部、ラッパ状に開く口頸部からなる。基本的な器形は古墳時代後葉のものと変わらないが、回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加えた丸底様の底部に、断面逆台形をなす小型・扁平な高台が接合される。口縁部から頸部にかけて刺突文（櫛状施文具）・２条沈線をめぐらしたものがある。胴部最大径10.0cm前後を測り小型品が主体をなす。

甕Ａ１　ほぼ直立気味にたちあがる短い口縁部を持つ。口縁端部は外方に折り返されたように著しく肥厚し、幅の広い外傾面を作る。外傾面は回転ナデ調整され中央がわずかにくぼむ。胴部・底部の形態は明らかでないが、肩が張り胴部内外面を回転ナデにより仕上げていたらしい。基部内面に明瞭な接合痕を残す。

口径14.0～14.4cmを測り、法量は均一である。

甕Ａ２　甕Ａ１同様に短い口縁部からなるが、その開く度合いは大きい。口縁端部を肥厚させ中央が盛り上がった丸味のある外傾面を持つ。胴部は卵型をなす。胴部をタタキ整形した後、口縁部に回転ナデ調整を加える。胴部内面の同心円当て具痕を縦・斜位の板ケズリによりていねいに消去したものと、わずかに残すもの（回転ナデ仕上げ）がある。底部は丸底と思われる。口径17.5～18.7cmを測る。

甕Ｂ１　背の高い口縁部があまり外反せず直線的に立ちあがる。口縁端部を折り返しあるいはつまみ上げたように肥厚させ断面三角形様をなす。外傾面（凹面）の傾斜は急である。口縁部・肩部に回転ナデを加える。内面の口縁部接合痕により下位に同心円当て具痕を残すものがある。胴部・底部の形態は明らかでない。口径は２大別できる（15.1～15.9cm＝Ⅰ、12.1～12.3cm＝Ⅱ）。

甕Ｂ２　肩の張った胴部と外反しつつ大きく開く口縁部からなる。口縁端部は下方へ肥厚し、なかには大きく折り返されて複合口縁状をなすものも含まれる。外傾面に丸味を持つ。口縁部（端部直下）に三角凸帯と沈線により文様帯（沈線・円形浮文・櫛状施文具による刺突文）を区画したものがある。口縁部を回転ナデ調整し、胴部はタタキ整形後下半・内面に回転ナデ調整・板ケズリ（横位）を加える。平底の底部は上げ底様を呈し、あらい不整方向のナデ（底面）と板ケズリ（内面）により仕上げられる。

大型品２点（口径42.9・50.0cm）を除き、口径18.9～29.5cm、最大径34.1cm以上を測る。法量に幅があり規格は一定していない。

甕Ｃ　胴部上半から口縁部にいたる破片が１点出土したのみであるが、扁平な胴部から口縁部がくの字状に屈曲する広口の器量を甕Ｃとした。口縁端部を回転ナデより先細く仕上げ、胴部にタタキメ（？）を残す。土師器甕Ｄ１を模した須恵器と考えている。

口径31.6cm、最大径33.6cmを測る。他に２条の沈線を施し俵型の器体をなすと思われる胴部片、厚手・扁平な脚部片等が出土している。

ⅱ）土師器

土師器には杯蓋・有台杯身・無台杯身・皿蓋・有台皿・無台皿・高盤・鉢・壷・甕・鍋・甑等がある。

食器類

杯蓋Ａ１　天井部は直線的に傾斜し笠型をなす。口縁端部を先細く丸く仕上げ身受け部を作らない。ヨコナデされた器壁の厚さは不均一である。中央に基部が太い断面逆台形のつまみを付し赤彩する。

出土量は少ないが、口径17.8cmの大型品を除き法量はほぼ一定している（口径13.4～15.0cm、器高3.1～3.8cm）。

杯蓋Ａ２　杯蓋Ａ１同様直線的にのびる天井部が外周近くで外反する。不明瞭ではあるが外傾面を持つ端部は下方へ肥厚し、見受け部を意識しているように思われる。外周に幅広く強いヨコナデ痕を残す。完形品はなく天井頂部・つまみの形態は明らかでない。口径を知りえた資料はわずか１点である（16.3cm）。

杯蓋Ｂ　扁平な天井部に丸味を持つ。つまみを接合しない。口縁端部を下方へ屈曲させ断面三角形様をなす身受け部を作る。身受け部をヨコナデし、天井部には不整方向（横位主体）の指頭ナデを加え器壁は厚い。杯蓋としたが杯類以外の器種に用いられた可能性もある。完形品が１点出土している（口径13.2cm・器高2.2cm）。

有台杯身Ａ１　平底をなす底部からほぼ直立する口縁部へ屈曲・移行する。底・体部間に丸味を持つ。口縁端部は若干外反し丸味のある内傾面を作る。底部外周近くに接合された高台には２形態ある。１つは扁平・小型で断面丸味を帯びた三角形を呈し、他の１つは背が高く端部を肥厚させ丸く仕上げている。器面の保存状態は良くないが、口縁部・高台にヨコナデ調整を加え底部にあらい指頭ナデ、内底面に不整方向のミガキを施していたらしい。口縁部・高台内面に赤彩の痕跡を残すものがある。法量を知りえた資料は比較的大型品である（口径19.5cm・器高5.5cm）。

有台杯身Ａ２　底（平底）・体部間で屈曲し口縁部は直線的に外上方へのびる。有台杯身Ａ１に比べ総じて深い。口縁端部を先細く丸く仕上げる。高台は底部と体部の境（屈曲部）に接合され、有台杯身Ａ１同様、扁平・小型のものと背の高いものの２形態が見られる。両者とも端部を丸く作るが、前者には外傾面を持つものも含まれる。剥落し底部の調整手法は明確でない。口縁部・高台にはヨコナデを加えている。完形品が１点ある（口径12.9cm・器高5.3cm）。

有台杯身Ｂ　平底の底部から丸味を持って体部へ移行し、口縁端部近くで外反する。端部を丸く仕上げる。高台は比較的扁平・小型で若干外に張る。端部に丸味を帯びた外傾面を作る。口縁部下半の調整（ヨコナデ）は徹底せず、粘土紐の輪積み痕を残すが、外反部分には強いヨコナデを加えている。底面に不整方向のナデを施す。器形は須恵器有台杯身Ｅに類似し、須恵器を模倣した土師器と考えている。多くが口縁部内外面を赤彩する。

口径14.6～16.6cm、器高5.6cm前後を測る。

無台杯身Ａ　器形は扁平な半球状を呈する。古墳時代まで遡る器種と考えたが、比較的多く奈良時代の土器群に混在して出土するため、一応古墳時代後期以降の伝統的な器形をなす器を無台杯身Ａとして区分した。口縁部下半（外面）の調整は粗雑で、端部近くに強いヨコナデを加える。口縁端部の形態（外反・丸味・先細等）・器面の調整手法（ヨコナデ・横位ハケメ・放射状暗文・ミガキ等）はバラエティーに富み、底部に木葉痕を残すものがある。

口径11.5～15.3cm、器高3.3～4.7cmを測る。

無台杯身Ｂ１　底部は丸底様をなし口縁部が直線的に大きく開く。底・体部間は若干屈曲する。口縁端部を肥厚させ丸くおさめたものと丸味を帯びた内傾面を作るものがある。口縁部内外面に横位・縦位のハケメを加えた後、外面を粗くヨコナデ調整する。口縁端部近くのヨコナデは強くていねいである。屈曲部外面に指頭圧痕を残し、底部は不整方向のナデにより仕上げられる。口径の大小差（10.8～14.9cm）にかかわりなく、器高（3.8～4.1cm）はほぼ一定している。

無台杯身Ｂ２　丸底をなし基本的な器形は無台杯身Ｂ１に類似するが、口径：器高の比は１：0.4前後を示し総じて深くなる。口縁部の立ちあがりは急で底・体部間に丸味を増す。口縁端部を先細く丸く仕上げる。器面調整には無台杯身Ｂ１と同様の手法の他、口縁部の内外全面にヨコナデのみを施したものが含まれる。

口径11.0～12.7cm、器高4.0～5.0cmを測り、法量は均一である。

無台杯身Ｂ３　底部は小さく平底を呈する。口縁部は内彎し端部を丸くおさめる。口縁部上半に幅広くヨコナデ調整を加え、下半は放射状に縦位の指頭ナデで仕上げる。底部の調整（不整方向ナデ）は粗い。無台杯身Ｂ１・２に比べ小型で出土量はきわめて少ない。法量を知りえたのは１点である（口径10.1cm・器高4.2cm）。

無台杯身Ｃ１　底部中央はわずかに脹らみ丸底様をなす。底部からなめらかに内彎する口縁部へ移行する。口縁端部に丸味を持つ。口縁部・内底面に縦・横位のハケメとヨコナデ調整を加え、無台杯身Ｂ１と同様の器面調整を行うものと、口縁部全面にヨコナデ調整のみを施したものがほぼ等量を占める。後者には内面を赤彩したものが多い。底部は不整方向の指頭ナデにより仕上げられる。

口径16.7cmを測る大型品を除き、法量は３大別できそうであり（口径14.6～15.1cm・器高4.2cm前後＝Ⅰ、口径13.4～13.9cm・器高3.2～3.7cm＝Ⅱ、口径12.4～13.0cm・器高3.2cm前後＝Ⅲ）、口径が大きくなるに従って器高も高くなる。

無台杯身Ｃ２　平底様をなす大きな底部から丸味を持って口縁部へ移行する。口縁部は内彎しつつほぼ真上に立ちあがる。多くは端部を先細く仕上げるが、内傾面を作り出したものも見られる。口縁部にヨコナデ調整、底部に不整方向のナデを加える。

法量的に３大別できる（口径15.1～15.6cm・器高3.4cm前後＝Ⅰ、口径12.8～14.0cm・器高2.9～3.5cm＝Ⅱ、口径11.6～12.0cm・器高3.3cm＝Ⅲ）。大型品（口径17.0cm）が１点ある。

無台杯身Ｃ３　平底をなす底部とほぼ直立する口縁部からなる。底・体部間でわずかに屈曲するものがあり、口縁部は外反する。端部を先細く丸く仕上げる。口縁部上半・内面にていねいなヨコナデを加えるが、底部・口縁部下半の調整は徹底していない（指頭圧痕・不整方向のナデ）。内面をヘラミガキし黒色化した焼成良好なものが比較的多く見られる。

口縁部が大きく開く大型品（口径19.6～22.2cm・器高5.4cm前後）と小型品（口径11.2～15.6cm・器高2.9～3.8cm）に大別でき、小型品の約80％が口径12.0～14.0cmの範囲内におさまる。無台杯身Ｃ類の主体をなす。

無台杯身Ｄ　口径と平底をなす底径の比は１：0.5前後を示し、底部の小さな椀状の無台杯身である。底部と体部の境にわずかに稜を作り、口縁部は内彎しつつ大きく開く。端部を丸く仕上げる。口縁部（ヨコナデ・ミガキ）・底部（不整方向ナデ）の調整は比較的ていねいで内外面を赤彩したもの、内面を黒色化したものを含む。総じて小型品が多い。

口径は３大別できるが（13.9～15.2cm＝Ⅰ、11.7～12.8cm＝Ⅱ、8.4～9.1cm＝Ⅲ）、器高はほぼ一定している（3.2～3.8cm）。出土量は少ない。

無台杯身Ｅ　平底の底部から若干稜をなして屈曲し、大きく開く口縁部へ移行する。口縁部には内彎するものと上半を外反させるものがあり、両者とも端部を丸く仕上げている。口径16.5cm、器高3.4cmを測る大型品を除き、多くが無台杯身Ｂ１・Ｂ２と同様の器面調整（縦・横位のハケメ・ヨコナデ）を施す。大型品の口縁端部直下には１条幅広の強いヨコナデが加えられる。小型品（口径10.2～11.4cm）も２点見られる。

法量は口径12.1～14.0cm、器高3.0～4.0cmの範囲内に集中している。

無台杯身Ｆ　完形品はなく出土量も少ない。底部は丸底と思われる。大型（口径14.2～16.3cm）で深い半球状の器形をなす。口縁端部を内彎気味に丸く仕上げる。端部内面に１条ヨコナデを加える他は、口縁部全面に粘土紐の巻き上げ痕・指頭圧痕が残り調整手法はきわめて粗雑である。

無台杯身Ｇ　口縁的片がわずかに１点出土した。口縁端部を内方へ丸く屈曲・肥厚させ特徴的な口縁

部を作る。口縁部内外面をていねいにヨコナデ調整し赤彩していたらしい。口径15.3cmを測る。

無台杯身H　口径：底径の比は１：0.5～0.6を示す。平底の底部と体部との境に明瞭な稜を持ち口縁部は内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部はわずかに外反し先細く丸く仕上げられる。口縁部外面・底部に同心円状のヨコナデを加え、内面には放射状暗文が密に施される。

口径10.8～12.6cm、器高3.9～4.3cmを測る。白色粒を多量に含む胎土と色調（茶灰色）は特徴的である。

皿蓋　受け部を作らず天井部・口縁端部の形態（丸味）・調整手法（ヨコナデ）は杯蓋Ａ１と何ら変わらない。口径20.0cm以上（19.9～22.5cm）の大型品を皿蓋とした。口縁端部近くで肥厚し天井部に丸味を持つ扁平な器種が含まれる。つまみは基部の太い擬宝珠状を呈する。内外面を赤彩する。器高を知りえた資料は１点しかない（5.0cm）。

有台皿Ａ１　平底をなす底部から短い口線部が屈曲し直線的に立ちあがる。口縁端部を丸くおさめる。底部外周に接合された高台は背が高く外に張る。端部をわずかに外反させ比較的幅の広い外傾面を作る。口縁部・高台はヨコナデによりていねいに仕上げられるが、底部内外面の調整（不整方向ナデ）は粗雑で指頭圧痕を残す。内外全面に赤彩を施したものがある。細片が多く法量を知りえたのはわずかに１点である（口径17.1cm・器高3.5cm）。

有台皿Ａ２　有台皿Ａ１に比べ皿部は浅くなる。外反する口縁部が見られる。口縁端部は一般的に丸く仕上げられるがつまみ上げられ先細くわずかに内彎するものを含む。高台には２形態（端部に水平面を持つ扁平なもの＝断面逆台形、背が高く外に張るもの＝断面三角形）あり、底部外縁から離れて内方に接合される。口縁部・高台にヨコナデ調整を加え赤彩するものが多い。底部には不整方向のナデが施される。

大型品（口径26.7cm・器高2.8cm）と小型品（口径18.5cm・器高2.5cm）がある。

有台皿Ｂ１　皿部は平底の底部と外反する口縁部からなる。口縁端部に丸味を持ち底部のやや内方に背の高い高台（脚）を接合する。高台の上半はほぼ真下に垂下し下半にいたり急激に開く。端部を丸く仕上げる。有台皿Ａと同様の器面調整を加え口縁部・高台に赤彩を施す。法量を知りえたのは１点である（口径18.6cm・器高4.4cm）。

有台皿Ｂ２　完形品がなく皿部の形態は明確でない。平底をなす底部の外周近くに接合された高台（脚）は有台皿Ｂ１と類似するが（上半垂下・下半開く）、背は低く丸味を帯びた端部が若干下方へ肥厚している。高台をヨコナデし、底面に指頭圧痕を残す。内底面・高台に赤彩を施す。底部径から判断して有台皿Ｂ１に比べ小型品が主体をなすと思われる。

無台皿Ａ　底部・体部間で屈曲する。平底をなす底部と外反しつつ大きく開く口縁部からなる。口縁部をヨコナデしヘラ記号「メ」を記したものがある。端部を先細く丸く仕上げる。底部には不整方向のナデが加えられる。明確でないが口縁部内面に放射線状暗文（斜位）を思わせる粗い細線列を残す破片が１点あり、器面すべてを赤彩したものが多い。口径の大小差（13.0～18.4cm）に比べ器高はほぼ一定している（2.3～2.8cm）。

無台皿Ｂ１　大きな平底の底部から短い口縁部が立ちあがる。口縁部は内彎し端部に丸味を帯びた内傾面を作る。口縁部にヨコナデ調整を加え、底部は不整方向のナデ・ケズリにより仕上げられる。口縁部上半を幅広くさらに１条ヨコナデし、端部をわずかに外反させたものがある。器壁全面に赤彩を施したものが多い。

無台皿Ｂの主体をなし口径は６大別である（19.5～19.9cm＝Ⅰ、18.0～18.3cm＝Ⅱ、15.6～16.6cm＝Ⅲ、14.5～15.0cm＝Ⅳ、12.3～12.8cm＝Ⅴ、10.0cm前後＝Ⅵ）。器高（1.7～2.6cm）には口径15.5

cm前後を境にして、若干差（２大別）が見られるようである（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ＝2.3cm前後、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ＝2.0cm前後）。

無台皿Ｂ２　基本的な器形は無台皿Ｂ１に類似するがわずかに深くなる。口縁部の中段を幅広く強くヨコナデ調整するため、端部はわずかに外反し丸く肥厚したように見える。無台皿Ｂ１と同様に底部調整の他、底部と体部との境（屈曲部）に連続する横・斜位の指頭ナデを施したものがある。口縁部内外面・内底面に赤彩が見られる。

多くが口径14.0～17.0cm、器高1.9～2.5cmの範囲内におさまり法量の分化は明確でない。大型品（口径19.7cm・器高2.0cm）が１点ある。

無台皿Ｂ３　底部中央が若干下方へ垂れ丸底様をなす。口縁部の形態には内彎するものと直線的あるいは外反しつつ立ちあがるものがあり、両者とも端部を丸く仕上げている。一般的に外反する口縁部は幅広の強いヨコナデ痕を残し、器面調整はていねいである。底部に不整方向のナデを加える。赤彩されたものが多い。

口径は３大別できるが（18.3～18.8cm＝Ⅰ、15.9～16.8cm＝Ⅱ、14.5～14.9cm＝Ⅲ）、器高はほぼ一定している（2.0～2.5cm）。

高盤Ａ　均一な太さで垂下し裾部近くでラッパ状に大きく開く長い脚部を持つ。脚端部を丸く仕上げる。器面は剥落し調整痕は明確でないが、面取りは行われていないようである。盤部の形態は明らかでない。

高盤Ｂ　ヘラを使い多面体（７角形・12角形以上）に面取りした脚を盤部に接合する。脚部には背の高いものと扁平で裾部を水平近くまで急激に外反させたものがあり、後者はヨコナデを加え端部を丸く仕上げている。外面に赤彩を施す。盤部の形態は明らかでない。

高盤Ｃ　基部から下半にかけて徐々に太さを増し、裾部にいたってさらに大きく開く大型・扁平な脚を接合する。ヘラを使い多面体（12角形以上）に整形した後、縦位のハケメ・あらいヨコナデを施す。脚内面は接合部に指頭圧痕を加え、上半を縦位の指頭ナデにより仕上げている。脚部内外面あるいは外面のみに赤彩が見られる。盤部の形態は明らかでなく他器種の脚の可能性もある。

高盤Ｄ　細片であるため明確でないが、面取りした脚をソケット状に盤部に接合するものを高盤Ｄとした。奈良時代以前に遡る可能性もある。

鉢　器形は半球状をなし平底様の底部から内彎する胴部へなめらかに移行する。最大径は胴部上半にある。短い口縁部は外反気味に立ちあがり端部を先細く仕上げている。胴部・底部外面に縦・斜位のハケメ、内面に板ケズリ（縦位・斜位・不整方向）を加え、さらに口縁部近くをヨコナデ調整する。口縁部の一部を外方へ脹らませ片口としたものを含む。

大型品（口径16.6cm・最大径17.6cm・器高8.9cm）と小型品（口径12.3cm・最大径13.7cm）がある。

貯蔵具類

壷Ａ　若干肩の張る胴部から口縁部がくの字状に屈曲し立ちあがる広口の壷である。口縁部は直線的にのび端部を丸くおさめる。肩部に２箇所、扁平・鉤形の把手を付したものがある。把手接合部には顕著な不整方向のナデ痕・指頭圧痕が残る。器面の保存状態は悪く細部の調整手法は明らかでない。底部は平底をなすと思われる。胎土に多量の赤色粒を含む。

口径16.2～20.8cm、最大径22.4～28.5cmを測る。古墳時代後期以来の伝統的な器形である。

壷Ｂ　底部は平底をなす。球状の胴部から短い口縁部がくの字状に屈曲し立ちあがる。口径と器高がほぼ等しい。口縁部はわずかに外反し端部を丸く仕上げる。底部と胴部下半の内面に板ケズリ（斜位）を加え器面をていねいにヨコナデ調整する。胴部下半に２段に指頭圧痕列が見られる。底面に木

葉痕を残す。法量を知りえた資料はわずかに２点であるが（口径13.7cm・14.6cm、最大径16.5cm、器高13.7cm）、ほぼ均一な数値を示し、大型品の破片は見られない。

煮炊具類

甕Ａ　頸部でわずかにくびれ、立ちあがりが急な短い口縁部と底部に向い直線的にすぼむ長い胴部からなる。口縁部は外反し端部に丸味を持つ。一般的な胴部内・外面に横位のケズリ・縦位のハケメを加え、頸部から口縁部にかけてヨコナデを施す。口縁部内面に粗いハケメ（横位）や胴部に顕著な指頭圧痕を残すもの、また器壁全面をていねいにヨコナデ調整するものも含まれる。煤の付着しない未使用品がある。底部は平底をなすと思われ、口径と胴部最大径はほぼ一致する（13.8～15.7cm）。法量は一定しており大型品は見られない。

甕Ｂ　器形は甕Ａに類似するが、最大径は胴部上半にあり胴部に丸味を増す。口縁端部に内傾面を持つものがある。甕Ａと同様の器面調整（口縁部ヨコナデ　胴部縦位ハケメ等）を加えるが、内面に板ケズリは見られず横・斜位のハケメを口縁端部から胴部上半にかけて幅広く施す。底部の形態は明らかでない。小型品には未使用品が含まれる。

口径10.5～14.7cm、最大径12.1～14.9cmを測り、大型品（口径17.8cm）が１点ある。

甕Ｃ　直線的で急な傾斜を示す肩部からほぼ直角に屈曲し口縁部は大きく開く。最大径は口径にあると思われる。口縁部は真っすぐのび一般的に端部を丸く作るが、内彎・肥厚させ、わずかにつまみ上げたように仕上げたものも比較的多い。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部から肩部にかけてヨコナデを施す。肩部のハケメをていねいにナデ消すものとそのまま残すものがあり、後者では多くの内面に横位のハケメ（粗い）・口縁部接合時の指頭圧痕が見られる。肩部以下の形態は明らかでないが長胴・平底と考えている。

大型品（口径27.8cm）１点を除き法量は口径19.9～24.2cmの範囲内に集中する。出土量は甕Ｄ３に次いで多い。

甕Ｄ１　頸部（屈曲部）に丸味を持ち口縁部はわずかに外反しつつ外上方へのびる。口縁端部はつまみ上げたように上方へ肥厚する。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部内外面をヨコナデ調整する。肩部以下の形態は明らかでない。口径16.6～26.7cmを測る。

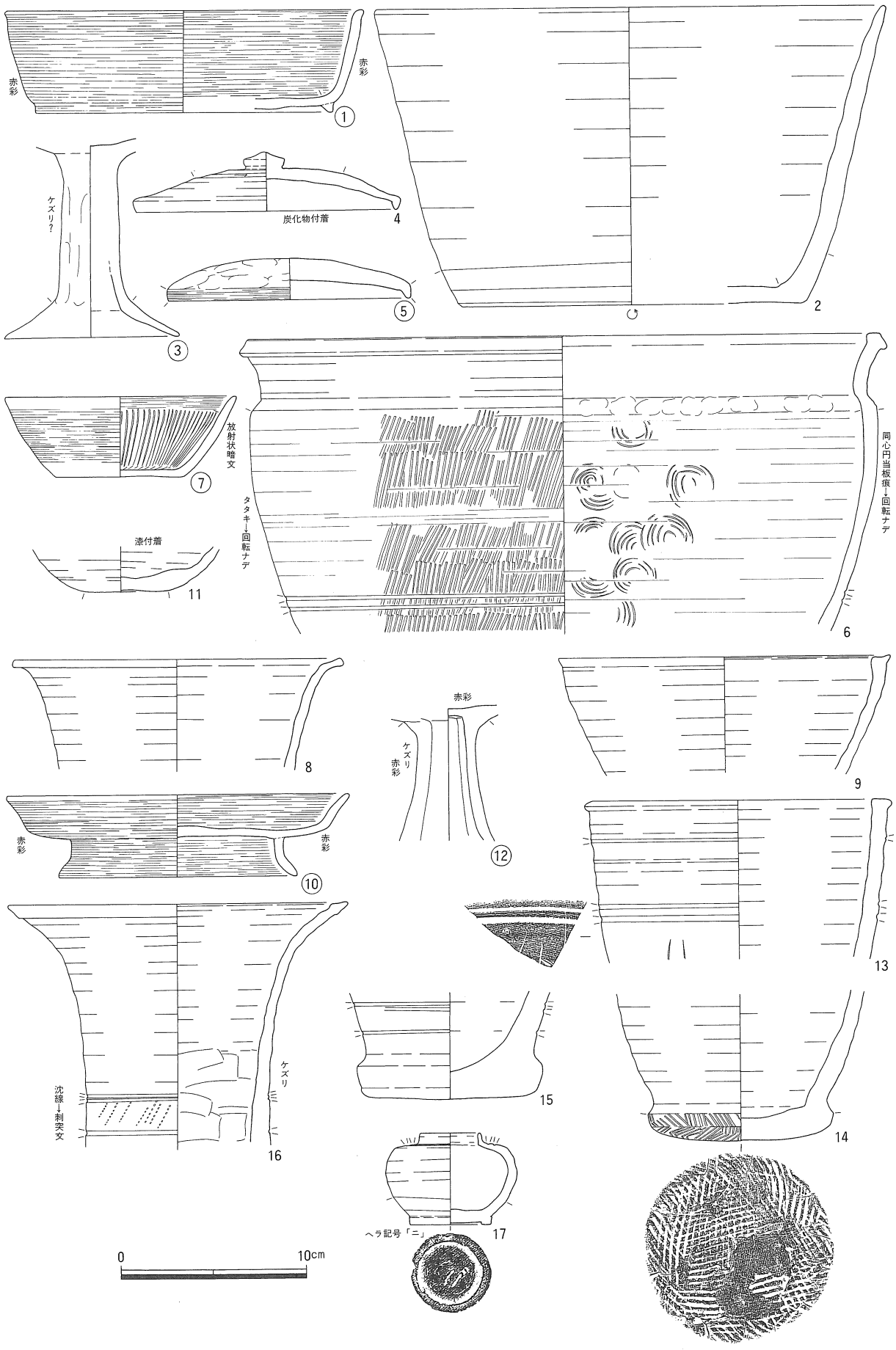
甕Ｄ２　甕Ｄ１に比べ口縁部はさらに大きく開き端部がほぼ水平となる。口縁端部の肥厚する度合いは小さく単純に丸くおさめたものが多く見られる。器面の調整手法は甕Ｄ１と何ら変わらない。

口径は２大別できそうである（22.1～23.4cm＝Ⅰ、18.7～19.2cm＝Ⅱ）。頸部（屈曲部）に丸味を持つ点は甕Ｃと異なる。

甕Ｄ３　若干肩の張る長胴部と直立・外傾する短い頸部大きく開く口縁部からなる。胴部・頸部・口縁部の境でわずかに屈曲する。口縁部・頸部の傾きには差があり、口縁端部を丸くおさめたものと上方へつまみ上げたように屈曲・肥厚させるものがある。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部にヨコナデ調整・胴部内面に横位のケズリ・ハケメを施す。頸部・胴部上半内面に指頭圧痕を残すものが多い。ハケメが口縁部内面に残ることは稀である。底部は平底を呈し底面から胴部下端にかけて斜位・不整方向のナデ、内底面は横・斜位のハケメ・ケズリ・指頭ナデにより仕上げられる。

甕類の主体をなし中型品（口径22.0～25.0cm）が約50％を占める。法量には大小差（口径18.1～31.6cm）が見られる。全形を知りえた資料は１点しかない（口径24.8cm、器高28.8cm）。最大径は口径にある。

甕Ｄ４　直立する頸部から口縁部はコの字状に屈曲し水平に開く。口縁端部は丸味を持ちつまみ上げたように上方へ肥厚する。肩部以下に縦位のハケメを加え口縁部・頸部に幅広くヨコナデを施す。多


赤彩
赤彩
①
ケズリ?
炭化物付着
4
③
⑤
2
放射状暗文
⑦
タタキ→回転ナデ
同心円当板痕→回転ナデ
漆付着
11
6
8
赤彩
ケズリ
赤彩
12
9
赤彩
赤彩
⑩
13
沈線→刺突文
ケズリ
16
15
14
ヘラ記号「ニ」
17
0
10cm

番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
①	(19.5)		(5.5)	有台杯身A1	6	(35.1)			鉢B	11				無台杯身A1	16	(18.4)			長頸壺B
2	(27.8)		(15.9)	鉢C	⑦	12.6		4.3	無台杯身H	⑫				高盤B	17	3.3	7.1	4.9	小型壺A
③				高盤A	8	(17.9)			長頸壺B	13	(16.5)			陶臼					
4	14.6		3.2	杯蓋A3	9	(17.9)			陶臼	14				陶臼					
⑤	13.2		2.2	杯蓋B	⑩	18.6		4.4	有台皿B1	15				陶臼					

第131図　包含層出土土器実測図

くが頸部内面に顕著な粘土接合痕を残す。胴部・底部片を甕Ｄ３と区別するのは難しい。口径20.2～27.1cmを測る。

甕Ｅ　直立する長い頸部を持つ。口縁部は外上方へのび端部をわずかに内屈させて丸くおさめている。頸部以下に縦・斜位のハケメ、内面には頸部に横位のハケメ（粗い）、肩部に横位のケズリを施し口縁部にはヨコナデ調整される。胴部・底部の形態は明確でないが、最大径は胴部上半にあると思われる。

口径20.4～26.8cmを測る。出土量は少ない。

鍋Ａ　浅く半球状をなす胴部から短く外反する口縁部へなめらかに移行する。胴部上半は垂下し肩部に張りを持たない。口縁端部は上方へ若干肥厚し丸く仕上げられる。器面の保存状態が悪く調整手法は明らかでないが、口縁部にヨコナデを施していたらしい。頸部に縦位の指頭ナデ痕、胴部内面に幅広いケズリ痕（横位）を残すものがある。丸底と思われる。

口径29.5～31.2cmを測り、小型品（口径23.6cm）を１点含む。

鍋Ｂ１　頸部がわずかにくびれ短い口縁部が外反する。口縁端部を先細く丸くおさめる。頸部以下に縦位のハケメを加えた後口縁部をヨコナデ調整し、内面には横位のハケメ・ヨコナデを施す。口径と胴部最大径はほぼ等しい。胴部下半・底部の形態は明らかでない。

口径は２大別できる（32.1～35.8cm＝Ⅰ、25.0cm前後＝Ⅱ）。

鍋Ｂ２　器形は鍋Ｂ１に類似するが口縁部・頸部・肩部の境に若干屈曲部を持ち、不明瞭ながら垂下する頸部を作る。最大径は口径にある。上方へ肥厚する口縁端部の他、単純に丸く仕上げたものも比較的多い。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部から肩部にかけて幅広くヨコナデを施す。肩が若干張る。胴部・底部の形態は不明である。

口径30.5cm以上（～41.9cm）の大型品のみからなる。

甑　円筒状をなす甑の底部片が数点出土している。胴部は外上方へ直線的にのびる。先細く丸味を持つ底端部をさらにすぼめるものと、若干下方へ屈曲させるものがある。縦位（外面）・横位（内面）のハケメを加え端部をヨコナデ調整する。

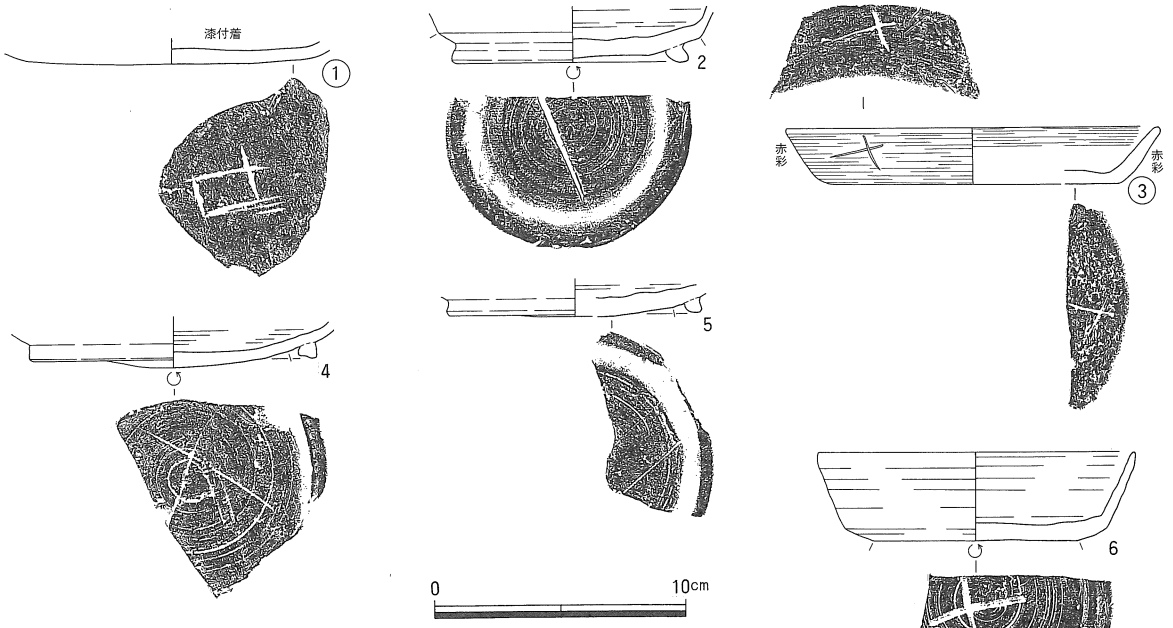
他に端部を内方へ折り曲げて幅広の水平面を作り、縦位のハケメ（外面）・指頭ナデ（内面）を施した台の破片がある。鍋Ｂの底部に接合されていたものかもしれない。

第２節　硯・転用硯（第133図　図版63）

３Ｉ－ｇ区Ⅲａ層中より円面硯片が１点、溝状遺構（ＮＳＤ３・４・11・17）竪穴住居（ＮＳＨ４・５）包含層中から40点以上（破片を含む）の転用硯が出土している。

ｉ）円面硯

陸から圏台上端にかけての小破片であり全形を知ることはできない。須恵質のいわゆる圏足硯であ



番号	口径	最大径	器高	器種
①				
2				有台杯身B
③	(14.9)		(2.3)	無台皿A
4				有台杯身A1
5				
6	12.7		3.5	無台杯身D3

第132図　ヘラ記号のある土器実測図・拓影

る。

ヘラ削りないしはナデを加えた陸の中央がわずかに盛り上がり外周に傾斜面を作る。傾斜面の下端に堤を接合し溝状の海とする。陵と海の境に稜を持つ。圏台上端（堤直下）に１条凸帯めぐらす。この凸帯は幅広の上面に断面Ｖ状の切り込みを刻んでいるため、一見、端部に稜を持つ凸帯が２条付されているように見える。透しの有無・形態は明らかでない。内面に回転ナデ調整を施す。

陸に火脹れによる凹凸があり顕著使用痕・墨痕は認められない。硯面径16.7cmを測る。

ⅱ）転用硯（第133図　図版63）

須恵器杯蓋Ａ２・Ａ３を用いた転用硯が約85％を占め他に有台杯、高盤がある。

杯蓋Ａ２・Ａ３は天井部内面を使用し、共に背の高いものと扁平なものを含んでいる。使用痕は中央からわずかに一方に偏して残り、背の高いものほどその範囲が狭くなる傾向を示す。つまみの頂部に摩擦痕を残し、なかには人為的つまみを打ち欠いたとさえ考えられるものも見られる。口径8.1cmを測る小型品を１点含む。

有台杯には内底面を広く使用するものと、反転し高台の内側底を硯面とするものがある。高盤は盤部の中央に顕著な使用痕を残す。

第３節　土製品

主に溝状遺構（ＮＳＤ３・４・11・13・16・21）から須恵質の紡錘車、人形、土馬、土錘、土師質のミニチュア土器、土馬、土錘が出土している。鞴羽口土製支脚も一応土製品として扱った。

ⅰ）紡錘車（第134図　図版65）

断面台形様をなす円盤状の陶製紡錘車である。３Ｆ－ｇ－ア区、Ⅲ層より出土した。

わずかに盛り上がる上面中央をヘラ切りにより平坦に仕上げ、下面にはケズリ（回転利用）を加え